

「あの千法を。」彼はたうとうポケットから封筒を取り出して言った。

ナナは忘れてゐたのだつた。「あの千法を、ですつて！」と彼女が叫んだ。「何時そんなものを下さいと言ひました？……さあ！ そんな千法の金なんか、どうするか見てゐらつしやい！」

彼女はその封筒を取つて彼の顔へ敲きつけた。抜け目のない猶太人らしく彼は濼々とそれを拾ひ上げた。彼は途方に暮れてナナを眺めてゐた。ミユファと彼は、絶望的な視線を交はした。彼女は腰に手を置いて、一層高い聲で叫んだ。

「あゝ！ もう私に恥を掻かせるのはおよしなさい！……シユタイネルさん、あなたの来てくれたのは仕合せだつたわ。二人を一緒にして、一度に厄拂ひが済ませるといふものよ……。さあ、早く！ 出て行つておくれ。」

二人が面喰つて、急いで行かうとしないので彼女は叫んだ。

「エツ？ 私が馬鹿なことを言ふとでもお考へなの？ 全くさうかも知れないわね！ もううんざりさせられてゐるんですからね！……厭だわ！ 上流社會の人はもう澤山！ それで私が損をするのなら、喜んでするわ。」

二人は彼女の氣を鎮めようと思つて、哀願した。「さあ、さあ、出て行かないの？……いゝわ、見てゐらつ

しやい。私にはいゝ人があるんですよ。」

素早く彼女は部屋の扉を開け放つた。二人は、亂れた寢臺の上に、フォンタンがあるのを見た。彼は、そんなに見世物にされるとは思ひがけなかつたので、寢衣を滑らせて、足を宙にしたまゝレース飾りの中で、黒い皮膚を見せて、山羊のやうに轉がつてゐた。併し彼は、熟練した舞臺の度胸で、周章ではしなかつた。最初にはつゝ驚いたが、直ぐそれを顔で隠してうまくその場を切り抜けた。彼は唇を尖らせて鼻に皺を寄せ、顔中を動かしながら、彼の所謂兎の藝をやつて見せた。その卑猥な獸の顔は、悪徳そのものであつた。一週間ばかり前から、ナナがワリエテ座へ會ひに出かけたのは、フォンタンであつた。彼女は、喜劇俳優の奇怪な醜態に對して娼婦達がよく抱くあのいゝかもの食ひの熱に捉はれてゐたのだつた。

「御覽なさい！」と彼女はそれを示しながら、悲劇女優の身振りをして言つた。

ミユファは前後の事情がすつかり分つて、この侮辱に對して憤慨した。

「淫賣！」と彼は呟いた。するともう部屋に入つてゐたナナが、また出て来て言葉

を返した。「あら、淫賣ですつて！ あなたの奥様は？」

そして彼女は部屋に入つて、カ一杯扉を閉めると、音を立て、鏡を下した。二人は後に残されたまゝ黙つて顔を見合せた。ゾエが入つて来た。彼女は二人を押し出さうとはせず、非常に丁寧に話しかけた。世故に長けた女らしく、

彼女は奥様の仕打ちをあまりひどすぎると考へた。けれど、彼女はナナを庇つて、あの大根役者とも永續きはしまし、また奥様の怒る時には、怒らせて置くのが一番いゝのですなど、話した。二人は外へ出た。彼等は一言も口を利かなかつた。そして歩道の上で、一種の親しさに心を動かされて、黙つて握手を交はした。二人は踵を返して、それぞれの方角へ、重い足を曳きずつて、遠く別れて行つた。

ミユファが、やつとミロメニール街の屋敷に辿りつくと、丁度そこへ夫人が歸つて来た。二人は階段でばつたり顔を合せた。陰鬱な壁が、氷のやうな戦慄を與へた。二人は眼を上げて、お互を疑ふやうに眺め合つた。伯爵はまだ泥まみれになつた服を着てゐた。放蕩をして歸つて来た男らしく、蒼ざめた、落着きのない顔だつた。夫人は夜汽車に疲れたやうに、髪を亂し、臉を腫れぼつたくして、立つたま

ま居睡つてゐるやうであつた。

それはモンマルトルのヴェロン街の、小さな五階の部屋で

八

それはモンマルトルのヴェロン街の、小さな五階の部屋で

あつた。ナナとフォンタンは、落着いてやつと三日目に轉宅披露をし、『王様の日』の菓子(一月六日の茶會現記念に菓子作りさせ、その蠶豆を取り、中に蠶豆を一個入れて來會者に切あてた者を一座の王さま)に數人の友達を招待した。

すべては蜜月の最初の情熱から、大急ぎで決められた。二人は殊更はつきり同棲しようと思つた譯でもなかつた。あの伯爵と銀行家とに劍突を食はせてきつぱり追ひ出してしまつた翌日、ナナはすつかり身邊の様子が變つてしまつたのを感じた。ナナには一目で自分の位置が分つた。債權者がまた控室へ殺到して來るだらう、二人の間にも干渉するだらう、そして彼女が相手の言葉を跳ねつければ、何も彼も賣り飛ばしてしまふと言ふだらう。喧嘩になつてしまつて、家具の三つや四つを渡すまい爲めに、果しのない面倒なことになるだらう。それで彼女はすべてを放棄することにした。その上オースマン街の家には、もううんざりしてゐた。その金でびか／＼と飾りたてた大きな部屋も馬鹿げたものに思はれた。フォンタンに對してはげしい愛情を感じると共に、彼女はまた洗花女工だつた頃の理想の、明るくて綺麗な小さい部屋を空想した。昔はたゞ鏡のついた紫香木の衣裳箱と、青いレプス織を張つた寢臺位のみしか考へなかつた。二日の間に、彼女は持ち出せるものは何でも、がらくた道具から寶石に至るまで賣り拂つてしまつた。そして一萬法ばかりの金を作つて、門番に一言の挨拶もせず



に、まるで水鳥のやうに足跡も残さないで雲隠れしてしまつた。かうして置けば、誰も彼女に付き纏つて来る者はないだらう。フォンタンは非常におとなしくしてゐた。彼女は彼女のなすがまゝに、少しも逆らはず、全く仲の好い友達のやうに振舞つた。彼は七千法ばかり持つてゐた。そして吝嗇だと云ふ世間の噂にも拘らず、それをナナの一萬法と一緒にすることに同意した。それが二人のしつかりした生活の基礎になるやうに思はれた。二人はかうした共通の貯金から引き出した金で、ヴェロン街に二間の部屋を借り、家具を買ひ整へて生活を初め、古い友達のやうに何も彼も分け合つた。初めのうちは、水も洩らさぬ楽しい家庭だつた。

『王様の日』の夜は、ルラ夫人がルキゼを連れて眞先きによつて来た。丁度フォンタンはまだ歸つてゐなかつたので、自分の姪が幸福を捨てしまふのを見てゐると、心配で身顛ひする位だと言つた。

「あゝ！ 伯母さん、私はあの人を心から愛してゐるのよ。」  
 ナナは、優しい身振りをし、両手で胸を押へて言つた。  
 この言葉はルラ夫人に異常な効果を與へた。伯母は眼をうるませた。

「さうね、何よりも、愛してさへゐるのならね。」と彼女は感じ入つた様子で言つた。

そして高い聲で部屋の綺麗なのを賞めた。ナナは寢室や食堂や、臺所まで案内した。それは廣くはなかつたが、ベソキを塗り變へ、壁紙を新らしくして、日光が氣持よく入るのであつた。

それからルラ夫人がナナを部屋の中に引き留めてゐる間に、ルキゼは臺所へ行つて女中が若鶏を焼いてゐるのを後ろからちつと眺めてゐた。伯母の氣に掛けることは、ゾエがナナの家にゐなくなつたことだつた。ゾエは勇敢にもナナの犠牲になつて、後に残つてゐた。そのお禮が貰へるか貰へないかは念頭になかつた。そしてオースマン街の家が大騒動になつてゐる中で、彼女は債權者に對抗して、綺麗に後始末をつけ、奥様は旅行中だと言つて、決して屏所も知らさずに立派に退却した。その上、後を跟けられるのを怖れて、ナナを訪ねたいのもこらへてゐたのだつた。しかしその朝新しい事件が起つたので、ルラ夫人の所へ駆けつけたのだつた。

その前夜、家具商も炭屋も仕立屋も、債權者がみんな揃つてやつて来て、もしナナがもとの家へ歸つて眞面目な生活をするならば、非常な多額の金も提供するからと言つて、それに返事をする時間を與へて歸つて行つたのだつた。伯母はゾエの言葉を繰り返して、きつとその後ろには金持がゐるのに違ひないと言つた。

「歸りませんわ！」とナナが腹を立てゝ言つた。「まあ！ 厭な御用聞きつたらありやしない！ まるで、私が勘定を濟ませるために買物にでもなると思つてゐるんだわ！……ほんとうに、私はフォンタンを欺す位なら、餓死でもした方がいゝわ。」

「私もさうは答へて置いたよ。あの子は情に脆いものだからつて。」さうルラ夫人が言つた。

しかしナナは、ミニョットの家が賣り飛ばされて、ラポルドットがそれを馬鹿々々しい値段で、カロリヌ・エッケに買つてやつたのを聞いて、ひどく腹を立てた。彼女はいら氣取つても、矢つ張り心から劣等なあの淫賣婦に對してすつかり怒つてしまつた。全くだ、ナナこそは外の誰よりも立派な人間だつた！

「皆は私をひやかすでせうよ。」と、ナナは言葉を結んだ。「でも、どんなにお金があつたつて、あんな女達はほんとに幸福になれやしないわ……それにね、伯母さん、私、あんな人達のことなんかもう少しも氣にかけてやしないの。私はずゐぶん仕合せなんですもの。」

その時マロアル夫人が、彼女獨特の變な形の帽子を被つて入つて来た。お互にかうして顔を合すことが出来たのを喜んだ。マロアル夫人は、相手が威勢のいゝ時にはどうも遠慮勝ちになるけれども、今のやうな有様なら、また

時々ベジグを取りにやつて来ると言つた。

ナナはまた家の中を案内した。そして臺所に来て、若鶏に脂をかけてゐる女中の前で、暮し向きの話をし、女中を備ふのは高くつくから、家庭の用事は自分でやるやうにしたいと言つた。ルキゼは口を開けてぼんやりと肉を焼く道具を眺めてゐた。

すると高い聲が聞えた。フォンタンがボスクとブリュリエールを連れて来たのだつた。もう食事の用意は出来てゐた。ナナが三度目に家の中を案内してゐる時には、もうスーブが出してあつた。

「ほう！ これやなか／＼いゝ家だな！」とボスクの言つたのは、たゞ今夜の御馳走をしてくれる友達にお世辭を述べたまでのことであつた。心の底では、彼の所謂『巢』のこ

となどは、少しも彼の興味をひいてゐなかつた。寢室を見ると、彼は更にお世辭を振りまいた。平生から彼は女を駱駝扱ひにして、苟くも男子たる者が、そんな汚ない動物の一頭にかゝづらつて、惱まされると云ふことがこの世にあり得ると考へるだけでも、業が煮えてならないのだつた。その外に彼が腹を立てることは滅多になかつた。そして何時も酔つ拂ひらしく世の中を見くびつて輕蔑してゐた。

「あゝ！ うまくやつたね。」と彼は眼をばちくりさせなが



ら言った。「こつそりとうまくやつたね……。だがね！それだけでいんだよ。嬉しいだらう。これからは俺も時々遊びに寄せて貰はうかね！」

その時、箒の柄に馬乗りになつて、ルキゼが威張つて入つて来た。それを見てブリュリエールが皮肉な笑を浮べて言った。

「おや！もうこんな子供があつたのかい？」

それが非常に面白くて、ルラ夫人とマロアール夫人は腹を抱へて笑つた。ナナも腹を立てるところではなく、嬉しさうに笑つて、いゝえ、生憎違ふの、もしさうなら私のためにもこの子のためにも嬉しいのだけれど、でも、そのうちにもまた生れるでせう、などと言つた。フォンタンは機嫌よくルキゼを抱き上げてからかひながら、子供のやうな言葉を使つて言つた。

「いゝよ、いゝよ。ね、坊や、お前、小父さんが好きだらう……。これからパパと言ふんだよ！」

「パパ……。パパ……。」と子供は吃りながら言つた。

皆は子供を可愛がつた。ボスタは退屈して、食事を初めようと言つた。他のことは、彼にとつてはどうでもいゝのだつた。ナナは、ルキゼを私の傍に坐らせてもいゝでせう、と言つた。食事は非常に愉快だつた。ボスタは子供の隣に坐つたので、自分の皿から眼が離せないのに弱つてゐた。

その上ルラ夫人がまた彼を苦しめた。彼女は聲を低くし、しみじみとした調子で、今でも彼女の後を駆け廻す金持の男達があるといふやうな話をして聞かせた。ボスタは、彼女が色眼を使ひながら、すり寄つて来るので、二度ばかりも膝を引き込めなければならなかつた。ブリュリエールはマロアール夫人に對して、何の愛想もない無作法な態度をとつてゐた。彼は、ナナとフォンタンが一緒になつてゐるのを見て、腹を立てたやうな様子しながら、ナナのことばかりを考へてゐた。その上この二人は、綱えず接吻するので、しまひに一同はうんざりしてしまつた。世間の習慣などには頓着なく、二人は隣同志に坐つてゐた。

「厭になるね！食事をしたまへよ。後からだつて時間はいくらでもあるんだぜ！」とボスタが口にものを頬張つたまゝ繰り返して言つた。「お願ひだから、僕等が歸つてからにしてくれよ。」

しかしナナは我慢が出来なかつた。彼女はすつかり夢中になつて、處女のやうに顔を赧らめながら、愛情の籠つた眼付をして微笑んでフォンタンを眺め、やたらに愛稱を使つて呼びかけ、彼を弱らせてゐた。フォンタンが彼女に水や鹽を渡してやる毎に、彼女は前屈みになつて、唇や、眼や、鼻や、耳に、所かまはず接吻した。誰かど叱言を言ふと、今度は打たれた猫のやうに、そつと恥かしさうに内緒

でフォンタンの手を取り、それを握り締めて、接吻するなど色々な手段を用ゐた。彼女はフォンタンのどこかに觸れずにはゐられなかつた。フォンタンはその度に、肩を聳やかして、おとなしく彼女のするがまゝに任せてゐた。彼の大きな鼻は肉慾的な喜びに蠢めてゐた。牡山羊のやうな顔と、風變りな悪魔のやうな醜さが、この色の白い肥つた美しい女の眞心をこめた愛情に對して變な對照を作つてゐた。嬉しくて耐らないのだが、上品にしてゐなければならぬので、彼は時々彼女に接吻を返すだけだつた。

「いや、どうも妬けるね！あちらへ行き給へ、君は。」とブリュリエールが叫んだ。

そして彼はフォンタンの位置を變へて、自分がナナの傍に坐り、食器もそこへ移した。一同は夢中になつて嘸し立て、卑猥な言葉さへ口にしました。フォンタンはがつかりした様子をして、ヴェニユスを戀慕ふヴェルカンの仕草をしてみせた。席が變ると直ぐにブリュリエールは、色氣たつぷりな様子をした。けれどもナナは、食卓の下で彼女の足を探してゐる彼の脚を蹴つて退けた。どんなことがあつても、ナナは彼と一緒に寝たりはしないだらう。たとへ以前に、彼の顔が美しいのでちよつと惚れかけてみたことはあつたとしても、今ではすつかり厭氣がさしてゐたのだ。彼女はもし彼がナプキンを拾ふやうな風をして、彼女を振りでも

しようものなら、その顔へゴップを敲きつけてやらうと思つてゐた。

しかし會合は楽しく過ぎて、話は自然とグリエテ座のことに移つて行つた。あのボルドナアヴの奴は、一體何時死ぬのだらう？ボルドナアヴの悪癖は、また近頃ひどくなつて、今ではとても手に負へないほど皆を惱ませてゐた。昨夜も稽古の間中、しつきりなしにシモンヌを叱り飛ばしてゐた。たとへ彼が死んだとしても、俳優で泣いてやるものなんぞ誰もゐないだらう！ナナは、もし彼が舞臺に出て呉れと頼みに來ても、うまく斷つてやると言つた。それに彼女はもう芝居へは出まいと思つてゐたのだ。劇場は自分の家ほど楽しいところではなかつた。すると、新しい芝居にも、又今稽古をしてゐる芝居にも、役を振り當てられてゐなかつたフォンタンは、完全に自由な體となつて、かうして煖爐の前に足を延ばして、好きな女と一緒に夜を過ごすことの出来る自分の幸福を誇張して話した。他の人は、二人の幸福を羨むやうな風をし、全く果報者だよ、と言つて嘸し立てた。

さて『王様の日』の菓子を切つてみると、蠶豆はルラ夫人に當つた。彼女はそれを、ボスタのゴップに入れた。すると一同は、「王様飲み給へ！王様飲みなさい！」と叫んだ。ナナはこの陽氣な騒ぎを利用して、フォンタンの傍に



行つて頸に縋りついて接吻しながら、その耳に何か囁いた。するとブリュリエールは、色男らしく怒つたやうな笑ひ方をしながら、冗談ぢやないよ、と叫んだ。ルキゼは椅子を二脚並べて、その上に眠つてゐた。やつと一時頃になつて、一同は別れることになつた。そして階段を下りながら、さやうなら、さやうなら、と呼び合つた。

かうして三週間ばかりの間、惚れ合つた二人の生活は、水も漏らさない有様で續いた。ナナは、初めて絹の着物を買つてあんなにも嬉しかつた頃にまた歸つたやうに思つた。彼女は何時も家にゐて、淋しい單純な生活を樂しんだ。或る日、早朝から、彼女は自分でラ・ロシュフウオオの市場へ魚を買ひに行つた。そして昔の髪結ひのフランシスにばつたり顔を合せて吃驚してしまつた。彼はいつもの通り、すつきりとした身なりをして、非の打ちどころのないフロックコートを着込んでゐた。彼女は道の真中で、上衣を着て、髪を亂し、古靴を曳きすつてゐる姿を見られるのが恥かしかつた。しかし彼は昔のやうに、如才なく丁寧な口をきいた。何一つ問ひ質さうとはせずに、奥様は旅行中だと思つてゐましたと云ふ風を装つた。まあ！奥様があんなにしてお出かけになつたので、不幸になつた者が澤山ありましたよ！ほんとに世間全體の損失ですからな、と言つた。するとナナは好奇心に動かされ、先刻の當惑も打ち忘

れて、彼に問ひかけるのだつた。通行人が二人にぶつかつて行くので、彼女はフランシスを或る家の入口に連れて行つて、手には小さな籠を下げたまゝそこに立ち止つた。私が出したのを、世間ではどんなに言つて？あゝそのことなら、私のお伺ひする奥様方は、あちらでもこちらでも兎や角言つてはゐましたが、何といつても大變な評判で、ほんとに大成功でしたよ。では、シュタイネルは？シュタイネルさんは、この頃はひどく景氣が悪くて、何か新しい仕事で當てなければもう駄目になつてしまふといふことです。では、ダグネは？おゝ！あの方は立派に暮してゐますよ。あのダグネさんは、身持もよくなりましたしね。ナナは次第に追憶に耽つてその上まだ問ひかけようとして口を開いたが、ミラファの名を言ふには些か氣がひけた。するとフランシスは、笑ひながら彼のことを切り出した。伯爵様と言へば、あなたがゐらつしやらなくなつてからはほんとにお氣の毒に惱んでゐらつしやいました。まるで亡靈のやうに、奥様がいらつしやりさうな所へは、何處へでもいらつしやらないところはなないといつた有様でした。すると或る日ミニオンさんがあの方に會つて、自分の家へ連れてお歸りになりました。この知らせはナナをひどく笑はせた。しかしその笑ひは、何か心にこだはりのあるものだつた。

「あゝ、ぢや今はローズと一緒にゐるのね。」と彼女が言つた。「いゝのよ、フランシス、私は何とも思ひやしないわ！……でも偽善者だわ！すつかり癖が悪くなつてしまつて、一週間の辛抱も出来ないのかしら。もう私の他に女は作らないなど言つてゐた癖に！」

心の底で彼女は怒つてゐた。「ローズがありつたのは私のお下りの御馳走だわ！」と彼女は言つた。「えゝ、分つてゐるの。あのシュタイネルを私が取つた仕返しなんだわ……。でも、私が追ひ出してやつた男を連れて歸るなんて、皮肉だわね！」

「ミニオンさんは、そんな風には仰しやつてゐませんでしたよ。」と、フランシスが言つた。「あの方のお話では、伯爵様があなたを追ひ出したんだと言つてゐますよ……。それも、ひどい仕打で、お尻を蹴飛ばしたりなすつたんだとね。」

突然ナナは眞蒼になつた。

「まあ！そんなことを言つてたの……。それなら、私が自分で行つてやるわ……。今からでも一緒に行つて呉れない？……。私が行つてやるわ、そして、まだお尻を蹴つたなど、厚顔しいことを言ふかどうか、試してやるわ……。まあ、蹴つたんですつて！でも、私が誰にだつてそんな眞似をさせるのですか。私が撲たれて黙つてゐるものですか。私に指一本でも觸れれば、噛みついてやるんですからね。」

さう言つて、彼女はやつと氣を落着けた。皆は勝手に好きなことを言ふがいゝ。彼女は人々を、靴についた泥のやうにしか思つてゐなかつた。そんな人達を氣に懸けることすらが、彼女の氣持を汚すのだつた。彼女は自分に對してだけ良心を持つてゐた。するとフランシスは、彼女がこんなお勝手用の上衣を着たまゝ戶外を歩いてゐるのを見て、別れ際について親しい氣持になつて意見して見たくなつた。彼は、一人の男に惚れ込んで、何も彼も犠牲にしてしまふ



のは間違つたことで、男に惚れ込めば生活が立たなくなるものだと云つた。そのやうにフランシスがおづくしなから、こんなに美しい女がその身を安く賣りつけてゐるのを見るに見兼ねて、昔馴染のよしみで言ふ言葉を、彼女は頭を垂れて聴いてゐた。

「でも、これは私が好きでしてゐることですからね。」と遂に彼女が言つた。「あんたの言つてくれることは、嬉しくお聞きするわ。」

二人は握手をした。フランシスは身嗜みのいゝにも拘らず、その手は何時少し油染みてゐた。彼女は魚を買ひに行つた。そして一日中、お尻を蹴つたと云ふあの話が、彼女の氣になつた。彼女は、爪弾き一つされても黙つてはゐない利かぬ氣の女らしい様子で、それをフォンタンに話して聞かせた。フォンタンは威張りかへつて、堅氣の人間は輕蔑すべき馬鹿者どもだと言ひ放つた。ナナもそれから後は、すっかり彼等を輕蔑する氣持になつた。

丁度その日の夕方、二人はブウフ座へ行つた。フォンタンの知つてゐる若い女が、僅かばかりの墓詞がついて、初舞臺を踏むのであつた。二人がモンマルトルの高臺を歩いて歸つて來たのは、十時頃だつた。ショーセ・ダンタン街で、二人はモカ珈琲の入つた菓子を買つて歸つて、陽氣は温かくもなかつたし、それかといつて、ストーヴを燃やす手

間をかける程でもなかつたから、寢床の中でそれを食べた。二人は夜具を腹まで掛け、枕を背中にあてがたまふ、その夜の女の話を話しながら、並んで寢床の上に坐つてそれを食べてゐた。ナナは、その女が、顔はまづいし少しも氣の利いたところが無いと言つた。前の方に横になつてゐたフォンタンは、寢臺傍の卓子の端の、蠟燭と燐寸の間にある菓子を取つて、彼女に渡してやつてゐた。そんなにしてゐる中に、二人は喧嘩を初めてしまつた。

「ふん！ あんな子が何でせう！」とナナが叫んだ。「あの子の眼は錐の孔のやうだし、髪の色は麻屑のやうぢやないの？」

「もうおよしよ！」とフォンタンが言つた。「髪の毛も立派だし、眼も輝いてゐたよ……女と云ふものは、妙に他の女のことを貶すものだね！」

フォンタンは腹を立てゝゐる様子だつた。「さあ、もう澤山だよ！」と遂に彼は怒りを含んだ聲で言つた。「ね、俺は執拗く言ふことが嫌ひなんだ……。喧嘩をするのは厭だから、もう寢ようよ。」

そして彼は蠟燭を吹き消した。ナナは苛々してまだ言ひ續けてゐた。彼女はそんな調子でものを言はれるのが不愉快だつた。彼女はいつも人から尊敬されてゐたのだ。しかし彼がもう答へようとしないので、黙るより仕方がなかつ

た。彼女は眠ることが出来なくて、幾度も寢返りを打つた。「煩さいね！ もうそれで寢返りはおしまひかい？」と突然フォンタンが起き上つて叫んだ。

「お菓子の粉がこぼれてゐるからぢやないの、何も好んでするのぢやないわ。」とナナが素氣なく言つた。

實際粉が零れてゐて、彼女は腿のあたりにまで感じられ、體中がちくちく刺されるやうだつた。彼女はたつた一つの粉にも苛々して、血が滲むまで肌を掻き掻るのだつた。それにしても、菓子を食べた後で、夜具を拂はないと云ふことがあるだらうか？ フォンタンはむつとして、また蠟燭を點した。二人とも寢衣のまま、足も露はにして起き上つて、夜具を捲つて手ではたき、菓子の粉を絨毯の上へ拂ひ落した。足をよく拭いて頂戴ね、とナナが頼むのを、フォンタンは勝手にしろと言ひすて、寒さに顫へながら、寢床の中へ潜り込んだ。ナナも寢床に入つたが、やつと足を延ばすか延ばさない中に、また動き初めた。粉がまだ残つてゐた。

「私があんなに言つたのに！」と彼女は繰り返した。「きつとあなたの足について入つたんだわ……。私、眠られやしないわ！ どうしたつて眠られやしないわ！」

そして彼を跨いで、彼女が寢床から下りようとすると、眠くてならなかつたフォンタンは、辛抱がしきれなくなつ

て、彼女の横面を力一ぱい殴りつけた。その強い力で、ナナは枕の上へ横に倒れて、ぼうとしてしまつた。

「おー！」とそれだけ言つて、彼女は子供のやうに深い呼吸をついた。

するとフォンタンは、もしまだ體を動かすなら、また殴りつけるぞ、と嚇しつけた。そして蠟燭を吹き消して、仰向けになつてしまつたが、間もなく軀をかき初めた。彼女は顔を枕に埋めて、息を殺して泣いてゐた。あんなに腕力を振ふなんて卑怯だ、と思はれた。けれども、フォンタンの奇怪な容貌が怖ろしく見えて來たほど、彼女は心から恐怖を感じた。そしてあの平手打ちが、彼女の心を静めたかのやうに、もう怒りは忘れてゐた。彼女はフォンタンを尊敬して、壁際へびつたり身を寄り寄せて、彼に廣い場所を残してやつた。それから彼女も、頬を熱くほてらせ、眼に涙を一杯ためたまふ、もう菓子の粉などは氣にならないほど、ぐつたり疲れたしとやかな氣持になつて、打ち碎かれたその心に、何か優しさを感しながら眠つてしまつた。朝になつて眼を醒ますと、彼女は露はな兩腕にフォンタンを引寄せ、力を籠めて胸に抱き締めた。あんなことはしないわね？ ね？ と彼女は繰り返した。フォンタンがほんとうに好きになつて、彼になら、打たれても嬉しいとさへ思つた。



その頃から生活が新らしく變つた。たゞ、「はい」とか「いえ」とか言ふだけにも、フオンタンは平手打ちを飛ばした。彼女はそれに慣れ、堪へ忍んだ。時々彼女は、叫び聲を上げて彼を脅かしても見たが、しかし彼が、彼女を壁際まで追ひ詰めて、絞め殺してしまふぞ、と言ふと、彼女はまた従順になつてしまふのであつた。幾度も彼女は、椅子の上を身を投げ出して、五分間餘りも泣いてゐた。だが、またすつかりそれを忘れたやうに非常に快活になつて、歌を歌つたり笑つたりして、スカートを蹴へしながら部屋中を走り廻るのであつた。けれども、最も悪いことには、今ではフオンタンが一日中家を留守にして、夜中にならなければ歸つて來ないことだつた。友達に會ひにカフエへ出掛けて行くのであつた。ナナは、もし一言でもそれを非難すれば、彼が歸つて來なくなりはいまいかとたゞそればかりを恐れて、優しく心を戰かせながら、何もかも耐へ忍んでゐた。しかしマロアル夫人も、ルキゼを連れだした伯母も來ない日などは、死ぬほど退屈してしまふのであつた。そんな有様だつたから、或る日曜日にラ・ロシュフウコオ市場へ鳩を買ひに出掛けた途中で、一把の赤蕪を買つてゐるサタンにばつたり出會つたときは、躍り上るほど喜んだ。殿下がフオンタンのシャンパンを飲んだあの夜以來、二人は顔を合はさなかつたのである。

「まあ！ あなた、この近くに住んでゐたの？」とサタンが、こんな時間に道の眞中で、スリッパをはいてゐる彼女を見て驚いて言つた。「可哀さうに、ぢやあなたは今困つてゐるのね！」

ナナは眉を皺めて、彼女を黙らせた。そこには部屋着のまま、上衣も着ない、崩れた髪に白く塵を溜めた女達が歩いてゐたからである。朝になると、この邊りの女は、男を送り出して、直ぐに市場へ買物に來るのであつた。そして寢不足な臉を腫らして、不機嫌さうに、昨夜のはげしい疲労の跡を顔に浮べながら、古靴を曳きすつてゐるのであつた。四辻と云ふ四辻から、さうした女達が市場へやつて來た。まだ若い年頃の女や、捨鉢な、併しいたいけな女や、見る眼にも恐ろしい女や、年とつて肥つた女や、それらが、皆青い顔を、肌を露はにして、商賣の時間の外は、そんな姿で人に見られるのを少しも氣に留めてゐなかつた。舗道を通る人々が振り返つて眺めても、微笑み一つ返さないので、絶えず忙しさに、女中のやうに無頓着な様子をして歩いてゐた。男なんかもう眼中になかつた。丁度サタンが赤蕪の代價を拂つてゐる時に、時間に遅れた何處かの若い店員が、「よう、今日は。」と通りがりに彼女に呼びかけた。すると、彼女は身を起して、侮辱された女王のやうな權幕で言つた。

「一體どうしたといふんだらう、あの豚は？」

しかし彼女はその男を思ひ出した。三日ばかり前の夜中に、一人で並樹街を物色して、彼女はその男を客にとるために、三十分近くもラブリユエール街の片隅で口説きたつたのであつた。その事を思ひ出すと、彼女は一層腹が立つた。

「まさかこんな日中に呼び掛けるほどの馬鹿者もゐやしないのに、」と彼女は言つた。「え、商賣に出てゐる時なら、相手にもしてやるけど。」

ナナは新らしいかどろかと疑つたが、鳩を買ふことにした。サタンは自分の家の入口を、ナナに教へて置かうと思つて、彼女と並んでラ・ロシュフウコオ街を歩いた。そして二人きりになると、ナナはフオンタンに惚れ込んでゐることを話して聞かせた。家の前に來て、サタンは赤蕪を腕に抱へたまゝ、ナナの話を夢中になつて立ち止つてしまつた。ナナは、今度は彼女が嘘をついて、ミユッア伯爵のお尻を蹴飛ばして追ひ出してやつたのよと言つた。

「あら！ まあ素敵だわね！」と、サタンは繰り返した。「素敵ね、蹴つてやつたの？ それで、何も言はなかつたの？ほんとに意氣地なしたわね！ 私はそこにゐて、その顔が見てやりたかつたわ……さうよ、金持は我慢が出來ないわね！ 私もね、男を持つてゐる頃は、うんざりさせ

られてしまつたわ……。どう？ よければ遊びにいらつしやいな。あの左手の入口よ。來る時は、三度敲いて頂戴ね。うるさい奴がよく來るんだから。」

それから後、ナナは退屈になるとサタンに會ひに出掛けた。サタンは夕方の六時迄は、決して外に出なかつたから、何時でも會へるに決つてゐた。彼女が警察の手を逃れる爲めに、或る藥劑師が、家具の揃つた二間を貸してやつてゐた。しかし一年餘りの間に、彼女は家具を壊すし、椅子の底を抜くし、カーテンを汚すし、まるで氣狂ひ猫が住んでゐるやうに、亂雑な不潔な部屋にしてしまつた。自分でさへ厭になるので、氣を入れ換へて掃除をしようと思つた朝もあつたが、椅子の棧やカーテンの端が、觸れれば直ぐに取れるといふ有様で、まるで部屋の中で埃と戦争をしなければならなかつた。この頃ではそれが一層不潔になつて、扉口では何か上から落ちて來さうで、もう誰も入つて行くことも出來なかつた。遂に彼女は、その部屋に手をつけようともせずに放つて置いた。それでもランプの燈火で見れば、鏡のついた衣裳箆や、柱時計や、まだ千切れ残つてゐるカーテンなどが、男達の眼を騙すことが出来るやうにも思はれた。六ヶ月も前から、家主は彼女を追ひ出してしまふと言つて脅かしてゐた。すると一體、誰のためにこんな家具を、大事にかけてやらねばならぬのだらう？ 家



主の爲めだつて！勝手にするがいや！さう思ふと彼女は元氣よく起き上つて、「そらつー」と叫んで、簾筒や戸棚の横腹を蹴飛ばした。すると、それは音をたて、ゆれた。

ナナは殆んど毎日来たが、サタンは何時にも寝てゐた。彼女は買物などに出掛けても、歸つて來るとぐつたり疲れて寢臺の端に身を投げ出して、また眠り込んでしまふのだつた。晝の間中重い足を曳きずつて、椅子に掛ければ居眠りをし、夕方瓦斯の點る頃までそんな懶い氣分から覺めないのであつた。ナナはこの家で、洗面器が床に置いてあつたり、昨夜泥まみれにしたスカートが脇掛椅子を泥で汚したりしてゐる中の、取り亂れた寢臺に、することもなくぼんやりと坐つてゐるのが非常に氣持よく思はれた。かうして彼女は、煙草を喫ひながら腹這ひになり、肌着のままで足を頭よりも高く上げてゐるサタンに、くどくどと打明け話をして聞かせるのであつた。時々もの悲しい午後などは、二人とも、それを忘れるためだと言つてアブサントを取り寄せた。サタンは階下へも下りずに、下衣もつけないままの姿で、手擦のころへ身を屈めて、門番の小娘に用事を言ひつけた。その十歳ばかりの小娘は、コップにアブサントを入れて運んで來ると、サタンの露はな足をぢろりと眺めて出て行つた。會話は何時も男が穢はしいといふことに落ちて行つた。ナ

ナはフォンタンのことより他には何も考へてゐなかつた。ちよつと喋つても、必ずフォンタンがどう言つたとか、どうしたとか、その事にばかり移つて行つた。しかしサタンは親切に、ナナが窓に凭れて待つてゐた話や、シチュウが焦げたといふので喧嘩をした話や、幾時間も不機嫌な顔をして黙つてゐた後、また寢床の中で仲直りをした話などを、退屈もせず何時までも聞いてやつてゐた。そんな話をしまつた。先週は眼が腫れるほど敵かれたし、昨夜もスリッパが見つからないといふだけのこと、フォンタンは彼女を寢臺側の卓子の上に倒したとのことだつた。サタンは煙草を吹かしながらそれを聞いてゐたが、少しも驚かなかつた。たゞその話の間に、私なら男が撲ちかゝつて來たら、ひよいと身を縮めて空を打たせてよろけさせてやるのに、とだけ言つた。二人は、何度も何度も繰り返される同じやうな詰らない喧嘩の、その平手打ちが嬉しくてならないといふやうな話をしながら、疲れてしまふのであつた。そのやうな平手打ちに、彼女等は體のはてるやうな、優しい氣持を感ずるのだつた。ナナが毎日こゝへやつて來るのも、フォンタンに撲られた喜びをもう一度繰り返して、果ては彼がどんな風にして長靴を脱ぐか、といふことまで説明するためであつた。遂にはサタンもその話に興味を感じて、それ

よりもつとひどく彼女を殴りつけ、死んだやうに土間へ倒れてゐるのを顧みようともしなかつた。或る菓子屋の男——それでも彼女は非常に愛してゐた——の話を聞いて聞かせた。だがやがて、こんな調子ではとても辛抱が出來ないと言つて、ナナが涙を流す日が續くやうになつた。そんな時サタンは、ナナの家まで彼女を送り届けてやつて、それから一時間も道に立つて、フォンタンに殺されはしまいかと眺めてゐるのだつた。そして翌日になると、またナナの仲直りの話を聞きながら、午後の時間を樂しむのだつた。しかし口へは出さなかつたにしても、二人とも滅茶苦茶に殴られた方がいゝと思つてゐた。それは尙更情熱を煽つてくれるからである。

かうして彼女達二人は別れられなくなつてしまつた。サタンは、フォンタンが淫賣などの來るのは厭だと言つたので、ナナの家へ決して行かなかつた。二人は、いつも一緒に外へ出て行つた。そんなにしてゐる或る日のこと、サタンはナナを或る婦人の家へ連れて行つた。それは何時かナナの晩餐會へ出席するのを斷つた日以来、ナナの氣に懸つてゐて、尊敬に似た氣持を抱かせてゐたロペール夫人の家であつた。ロペール夫人は、モスニエ街に住んでゐた。その新しい街は、ユーロップ區の靜かな場所にあつて、商店は一軒もなく、軒を並べてゐる美しい家は、その小さな部屋

に女達を住はせてゐた。丁度五時頃だつたので、人影の絶えた鋪道を通つてゆくと、その眞白な高い家の建ち並んだ貴族的な靜かさの中に、時々相場師や富豪の四輪馬車が止つて、素早く下りた男達は、化粧着を着た女達が待つてゐるさうに思はれる窓を見上げてゐた。最初ナナは、その夫人を知らないからと言つて、當惑した様子で、入つて行くのを斷つた。すると、私は友達を連れて行くのだから、少しも關はない、とサタンが言つた。サタンはたゞ、普通の訪問をする積りでゐた。ロペール夫人は、或る料理店で昨夜サタンに出會つて、大へん親切な様子で、ナナを連れて來てくれと頼んでゐたのであつた。ナナは遂にサタンの言葉に従つた。二階へ上つて行くと、居眠りをしてゐた女中が、奥様はたゞ今お留守です、と言つた。しかし丁寧に二人を客間へ通して待たせた。

「まあ！素敵だわ！」とサタンが囁いた。それは暗い色の織物で壁を覆つた下町風のがつしりした部屋であつた。總てが立派に整つてゐて、財産を作つて隠退した巴里の商人らしい好みに作られてゐた。ナナはそれに感心して一寸冗談が言つて見たくなつたが、サタンはそれを窘めて、ロペール夫人の所持のよいことを話した。夫人は何時會つても、年をとつた眞面目な男と腕を組んで歩いてゐた。この頃では、昔チョコレート商だつた堅氣な男を



守つてゐた。その男は、この家の立派なのがすつかり氣に入つて、彼女のことを『私の子供よ』と呼んで、そこへ來る時には必ず手紙で知らすのであつた。

「あら、これだわ！」とサタンは、柱時計の前に掛つてゐた寫眞を指して言つた。

ナナは暫らくその肖像を眺めてゐた。それは濃い褐色の髪、顔の長い女で、微かに笑つてゐるやうに唇をすぼめてゐた。云はゞ立派な社交界の貴婦人で、しかも慎しみ深いところがあつた。

「可笑しいわね。」と暫らくしてからナナが囁いた。「私、この顔なら確かに何處かで見ることがあるわ。何處だつたかしら？ もう思ひ出せないわ。でも、きつと餘りよくない場所だつたと思ふの……。え、さうよ、きつと餘りよくない場所だつたわ。」

かう言つて彼女は、サタンの方へ振り返つて附け加へた。「では、ロベールさんが私を連れて來るやうに言つたのは、どんな用事なの？」

「ロベールさんの用事？ 何でもないので！ たゞ一寸、一緒に話して見ただけのことです。……まあ、世間並みのおつき合ひだわ。」

ナナはサタンの顔を見つめてから、軽く舌打ちした。そんなことなら、彼女にはどうでもよかつた。それに、あま

り待たされるので、ナナは、これ以上待つてゐるのも詰らないと言つた。で、二人は戶外へ出た。

翌日フオンタンはナナに、夕飯に歸つて來ないと言つて置いたので、彼女は早くからサタンに會ひに出掛けて、どこの料理店で、御馳走をしようと思つた。その料理店を選ぶのが、また、なか／＼むづかしい問題であつた。サタンはピヤホールがいゝと言ふし、ナナはそれをくだらないと言つた。そして結局、二人はロールの家へ行くことにした。それはマルティル街の料理店で、食事は三法ときまつてゐた。

二人は時間を待つてゐるのも退屈だつたし、鋪道の上ではどうする譯にも行かなかつたので、二十分ばかりも早かつたが、ロールの家へ入つて行つた。三つの廣間が、まだからんとしてゐた。二人はそのうちの一部屋の食卓についた。ロール・ピエドフェルは、その部屋の勘定場の高い腰掛に坐つてゐた。このロールは五十歳ばかりの肥満した女で、帯やコルセットで體を締めつけてゐた。しつ切りなしに入つて來る女達は、伸び上つて、珈琲皿を隔て、親しげな優しい様子でロールの口に接吻した。眼に愛嬌を湛へた女主人は、誰に對しても公平に振舞つて、皆に嫉妬を起させないやうに努めてゐた。それとは反對に、料理を運んで來る背の高い瘦せた女中は、臉が黒くて、その眼は陰氣に輝い

てゐた。見るうちに三つの部屋は満員になつた。かれこれ百人ばかりのお客が、入り交つて食卓に着いてゐた。そのお客達は殆んど、年は四十に近く、大柄で肥満してゐた。誰も皆惡徳の沁み込んだ、厚い唇をし、肥つた手足をしてゐた。そしてこんな胸や腹の膨れた人々の間に、圓々しい様子はしてゐながらも、まだ純なところのある瘦せた可愛い娘も交つてゐた。それはほんのこの頃、怪しげな舞踏會へ出初めたばかりの小娘らしく、そこからこのロールの家へ、誰かに伴はれて來たのに違ひなかつた。そしてこゝでは、肥つた女達が、自分等の青春の香りをまた嗅ぎつけたかのやうに、すぐにそんな娘達の周圍に集つて、若い娘の御機嫌取りに忙しい年をとつた男のやうに、いくらでも御馳走を奢つてやるのであつた。男達の數は非常に少なく、精々十人か十五人位ゐるものであつた。それも、女達のスカートの浪に押されて、おとなしくしてゐた。たゞ、こゝの様子を見に來た四人の元氣のいゝ男達だけが、自由に振舞つて、冗談を言ひ合つてゐた。

「どう？」とサタンが言つた。「こゝのシチュウはなか／＼美味しいでせう。」

ナナは満足して點頭した。それは肉饅頭や、チキンライスや、豆の入つたスープや、ワニラ入りの氷菓子などの、まるで田舎の旅館で出すやうな、腹に應へる古風な料理で

あつた。女達は皆、特にこの店のチキンライスを食べにやつて來て、胴着の中で胸を膨らませながら、ゆつくりと片手で唇を拭つてゐた。最初ナナは、古い友達にでも出會つて、色々な下らないことを聞かれはすまいかとびく／＼してゐたが、やつと落着くことが出來た。色褪せた着物や、眼も當てられない帽子が、贅澤な衣裳の隣に、同じ倫落の世界に住んでゐるといふ親しさから仲よく並んでゐる。この種々様々な群衆の中に、彼女は一人も知つた顔を見なかつた。彼女は一寸、渦巻いた髪を短かく刈り込んだ一人の青年に心を惹かれてゐた。その青年は、構柄な顔をして、さつきから絶えず、ほんの一寸したその氣紛れな仕草にも、同じ食卓の肥えた女達の注意を一身に集めてゐた。だがその青年が笑つた時に、胸が大きく膨らんだ。

「あら女だわ！」とナナは思はず軽い叫びを上げた。チキンライスを食べてゐたサタンが顔を上げて囁いた。

「え、さうよ、私、知つてゐるわ……。なか／＼いゝでせう！ 現を抜かしてゐる人もあるのよ。」

ナナは不機嫌な顔をした。彼女にはまだその譯がよく分らなかつたのだ。そして考へ深さうな聲で、人は何時どんなものが好きになるか知れないのだから、ものゝ味だとか色だとかは議論したつて仕方がないと言つた。ナナは、サタンが大きな青い初心な眼をして近くの食卓を騒がせてゐ



るのをつく、眺めながら、物思ひに沈んだ様子で氷菓子を食べた。サタンの傍には、非常に可愛い金髪の肥えた女がゐた。サタンは顔を赤くしながら、ナナが窺めようと思つたほど、その女の傍へすり寄つてゐた。

丁度その時、一人の女が入つて来たので、ナナは吃驚した。それはロペール夫人だつた。夫人は褐色の髪、二十日鼠のやうな可愛い顔で、瘦せた背の高い女中に親しげに會話をした。それからロペールのゐる勘定場へ行つて、そこへ凭れかゝりながら、長い間接吻してゐた。ナナは、そんなに身分のある婦人にしては、接吻の仕方が可笑しいと思つた。それどころか、ロペール夫人には憤ましい様子が少しもなかつた。夫人は、部屋の中をちろ／＼眺めながら、低い聲で話してゐた。ロペールはまたその大きな體を、椅子の上に落着けてゐた。その態度は、まるで惡徳の古い偶像のやうに傲然として、その顔は、信者達の接吻で磨かれて光つてゐた。彼女は料理の皿を見下しながら、肥満して膨れ上つたお客達の上に君臨してゐた。逞ましい女達に對して、まるで惡魔のやうに構へ込み、四十年間の働きのよつて報いられた料理店の主人として、その玉座を占めてゐた。そのうちにロペール夫人は、サタンを見つけた。そしてロペールと別れて、愛嬌を作りながら近づいて来て、昨夜家を空けたのをどんなに後悔したでせうと言つた。サタンが

彼女の愛嬌につり込まれて、どうかして自分の傍に少し席を作らうとすると、彼女は、夕飯はもう済ませたと云つた。ロペールは、たゞ様子を見に入つて来ただけだつた。そして新しい知人のナナの後ろに立つて、その肩に手を置きながら、優しく微笑んで繰り返した。  
「何時またお目にかゝれるでせう？ もしもお暇でしたら……」

生憎ナナは、それ以上辛抱して聞いてゐられなかつた。彼女は、この會話に腹を立て、しまつた。この立派な婦人にあけすけに理窟を言つてやりたくてならなかつた。が、その時、一組の人々が入つて来たので、彼女もその方に氣を取られてしまつた。それは立派な服装をして、ダイヤモンドを輝かせてゐる素敵な女達であつた。彼女等は、古い馴染を思ひ出して、親しい口を利き合つたことのあるロペールの店へ一緒にやつて来たのだつた。そして汚れた身なりの貧しい婦人達が、嫉妬の眼を見張つてゐる中へ、體につけた幾十萬法の寶石を見せびらかす爲めに、一人前三法の食事をしに来たのであつた。彼女等が入つて来ると、その高い話し聲や明るい笑ひ聲が、まるで戸外から日光を持ち込んで来たやうに思はれた。ナナは、つとしてその方へ顔を向けると、その中にリュシイ・スツワールとマリア・ブロンが交つてゐるのを見て、非常に厭な氣持になつた。五分間

ばかり、その女達がロペールと話しながら隣の部屋へやつて来ない間、ナナは顔を伏せて、パン屑をナブキンの上で轉がしながら、それに夢中になつてゐるやうな風を装つた。それから暫らくして振り向くと、彼女はすっかり驚いてしまつた。隣の椅子は空になつて、サタンの姿が見えなかつた。

「あらまあ！ どこへ行つたのかしら？」彼女は思はず高い聲を立てた。

サタンの注意を集めてゐた金髪の肥つた女が、意地悪さうに笑つてゐた。そしてナナがその笑顔を見て苛々しながら脅やかすやうな眼付で睨み返すと、彼女は低い聲で優しく話しかけた。

「でも、私ぢやないことよ。あなたの友達を取つたのは、他の方よ。」

ナナは自分がからかはれてゐるのに氣がついて、もう何も言はなかつた。彼女は、なほ暫らく怒りを現はすまいとして坐つてゐた。隣の部屋の奥の方では、すつかり卓子を占領して、モンマルトルやシャベルの舞踏場から連れて來たらしい娘達に御馳走をしてやつてゐるリュシイ・スツワールの高い聲が聞えて來た。部屋は暑かつた。女中は汚れた皿を重ねて、チキンライスの強い香の中を出て行つた。先刻の四人の男達は、今では六人ばかりの女達を相手に、彼女

等を酔はせて淫らな話を聞かうと思つて、高價な酒を注いでやつてゐた。かうなると、サタンの晚餐代を支拂つてやる事が、ナナの癢に觸つてならなかつた。まああの淫賣は、自分が玩具にされるために、ひよつくり出會つたばかりの、帽子を被つた犬のやうな男に連れられて、私には有難うとも言はず、あんなにして出て行つてしまふんだ！ そんな風に彼女には思はれた。勿論それは、三法位のみ僅かな金ではあつたが、それにしても彼女の仕打ちがあんなりなので、彼女は腹が立つてならなかつた。彼女は、今では濁泥よりも厭なロペールの前に六法を投げ出して、支拂を済ませた。

マルテイル街まで来ると、ナナは腹立たしさがなほ募つて來るのを感じた。どんな事があつても、もうサタンのところへは足踏みをすまい。あんなところへ顔を出すなんて、ほんとに穢ららしいことだわ！ と彼女は考へた。そして折角の一夜が、こんな風に壞されたのを忌々しく思ひながら、ゆつくりと、モンマルトルを歩いて行つた。ロペール夫人に對しては殊に腹の蟲が納らなかつた。あの女が立派な婦人のやうな様子をするなんて、何といふ厚顔しいことだらう。あんな女の屑の寄り集まる場所へ出掛けて行つて、あの威張りやうはどうだらう！ と彼女は考へた。そして今では、あの女とカフェ・パピヨンで出會つたことも、ポア



ソニエの怪しげな踊り場で、男達が三十スウ位で、彼女を連れ出してゐたことも、憤まじさうにしてゐたので役人達の氣に入つてゐたことも思ひ出せた。そして、自分がわざ／＼招待してやつた晩餐會に出席を斷つたのは、たゞ身持の正しいのを衒ふためにしか過ぎなかつたのだ！ほんとに、あんな女こそ道徳の外へ摘み出してやればいゝ！あんなに内氣がる女に限つて、何時でも誰も知らない忌しい穴の中で、見るに耐へない眞似をしてゐるものだ。

ナナはそんな事を考へながら、ヴェロン街の自分の家に辿りついた。火が點いてゐるのを見て、彼女は驚いた。フォンタンは、彼も亦夕食を奢つてくれる等の友達にまかれてしまつて、不機嫌な顔をして歸つてゐた。朝の一時まで歸つて來ないだらうと思つてゐた彼がそこに居るのを見て、ナナが撲たれるのを恐れて、びく／＼しながら辯解するのを、彼は冷やかな態度で聞いてゐた。彼女は六法を使つたことは言つてしまつたが、しかしマロアル夫人と一緒に掛けたのだと嘘をついた。すると彼は極柄な態度で、彼がそつと見て置いた彼女宛の手紙を差し出した。それは今もフォンデットに閉ぢ込められてゐるジュールジュが、僅かに熱烈な文章に心を託して毎週送つて來る手紙であつた。ナナは手紙を貰ふのを嬉しがつた。殊に、大袈裟な愛の言葉や誓ひの書いてあるのは嬉しかつた。彼女はそれを誰にで

も讀んで聞かすのだつた。フォンタンは、ジュールジュの文章をうまいと言つて褒めてゐた。しかしその夜は、喧嘩の種を播くのを恐れて、彼女は無關心な風を装ひ、その手紙を走り讀みすると、直ぐに不機嫌な様子で投げ棄てた。フォンタンは窓に寄り掛つて、そんなに早くから寝るのも退屈だし、今夜一晩どうして過せばいゝのか分らずに困つてゐた。突然彼は振り返つた。

「この小僧に返事を出してやつたらどうだらう。」と彼が言つた。

何時も手紙を書くのは彼の役だつた。彼は文章を推敲し、それから調子に乗つて大きな聲でその手紙を讀み上げて、ナナが、そんなに書けるのはあなたより外にはないと言ひながら接吻すると、彼は得意であつた。それは二人の心を晴々とさせ、二人の愛を強めるものだつた。

「いゝやうになさいよ、私今お茶を差すわ。それから寝ませうよ。」とナナが言つた。

フォンタンは机の前に坐り込んで、ペンやインクや、紙を大袈裟に持ち出して、腕を張り、顎を突き出した。

「私の心よ」と彼は、高い聲で讀みながら書き初めた。

一時間餘りもそれに熱中して、時々文章を推敲したり、兩手で頭を抱へたり、またいゝ言葉を搜したり優しい言ひ廻しを發見すると、一人で笑つたりしてゐた。ナナは黙つ

て、先刻からもうお茶を二杯飲んでゐた。フォンタンは遂に、劇場で本讀みをする時のやうに、普通の聲ではあつたが身振りを交へながら、その手紙を讀み上げた。彼はその五枚ばかりの中で、『ミニニョットにての樂しき時間は過ぎ去り申し候、されどその時の思ひ出はこよなき香りの如くになほ消えやらす候。』とまづ書いて、『その戀の花咲きし春へ變らぬ眞心』を誓つた後に、たゞ一つの私の願ひは、『もし過ぎ去りし幸福にして再び繰り返し得るものならば、この幸福をこそ繰り返したく消え入る思ひにて候。』とそれを結んだ。

「まあね、」と彼が言つた。「こんなに丁寧には書いて置いたが、みんな冗談さ……。どうだい、こんなに書いて置けば、胸に應へるだらうな！」

彼は得意だつた。併しナナは何時もびく／＼しながら、ついつつかりして、過ちを犯してしまつた。上手だとか何とか叫びながら彼の頸に飛びついて行けばよかつたのに、それをしなかつた。彼女はたゞ手紙がよく出来てゐると言つて、その外には何も言はなかつた。すると彼は非常に腹を立てた。この手紙が氣に入らないならば、自分で書くがいゝ、といつた具合で、何時ものやうに愛の言葉を語り合つた後で接吻をする代りに、卓子を隔て、黙つて坐つた。ナナは彼の茶碗に茶を注いだ。

「馬鹿めが！」と彼は、茶碗に唇を當て、怒鳴つた。「鹽を入れたんだな！」

悪いことに、ナナはその時肩を聳やかした。彼は猛りたつた。

「えゝ！面白くもねえや、今夜は！」

それから喧嘩が初まつた。柱時計を見ればまだやつと十時だし、それは一つの時間潰しの方法に外ならなかつた。彼は罵りながらナナの顔に飛びついて行つて、續けざまにありとあらゆる悪口を浴せかけて、彼女に辯解の際も與へなかつた。お前はだらしがなくて、馬鹿で、どんな男とでも一緒に寝ると罵つたり、また金錢の問題を持ち出して怒鳴り散らしたりした。俺が街で晩飯を食ふ時に、六法も使つたことがあるか？人に奢つてもらふか、でなければスー鍋でも食つてゐるんだ。それにあんなマロアルのやうな鴉母婆と歩いてさ、もうあんな奴は明日からお拂ひ箱だぞ！おう！お前とあの女とで、毎日六法つゝ街へ棄てゝ來れば、未はどうなることか知れたものぢやない！

「兎に角、勘定して見よう！」と彼は叫んだ。「さあこゝへ金を出して見ろ。どれだけ残つてゐるんだい？」

彼の卑しい吝嗇の本能が現はれて來た。ナナは言はれるまゝにびく／＼しながら、急いで机の中から残りの金を取り出して、彼の前に差し出した。今まで、二人の共用の手



箱の中にその鍵があつて、自由に金を出してゐたのだ。「なんだい」と彼は金を數へ終つて言つた。「一萬七千法あつた金が、やつと七千法しか残つてゐないぢやないか。一緒に暮してから、まだやつと三月にしかならないのに……こんな馬鹿なことがあるものか。」

彼は自分で机のところへ行つて、その抽斗を抜いて来て、ランプの下で掻き廻した。しかし、どうしても六千八百何法しか出て来なかつた。そこでまた大喧嘩が初まつた。

「三月に一萬法も使つたんだな」と彼が怒鳴つた。「畜生！一體何に使つたんだ？ え？ 言つて見ろ……あの瘦つぽちの伯母にやつたんだらう、え？ それとも男に注ぎ込んだのか？ どうだ……言つてみろ！」

「まあ！ そんなにあなたが怒るのなら！」とナナが言つた。「勘定をするのはやさしいことだわ……。あなたは家具のことも忘れてゐるし、それから私だつて着物を買はずにゐられないわ。新らしく世帯を初める時には、ばた／＼お金を出していつて了ふわ。」

しかし彼は、辯解を求めて置きながら、それには耳を藉さなかつた。

「うん、それにしてもばた／＼出て行き過ぎるな。」とまた彼が、今度は少し落着いて言つた。「だがね、俺はもうこの世帯にはうんざりしてゐるんだ……この七千法は俺のも

のだらう。だから、俺が取つて置くことにしよう……いやさ！ お前のやうなふしだらな女の道伴れになつて、素寒貧になりたかないからね。誰だつて自分の幸福は護らなけりやならないんだ。」

そして、彼は威張つて、その金をポケットに入れてしまつた。ナナはぼんやりそれを眺めてゐた。彼はいゝ氣になつて、また言葉を續けた。

「ねえおい、生憎俺は人の伯母や子供を養つてやるほど聞抜けぢやないんだ……。お前のことだから、お前の金を出したらいいだらう。だが、俺の金には手を觸れて貰ふまいぜ！……お前が羊の焼肉でもつくれば、半分は俺が出すよ夕方に勘定しようぜ。きつぱりとな！」

するとナナは腹を立て、かう叫ばずにはゐられなかつた。

「それぢやあなたは、私の一萬法を食べてしまつたことになるわ……それや卑怯だわ！」

「もう一度言つて見ろ！」

彼女は打たれるのも構はずに繰り返した。彼は飛びついて行つて、殴つたり蹴つたり散々な目に會はした。やがて彼女は仕方なく何時ものやうに着物を脱いで、泣きながら

寢床に入つてしまつた。彼も寢ようとしたが、卓子の上に先刻ジョルジュに書いた手紙を見つけると、それを丁寧に折つて、寢床の方に向き直つて脅かすやうな態度で言つた。

「いゝ手紙だ。俺がポストへ入れてやるよ、氣紛れなことは嫌ひなんだから……。黙つて寢ろよ、煩さい奴だな。」

息を殺して泣いてゐたナナは、ほつと溜息をついた。彼が寢床に入ると、彼女は苦しさに嘔ひ泣きながら、その胸に寄りかゝつて来た。二人の喧嘩は何時もこんなにして終るのだつた。彼女は彼を失ふことばかりを恐れて、たとへどのやうな苦痛を耐へ忍んでも、彼を自分の傍から離さずにおきたいと願つてゐた。彼は二度ほど素氣なく彼女を突き返した。しかし彼女が、大きな眼に涙をためて、彼に哀願しながら眞心を籠めたその温たかな胸で抱き寄つて来ると、彼の心にはまた欲情が眼覺めて来た。が、彼は少しも優しい態度にならなかつた。たゞ横柄に振舞つて、彼女の愛撫するに任せた。そして自分が宥してやつたのだから、彼女としては骨折つて機嫌を取るのが當然だ、といふかのやうに勝ち誇つて威張つてゐた。その時彼は、突然或る不安に襲はれた。ナナがもう一度あの箱の鍵を手に入れて、金を自由にするためにこんな芝居を演つてゐるのではないかと思はれた。そして蠟燭の火が消えてからも、自分の意志を押し通さうと考へてゐた。

「こんなにしてね、俺が金を預つて置くのは、ほんとに眞面目な話なんだよ。」

彼の頸に縋りついてゐたナナは、眞面目に言つた。

「え、そんなことは氣にしなくてもいゝわ……。私、働

だがその夜以來、二人の生活は益々堪へ難いものになつて行つた。一週の間、初めから終りまで、二人の生活を決定してゐると思はれるものは、たゞその打撃の音と柱時計の音とだけであつた。ナナは打たれ／＼ば打たれるほど、上等な麻布のやうに柔かくなり、皮膚は滑らかになつて、顔はほんのり、薔薇色を帯びて来た。指で觸れば柔かく、見る眼には明るくなつて、一層美しくなつたやうに見えた。するとブリュリエールは、フォンタンの留守を狙つてやつて来て、煩さく彼女の後をつけ廻し、果ては接吻しようとして部屋隅まで押しつめたりした。しかし彼女は、それに反抗し、恥かしさの餘り顔を赧らめながらいつも腹を立てるのだった。彼女はブリュリエールが友達を裏切らうとしてゐるのを見て、忌はしいことだと思つてゐた。ブリュリエールは癪にさはつた様子で、ほんとにお前は馬鹿になつたね！ どうしてあんな猿みたいな野郎に喰つゝいてゐるんだい？ などと嘲るのだつた。全くフォンタンは、何時も大きな鼻を動かしてゐて、まるで猿のやうであつた。あんな醜い男、し



かも彼女を虐める男のどこがいゝのだらう！  
「さうかも知れないけれど、私はこの通り好きなんだもの。」或る日彼女は、自分のいかもの好きを打明ける女のやうに、落着いて答へた。

ボスクは、出来るだけ晚餐にありつけば、それで満足してゐた。美男子だが不真面目なブリュリエールの後ろで、彼は肩を聳かしてゐた。彼は幾度か、食後にフオンタンとナナが夫婦喧嘩を初め、彼女が打たれてゐる傍にも居合せたが、そんなことは當り前のことだと言はんばかりに、平気で食ひ續けてゐるのだつた。御馳走を食へさせてくれるから、彼は常に二人の幸福を願つてゐた。彼は哲學者だと自稱し、總てのものを、名譽をさへも棄てゝゐた。時々ブリュリエールとフオンタンは、食事の済んだ卓子の前で、我を忘れて、椅子の上に仰向きになつたまゝ、お互の手柄話を、芝居の聲色や身振りで、朝の二時頃まで話し合ふことがあつた。そんな時にも、ボスクは知らぬ顔をして、稀には人を馬鹿にしたやうな微かな息を漏らしながら、黙つてコニャックの瓶を空けてゐた。あのタルマ(一七六三—一八二六。ナポレオンの死後に何が残つたか？ 何も残つてゐない、人に忘れられてしまへば、どんなものでも詰らないぢやないか！ と彼は考へてゐた。) 或る夜、ボスクが入つて來ると、ナナは泣き崩れてゐた。

ナナは着物を脱いで、背中や腕の打たれた跡の黒い斑點を見せた。そんな場合にも、ボスクは、ブリュリエールなら仕兼ねない、その機會を利用するやうな眞似は決してしなかつた。彼はナナの皮膚を眺めてゐたが、やがて勿體ぶつた口調で言つた。

「ねえ、女のゐるところ必ず打撃あり、と、これは確かナポレオンが言つたことだ……鹽水でお洗ひ。そんな疵には鹽水が一番いゝんだ。これからも打たれるだらうが、怪我さへなければ、そんなに不平を言ふものぢやない。……どれ、御馳走にならうかな、わしは先刻焼肉のあるのを見たよ。」  
しかしルラ夫人は、そんな風には考へなかつた。ナナが白い皮膚の上の新らしい黒い斑點を見せる毎に、彼女は高い叫び聲を上げた。自分の姪が殺されさうなのに、黙つてはゐられないと言つた。實を言へば、フオンタンが、もう自分の家へは寄せつけな言つてルラ夫人を追ひ出したので、その日以来、彼女が來てゐるところへフオンタンが歸つて來ると、そつと臺所から抜け出して行くのだつた。それが彼女の自尊心をひどく傷つけた。彼女はこの恥知らずを幾ら罵つても罵り切れなかつた。そして殊に、彼の育ちの悪いことを、上流夫人のやうな顔付で非難し、もうどんなにしても、あんな男を教育し直すことは出来ないと言つた。

「さうよ、一目で分るわね。」と彼女はナナに言つた。「フオンタンが禮儀なんてことをてんで氣に懸けないのは、きつとお袋が下等な女だつたからだらう。さうよ、一目でわかるわね！……私にはどうでもいゝとして、私のやうな先輩の者は少しは尊敬されていゝわ……それにしても、お前さんはどうしてあんな仕打ちを辛抱してゐるだらう。私は恩に着せるのではないけれど、何時もお前さんのことは氣にかけて來たし、お前さんも私の言ふことをよく聽いて呉れたのに。え？ 私達だけの時は、あんなに楽しかつたぢやないの。」

ナナは口答へもせず、頭を下げてそれを聽いてゐた。「それに、」とルラがまた續けた。「お前さんはあんなに立派な人達を知つてゐたぢやないの……丁度昨夜も、私の家でソエと話してゐたが、ソエも、まるでお前さんの心が分らないと言つてゐたよ。『奥様は、あんなに立派な伯爵様をさへ思ふまゝにしてゐらしたのに——全くお前さんは、あの方を馬鹿扱ひにしてゐたね——それに、どうしてまた奥様は、あんな道化役者の自由になつて、苦しめられてゐらつしやるんでせう？』と言つてゐたよ。私もさう思ふわ。それに、打たれるのはまだ辛抱が出来るとしても、私は、尊敬されないといふことは我慢が出来ないのだよ。ほんとにあんな男は、何一つ取柄がありやしない。私だつたら、

一つの部屋に居ると思つたゞけでもぞつとするわ。それに、お前さんは、あんな下らない奴のために身を持ち崩して——さうよ、お前さんは身を持ち崩してゐるのよ——あんなに澤山お金持の方や名譽ある方達が來ると、舌を出すんだからね……厭になつてしまふね！ 私がこんなことを言ふ必要もないがね、私がお前さんだつたら、あんな眞似をされたが最後、『私を誰だと思つてゐらつしやるの？』と、そのお前さんの立派な様子で言つて、そのまゝ置き去りにして行つてやるわ。さうすれば、あの男は手も足も出なくなるに決つてゐるんだからね。」

するとナナは、涙に咽びながら口籠つて言つた。「おゝ！ でもね、伯母さん、私は愛してゐるんですもの。」  
實を言へば、ルラ夫人が不安を感じたのは、ナナが子供のルキの費用の二十スウを仕送るのが、だん／＼困難になつて來たからであつた。勿論ルキも眞心を盡して、たとへどんなことがあつても子供の世話をし、またよい時が廻つて來るのを待たうと思つてゐた。が、フオンタンがゐて、自分と子供とナナがしようと思へばどんな贅澤も出来るのに、それを妨げてゐるかと思ふと、ナナの愛をも否定してしまひたいほど腹が立つのだつた。それで彼女は、最後に眞面目にかう言つて言葉を結んだ。  
「もしも今に、あの男がすつかりお前さんを喰ひ盡してし



まつて、お前さんがまた私の家へやつて来るやうなことがあつたら、無論私は、喜んで入れて上げるよ。」

それから間もなく金銭の問題がナナの大きな心配になつた。フォンタンはあの七千法を匿して、勿論それは彼女の手の届かないところに置いてあつた。そして彼女は、それを問ふことすらも出来なかつたのだ。ルラ夫人の所謂あんな奴に、彼女は純情の眼をくくしてゐた。彼女は、僅かばかりの金に自分が執着してゐると思はれはしまいかと恐れてゐた。併しフォンタンは、日々の費用は出してゐたのだつた。最初の間、彼は毎朝三法づゝ渡したが、それも支拂をする男のやうに、氣むづかしい顔をして出すのであつた。その三法で、バタだとか、肉だとか、果物のはいりだとか、いろんなものを要求した。もし彼女が思案顔でもして、三法くらゐでは市場で何を買ふことも出来はしないと言はうものなら、彼は腹を立て、ナナを、まるで無能な女中か、無駄費ひをする女か、商人達に誤魔化される智慧のない間拔女かのやうに罵るのであつた。二言目には何時も、もうこんなところには居たくないのだ、と言ひ出しさうな權幕であつた。それから一月ばかりたつた頃には、彼は朝になつても筆筒の上へその三法を出して置くのをよく忘れてゐた。彼女がおづくしながら、それとなくその金を要求すると、また喧嘩が持ち上るのであつた。

彼は、なにかにつけて彼女の手許を切りつめさせるので、彼女はもう彼を頼りにしようとは思はなくなつた。その癖彼は、二十スウ銀貨三枚も渡さないで置いて、しかも食卓に御馳走が出ると、非常に快活になつて、上機嫌でナナに接吻して、椅子とでもワルツを踊りさうだつた。彼女はいろ／＼苦勞をして暮し向きの辻褄を合せなければならぬにも拘らず、今では筆筒の上に、銀貨が出てゐないことを願ふやうにさへなつてゐた。或る日などはまだ昨夜の金が残つてゐると言つて、彼が出した三法を返した。彼は昨夜も金を與へなかつたので、何か叱言を聞かされるだらうと一寸躊躇つてゐたが、彼女はやさしい眼付で彼を見、自分のことなどはすつかり忘れて彼に接吻した。すると彼は危く取られさうになつた金をまた手に入れた守銭奴のやうに、軽く身を慄はせてその銀貨を再びポケットに入れてしまつた。そしてその日以来、彼はその金がどこから入つて来るのかと考へもしなかつたし、訊ねもしなかつた。馬鈴薯が食卓に出れば厭な顔をするし、七面鳥や羊の焼肉が出れば、頭が外れるほど大きく口を開いて食べた。しかしそれでもやはり、ナナを打つことは止めなかつた。どんなに満足してゐる時にも、後でまた手を握り合ふために殴るのであつた。

ナナは何事にも満足の出来るやうな手段を見つけた。この頃では、家には御馳走が溢れてゐた。ボスクは一週に二

度も消化不良に陥つた。或る夕方ルラ夫人は、ナナの家から出る時に、自分には食べさせてくれないものだが、立派な晚餐が整へられてゐるのを見て、一體誰がそんなお金を出すのか、と無様に訊ねないではゐられなかつた。ナナははつとして黙つてゐたが、やがて泣き出した。

「え、いよ。何も悪いことはないよ。」と、事情が分つたのでルラは言つた。

ナナは家庭の平和をさへ保てるなら、どんなことをも厭はなかつた。併しそれは、或る日フォンタンが食卓に出た鱈の料理に腹を立て、出て行つた日に、ラヴァル街で出會つたトリコンの罪でもあつた。その時困り切つてゐた彼女は、トリコンに、え、私、さうしますわ、と答へたのだつた。フォンタンは夕方の六時までは歸つて来ることになつたので、彼女は午後の時間をそれに當てた。そして四十法か、六十法、時にはそれ以上の金を持つて歸つて来た。衣裳でもきちんとしてゐる事が出来れば、十ルイや十五ルイとも切り出し得たのだらうが、彼女はたゞ晚餐の支度に足りるだけで十分に満足した。そして夕方、ボスクは鱈腹食べ飽きるし、フォンタンは食卓に頬杖をついて、満足しきつた様子で威張り返つてその眼を彼女の思ふまゝに接吻させてゐる時、ナナはすべてを忘れてしまふのであつた。

この頃では、彼女は苦勞をすればするほど盲目的な情熱

に捉はれ、愛い男のために何もかも犠牲にして、また最初の忌はしい生活に身を落してゐた。彼女は街を歩き廻つて、百スウの金を得るために、よからぬ稼業の古靴を舗道に曳きずり、よからぬ商賣を初めたのであつた。或る日曜日に、彼女はラ・ロシュワウコオ市場でサタンに會つて、一寸喧嘩をした後で、また仲直りをしてしまつた。ナナが、ロベール夫人は、とても我慢の出来ない女だと腹立たしげに非難すると、サタンはたゞ、自分が何か好かないからと言つて、それを人にまで嫌ひになれと言ふ理由はない、とだけ答へた。素直なナナは、行く先どんなになるか分らないのだからと思つて、この教訓的な言葉を聴き入れて彼女を許したのだつた。そして新しく眼覚めた好奇心に動かされて、彼女はサタンにあのロールの家のことを問ひかけ、もう何も彼も知つてゐる年にも似ず、それを聞くと驚いて、笑つたり高い聲を立てたりして不思議がつた。が彼女の心の底は堅氣な女とすこしも變らなかつたので、自分の習慣に合はないものに對しては些か嫌惡の情をさへ現はした。それから後フォンタンが外で晚餐をする時は、彼女は何時もロールのところへ行つて食事をつた。そこへ来るお客達が、手からフォークを落しもしないで一生懸命に話してゐるいろ／＼の噂や、戀愛や、嫉妬の取沙汰を、彼女は面白がつて聞いた。しかし自分でも言つてゐたやうに、彼女



はそこに集まる人々に少しも似てゐなかつた。肥つたロー  
ルは、母親らしい優しさで、アーニエールの田舎にある別  
荘には、七人ばかりの女達を泊める部屋もあるから、五六  
日も遊びに来ないかと、何度も誘つたが、彼女は何時もそ  
れを怖ろしく思つて断つた。しかしサタンが、そこへは巴  
里の紳士達が来て、鞦韆に乗つたり、輪投げ遊びをしたり  
して一緒に遊ぶのだから、断らない方がいゝと教へると、  
ナナもその氣になつて、暇になつたら寄せて頂きませう、  
と約束した。

その頃ナナは非常に困つてゐて、遊ぶことなどは考へな  
かつた。それよりも、金が欲しかつた。よくあつたことだ  
が、トリコンが周旋してくれない時は、體一つの道り場  
も困つた。そしてサタンと一緒に、巴里の舗道へ惨めな姿  
で外出して行くのだつた。瓦斯の光がぼんやりと照らして  
ゐる中を、濁つた小川に沿つて、淺間しい稼業のために仿  
徨ふのであつた。彼女は嘗て汚れたスカートを誦へして踊  
つてゐた場末の踊り場へ、再び出入するやうになつた。そ  
こから出ると、また街端れの並樹街の暗い場所を通つて行  
くのであつた。その道端で、十五歳ばかりの青年が飛び出  
して来て接吻する事もあつたし、さうかと思へば、その青  
年の父位ゐるの年輩の男が彼女の後ろから悪戯をする事もあ  
つた。ナナとサタンは近所のカフェや舞踏場を残らず歩き

廻つて、痰や零れたビールで汚れた階段を上つたり、また  
ゆつくりと狭い道を登つて行つて、潜り門の前に立ち盡し  
たりなどした。ラテン街を振り出しにしたサタンは、そこ  
のビュリエ(學生の集まる有名な舞踏場)や、サン・ミシエルのピヤホール  
などへ彼女を連れて行つた。しかし休暇になつてその邊り  
が非常に寂れて来ると、二人はまた廣い通りへ歸つて來  
た。彼女が最もいゝ機會を捕へ易いのは、やはりそこであ  
つた。モンマルトルの丘から天文臺の高地まで、二人は  
そんなにして残る限なく、街中を歩き廻つた。長靴の踵が  
とれさうな雨の夜や、コルセットが肌に着く暑い夜なども、  
長い間客の來るのを待つてゐたり、果しのない散歩をした  
りしなければならなかつた。そして人に押されたり、喧嘩  
をしたり、通りすがりの男に聞くに堪へない言葉を浴せら  
れたり、またその男が、泥まみれの階段を踏んで怪しげな  
家の中へ下りてゆくのを見送つたりしなければならなかつ  
た。

夏が終つた。激しい風雨と夜の蒸し暑い氣候が終つた。  
二人は晚餐が済むと、九時頃から一緒に出掛けるのだつた。  
ロレット聖母堂の前の歩道を、スカートを持ち上げ、軒を  
ならべた商店の前を、陳列などには目もくれずに、俯向い  
て、急がしさに、二人並んで並樹街へ出掛けて行くのだ  
つた。それは瓦斯が輝き初めた、ブレダ區の急な坂道であ

つた。ナナとサタンは教會に沿つて、ブルティエ街を進んで  
行つた。カフェ・リイシユから百米ばかり離れた練兵場へさ  
しかゝると、今まで注意して片手で摘んでゐた着物の端を  
放して、二人は埃の立ち昇る中を、體をゆすり歩道に裾を  
曳きすりながら、小刻みに急いで行つた。そして大きなカ  
フェの、ぱつと明るい光の中を通る時には歩みを緩めた。  
身を反らして高い聲で笑ひながら、振り返る男達の上に視  
線を投げかけて、二人は愉快さうな様子をした。唇には紅  
をさし、臉には隈をとつた二人のその白い顔は、暗い闇の  
中で、バザーで見掛ける十三スウの東洋人形のやうなけ  
げばしい魅力を路上に撒きちらした。十一時頃までは、彼  
女等に突き當つてゆく群衆に揉まれながら、二人は快活さ  
うに、時々スカートの裾を踏んでゆく男の後ろから、氣を  
おつけよーなどと怒鳴つてゐた。そして、カフェのボー  
イ達と親しさを交して、卓子の前に歩を停めて話  
し込み、腰掛けられるのが嬉しさに與へられる飲物をゆ  
つくり飲み干しながら、芝居の閉場のを待つてゐた。し  
かし夜が更けて、ロシユワコオ街へ二度往復してゐない  
場合には、彼女等は全く下等な賣笑婦になつて、矢鱈に男を  
捉へようと焦るのだつた。暗くなつて人通りの絶えた並樹  
街では、その並樹の下で、野蠻な取引や、露骨な言葉や、  
喧嘩が行はれた。もしそんな時に、堅氣な家庭の両親が娘

達を通れて通りかゝると、そんな事は見なれてゐるか  
のやうに、別に急ぎもしないで靜かに通り過ぎて行つた。  
オペラ座からジムナズ座までの間を十度も往復したあと  
で、次第に暗くなる夜の中を男達が急ぎ足で歩み去る頃  
になると、ナナとサタンは見切りをつけてモンマルトル郊外  
の小路へ引き返して行つた。そこでは二時頃まで料理店や  
ピヤホールや豚肉屋が明るく店を照し、女達がカフェの入  
口で雑沓してゐた。それは夜の巴里の、最後まで火を照し  
て活動してゐる地域であり、一夜の情のために解放されて  
ゐる最後の市場であつた。そこでは群衆の間で露骨に取  
引が決められた。その街は端から端まで、まるで公共の建  
物の廣い解放された廊下であつた。それでもなほ空手で歸  
らなければならぬ時は、女達の間に口喧嘩が持ち上るの  
だつた。ロレット聖母堂の前の通りは、人影も絶えて暗く  
續いてゐた。そんな時に歩いて行く女の影は、この附近の  
あふれ者の歸りであつた。商賣の出来なかつたその夜が腹  
立たしくてならない哀れた女達は、フォンテヌ街や、ブ  
レダ街の角でやつと捕へた酔つ拂ひと、囁れ聲でいつまで  
も執拗く言ひ争つてゐた。

しかし氣前のいゝ外人を捕へることもあつたし、また勳  
章をポケットへ捻ぢ込んだ立派な紳士達から幾ルイかの金  
を捲き上げることもあつた。サタンは殊に鋭敏な鼻を持つ



てみた。雨の降つた夕暮、濡れた巴里が、恰も掃除の行き届かない大きな寢室のやうな懶い匂を發散してゐる時、彼女は、こんな陰鬱な天候や怪しげな隅々から立ち上る臭氣が、男達の心を掻き亂すことを知つてゐた。そして彼女は身よりの立派な男達を待ち受けて、彼等の蒼ざめた眼の中にこの氣持を讀み取ることが出来た。それはいはゞこの都會の上を狂ほしい肉慾の發作が行き過ぎる時であつた。彼女が幾分恐ろしく思つてゐたのは、最も地位の高い人々が最も穢らしいといふ事だつた。彼等はすつかり鍍金が落ちてしまつて、その獸性が露骨に顔を出した。彼等は奇怪な嗜好に中々氣むづかしく、その頹廢振りは徹底したものであつた。だからこの賣笑婦のサタンは、車に乗つて威張つてゐる人々の前で、敬意などは少しも拂はずに、彼等よりもその馭者の方が女を尊敬する道を知つてゐて、地獄の話などをして女達を虐めはしないから、遙かに優しいと大きな聲で怒鳴るのだつた。サタンはそれを除かうと努めたが、ナナにはまだ偏見が残つてゐて、放蕩に耽る上流社會の人々を見ると、いつも驚異の眼を見張るのだつた。そして、彼女が眞面目になつてそれを話すときには、上流社會から下層階級に至るまで、人は悉く淫蕩で、もはや道徳は地を拂つてゐるのか、と思はれた。成程、宵の九時頃から朝の三時頃までの巴里はもつと清淨なものでなければならぬ

のだ。彼女は聲を高くして、もし巴里中の部屋を見ること出来るなら、一寸面白い場に立ち會ふ事が出来よう、普通の人々は勿論想像に餘るやうな馬鹿げた事をしてゐるが、それにも増して、多數の身分の高い人々も到る處で、見るに耐へないやうな醜行を犯してゐるであらう、と叫んだ。そんな事實が彼女に世の中といふものを教へたのであつた。或る夕方、ナナがサタンに會ひに行くと、躊躇しながら欄干につかまつて階段を下りて来る白い顔をしたシユール侯爵に出會つた。ナナは涙をかむ風をした。そして彼女は二階に上つて、穢ない寢臺があり壺の轉がつてゐる一週間も投げやりにされた恐ろしく不潔な部屋でサタンに會ふと、彼女も侯爵を知つてゐるのに吃驚した。あゝ！ さう、あの侯爵なら知つてゐるわ、私がお菓子屋と一緒になつてゐた頃に、随分煩さくつき纏はれたものよ！ とサタンが言つた。今では時々しか顔を見せなかつたが、どこまでもサタンを困らせ、どんな汚ない場所でも構はずに、スリッパの中へまでも鼻を入れるのだつた。

「さうよ、スリッパの中までも……。おゝ！ あんな汚ないらしい爺さんたら、ありやしないわ！」

殊にナナを不安にしたのは、醜惡な遊蕩に對する男達の熱心さであつた。彼女は其の賣り出しの頃の情痴の世界の喜劇じみたことを思ひ出した。彼女の周圍の女優達は、毎

日男につき纏はれて、弱つてゐたのだつた。それからサタンは、警察の手の非常に恐ろしい事を話して聞かせた。それに就いて、サタンは話を澤山持つてゐた。昔サタンは安全を計るために、風紀係の警官と一緒になつたことがあつた。その警官が、一度も拘留されてゐる彼女を助けてくれた。今でも彼女は、捕まりさへすればその稼業が分るので、それを恐れてゐた。それは恐ろしい話だつた。警官達は賞與が欲しいので、出来るだけ多くの女達を攫つて行つた。一人残らず取り抑へて、もしも叫び聲でも上げやうものなら、横つ面を張り飛ばすのだつた。そしてもしも間違つて堅氣の婦人を一緒に捉まへたとしても、それが過失になる譯でもなく、賞與がもらへるので、彼等は勢ひ込んでやつて來た。彼等は夏になると、十二人か十五人で組を作つて、並樹街に手を入れた。歩道を取り圍んで、一晚に三十人も擧げてゆくこともあつた。しかしサタンは隠れ場所を知つてゐて、警官の姿を見ると直ぐ周章して、群衆の間を逃げまどふ女達の長い亂雑な列から抜け出すのだつた。それは女達にとつては法律の恐ろしい力であり、官憲の恐るべき襲撃であつた。街路を一掃するこの權力の襲來の中で、或る者は立ち竦んでカフエの扉口に獅噛みついてゐた。しかしサタンは、それよりも密告を一層恐れてゐた。彼女の情夫だつた菓子屋は卑怯にも、彼女が別れようとする、と密告

してやると言つて脅かすのだつた。さうよ、男達はそんな手で私達を食ひ物にするんだわ。でも、まだその他に、腹の黒い女達が、自分より纏緘のいゝ者を見ると、裏切つて密告するやうなこともよくあるわ、とサタンが言つた。ナナは、それらのことを次第に募る恐怖を以て聞いてゐた。そして今まで知らなかつた法律といふ力の前に絶えず戰慄した。誰一人保護してくれる者のないこの世で、男達の復讐がまた彼女を苦しめるのであつた。サン・ラザール(巴里)の囚人は、彼女に墓のやうに見え、女達の髪を切つて生きながら埋葬する暗い孔のやうに思はれた。彼女は他に保護を求めるときには、フォンタンと別れさへすればよいのだと考へた。サタンが、寫眞のついた淫賣婦の表があつて、警官達は、他人には決してそれに指も觸れさせないで、参考にしてゐるに違ひない、と言つてゐるのも、もう耳に入らなかつた。彼女は依然として身を慄はしてゐた、明日にでも檢舉されて、突き飛ばされながら引つ立てられて行く自分の姿を想像した。椅子に坐つて、訊問を受けるのだと思ふと、苦痛と羞恥で心が一杯になつた。彼女にも、幾度となく、恥かしい行ひの記憶があつたからである。

丁度九月の末の或る夜、ボアソニエ街をサタンと一緒に歩いてゐると、サタンが突然駈け出した。彼女が問ふと、「警官よ、さあ早く！ 早く！」と息を切らして言つた。



そして、群衆の間を氣狂ひのやうに駆け抜けた。スカートが裂けて千切れた。拳の音や叫び聲が聞えた。一人の女が捉まつた。群衆は笑ひながら、敏速に包圍の輪を縮めて行く警官の残忍な攻撃を眺めてゐた。ナナはサタンを見失つてしまつた。足が棒のやうになつて、彼女はもう捉まへられるに決つてゐた。丁度その時、一人の男が彼女の腕を取つて、猛り立つてゐる警官達の前を通れ去つた。それは、彼女を見つけて飛んで来たブリュリエールであつた。彼は黙つて、人影の絶えたルウジモン街へ彼女を連れて行つた。そこまで来ると、彼女はひどく息を切らしてゐて、どうしても彼が支へてやらなければならなかつた。が、彼女は一言の禮も言はなかつた。

「さあ、落ちつかなきやならないし……。俺のところへ来ないかい。」と彼が言つた。

ブリュリエールはその附近の、ベルジェル街に住んでゐた。彼女はすぐに體を起して答へた。

「いゝえ、私は参りませんわ。」

すると彼はむつとして言葉を繼いだ。

「皆が来るからかい……え？ 何故来ないの？」

「だつて……」

その言葉が、彼女の心の中ではすべてを語つてゐた。彼女はまだフォンタンを深く愛してゐたので、彼を裏切つて

その友人の許へ行くことは忍びなかつたのだ。他の男達の場合なら、別に楽しみがあるわけではないが、必要に迫られてゐるのだから仕方がなかつた。ブリュリエールは、こんなに堅意地なのを見て、自尊心を傷つけられた美男子らしく罵つた。

「ぢや、いゝよ！ 好きなやうにするさ。」と彼は言つた。「だがね、もう助けてやらないぜ、一人でこの場を切り抜けるがいゝや。」

そして彼女を捨て、立ち去つた。彼女はまた恐ろしくなつて、男が近づいて来るのを見ると蒼くなりながら、商店の前を堅くなつて通り過ぎ、遠い廻り道をしてモンマルトルへ歸つて行つた。

その翌日、前夜の恐怖にまだ戦々ながら、ナナは伯母の家へ行く途中、バティニョルの淋しい小路の奥で、ぼつたりラポルデットに出會つた。二人はちよつと氣まづい思ひをした。よく他人の用事をたしてやる親切者のラポルデットはその日も例に依つて、何か秘密な用事があるらしかつた。併し彼の方から大きな聲で話しかけて、こゝで出會つたのを喜んだ。世間では皆がナナの常識のないのに呆れてゐた。人々は彼女を非難して、古い友達など、愛想をつかしてゐた。しかしラポルデットは、父親らしい態度で、やがてこんなに言ひ聞かせた。

「こゝだけの話ですが、正直なところ、それは智慧のないことですよ……。そりや惚れ込むこともありませうさ。しかし考へて見れば、結局人のだしになつて稼いで、その後で撰られるだけのことぢやありませんか！……それがあなたの眞心の報酬でせうかね？」

彼女は當惑した様子でそれを聞いてゐた。しかし彼が、ミラファ伯爵を手に入れて得意になつてゐるローズのことを話して聞かせると、彼女の眼は急に輝きを増した。

「おゝ！ しようと思へば、私だつて……」と彼女は驕ひた。

彼はすぐに友達らしく親切に、仲介の勞をとらうと言ひ出した。彼女はそれを斷つた。すると彼は、また手を變へて彼女に話しかけた。ポルドナアヴがフォシュリイの脚本を上演するので、それには彼女に倣つたいゝ役があるといふのだつた。

「何ですつて！ 今度の芝居に役が要るんですつて！」と彼女は思はず叫んだ。「あの人も出てゐるのに、私に何も言はないなんて！」

彼女はフォンタンの名を口に出さなかつた。そしてすぐに心を取り直して、もう芝居へは出ようと思ひませんと言ひ切つた。勿論ラポルデットはそれを素直に聞き入れずに、笑ひながら、まだその話を續けた。

「私には何を言つたつて少しも心配は要らないですよ。私はあなたをミラファと仲直りさせ、芝居へ出るやうにしようよ、ほんとに、あなたの手を引つ張つて行きたいほどに思つてゐるんです。」

「私、もうそんなことは厭ですのー！」と彼女はきつぱり言ひ放つた。

そして彼女は別れた。彼女は自分のその健氣な氣持が、我ながら嬉しかつた。吹聴もしないであんなに何かと親切に言つてくれるラポルデットは、厭な男ではなかつた。それにしても彼女の心を打つたのは、ラポルデットが、あのフランスと寸分違はない忠告をしてくれたことだつた。夕方になつてフォンタンが歸つて来ると、彼女はフォシュリイの脚本のことを訊ねた。フォンタンは二月ばかり前からまたブリエテ座へ出演してゐたのだつた。それにどうして、あの役のことを彼女に何も言はなかつたのだらうか？

「何の役だい？」と彼は意地悪い口調で言つた。「まさか、あの女主人公役のことを言つてゐるんぢやあるまいね？……ぢやお前は、自分にそんな技倆があると思つてゐたんだね！ だつてあの役は、お前なんかの腕に合ふものかい……ほんとに、人が笑ふぜ！」

彼女は非常に自尊心を傷つけられた。それから一晩中、彼女は彼女をからかつて、マドマゼル・マルス(當時の最も有名なモリ



「エー」と呼びかけた。彼女は彼に苦しめられ、ば苦しめられるほど益々優しくなつて、その健氣な愛の中に、苦い快樂を味ふのだつた。そして我と我が眼に自分が偉大な、情愛の濃やかなものに見えるのだつた。彼の食事を賑はすために、他の男達を捉まへなければならなくなつて以來、疲労と不愉快な氣持を懷いて歸つて來た彼女は、益々彼を愛するのだつた。これは彼女の弱點となり、またひどい打擲をうけながらもその愛情を捨てることは出来なかつた。彼はこんなに愚かなほど善良な彼女を見ると、益々それにつけ込むやうになつた。彼女を見ると苛立たしくなり、最早彼女のことには無關心になるほど、はげしい憎惡すら感じ初めた。ボスタクが彼に意見をする、彼は何故か腹を立てて大きな聲で、自分にはもう彼女も彼女の作つてくれる晩餐も、どうでもいふことで、この七千法の金を一緒に使ふくらゐなら、あんな女は追ひ出してしまつて、外の女を連れて來ると言つた。これが二人の關係の解決だつた。

或る夜ナナは、十一時頃に歸つて來ると、家の戸は門がかゝつて閉つてゐた。叩いて見たが返事はなかつた。また叩いて見たが相變らず返事はなかつた。扉の中には燈火が灯つてゐて、フォンタンが平氣で歩いてゐた。彼女は腹を立て、大きな聲で呼びながら扉を叩き續けてゐた。すると、やがてゆつくりした太いフォンタンの聲が、それ

もたゞ一言だけ聞えて來た。

「馬鹿！」  
彼女は兩手で叩いた。

「馬鹿！」  
彼女は一層力を籠めて、扉が壊れるほど叩いた。

「馬鹿！」  
そして十五分間ばかりも、彼女が扉をかた／＼させて叩く度毎に、同じ罵りの聲が、まるで雷のやうに彼女を嘲つて應じてゐた。それでもなほ彼女が止めようとしないので、突然彼は扉を開き、腕を組んで闕の上に立ち塞がつた。そして冷淡な荒々しい聲で、

「おい！ よしたらどうだい？……何が欲しいんだい？……靜かに寢させてくれなきゃ困るぢやないか。お客様があるのにきまつてるだらう。」

實際、彼は一人ではなかつた。プウフ座のあの若い女が來てゐた。その女は、錐の孔のやうな眼をし、麻屑のやうな髪を振り亂し、もう寢衣姿で、ナナが買ひ整へた家具の間でふざけ散らしてゐた。フォンタンは闕から一足踏み出して、その太い指を鉄のやうに開いて、恐ろしい様子をして見せた。

「行つちまへ、行かなきや締め殺すぞ！」  
ナナは激しく泣きはじめた。そして、怖ろしくなつて逃

げ出した。今度こそ、扉の外へ追ひ出されたのは彼女自身であつた。取り亂した心の中に、突然ミリアフのことが思ひ出された。それにしても、自分をこんなに追ひ出したのは、きつとフォンタンのせみではない、と彼女は考へてゐた。

鋪道に出ると、直ぐにサタンのところへ行つて、彼女が一人でゐるなら、一緒に寢ようと思つた。するとその家の前で、家主のために同じく鋪道の上へ抛り出されたサタンと會つた。彼女が歸つて見ると、無法にも扉口には錠が下されてゐて、もう部屋の中に置いてやらないと言ふのであつた。彼女は罵りながら、あの家主を警察へ訴へてやると言つた。けれども、もう十二時の打つのを聞いたので、寢床を見つけることを考へなければならなかつた。そしてサタンは、自分の用事で警官なんかと掛り合ひを作るのは危険だと覺つて、ナナを伴つて、ラザル街に小さな家具附ホテルを營んでゐる或る夫人の家へ行くことにした。その二階の、庭に向つて窓のある狭い一部屋を借りることが出來た。サタンはこんなことを言つた。

「ロペール夫人のところへ行けばよかつたわ。私になら何時でもどこか借してはくれるの……でも、あなたと一緒に多分駄目だわ……ほんとに、あの人は可笑しいほど妬いてゐるんだわ。何時かも私打たれたのよ。」

二人は部屋を閉め切ると、悲しみの遣り場のなかつたナナは涙に暮れて、幾度も幾度も繰り返して、フォンタンがひどいことをするのを語るのであつた。サタンは優しくそれを聞いて、ナナを慰め、彼女よりも一層怒つて、男を罵つた。

「おー！ 豚だわ。豚だわ！……もう、あんな豚のやうな奴等に、何の用事があるのですか！」

それから彼女は、ナナに手傳つて着物を脱がせた。彼女はまるで氣の利いた従順な女中のやうに、ナナの傍についてゐた。そして口説くやうにこんなことを繰り返した。

「早く一緒に寢ませう。その方がいゝわ……まあ！ そんなに怒つてなんかゐるのは馬鹿らしいぢやないの！ あんな穢らはしい奴等なんだもの！ もうあんな奴等の事なんか忘れてしまひなさい……私はね、あなたを愛してゐるのよ。泣かないでね。泣くんなら、私のために泣いて頂戴よ。」

そして寢床に入ると、彼女はすぐに、ナナを宥めながら兩腕に抱いた。サタンはもうフォンタンの名前を聞いたがらなかつた。その名前がナナの唇に上る毎に、彼女はそれを接吻で押し止めて、髪を解けたその可愛い、子供らしい、美しい顔に愛情を湛へて、怒つて見せるのだつた。ナナは優しく抱き締められながら、その涙を拭いた。そして少しづつ心を惹かれて行つて、終ひには彼女もサタンを抱きし



めるのであつた。そのとき二時が鳴つたが、蠟燭はまだ燃えてゐた。二人は愛の言葉を囁き合つて、微笑を噛み殺してゐた。

すると突然、激しい足音がホテルに聞えたので、サタンは起き上つて、半裸體のままに聞き耳を立てた。

「警官だわ！」と彼女は眞蒼な顔になつて言つた。「えゝ！畜生！もう逃げられないわ！……不意打ちを喰つてしまつたわ！」

警官がホテルに臨検することを、彼女は幾度も言つてゐた。そして丁度この夜、ラヴァル街へ宿を求めるときには、サタンもナナも少しもそのことを氣づかなかつた。警官と聞いて、ナナは狼狽してしまつた。彼女は寢床から飛び起きて、部屋を横切つて、まるで放たれた狂人のやうな周章をかたで、窓を押し開いた。幸ひにも小さな庭が見透かされた。窓の鐵網は低く張つてあつた。彼女は少しも躊躇しなかつた。支柱を飛び越えて、寢衣を翻へしながら、庭までの夜の冷氣を受けて、闇の中に姿を消した。

「出ちや駄目よ。ひどい目に會ふから。」とサタンは周章で繰り返した。

そしてもう誰かど扉口に突き當つてゐるので、彼女は親切にも窓を閉め、ナナの着物を衣裳戸棚の底に投げ込んだ。彼女は自分のことはもう諦めてゐた。どうせ留置場へぶ

ち込まれるのなら、そんなにびく／＼するにも當らない、と度胸をきめてゐた。そして、睡くてならないやうな風を装つて、欠伸まじりに應對した。大男の警官は、汚れた髯の生えた口を開いて怒鳴りつけた。

「手を見せろ……。肝臓がないぢやないか。働いてゐないな。さあ着物を着ろ。」

「でも私はお針女ぢやありませんわ。私は金屬磨工ですのよ。」とサタンは厚顔しく言つた。

しかし彼女は、もう議論をしても駄目だと見て、おとなしく着物を着た。ホテルの中には、あちらこちらから叫び聲が起つてゐた。或る女は行くまいとして扉に獅噛みついてゐた。また或る女は、戀人と一緒に寢てゐたので、その男の方が純潔な女を侮辱したと言つて、裁判沙汰にすると呼んでゐた。一時間ばかりの間、階段には大きな靴の足音が聞え、扉はど／＼叩かれ、鋭い聲で争つてゐたのがやがては敵愾に變り、スカートが壁に擦れる音が聞えるかと思へば、また突然に寢込みを襲はれて、金髪の上品な小柄な男の指揮する三人ばかりの警官に拉致されて、あわたとしく出て行く女の一群もあつた。それからまたホテルは、静まり返つた。

誰もナナのことを告げるものはなかつた。彼女は無事に逃れた。彼女は手探りで、顫へながら部屋へ歸つたが、怖

ろしくてならなかつた。その露出の足が窓の鐵網に刺さつて血を流してゐた。永い間、彼女は寢臺の端に坐つたまゝ、もの音を耳を傾けてゐた。しかし夜の明ける頃になつて、眠り込んでしまつた。そして八時頃に眼を醒まして、ホテルを抜け出し、伯母の家へ辿り着いた。丁度ゾエと一緒に珈琲を飲んでゐたルラ夫人は、そんな時間に、まるで女中のやうな姿の、血相を變へてゐる彼女を見て、直ぐに事情を察した。

「どうしたの？ まあ！」と彼女は叫んだ。「私が前からあんなに、ひどい目に會ふよと言つてゐたぢやないの……さあ、お入り。私の家なら何時でもお前さんを歓迎してあげよ。」

ゾエは立ち上つて、憤ましい懐かしさを籠めて囁いた。「まあ、奥様が歸つて下さいましたわ……私、奥様に會ひたりございました。」

ルラ夫人は、ナナに直ぐルキゼを抱かせてやりたかつた。夫人の言葉に従へば、母親が思慮深いといふことは、赤ん坊にとつても幸福である、といふのだつた。ルキゼは弱々しく蒼ざめて、まだ眠つてゐた。そしてナナはルキゼの、その腺病質な白い顔の上に身を屈めた時に、この幾月かの間の彼女の無分別な行爲が急に咽喉にこみ上げて來て、息をつまらせた。

「おゝ！可哀さうに、可哀さうに！」と彼女は今にも泣き出しさうになりながら口籠つた。

九

フリエテ座では『公爵夫人』の前稽古をしてゐた。第一幕がやつと片づいて、第二幕目に掛らうとしてゐるところだつた。翼席の古椅子では、フォシュリイとボルドナアヴが口論してゐた。尙俵の後見コサル爺さんは、藥を詰め

た椅子に腰かけて、鉛筆を口に啣へて脚本を繰つてゐた。「おい！何を待つてるんだい？」と突然ボルドナアヴが、太いステッキの先で激しく床を叩いて叫んだ。「バリヨ、何故早く初めないんだい？」

「ボスクさんが先刻から見えなくなりましたので。」と、監督助手を務めてゐるバリヨが答へた。すると大騒ぎになつて、皆がボスクを呼んだ。ボルドナアヴは罵り続けた。

「なんてことだ！何時も同じことばかりやつてゐやがる。いくら電鈴を鳴らしたつて、ちやんと持役につかないんだからね……そして四時間も経つてからやつと連れて來れば、ぶつくさ言ひやがつて。」

しかしその時ボスクは、落着き拂つて歸つて來た。「えゝ？なに？ なにか用事かい？ あゝ！俺の番か



「い！ さうならさうと言へばいゝのに……。よし来た！ シモンヌ、臺詞を言つてくれ。『この時來客登場する。』だね。そして俺が入るんだが……。一體どこから入るんだい？」

「扉口からに決つてゐるぢやないか。」とフォシユリイが苛苛して言つた。

「ところでその扉口がどこにあるんだい？」

今度はボルドナアヴが杖で床を突き通すほど叩いて、バリヨを怒鳴りつけた。

「なんてことだい！ 俺がちやんと扉口の代りに椅子を置いてけつて言つたぢやないか。毎日々々、初めから言つて聞かせなきや分らないのかい……。おい、バリヨ、バリヨはどこにゐるんだい？ 一人が来ればまた一人がゐなくなる！ みんな行つてしまふつもりか！」

しかしバリヨはすぐに歸つて来て、叱言を受けながら背中を圓くして、黙つて自分で椅子を置いた。そこで稽古が初まつた。シモンヌは帽子を被り外套を着たまゝ、家具を片づけてゐる女中の役を演つた。そして、一寸やめて、

「私、寒いから、マーフに手を入れてもいゝでせう。」と言つた。

それから聲を變へて、軽く叫んでボスクを迎へた。

「『まあ！ 伯爵様でございますか。さあどうぞ、まだ誰もお見えになつてをりませんの。きつと奥様がお喜びになり

ますわ。』」

ボスクは泥まみれのズボンを穿き、黄色い大きな外套を着て、頸には大きな襟巻を巻いてゐた。両手をポケットに入れ、古帽子を被つたまゝ、そつと歩きながら、眞面目な顔をして言つた。

「『奥様には知らさないで下さい、イザベルさん。私が吃驚させて上げるのだから。』」

稽古は續いた。ボルドナアヴは蟹め面をし、脇掛椅子にかけて、疲れたやうな様子で聞いてゐた。フォシユリイは苛々し、こと毎に中止させたくてむづ／＼しながら、ちつとそれを抑へてゐた。すると彼の後の、がらんとした暗い中から囁き聲が聞えて来た。

「あすこにゐるんですね？」と彼はボルドナアヴの方へ身を屈めて訊ねた。

ボルドナアヴはさうだと首肯して見せた。ボルドナアヴが振り當てたジラルディヌの役を引き受ける前に、ナナは筋書を見て置かうと思つたのだつた。彼女はまだ蓮葉女の役を演るのを躊躇してゐた。彼女が望んでゐたのは貞淑な女の役だつた。彼女はラボルデットと一緒に平土間の影の方から隠れてゐて、ラボルデットが自分の體で、ボルドナアヴから見えないやうに庇つてやつてゐた。フォシユリイはちつとその方を見てから、また稽古の方へ注意を向けた。

「おい、おい！ 黙つてゐたらどうだい！」とボルドナアヴが怒鳴つて脇掛椅子から立ち上つた。「一言も聞えやしなぢやないか……。喋ることがあるんなら、戸外へ行つて貰はうぜ。俺達は仕事をしてゐるんだから……。おい、バリヨ、今度喋る奴があつたら構はないから皆に罰金を喰はしてしまへ……」

暫く一同は黙つてゐた。彼等は少しづゝかたまつて、もうそこに出来上つてゐる今夜の第一幕の、庭園になつた舞臺装置の田舎風な椅子や腰掛に坐つてゐた。フォンタンとブリュリエールは、ローズ・ミニヨンの話を聞いてゐた。それはフォリイ・ドラマチックの支配人が、ローズを素晴らしい給金で抱へようと申し込んでゐるのであつた。すると、その時誰かと呼んだ。

「公爵夫人！……それからサン・フィルムマン！……さあ、公爵夫人とサン・フィルムマン！」

二度目に呼ばれてブリュリエールは、自分がサン・フィルムマンであつたことを思ひ出した。エレヌ公爵夫人を演るローズは、先刻からその登場を待ち受けてゐた。老僮ボスクはゆつくりと、よく反響を立てる空ろな舞臺に足を曳きずつて、休みに歸つて行つた。クラリスは身を避けて、腰掛の半分を彼に譲つた。

「何をあんなに怒鳴ることがあるでせう？」と彼女はボル

「翼席だけが明るく火を點けてあつた。ファットライトから引かれた瓦斯の火が、一脚の臺の上に照り、舞臺の前面をばつと照らしてゐるその反射鏡が、半暗の中に、黄色い大きな眼を見開いたやうに物悲しさうに燃えてゐた。その臺の細い脚に、コサールが、脚本をよく見えるやうに置いてゐた。と、その光が、くつきりと浮彫のやうに彼の尙僕を照らし出してゐた。ボルドナアヴとフォシユリイは沈鬱な氣持になつてゐた。それはまるで大きな船の中にあるやうで、頭上二三米のところには、釘に引つ掛けられた燈火が船着場のシグナルのやうに點つてゐるし、俳優達は皆、彼等の後で踊つてゐる大きな影と共に、奇怪な幻影のやうに見えた。舞臺の後方には煙が漂つてゐて、まるで壊れかけた船渠のやうでもあり、梯子や、脇道具や、大道具が一杯つまつてゐる壊れた船のやうでもあり、褪色した背景の繪は、漂流物の堆積のやうでもあつた。そして天井には、背景の布が捲き揚げられて、屑屋の竿に引つ掛けてある襪のやうに見えてゐた。一番高いところには、明るい日光が窓から射し込んで、天井の闇の中に黄金色の棚を横たへてゐるやうだつた。

舞臺の奥の方では俳優達が、臺詞がまはつて来るのを待ちながら低い聲で喋つてゐたが、少しづゝその聲が高くなつて行つた。



ドナアヴのことを言った。「何時になつたらもう少し親切になるのかしら……この頃のやうでは、あの人を怒らせないで芝居をしようたつて出来やしない。」

ボスクは肩を聳やかした。彼はボルドナアヴの怒鳴る位ゐのことは何とも思つてゐなかつた。今度はフォンタンが囁いた。

「大いに客を寄せる積りなんだから、俺にはこの芝居は面白くないね。」

そしてクラリスに向つてロイズの話を續けた。

「どうだい？ あのフォリイ座の給金をどう思ふ、お前さんは？ 百回の上演中、毎晩三百法だとさ。何故またおまけに別荘を一軒と言はないのだらう！……ミニヨンにしても自分の女房に三百法もくれるものがあるんなら、大威張りでボルドナアヴなんかと手を切つてもよさうなものだのに！」

クラリスはその三百法といふのを信じてゐた。それに、このフォンタンは、何時でもひどく友達の悪口を言ふ男だから！と思つた。併しそのとき二人の間へ、シモンヌが入つて来た。彼女は顫へてゐた。誰も皆鉦をかけ、毛皮を頸に巻き、この陰鬱で寒い舞臺までは降りて来ない天井の光を見上げてゐた。戶外では十二月の空が晴れて、何も彼も凍りついてゐた。

「樂屋には火がないのね！」とシモンヌが言つた。「厭になつてしまふわね、すつかり消えてゐるんだもの。……病氣になんかなりたくないから、私、もう歸りたいわ。」

「喧ましい！」とボルドナアヴがまた雷のやうな聲で怒鳴つた。

すると暫らくの間、俳優達が臺詞を暗誦する騒ろげな聲だけが聞えてゐた。彼等は仕草だけはするが、疲れないやうに聲は平生の通りで喋つてゐた。そして仕草に力を入れて観客席を見渡すと、そこはがらんとして、暗い影の漂つた孔のやうであつた。窓のない大きな屋根裏部屋に塵が立ち昇つてゐるやうに感じられた。たゞ舞臺の僅かな光に照らされた場内は、燈火もなく、物悲しげなぼんやりとした眠りの中に掻き消されてゐた。天井の繪は薄闇の中に溺れてゐた。左右の翼席は、そのカーテンを保護するために、上から下まで灰色の大きな粗い布で覆はれてゐた。その布は横にずつと欄干の天鵞絨の上に垂れ掛つて、棧敷を包んでゐた。その蒼白色が、場内の暗さを一層陰鬱なものにしてゐて、棧敷は二重の覆ひを掛けられてゐるやうだつた。舞臺装置にはどこも眼に立つ所がなく、たゞ棧敷の影が一層深くなつて、各階の在處だけがそれと窺はれ、赤の地色が黒くなつた天鵞絨の肘掛椅子だけが見えてゐた。吊燭臺は低く下げられて、特等席に總飾りを垂らしてゐた。それ

は轉宅の後のやうでもあり、観衆が旅に出てもう歸つて来る日もないやうに思はれた。

その時娼家にさ迷つてゐた公爵夫人に扮したロイズは、フラットライトに向つて進んで来て、両手を挙げ、この喪中の家のやうに悲しげな暗いがらんとした場内に向つて、巧みに、響め面をした。

「『まあ、まあ！ 何といふをかした世の中でせう！』と彼女は、臺詞の効果に自信を持つて、力を入れて言つた。大きな肩掛に體を包んで、平土間の奥に隠れてゐたナナは、ロイズから眼を離さずに臺詞を聞いてゐた。そしてラポルデットの方を振り返つて、小さな聲で訊ねた。

「あの人は間違ひなく来ますか？」

「間違ひなく来ます。屹度ミニヨンと一緒に、何とか口實を作つて来るでせう……。来たならあなたは直ぐマティルドの部屋へ行つて下さい、その後から私があの人を連れて行きますから。」

二人はミラファ伯爵のことを話してゐたのだつた。中立の位置にあるラポルデットが調停して、二人を會はせることになつた。また、二度も續けざまに入りのない芝居を打つて、すつかり損をしたボルドナアヴとの間にも、重要な話が持ち上つてゐた。ボルドナアヴは、伯爵の氣に入るやうにして、彼からうまく金を引き出さうと思つてゐたので、早く

芝居をやり、ナナにも一役を振り當てようと焦つてゐた。

「あのジェラルディヌの役はどうです？」

しかしナナはちつとしたまゝ答へなかつた。一幕目はボオリヴァジュが、歌劇の花形である金髪のジェラルディヌのため、にどうして妻を欺くかといふ経緯だつた。二幕目はエレヌ公爵夫人が、或る夜その女優の假裝舞踏會に来て、さうした女優がどんな魔術で自分等の夫を瞞して、手に入れるかを見るところだつた。夫人を案内したのは、従弟で美男子のオスカール・ド・サン・フィルマンで、それがまた彼女をたらし込まうとかゝつてゐた。夫人はまづ、ジェラルディヌの、車夫のやうな亂暴な言葉使ひに、公爵が満足して喜んでゐるのを見て非常に驚いた。そして「あらまあ！ 男達には、こんな風に口を利かなければならぬのかしら！」と叫ぶのだつた。ジェラルディヌは、この芝居ではこの場にしか顔を見せなかつた。一方公爵夫人は間もなくその好奇心の爲に罰せられることゝなつた。やがて年とつた美男子のタルディオ男爵は、公爵夫人を娼婦扱ひにして激しく色眼を使ふし、一方長椅子の上では、ボオリヴァジュがジェラルディヌと仲直りをして接吻してゐた。ジェラルディヌの役がきまつてゐないので、コサール爺さんが立ち上つて臺詞を言つた。彼は調子に乗つて仕草を交へ、ボスクの腕に抱かれた。今は丁度その場を演つてゐたときで、稽古に身が入



らなくてだら／＼してゐた。突然フォシュリイが椅子から立ち上つた。彼は今まで辛抱してゐたのだが、耐へ切れなくなつて腹を立てた。

「さうぢやないんだ！」と彼が叫んだ。  
俳優達は、両手をぶらりと垂れて立ち止つた。フォンタ  
ンが鼻に皺を寄せて、人を食つた態度で問ひかけた。  
「何です？ 何がさうぢやないんです？」

「みんな違つてゐるんだ！ すつかり違ふんだ、すつかり！」とフォシュリイが叫んで、身振りをしながら舞臺を大股に歩いて、自分で演つて見せた。「おい、フォンタン、タルデイヴオは夢中になつてゐるんだよ。君は、かういふ風に體を屈めて夫人に抱きつかなきやならないんだ……それからローズ、今度はお前さんがこんな風に、さつさと通り掛るんだ。が、早過ぎていけな、接吻が聞える位でなきや……」

彼はそこで言葉を切つて、説明に夢中になつてコサールに叫び掛けた。

「ジェラルディヌ。さあ接吻するんだ……。強く！ よく聞えるやうにするんだ！」

コサール爺さんはボスタの傍へ寄つて、激しく唇の音を立てた。

「さう！ そんなに接吻をして、」とフォシュリイは得意に

なつて續けた。「もう一度接吻をして……。そこでローズは間を置いて、『あら！ 接吻したわ。』と軽く叫ぶんだ。そして、そこへタルデイヴオが出なきやならないんだ……分つたかいフォンタン、君が出るんだよ……。さあみんなやつて見よう。」

俳優達はまた芝居を初めた。しかしフォンタンはすつかりぶち壊しになるほど故意に出鱈目をやつた。フォシュリイは益々熱心に身振りをして、幾度も説明しなければならなかつた。一同は不服さうな様子で聞いてゐた。そしてフォシュリイが逆立ちになつて歩けども命じてゐるかのやうに、ちよつと互に顔を見合せた。だが、まるで糸の切れた操人形のやうなきごちなさで、無器用に演るので、すぐにまた中止しなければならなかつた。

「そんなことは俺にや出来ないな、さつぱり譯が分らないんだから。」と遂にフォンタンが横柄に言つた。

ボルドナアヴは口を開かなかつた。脇掛椅子にぐつたり納まり込んでゐたが、燈火が薄暗いので、目の上まで引き下げた帽子の上しか見えてゐなかつた。杖は手から離れて、膝の上に横たへられて、まるで眠つてゐるやうであつた。と、突然彼は立ち上つて、

「馬鹿だよ、君は。」と落着き拂つてフォシュリイに怒鳴りつけた。

「何！ 馬鹿だつて！ 馬鹿とは君のことだらう！」と眞蒼になつてフォシュリイが叫んだ。

それを聞いてボルドナアヴは腹を立てた。馬鹿と云ふ言葉を繰り返しながら、一層強い言葉を考へてゐたが、やがて野郎とか間抜けとか叫んだ。観客から口笛を吹かれて、この芝居は壊されるだらうと言つた。フォシュリイは一時かつとなつたが、新しい芝居をやる時に付きものゝそんな亂暴な言葉には、別に自尊心を傷つけられなかつた。そしてボルドナアヴを無遠慮に野蠻人扱ひにした。ボルドナアヴは夢中になつて、杖を風車のやうに廻しながら、牛のやうな息をついて叫んだ。

「煩さいな！ 黙つてゐろ……。詰らないことに十五分も潰してゐるんだぜ……つまらないことに。常識のない話だよ……分り切つたことぢやないか！ おいフォンタン、そこを動かさないで。それからローズはちよつと體を動かすだけでいゝんだ、そして下りて来るんだ……さあもう一度やつて。接吻するんだ、コサール。」

それもまた混亂して、芝居はうまく行かなかつた。今度はボルドナアヴが、象のやうな優しい身振りをした。フォシュリイはそれを嘲つて、憐むやうに肩を聳かした。フォンタンが口を出すし、ボスタまでがいらぬ手出しをした。ローズは疲れて、入口の代りに置いてあつた椅子に坐つて

しまつた。もう何をしてゐるのか分らなかつた。その上シモンヌが、臺詞渡しを取り違へて、その混雜の中へ早まつて登場した。それがボルドナアヴの癪に觸つたので、風車のやうに廻してゐた杖を力一杯彼女の尻に叩きつけた。彼は稽古の時に、自分が一緒に寝たことのある女を、屢々こんなにしてゐるのだつた。そして逃げて行く彼女の後ろから猛り立つて叫んだ。

「勝手にしろい、畜生！ こんなに煩さいんなら芝居はやめだ！」

フォシュリイは、劇場を出て行きさうな顔付で帽子を被つて、ちよつと舞臺の奥に立ち止つてゐたが、ボルドナアヴが汗みづくになつて椅子に歸ると、彼もまた戻つて来て椅子に坐つた。二人は並んで暫らくちつとしてゐた。重苦しい静けさが場内の薄闇を壓した。俳優達は、二分間ばかり黙つて待つてゐた。大仕事の後のやうに、皆くつたり疲れてゐた。

「さあ！ 續けよう。」と、すつかり落着いたボルドナアヴが、普通の聲で言つた。

「よろしい、續けよう。」とフォシュリイが繰り返した。「そして明日は稽古を一通り済ませよう。」

二人は體を伸ばした。稽古はだらけ切つた退屈な調子で續けられてゐた。舞臺監督と作者が喧嘩をしてゐる間、フ



オンタンを初め他の者は、舞臺の奥で田舎風な椅子や腰掛に澄ました顔をして坐つてゐた。彼等はくつ／＼笑つたり、ぶつ／＼咳いたり、ひどい蔭口を言つたりしてゐた。そこへシモンヌが尻を殴られた痛さで、涙に聲を途切らせながら歸つて来たので、彼等は舞臺の方を見て、もしも自分達がそんな目に會はされたなら、あのポルドナアヴの豚を締め殺してやるんだと言つた。

彼女は涙を拭いて首肯し、昨夜シユタイネルが十分暮しの立つだけ金を呉れると約束したのだから、もうこれつきりあんな奴のお世話にならないでもいゝのだと言つた。クラリスは、あの銀行家はもう一文なしなのに、と思つて吃驚してゐた。しかしブリュリエールは、あの猶太人の野郎はロイズと一緒になつてゐた頃でも、取引所相手にランドの製鹽事業の株を集めるのにどんな細工をしたことか、と言つて笑つてしまつた。丁度シユタイネルは、新しい計畫を立てゝゐた。それはまるでボスフオール(マルマ海を海に通河の古名)の下に隧道を穿たうとするやうな事業であつた。シモンヌは非常に面白さうに聞いてゐた。クラリスは一週間も前から鬱ぎ込んでゐたのだつた。あんないきさつで結局ガガにくれてしまつたあのラ・ファロアズの頓馬が、金持の叔父の相續人にならうとは、全く彼女には思ひも寄らないことだつた！ 彼女は運が無くて、相變らず借家住ひをし

てゐた。それにあのポルドナアヴの奴が、自分にジェラルディヌの役を演る力がないかのやうに、やつと五十行ばかりの臺詞しか呉れぬのが癪にさはつてならなかつた。彼女はあのジェラルディヌの役が欲しくて、ナナが斷るのを願つてゐた。

「だがね！ 俺はどうだい？」とブリュリエールがつんとして言つた。「俺にもたつた二百行しかないんだよ、もうこんな役はお返ししたいもんだ……この俺に、あんなサン・フィルムンの給仕を演らせるなんて、馬鹿にしてらあ。それにまた、何と云ふまづい臺詞なんだらう！ 味も素氣も無いや。」

するとバリヨ爺さんと話してゐたシモンヌが周章て、叫んだ。  
「あら、ナナが、ナナが棧敷に来てゐるわ。」

「どこに？」とクラリスが吃驚して、伸び上りながら訊いた。  
その噂がばつと擴がつて、皆が體を乗り出した。稽古は暫らく中止された。すると靜かにしてゐたポルドナアヴが、また怒鳴り出した。

「何？ どうしたんだ？ 稽古を続ける……黙れ、黙れ、我慢が出来ねえや！」  
平土間でナナが稽古を見つめてゐた。二度ばかりラボル

デットが話しかけたが、ナナは苛めたしげに脇で突いて彼を黙らせた。二幕目が終ると、舞臺の奥に二つの影が現はれた。音を立てないやうに爪がき立ちで入つて来て、ポルドナアヴにそつと挨拶に来た男を、ナナはミニヨンとミラフア伯爵だと見て取つた。

「あら！ 来たわ。」と彼女は囁いて、ほつと溜息をついた。ロイズ・ミニヨンが最後の臺詞を済ますと、ポルドナアヴが三幕目に移る前に、もう一度二幕目をやり直せと命令した。そして稽古の方はそつち除けにして、大袈裟な、丁寧な身振りで伯爵を迎へた。フォシユリイは、彼の圍に集まつた俳優達に、すつかり氣を取られてゐる風を装つた。ミニヨンは手を後に組んで、興奮してゐるらしい妻を見やりながら、口笛を吹いてゐた。

「さあ！ 階上へ行きませうか？」と、ラボルデットがナナに尋ねた。「あなたを樂屋へ連れて行つて置いて、私は呼びに下りますから。」

ナナはすぐに平土間を離れた。彼女は手探りで特等席の椅子の間を通らなければならなかつた。影の中を歩いてゐたのに、ポルドナアヴはそれと見て取つて、舞臺裏に通ずる廊下の、晝も夜も瓦斯の燃えてゐる狭い通路の端で彼女を捕へた。彼はいきなり用件を切り出して、熱心にジェラルディヌの役を引き受けさせようとした。

「どうだい？ いゝ役だらう！ 素敵なんだよ！ お前さんに篋り役だぜ……明日から稽古に来ておくれよ。」

ナナはつんと澄ましたまゝで、三幕目を見てからにませうと言つた。

「おゝ！ その三幕目が素敵なんだ……公爵夫人が家で淫賣の眞似をする、ボオリヴァジュはそれにうんざりして、遊ぶ癖をやめることになるんだ。するとそれが非常に滑稽な人違ひになつて、やつて来たタルディヴオが踊り子の家だと思ふんだよ……」

「では、その幕にジェラルディヌは？」とナナが遮つた。  
「ジェラルディヌ？」とポルドナアヴはちよつと當惑して繰り返した。「ジェラルディヌにも出る場はあるよ。長くはないが受けるところだ……ほんとは、お前さんには打つてつだけだよ！ さあ約束してくれませんか？」

彼女はちつと彼を見つめてから答へた。  
「もう少し後にして下さいな。」

そして、階段で彼女を待つてゐるラボルデットの方へ行つた。もう皆が彼女の來たのを知つてゐた。囁きが聞えた。ブリュリエールは、それを見て厭な顔をし、クラリスは役のことまで心配した。會つて愛した女の悪口を言ふのを好まなかつたから、フォンタンは冷淡で、無關心な様子をしてゐた。しかし腹の底では、昔の愛が憎悪に變つて、彼女の自



分、盡 てくれたこと、美しさ、彼の忌はしい悪趣味から、もう二度と繰り返したくないと思つてはゐるが、あの二人の生活や、それらすべてに就いて、彼は彼女に對して深い怨みの氣持を抱いてゐた。

またラポルデットが現はれて伯爵に近づく、ローズ・ミニオンはそれを見て、ナナが來たのと思ひ合せて、直ぐにすべてを諒解した。ミラファにも厭氣がさしてゐたが、しかしこんな目に會ふのをちつとして見てゐられなかつた。そんなことでは、何時も夫に對して黙つてゐる彼女も、ついミニオンに向つて荒々しく言葉をかけた。

「あなた、分つてゐる？ またあの女が、シュタイネルの時と同じやうなことを繰り返すなら、今度こそ私、眼をひっこ抜いてやるわ！」

様子ぶつて澄ましてゐたミニオンは、何も彼も呑み込んだ風に肩を聳やかした。

「お黙り！ ね、お願ひだから黙つておくれ！」  
彼は自分の立場を知つてゐた。ミラファから絞取れるだけ絞り取つた彼は、そのミラファが、今ナナを一眼見ると、もうナナの爲めにならたとへ足で踏まれてもいゝと思つてゐることを見て取つた。そんな情熱とは争ふことが出來ない。そこで男の心を知り抜いてゐる彼は、たゞ形勢の許す限り、最も有利な立場に立たうとしか考へなかつた。

それは成り行きを傍觀することだつた。彼は待つことにした。

「ローズ、出るんだ！」とボルドナアヴが叫んだ。「二幕目が初まつてゐるんだよ。」

「まあ、俺に任せて置けばいゝよ。」とミニオンが言つた。

それから彼は冷やかし半分に、この脚本に就いてフォシリイに挨拶してやるのも面白いと思つた。立派だよ、この脚本は。だが、どうしてこの貴婦人はこんなに眞面目なんだらう？ こいつは不自然だね。と、彼は冷笑しながら、ジェラルディヌに籠絡されるボオリヴァジュ公爵のモデルになつたのは、誰かと訊ねた。フォシリイは腹を立てるところか、却つて微笑を浮べた。ボルドナアヴはミラファの方へ眼をやつた。伯爵はむつとしてゐたので、ミニオンも急に眞面目になつた。

「初めるんだ、さあ！」とボルドナアヴが怒鳴つた。「さあ、バリヨ！……おや、ボスタがゐないぢやないか？ あいつは何時でも俺を馬鹿にしてゐるやがるんだ！」

しかしボスタは平氣な様子で歸つて來た。ラポルデットが伯爵を連れて來た時、また稽古が初まつた。伯爵は、ナナに逢ふといふことで、胸を轟かしてゐた。あの喧 の後で、彼は堪へ難い空虚を感じ、何も手につかなくなり、習慣の

崩れた苦しさに堪へられなくて、導かれるまゝにローズの家へ行つたのだつた。その上、彼はこの昏迷の裡、浸つて何もかも忘れようと思ひ、ナナを探すことも断念し、サビエ夫人のことも深く氣に懸けまいと避けてゐた。かうした一切の忘却こそ、自分の威嚴に應はしいものに思はれた。しかし眼に見えない力が働きかけて、ナナがまた靜かに彼を征服した。彼の思ひ出や、放肆な情慾の生活や、新らしく目覺めた感情は、ナナ以外の者を全然好まなくなり、ナナに對してのみ、その心は優しくなり、殆んど父親らしい氣持になつてゐたのであつた。すべての忌はしい思ひ出は消え去り、フォンタンのことも忘れ、妻が姦通したと言つて彼を侮辱して追ひ出したナナの言葉ももう思ひ出さなかつた。それらの言葉は皆飛び去り、彼の心に残つたたゞ切ない抱擁の優しさのみが、日ましに強くなり、息も絶えんばかりに胸を絞めつけた。彼はまた單純な心に歸つて、もしも彼が眞實に彼女を愛したのなら、きつと彼女は裏切らなかつただらう、と考へて自分を責めた。その苦痛は耐へ難いものとなり、彼は非常に鬱めな心を懷いてゐた。それは丁度、古傷の痛みのやうなもので、盲目的な、矢も楯も耐らぬ欲望は最早靜かに落着いたが、しかし思慕の情熱は彼につき纏つて、たゞ彼女一人を、その髪を、その口を、その肉體を求めてやまなかつた。彼女の聲を思ひ出すだけで

體が震き、飢ゑた無限の優しさで彼女を懇ひ求めた。かうしてその思慕が激しく彼を苦しめてゐた時、巧みに取りなして二人を會はせようとしたラポルデットの最初の言葉を聞いて、彼は耐らなくなつて相手の腕に身を投げかけた。そして直ぐ、そんな動作が彼のやうな身分の者としてはどんなに滑稽であるかを考へて、恥かしく思つた。しかしラポルデットは如才なく、何も彼も呑みこんで、階段の下で、あつさり次のやうな言葉を告げて彼と別れた。

「三階の右の廊下ですよ。扉が少し開いてゐますから。」  
ミラファは、劇場の靜かな所を一人で通つて行つた。樂屋の前を過ぎる時に、開け放された扉口から、見苦しく汚れた、取り亂された廣い部屋の有様が、晝の光線に依つて窺はれた。暗くて騒がしい舞臺裏を抜け出て來た彼は、何時かの夜瓦斯の匂ひに蒸せ返つた中を、芝居の濟んだ女優達が駈け上つて來たこの階段を、今日は白晝の深い靜かさの中で驚いて見廻した。がらんとした樂屋やひつそりした廊下には、何の物音も人の氣配もなかつた。足許の正方形の窓から十一月の蒼ざめた光線がさし込んで、そのぼつと明るい中に、塵が舞つてゐて、天井からは死のやうな靜けさが降りてゐた。彼はこの落着いた靜かさを喜んで、ゆつくり溜息をつきながら昇つて行つた。心臓が高く打つてゐた。そんなに子供のやうに溜息をついたり涙を流したりし



ながら、昇つて行くのが恐ろしかった。二階の踊り場に着くと、誰もゐないのに安心して、壁に凭れかゝつた。彼はハンカチを唇に當て、反り返つた踏段や、手摺れで光つてゐる鏡の欄干や、塗料の剥けた壁の有様や、娼婦達が眠りに耽る午後の懶い時刻に、露骨に剥き出された娼家に見るやうな惨めさを眺めてゐた。三階へ着くと、踏段の上に圓くなつて眠つてゐる、大きな褐色の猫を跨がなければならなかつた。女達が毎晩撒いてゆく香が閉ぢ籠められてひやりとしたところに、この猫だけが眼を細く見開いて、眠たげにその住居を守つてゐた。

右の廊下には、果してその樂屋の扉が、すこしばかり開いてゐた。ナナは待つてゐた。小さな質朴な女中のマティルドは、その部屋に壊れた化粧瓶を亂雑に並べ、汚れた化粧臺や、藥の上に血を流したやうに紅で汚れた椅子や、さうしたものでその部屋を非常に不潔にしてゐた。壁と天井に貼られた紙は、高いところまで石鹼水の飛ばつちりで汚れてゐた。腐敗したラブンド香水の匂ひが鼻に来るので、ナナは窓を開けてゐた。彼女はほつと息をついて、暫らく窓に眩を掛けたまゝ、眼の下の、日影に覆はれてゐる狭い庭で、ブロン夫人が苦蒸した敷石を一心に掃いてゐる音のする方を見ようとして身をのり出してゐた。罎扉に吊り下げられたカナリヤが、鋭い聲で轉つてゐた。並樹街の馬車

の音も、近くの道のざわめきも聞えて來ないこの部屋は、太陽が廣い空で眠つたやうに見える田舎の平和があつた。眼を上げると小さな建物や、街路の商店の輝いた硝子が見えた。そして正面には、ヴィヴィエンヌ街の高い家並の空家のやうに静かな裏側が聳えてゐた。あちこちに露臺が見え、寫眞屋は屋根の上に青硝子の大きなアトリエを張り出してゐた。その眺望は非常に氣持がよかつた。彼女は我を忘れてゐたが、誰か戸を叩く氣配に、振り返つて叫んだ。

「お入りなさい！」  
伯爵を見ると、彼女は窓を閉めた。部屋はもう熱くもなかつたし、あんなブロン夫人を相手にしてゐるのも面白くなかつたからである。二人は眞面目な顔で眼を見交はした。伯爵が非常に堅くなつて、息を詰らせたやうにしてゐるので、彼女は笑ひながら言葉を掛けた。

「あら！ やつぱりいらしつたのね。あなた！」  
伯爵は非常に感動してゐたので、却つて凍りついたやうに見えた。彼はナナを夫人と呼んで、彼女にこゝで會へたのを喜んだ。するとナナは手早く物事を片づけるために、一層慣れ／＼しい態度をとつた。

「堅苦しくするのはお止しなさいよ。私に會ひたかつたのでせう、どう？ だから、陶器の犬のやうに眺め合つても詰らないわ……。昔は二人とも馬鹿だつたわ。ねえ、

私、許して上げるわ！」

そして、そのことは、もう何も言はない方がよかつた。伯爵は首肯した。彼はやつと落着いたが、一時に先きを争つて唇に上つて來る波のやうな言葉の中から、何を言つていゝのか分らなかつた。彼の冷やかな態度に驚いて、ナナは大袈裟な様子をした。

「さう、あなたはお例巧だわ。」と彼女は唇をすぼめて言つた。「もう仲直りをしたのですから、握手をさせようよ。仲のいゝ友達になりませうよ。」

「何ですつて、友達になるつて？」と、彼は急に不安になつて小聲で言つた。

「えゝ、詰らないとお考へになるでせう、だけど私、あなたを尊敬したいと思つてゐたんですわ……。もう、何も彼も言つてしまつたんですから、お目にかゝつても、こんな馬鹿みたいな顔をしてゐるのは止ませよう……」

伯爵は口を押まうとした。  
「私にしまひまで言はせて頂戴な……。私は非難されるやうなことは何もしてゐませんわ。だから、あなたともそんなことはしたくないの……。お互に名譽を守りませうよ。」  
「いゝや、そんなことはない！」と彼は強しく叫んだ。「まあ坐つて、私の話も聞いて下さい。」  
そして伯爵は、ナナが出て行つてしまふのを恐れるかの

やうに、そこにあつた一脚の椅子に彼女を坐らせた。彼は益々いら／＼して部屋の中を歩き廻つた。密閉されて、陽を受けてゐる小さな部屋は、外の物音に少しも妨げられず、暖かだしつとりと落着いてゐた。二人が黙つてゐると、遠い笛の顫音符のやうなカナリヤの鋭い轉りだけが聞えてゐた。

「ねえ、」と彼は、彼女の前に立ち止つて言つた。「私はあなたの手をとりて來たのです……。さう、私はもう一度昔のやうになりたいのです。それをよく知つてゐて、何故今のやうなことを言ふのです？……さあ、答へて下さい。如何ですか？」

彼女は俯向いて、自分の椅子の、血を流したやうな赤い藥を擽つてゐた。だが氣づかはずさうな彼の様子を見ても、彼女は少しも急がなかつた。遂に彼女は美しい眼に、巧みに悲しみの色を浮べて顔を上げた。

「おゝ、それは出來ないことですよ、私があなたとまた一緒になるなんて、どうしても出來ませんわ。」  
「どうして？」言ひ盡し難い苦痛の色を顔に浮べて、彼は口籠つた。

「どうして？ と仰しやるの……だつて……出來ないことだから出來ないのですわ。私、厭ですもの。」  
彼はなほ暫らくちつと彼女を見つめてゐた。と、急に彼



は床に跪ひざまづいた。彼女は厭いやになつた様子で、たゞ一言かう附つけ加へた。

「あゝ！ 子供のやうな眞似はよして下さい！」  
彼はもう子供のやうになつてゐた。彼女の足許あしもとに跪ひざまづいて、彼女に抱かきつき、その顔を膝ひざの間に伏ふせて、強く彼女を引き寄せながら、激げきしくその身をすり寄せた。かうして、彼女の薄い着物の下の天鵝絨ひらうとのやうな軟なかい脚を感じて、彼は體を震ふるはせてゐた。前後もなく、熱あつに浮かされたやうに身を震ふるはせ、彼女の體の中へ入いつてしまひたいやうに、一層激げきしく彼女の脚に纏まとりついた。古い椅子が軋びつた。低い天井てんじやうの下の、古い化粧水の酸すつばい匂におひの中に、彼が懇願こんがんする歎なげの聲こゑが微かかに聞きえてゐた。

「まあ！ どうなさるの？」とナナは、彼のなすがまゝに任まかせて言いつた。「そんなことをなすつても仕方がありませんわ。だつて出来ないのですもの……あゝ！ あなたはほんとに聞き分けがないのね！」

彼は心を落着おちけた。しかしまだ床に跪ひざまづいたまゝ、彼女を離はなさなかつた。そして途切とぎれ勝ちな聲こゑで言いつた。

「まあ、せめて、私があなたに上げたいと思おもつてゐるものを聞いて下さい……。モルソウ公園の傍かたに屋敷を見立てゝあるんです。あなたの言いふことなら、何でもして上げませう。あなたがすつかり私のものになつてくれるなら、私の

財産を上げませう……。さうだ！ すつかり私のものにさへなつてくれるなら、ねえ分わりますか、あなたがもう私より外ほかに、誰たれの男おとこのものでもないのなら。この世の中で最も立派りっぱな、最も美しい、車くるまや、ダイヤエンドや、着物を、私はあなたに上げたいのです……」

ナナは、それらのどの申し出にも、落着おちいた態度で、いえ、いえ、と首くびを振ふつてゐた。そして、なほ彼が言葉を續つけながら、しどろもどろになつて、金を與あづかると言いひ出すと、彼女は、辛抱しんぱうが出来なくなつてしまつたやうだつた。

「もう私を慮おぼめるのはおしまひですか？……私は氣が弱いので、あなたが氣狂ききやうひのやうにおなりになると、かうしてつい辛抱しんぱうしてしまふのですけれど、でも、もうこれで澤山たくさんだわ……。私を立たせて下さいな。あなたのお蔭かげですつかり疲つかれましたわ。」

彼女は彼を離はなれて、立ち上あつて言いつた。

「いえ、いえ、いけません……私、厭いやですの。」  
伯爵は、やつとのことことで立ち上あつて、ぐつたり椅子に倒たれて兩手りょうてで顔をかくし、腕うでを椅子の背せに凭たせかけた。今度こんどはナナが歩き初はじめた。彼女は暫しばらくの間ま、蒼あざざめた陽ひの射さしてゐる、この汚よごれた孔あなのやうな部屋へやの、油あぶら染ぞみた化粧けしやう臺たいや、斑まだら點まのついた壁紙かべじを眺ながめてゐた。それから伯爵けいやくの前に

立ち止とつて、落着おちいた口調くちやうできつぱり言いひ切きつた。

「お金持かねもちの方が、お金かねで何も彼も出來ると思おもつてゐるのはをかしいわ……。けれども、私が厭いやだと言いつたら、どうするの！……そんなものは欲ほしくないんです。巴里パリを下くださると仰おほしやつても厭いやですわ。いゝえ厭いやですわ……ほんとにこの部屋へやは穢けがないのね、でも、こんなところでも、あなたと一緒に暮くすのが好きなら、厭いやぢやないわ。けれど、もし氣きが向むかなければ、たとへ宮殿みやてんの中なかだつて嬉うれしくないの……あゝ！ お金かねなんか！ 欲ほしければどこからだつて入いつて來きるわ！ さう、お金かねなんか蹴け飛ばとしてやるわ！ 唾つばを吐つきかけてやるわ！」

そして彼女は不機嫌ふきげんな顔かほをした。それから鬱ふさぎ込んだ様子ようすをして、悲かなしさうな聲こゑで附つけ加へた。

「私にはお金かねよりもつと欲ほしいものがありますの……。ああ！ その私のほしいものを、誰たれかと私わたしにくれるなら……」  
伯爵は靜しずかに顔を上げた。その眼まなこは希望きやうぼうの光ひかりに輝きらいてゐた。

「いゝえ！ あなたにはそれをくれることが出來ません。」と彼女は言いつた。「私がこんなに言いふのは、あなたの知しつたことぢやないの……えゝ、何も彼も言いつてしまひますわ……私わたしは今度こんどの芝居しばいのあの立派りっぱな奥様おくさまの役やくが欲ほしいのです。「どんな奥様おくさま？」と彼が驚おどいて囁ささいた。

「あのエレエヌ公爵夫人くわくふじんよ！……私がジュラルディヌを演あると皆みなは思おもつてゐるの。でも、どうしてあんな役やくを演あるもんですか！ あんな詰つまらない、あんな一場いちやうしか顔かほを出でさないやうな役やくなんかない……それに私わたし、かとも思おもふの。蓮葉れんえつ女の役やくはもう澤山たくさんだわ、いつもそんな役やくばかり演あらして置いて、まるで私がほんとにそんな女のやうに思おもつてゐるんだわ。それが、穢けがに觸ふつてならないの。みんな私の育そだちが悪いと言いはぬばかりの顔かほをしてゐるんですもの……。さうよ！ みんな私わたしを見損みそんなつてゐるの！ 立派りっぱな夫人ふじんの役やくだつて、演あらうと思おもへば立派りっぱに演あつて見せるわ！……一寸いっしん！ まあこんな具合ぐあいよ。」

彼女は窓まどのところまで退ひつて、胸むねを反そらし、足の汚よごれるのを厭いやふ大きな雌鷄めいけいのやうな、注意ちうい深い態度たいどでしづ／＼と進すすんで來きた。彼は涙なみだに濡ぬれた眼まなこを見上げて、その苦痛くるつうの上うへを過すぎる、この突然とつぜんな喜劇きげきの場面まへんをぼんやり眺ながめてゐた。

彼女は、その仕草しきさうをしながらつんと澄すましたり、上品しんぴんに笑わらつたり、瞬まきをしたりしながら、スカートを揺ゆつて暫しばらく歩いてゐたが、また彼の前に來きて立ち止とつた。

「どう？ いゝでせう！」  
「えゝ！ ずるぶん立派りっぱです。」と彼はまだ咽喉のどを詰つまらせて、そば／＼した眼付まなこで口籠くちかごつた。

「立派りっぱな夫人ふじんの役やくが演あつて見たいわ！ 家いへでも時々ときどきやつて



見るの。誰だつて私のやうに、男なんか眼中にないあの公爵夫人の役は出来ないわ。あなたの前を通りながら、横眼で見た私の様子に気がお付きになつて？ あんな様子は、生れつきでなければ出来ないことよ……。だから私、立派な夫人の役がやりたいわ、そのことばかり考へてゐるの。私も運がないわね。でも私、あの役でなければどうしても厭だわ！

彼女は眞面目になり、しつかりした聲で、非常に感動して、本當にそんな詰らない望みをくよくくと考へてゐた。ミッファは、彼女に拒けられた氣持のまゝで、何が何やら分らずに、まだぼんやりしてゐた。二人は暫らく黙つてゐた。がらんとした部屋の平和を亂すものは、一匹の蠅さへも飛んでゐなかつた。

「どうでせう。」と彼女は眞面目になつて言つた。「あなたは、私にあの役を演らせて下さるでせう。」

彼はまだぼんやりしてゐた。それから絶望した身振りで、「けれども、それは出来ませんよ！ 先刻あなたも、この私の知つたことでないと言つたぢやありませんか。」

彼女は肩を聳やかして、その言葉を遮つた。

「あなたが階下へ行つて、ボルドナアヴにあの役が欲しいと言へばいぢやありませんか……あんまり馬鹿正直も困るわ！ ボルドナアヴはお金が必要なんですの。ね、それに

あなたは窓から捨てるほどお金があたりだから、貸しておやりなさいよ。」

そして彼がまだ困つた様子をしてゐると、彼女は腹を立てた。

「いゝわ、分つてるわ。ローズを怒らせるのが厭なんですから……先刻あなたが断つて泣いてゐる時にも、私、このことは言はなかつたの、言へば非常に長くなりますからね……さうよ、一人の女を何時までも愛すると誓つた以上、その翌日、不意に出會つた女と一緒になつたりするものぢやないわ。おゝ！ こんな侮辱を受けたことは、決して忘れやしないわ！ それに、ローズのお餘りなんか、有難くもないわ。あんなに膝へ寄りかゝつたりして、馬鹿な眞似をする前に、あなたは汚らしい人と手を切らなければならぬわ！」

彼はやつと物を言ふことが出来るやうになつて、大きな聲で叫んだ。

「おゝ！ ローズなんかどうでもいゝのです、すぐに別れてしまひませう。」

ナナはそれに満足して言ひ續けた。

「では、何も困ることはないぢやありませんか？ ボルドナアヴは支配人なんですよ……。それともボルドナアヴの外に、フォッシュリイがあると仰しやるの……」

彼女は口調をゆるめて、この要件の中心に觸れて来た。ミッファは眼を伏せて黙つてゐた。彼は、フォッシュリイがサビイヌに付き纏つてゐることは、努めて知らぬ振りをして、あのティッポウ街の軒下で過ごした怖ろしい夜のこと、自分の間違ひがあつて欲しいと願つてゐたのだつた。だが彼は、フォッシュリイに對しては、嫌悪や、密かな怒りを感じてゐた。

「けれども、あのフォッシュリイはそんなに悪い人ぢやないわ！」と言つてナナは、サビイヌの夫とその情夫との間の氣持を、そつと探らうとした。「フォッシュリイなら譯はないわ、實際は、あの男は少しお目出度いによ……どう？ 私にあの役を廻すやうに言つて下さるでせう。」

さうした彼女の下心が、伯爵を怒らせた。

「いゝえ、そんなことは出来ません！」と彼は叫んだ。

彼女は躊躇した。「あのフォッシュリイは、あなたに對してはどんなことでも断れないの。」と彼女は危く言ひかけたが、さう言つては理窟がましく、少し角が立つと思つたので、たゞ笑つて見せた。そしてこの妙な微笑が、すべての意味を語つてゐた。彼女を見上げてゐたミッファは、當惑したやうに顔色を變へて、また眼を伏せた。

「まあ！ あなたは思ひやがないわね。」と遂に彼女が囁いた。

「そんなことは出来ません！」と、彼が困り切つて言つた。「その外のことなら、何でもあなたの言ふことをきつとして上げます！」

すると彼女は、もう言ひ争ふのはやめて、その小さな兩手で彼の顔を仰向け、自分の身を擦り寄せて、彼の唇に唇を當て、長く接吻した。彼の體には戰慄が走つた、彼は彼女の體の下に、夢中になつて、眼を閉ぢ、體を頼はせてゐた。それから彼女は彼を立ち上らせて、

「さあ、行つていらつしやい。」と、たゞ一言言つた。

彼は扉口の方へ歩いて行つた。しかし、彼が出ようとすると、また彼女がその兩腕に抱き寄せて、優しく甘えながら、顔を反らして、その艶めかしい頸を彼の胸着に擦りつけた。

「どこにその屋敷があるの？」と彼女は低い聲で、取り亂した様子をして、まるで欲しくなかつたものがまた氣になり出した子供のやうに、笑ひながら言つた。

「ヴィリエ街にあるんです。」

「馬車もあつて？」

「えゝ。」

「着物も？ ダイヤモンドも？」

「えゝ。」

「まあ！ あなたは親切ね！ 先刻あんなことを言つたの



は、ローズが憎らしかつたからよ……もう私、きつと前のやうな眞似はしないわ。あなたも女に對して、どうしなければならないかお分りになつたんですからね。あなたは、私に何でも下さるのでせう？ 私、もう他の男なんか要らないわ……さあ！ もう何もかもあなたのものよ！ え、え、え、もうすつかり！」

彼の顔や手の上に雨のやうに接吻して、彼を扉外へ送り出すと、彼女はほつと溜息をついた。まあ！ マティルドの掃除が行き届かないものだから、この部屋は、何といふ變な匂ひがするのだらう！ 冬の陽の射し込むこの部屋は、プロバンスのやうに暖かだつたが、腐敗したラヴンド香水や、その他の不潔なもの、匂ひがした。彼女は窓を開放つて、再びそこに脇をついた。そして歩道の雨覆ひの硝子を見ながら、待つてゐる時間を紛らした。

頭のこんがらかつたミラファは、階段を躊躇しながら下りて行つた。どう言はうかしら？ 自分に無關係であるべきこの話をどう切り出さうかしら？ と彼は考へた。舞臺へ辿り着くと、口論が初まつてゐた。二幕目が終らうとしてゐるところで、フォシュリイが臺詞を削らうとするのを、ブリュリエールが食つて掛つてゐた。

「すつかり削り取つて下さい。」と、ブリュリエールが叫んだ。「その方がいつそさつぱりしていいですよ！……考へ

て御覽なさい！ たつた二百行しかないところを、また削るんですからね！……え、え、もう澤山です、その役はお返しいたしませう。」

彼はポケットから皺になつた手帳を取り出し、神経的にそれを手の中で揉んで、コサールの膝へ投げ出すやうな身振りをした。彼は虚榮心を傷つけられて、蒼ざめた顔を癡癡とさせ、唇を噛みしめ、眼を輝やかしてゐた。反抗的な心中を、どうしても押し隠すことが出来なかつたのである。觀衆から偶像のやうに愛されてゐるこのブリュリエールが、そんな二百行ばかりの役が出来るものか！ といった權幕だつた。

「何故またこの私に、益に手紙をのせて運ぶやうな給仕の役をさせるのです？」と、彼がまた苦り切つて言つた。

「ね、ブリュリエール、まあ我慢してくれ。」と役者に對して當然の力を振ふ管のボルドナアヴが彼を宥めて言つた。「もうそれ以上言ふのはよせよ……。お前なら出来栄えがするよ。どうだね？ フォシュリイ、見せ場をつけ足しては……。三幕目で、もう一場位は長く出来るだらう。」

「では、幕の下りるところで、何か私に言はせて貰ひませう……。きつとやうまくやつて見せますから。」とブリュリエールが言つた。

フォシュリイは黙つたまゝ、同意する態度を示した。ブ

リュリエールは、役が増したけれども、まだ苛々と不満さうな様子をしてゐた。ボスクとフォンタンはそんな經緯の間、全く知らぬ顔をして、二人とも自分達の知らないことだとばかりに、無關心な態度をとつてゐた。俳優達は皆フォシュリイの周圍に集つて、褒めて貰ひたさに何かと質問してゐた。ミニオンはブリュリエールの不満をすつかり聞き取りながら、ミラファ伯爵を待ち構へて、彼の歸りを見逃がすまいとしてゐた。

伯爵は歸つて来て、薄暗い舞臺の奥に立ち止つたまゝ、口論の間へ顔を出すのを避けてゐた。ボルドナアヴはそれを見つけると急いで傍へ行つて、

「どうでせう？ こんな有様なんですよ！」と囁いた。「伯爵様などには想像も出来ないでせうが、私はこんな連中を相手にして、何時も弱らされてゐるんです。みんな負けず劣らずに虚榮心が強くて、おまけに金と言へば眼がななし、お話にならないほど不愉快な奴等なんです。それに厭な話の絶え間もありませんし、私が腰でも挫けばいゝと待ち構へてゐるんですからね……。いや、ついこんなことをお聞かせしまして御免下さい。」

彼の言葉が終ると暫らく沈黙が続いた。ミラファは話題を變へようと努めてゐた。しかしうまく行かないので、早く切り上げようと思つて、きつぱり言つてしまつた。

「ナナが公爵夫人の役を望んでゐるんです。」

ボルドナアヴが吃驚して叫んだ。

「何ですつて！ それや正氣の沙汰ぢやありませんよ！」

そして伯爵の顔を見ると、蒼い顔をして困つてゐるやうなので、彼は直ぐに氣をと直した。

「困りましたな！」とだけボルドナアヴは言つた。

そしてまた二人は黙つてしまつた。ボルドナアヴの心の底では、それはどうでもいゝことだつた。あの無器用なナナが公爵夫人をやれば、滑稽なものにはなるだらうが、それは又それで、ミラファを迷さないやうにすることだけは出来るのだ。で、彼は直ぐに決心をして、振り返つて叫んだ。

「フォシュリイ！」

伯爵はそれを身振りで押し止めた。フォシュリイには聞えなかつた。フォシュリイは、舞臺脇の垂れ幕までフォンタンに連れて行かれて、彼がタルデイヴオの役に就いて理解したところを草稿で説明するのを聞いてゐなければならなかつた。フォンタンはタルデイヴオをマルセイユ人と考へて、その聲調を使つてゐた。彼は努めてその聲調を眞似てゐた。臺詞をすつかり繰り返して、これでいゝんでせう？ と言ふのだが、どうやら自分でもはつきり分らないらしかつた。しかしフォシュリイは、冷静な態度を守つて、それ



に反對を唱へた。すると忽ちフオンタンが腹を立てた。そこでフオシュリイが、よろしい！ そんなに役の精神が分らないなら、君が演つてくれない方が、皆のためにどれほどいゝか知れないのだと言つた。

「フオシュリイ？」とまたボルドナアヴが叫んだ。するとフオシュリイは、この役者から逃れられるのを喜んで駈けつけて来た。フオンタンは、彼に素早く逃げられて忌々しさうに眺めてゐた。

「そちらにゐないで、どうかこちらへ来て下さい。」とボルドナアヴが言つた。

聞き耳を立てゝゐる一同を避けるために、彼は舞臺裏の小道具部屋へ二人を連れ込んだ。ミニオンは二人の姿が見えなくなつたのに驚いてゐた。その四角な部屋は舞臺から少し階段を下りなければならなかつた。その二つの窓は庭に面してゐて、低い天井の下、汚れて曇つた硝子からは、簾のやうに日光が射し込んでゐた。部屋一ぱいの棚と云ふ棚には、まるでラッブ街の古道具屋が、蔵ざらへでぶちまけたやうなありとあらゆるがらくた道具が並んでゐた。くだらない小皿や、金を塗つた厚紙のコップや、古い眞赤な編蝠傘や、伊太利風の水差しや、あらゆる型の柱時計や、皿や、インク壺や、鐵砲や、ポンプが、亂雑に並んでゐた。それらは皆、一寸も積つた塵に覆はれて、積み重ねられた

まゝ、壊れたり缺けたりして、何か何だか見分けがつかなかつた。鐵屑や襤褸や濡れた厚紙などの耐へ難い臭氣が、五十年來舞臺で使はれてそこに堆積されてゐる小道具の残骸から立ち昇つてゐた。

「こちらへお入り下さい。」とボルドナアヴが繰り返した。「外の者に聞えてはなりませんから。」

伯爵は非常に當惑したらしく、ボルドナアヴ一人に話を切り出させようとして、あたりを歩いてゐた。フオシュリイは驚いて、

「何ですか？」と訊ねた。

「あのね、」とボルドナアヴがやつと口を切つた。「ちよつと考へたことがあるんだがね……。驚いてはいけませんよ。眞面目な話なんだがね……。公爵夫人の役をナナに演らせたらどうだらうね？」

作者は吃驚してしまつた。そして高い聲で叫んだ。

「それやいけませんよ、いけませんとも、冗談でせう……いゝ笑ひものになりますよ。」

「だがね！ 笑つて貰へば、滿更不成功でもないぢやないか！……もう一度考へ直してくれ給へ……。さうすりや大へん伯爵様のお氣に入るんだから。」

ミニリアは體裁を繕ふために、埃まみれの棚から得體の知れない品物を取り上げてゐた。それは石膏で脚を接いだ

卵立てであつた。彼はそれを眺めてゐて氣のない様子だつたが、やがて傍へ来て呟いた。

「さう、さう、それが非常にいゝでせう。」

フオシュリイは、彼の方を振り返つて、はげしく我慢が出来ないといふ様子をした。伯爵は、脚本に就いては何も知つてゐなかつた。そこで彼はきつぱり言ひ放つた。

「駄目ですよ……ナナには精々のところ、浮氣女しか出来ません。それに、貴族の婦人なんて以ての外ですよ！」

「それは君が見損なつてゐるのです。私が保證します。」とミニリアが大膽になつて言つた。「えゝ、その貴族の婦人を私に演つて見せたんですから……」

「どこです？」とフオシュリイが益々驚いて訊ねた。

「階上の樂屋でね……ほんとにさうです。それがまた實に素敵なんです！ 殊に眼付がいゝですよ……かう、ね、行き過ぎながら、こんな風に……」

そして彼は、卵立てを持つたまゝ、二人を説き伏せたい熱望から、我を忘れてナナの眞似をしようとした。フオシュリイは呆れてそれを眺めてゐた。そして何も彼も分つたのもう腹を立てなかつた。伯爵は相手の眼付に、輕蔑と憐憫を感じると、立ち止つて、少し顔を赤くした。

「まあ、出来るかも分りませんね。」と作者は機嫌を取るやうに呟いた。「ナナにも立派に出来るでせうが……たゞ役

割がもう決つてゐるんです。それをローズからとり上げることは出来ませんのでね。」

「いや、それだけのことなら、」とボルドナアヴが言つた。「それなら私が引き受けて始末をつけるよ。」

するとフオシュリイは、相手が二人になつたのを見て、ボルドナアヴに秘密な魂膽のあるのを直ぐに讀みとつたが、弱味を見せまいとして、その話をぶち壊すやうに一層激しく反抗した。

「いゝえ！ いけません。いけません。たとへその役が空いてゐても、私ならナナには與へません……。分り切つたことぢやありませんか？ 私の好きなやうにさせて下さい……私の脚本を壊したくはありませんからね。」

彼は當惑したやうに口を噤んだ。ボルドナアヴは、自分があるのは邪魔になると思つて少し離れてゐた。伯爵は俯向いてゐた。そして、やつとのことで顔を上げると、聲の調子を變へて言つた。

「ねえ君、どうかうまく計らつていたゞけないものでせうか？」

「私には出来ませんよ。私には出来ませんよ。」とフオシュリイが苦しさに繰り返した。

ミニリアの聲は一層重々しくなつた。「私がお願ひします……私の希望ですから！」



そして、彼はフォシユリイをぢつと見つめた。その脅威を含んだ黒い視線をうけて、フォシユリイは急に逃げ腰になつて、譯の分らない言葉を口籠つた。

「では宜しいやうに、兎に角、もう私は、知りません……あゝ！ それやあんまりですよ。まあ、やつて御覽なさい、今に分るでせうよ……」

その場の様子は一層始末が悪くなつた。フォシユリイは棚に凭れて、背立たしげに足を踏み鳴らしてゐた。ミユフアは相變らず卵立てをひねくりながら、それを注意深く眺めてゐるやうに見えた。

「それは卵立てですよ。」とボルドナアヴが傍へ来て親切に教へた。

「あゝ！ さうです、これは卵立てです。」と伯爵が繰り返した。

「どうかお許し下さい。埃だらけにおなりになつて。」とボルドナアヴは、卵立てを棚に置いて言葉を續けた。「御承知の通り、毎日掃除しようと思ひますと、果しがありませんで……それで、こんなに不行届きになるのです。どうでせう？ この亂雑な有様は……けれども、實はまだ少しばかり金目のものもあるんです。まあ御覽下さい。どうかずつと御覽下さい。」

庭から来る緑を帯びた光の中で、彼はミユフアに棚の前

を歩かせ、一々道具の名前を告げて、彼が笑ひながら名づけた所謂屑屋の物品目録によつて伯爵の氣を紛らさうとした。そしてフォシユリイの傍へ歸つて來ると、軽い調子で話しかけた。

「さあ、皆の意見が一致したのだから、もうその話は切り上げよう……。あゝ、丁度ミニオンが來た。」

暫らく前からミニオンは廊下を歩いてゐた。彼は、契約を變更したといふボルドナアヴの言葉を聞くや否や、彼に喰つて掛つた。それは侮辱だ、妻の未來を破壊するものだ、たとへて訴訟沙汰にしても、と彼はいきまいた。するとボルドナアヴは、落着き拂つて説明した。あの役は、考へて見るとロイズにやらせるほどの役でもないし、だからロイズの方は、この『公爵夫人』の後でやる小歌劇のために、出さずに置かうと思ふのだ、と言つた。しかしミニオンが怒鳴るのをやめないで、終ひにボルドナアヴは、ロイズにはフォリイ・ドラマチック座から金を出す話もあるさうぢやないか、と仄めかせて、突然、暇を出すと言つた。するとミニオンは一寸躊躇したが、その話の方は否定しないで、金のことなどは眼中にないと言つた風に、妻が公爵夫人を演る約束が結ばれた以上は、たとへ自分は損失を招かうとも、威嚴の問題であり名譽の問題であるから、妻がどうしてもその役を演らなければならぬと言つた。議論はそこ

で停滞して、果しがつかなかつた。ボルドナアヴは幾度も繰り返して、フォリイ座からはロイズに一晚三百法の契約

で百回の上演を申し込んでゐるのだし、こゝにあればやつと百五十法にしかならないのだから、今彼女に暇をくれてやれば、彼女にとつても、一萬五千法の利得になる筈だらう、と理窟を言つた。夫は、彼女の藝を楯にとつて、妻の

役が奪られたとなれば、人はどう言ふだらう？ 役を變へなければならぬほど、力量が足らなかつたのだと言ふに

決つてゐるし、さうなれば女優としての評價も墮ちるし、その損害は見逃すことが出來ない、と言つて下らなかつた。

いゝえ、いゝえ、絶対に承知が出來ません！ 金よりも名譽が大切ですよ……と彼は言つた。さう言ひながらも、彼はまた突然手切れ金を要求した。ロイズには契約があるんですから、もし彼女がやめさせられるのなら、一萬法の契約

金を拂つて貰ひませう。さうですよ！ 一萬法を貰つてから、フォリイ・ドラマチックへ参りませう、と言つた。ボルドナアヴは驚いてしまつたが、ミニオンは伯爵から眼を離さずに、靜かに答へを待つてゐた。

「それぢや、すべてが解決した。」とミユフアがほつとして呟いた。「話は片づいたことになるでせう。」

「いゝえいけません。飛んでもない！ そんな馬鹿な話があるのですか！」とボルドナアヴが、事業家らしい本能

から驚いて叫んだ。「ロイズに暇をやるのに、一萬法も出さうものなら、私が世間から笑はれますよ！」

しかし伯爵は、幾度も首肯して見せて、彼に承知するやうに命じた。彼はまだ躊躇してゐた。そしてたうとう呟きながら、自分の懐から出るのでもない一萬法を、惜しさうにして、荒々しく言ひ足した。

「兎に角、それでいゝよ。だからもう君とはきつぱり手を切つたぜ。」

十五分ばかり前から、それをフォンタンが庭で聞いてゐた。彼は氣にかゝつて仕方がないので、そこへ降りてゐたのだつた。彼は事情が分ると、階段を上つて行つて、嬉しさうにロイズに知らした。全くだよ！ みんなが勝手に亂暴なことをしてお前さんを滅茶々にしたんだ、と言つた。

ロイズは小道具部屋に駆けつけた。皆が黙つてゐた。彼女は四人の顔を見た。ミユフアは俯向き、フォシユリイは、彼女の物問ひたげな眼付に對する答へとして、絶望したやうに肩を聳やかした。ミニオンはボルドナアヴと、契約に就いて言ひ争つてゐた。

「どうしたの？」と彼女は急ぎ込んで訊ねた。

「何でもないよ。」と夫が答へた。「ボルドナアヴさんが、一萬法でお前の役を買ひ戻してくれるんだ。」

彼女は體を顫はせ、眞蒼になつて、小さな兩手を握り締



めた。何時もは従順に、すべての折衝を、支配人との契約も情夫との契約も、すっかり夫に任せてゐたが、今度は彼を睨みつけて、出来るだけ反抗した。彼女はたゞ次のやうに叫んだだけだったが、それは彼の顔を鞭打つやうに打つた。「まあ！ 何ですつて！ あなたもあんまり腑甲斐なしなのね！」

さう言つて彼女は走り去つた。呆氣に取られてゐたミニオンは、どうしたのだらう？ 氣でも狂つたのかしら？と思つて、彼女の後を追つた。彼は低い聲で、一方から一萬法入るし、一方からは一萬五千法入るから、結局二萬五千法になる譯だと彼女に説明した。立派な取引だよ！ どんなにしたつて、ミラファと手を切らなければならぬのだから、彼から最後にこれだけの金が引き出せたのは大成功だ、とも言つた。しかしローズは、腹を立て、答へなかつた。だがミニオンは、ローズの女らしく口惜しがるので、もう相手にしなかつた。彼は、ミラファとフォシュリイを連れて舞臺へ歸つて来たポルドナアヴに話し掛けた。

「明日の朝署名をしますから、金を持って来て下さい。」丁度そこへ、ラポルデットに委細を聞いたナナが、得意になつて下りて来た。彼女は際立つて立派な様子をし、上流婦人のやうに取り澄ましてゐた。そしてもしも自分が望みさへすれば、誰一人として自分の相手にはなれないのだ、

といふところを見せつけるので、周囲の者は呆氣にとられた。しかし彼女は、どうしても危ない目に會はなければならなかつた。彼女を見つけたローズが、彼女の傍へ飛んで来て、咽喉を詰らせて口籠つた。

「お前さんとはまたお目にかゝりませうね……。私達だけでは是非話をつけませう。覚えてゐらっしゃい！」

不意打ちを喰つて夢中になつたナナは、両手を腰に置いてローズを淫賣扱ひにしようとした。が、ちつと自分を抑へて、金切り聲で腹を立てながらも、蜜柑の皮でも踏めば轉がりさうな侯爵夫人のやうに取り澄ました。

「何だつて？ 何だつて？」と彼女が言つた。「あんたは氣でも狂つたの！」

そして、彼女がまだそんな様子が続けてゐると、ローズはさつさとミニオンを連れて出て行つてしまつた。ミニオンは彼女の心を知らなかつた。クラリスはポルドナアヴからジュラルディヌの役を振り當てられて喜んでゐた。フォシュリイは鬱ぎ込んで、激しく劇場と手を切る氣にもなれずに歩き廻つてゐた。するとナナが手をとつて、傍へ引き寄せながら、私がそんなにひどい女でせうか、と訊ねた。あなたの脚本を食べてしまはうとはしませんよ、と言つて彼は笑はせた。そして、ミラファ夫婦に對するあなたの位置を考へて見れば、私に楯つくのは惻かなやり方ぢやありませんか、

せんよ、などと言ひ聞かせた。それとも私の覺えが悪いのなら、後見を使へばいゝぢやないの。入りをとつて見せるわ。あなたの考へ方は間違つてゐるわ。どんなに私がうまく演るか、まあ見て、御覽なさいと言つた。そこで作者は公爵夫人の役を少し直して、ブリュリエールにも臺詞を澤山與へることにした。ブリュリエールは夢中になつて喜んでゐた。ナナが周囲の者に齎したこの喜びの中で、フォンタン一人が冷たい様子を示してゐた。黄色い燈火の中に突

つ立つて、その牡山羊のやうな横顔の、角ばつた輪廓をくつきり浮ばせて、寒鉢な態度を見せつけてゐた。ナナは靜かに近づいて行つて、彼に握手した。

「どう、御機嫌いム？」

「うん、悪くはないよ。お前は？」

「ありがたう、非常にいゝわ。」

それだけの會話であつた。二人はまるで、昨夜劇場の出口で別れたやうに見えた。俳優達は待つてゐたが、ポルドナアヴは三幕目の稽古をしないと云つた。それ見ろ、といふやうに、老ボスタは眩きながら出て行つた。俳優達は皆、用もないのに引き留められて、すっかり午後を潰されたのだつた。皆は出て行つた。戶外の歩道の上で、ぱつと明るい光に何も見えなくなつて、三時間も客の底で喧嘩をしたり、絶えず神経を張りつめてゐた人らしく、皆ぼんやりし

て眼を瞬かした。伯爵は全身を疲らし、頭を空にし、ナナを伴つて馬車に入つた。ラポルデットはフォシュリイを慰めながら、一緒に歩いて行つた。

一と月経つた後の、「公爵夫人」の初演は、ナナによつて大失敗だつた。彼女は眼も當てられないほど拙かつた。自分では高級劇をやつてゐる積りであるが、見物は全く吹き出してしまつた。誰も口笛を吹かなかつた。それほど詰らないものだつた。何時も翼席の一つから、ローズ・ミニオンが冷笑を浮べて、そんな場内の人氣を煽つてその競争者が登場するのを迎へた。それは最初の復讐だつた。或る夜ナナは、ミラファと二人切りになると、非常に悲しさに、腹を立て、彼に告げたのだつた。

「まあ！ なんて腹の黒い女なんぞでせう！ あんなにするのも、みんな嫉妬からだわ！ それに、私の方で、馬鹿にしてゐるとは知らないのかしら！ 今では私、あんな連中に何の用事があるでせう！……ねえ！ 百利だつて賭けるわ、私を笑つた奴等に、きつと、私の前の土を蕪めさせてやるわ！……さうよ、私はこの巴里では、貴婦人がどんなものであるか教へてやるわ！」

## 十

その頃、ナナはすっかり粹な女になつて、愚かな淫らな



男共から捲き上げた金で、まるで侯爵夫人のやうな生活を續けてゐた。彼女は、全く突然に、しかも鮮やかに出世して、氣取つた社交界の有名な人々の仲間入りをし、晝日中でも金にあかせて我儘勝手な眞似をしたり、美貌を用ゐて目に餘るやうな狂態を、演じたりしてゐた。かうして彼女は、忽ちの間に、上流の人々の間にも羽振りを利用せるやうになつた。その肖像は飾り窓に陳列され、その名は新聞に書き立てられるといつた有様だつた。彼女が馬車で並樹街を通ると、人々はまるで女王様のお通りを見るときのやうな氣持で、振り返つて見ては彼女の名を言ふのだつた。そんなとき、風に翻へる衣裳に包まれ、落着いてゆつたりと坐り、金髪の小さな縮れ毛を額に垂らし、その下には眼の縁を青く隈どり、唇には赤く紅をさしたナナは、快活な様子で微笑み返すのであつた。そして不思議なことには、舞臺ではあんなに拙く、良家の婦女に扮するとあれほど滑稽に見えるこの大柄なナナが、街の上では何の苦心もせずに、魅力のある役を立派にやつてのけてゐた。蛇のやうななよやかさ、無難作につけた平常着、垢抜けのした美しさ、長種の牝猫のやうな神經質な上品さを持ち、しかもすぐれた反抗的な背徳の貴族である彼女は、素晴らしい勢力を持つた女として、この巴里の街を歩いてゐた。彼女が流行を作ると、上流の婦人達は争つてそれを眞似た。

ナナの住んでゐる家は、カルディネ街の町角にあたるウィリエ街にあつた。そこは立派な邸宅の立ち並んでゐる一廓で、もう少しで昔のモンソオの荒蕪地の眞中へ至るといふところだつた。その家は、或る若い美術家が、初めての成功に酔つて建てたものだが、暫らく住まぬ間に賣らなければならなくなつたもので、一見、宮殿のやうなルネッサンス式の建築だつた。内部の間どりは頗る凝つたもので、しかも家の恰好は幾らか工夫を凝らした近代的な安易な氣持を現はしてゐた。ミラファ伯爵は、すつかり家具の備はつた、澤山の裝飾物や、非常に美しい東洋風な壁覆ひや、古い戸棚や、ルキ十三世時代の大きな肘掛椅子などのあるこの邸を買ひ取つた。そしてナナは、藝術的な家具のある、極めて上品な選擇の行き届いた、しかも色々な時代のものが入り交つたこの家に落着いたのである。しかし、この家の眞中にあるアトリエは、少しも彼女の役に立たなかつたので、ナナは家中の部屋をみな模様變へして、一階は温室や大客間や食堂に當て、二階には自分の居間や化粧室を作り、その傍に小さな客間を拵らへた。また彼女は色々な意見を述べて、建築家を驚かした。巴里の街の一娼婦の癖に、本能的にあらゆる優美な感情を持つてゐて、贅澤な趣味にはすぐに眼が肥えた。かうして彼女は、この屋敷を大して損はないばかりか、豪奢な家具を更に立派にしたほどで

あつた。たゞ往來の飾り窓の前で夢を見てゐた昔の造花女工を思ひ出させるやうな、極めて下らないものや、また馬鹿げてけばくしいものを附け加へたところもあるにはあつたのだが。

庭の大きな庇の下にある扉口の踏段には敷物が敷いてあつて、玄關を入ると直ぐ、厚い敷物に織り込めた葦の匂ひに充ちた生温かい空氣に觸れるのだつた。黄色や薔薇色や薄桃色などの硝子の嵌つた窓が、廣い階段を照らしてゐた。階下では、木彫の黒人が來客の名刺を盛り上げた銀の盆を捧げ、白い大理石で造つた胸も露はな四人の女が燭臺を掲げてゐた。また、花を盛つた青銅や七寶燒の花瓶、古い波斯の掛布をかぶせた長椅子、古代の綴織で飾つた肘掛椅子などが、玄關から階段の踊り場にかけて備へつけられ、それが二階の控間のやうになつてゐて、何時も紳士達の外套や帽子が並んでゐた。そこでは絨毯が足音を消し、氣持が静まつて來て、まるで、敬虔な感情に充ちた寺院の中にでも入つたやうな氣がするのであつた。扉のしまつてゐる背後の沈黙は、何かの祕密を籠めてゐるかとも思はれた。

ナナは、大饗宴の夜、テュイルリイ宮殿の人々や外國人を招待するときのほか、華麗なルキ十六世式の裝飾を施した大廣間は使はなかつた。平生は、食事のときに階下の食堂

に下りて來るだけであつた。そしてたつた一人で、ゴブラ織を掛け、大きな戸棚を置き、古い伊太利製の陶器や昔の素晴らしい銀器を飾つたこの天井の高い食堂で、ぼんやりしながら朝食をとつてゐることがよくあつた。が、それでも直ぐに二階へ上つて、何時もその居間と化粧室と客間の三つの部屋で暮してゐた。今までも二度ばかり、彼女は居間を作り變へた。一度は紫色の縞子で飾り、二度目は、青い絹地の上にレースを用ゐたのであつた。しかしそれでも満足せずに、つまらないと思つてゐた。そして氣に入るやうなものはないながらも、常にそれを求めてゐた。ソファのやうな低い革張りの寢臺には、二萬法もするヴェニス製のレースが掛けてあつた。家具はみんな、白や青の塗料を施し、それに銀線が鑲めてあつた。こゝにもかしこにも、白熊の皮が置いてあり、その数が非常に多いので、絨毯さへ隠れる位だつた。それはナナの氣紛れや酔狂で、靴下を脱ぐときに床の上に坐る習慣を止められなかつたからである。居間の傍の小さな客間には、すぐれた美術品が面白く陳べ立てられてゐた。金線の入つた、襷めた薔薇色や薄桃色の絹壁覆ひに對して、あらゆる國々のあらゆる恰好をした裝飾品、伊太利の美術品、西班牙や葡萄牙の手匣、支那燒の首振人形、極めて精巧な日本の屏風、それから陶器や青銅や刺繡や目の細かい綴織などが、目立つ



てゐた。また一方では、寢臺位ゐの大きさの肘掛椅子や、寢床の間のやうに深い長椅子などが、そこに安逸な生活と、妓樓のやうな眠たげな様子を見せてゐるのだつた。部屋全體は、青や赤に彩られた古い黄金のやうな色調を現はしてゐて、肉感的な多くの椅子を除けば、娼婦の部屋らしいものは何もなくあつた。たゞ二つの素焼の小さな置物——一つは肌着だけになつて蚤をとつてゐる女の姿であり、もう一つはすつかり裸になつて足を空にあげ、逆立で歩いてゐるものだつた——が、突拍子もない馬鹿々々しい調子で、この部屋の空気を汚すに十分だつた。また、殆んど何時も開け放しにしてゐる扉からは、化粧室が見えてゐた。そこには大理石と鏡が張りつめてあつて、白い浴槽がぼんやりと見え、銀製の壺や洗面器や、硝子又は象牙製の裝飾品が備へられてゐた。またそこにはカーテンが一つ下りてゐるの、白い薄明りが漂ひ、葦の匂ひに温められて眠つてゐるかのやうであつた。ナナの好きなこの強い匂ひは、屋敷全體に浸み込んで庭まで及んでゐた。

家事を處理してゆくことは大變な仕事だつた。が、ナナには、彼女のために骨身惜しまず働いてくれるゾエといふ者がゐた。この女は、數ヶ月以前から、急に召し抱へられることを見越して、安心してその日を静かに待つてゐたのであつた。そこで、ゾエはすつかり喜んで、この屋敷の主

人になつたつもりで、一人で控へ目勝ちに家政を切り盛りし、出来る限り、心から忠實にナナのために盡した。しかしそれでも女中一人では不十分だつた。料理係、馭者、門番、炊事女などが一人づゝ必要だつた。また厩舎も作りにかゝらなければならなかつた。そのためにラポルゲットは、伯爵の厭がる仕事を引きうけて、しきりに腕をふるつてゐた。彼は、馬を選んでやつたり、馬車屋へ訪ねて行つたり、ナナが買物をするのを助けてやつたりした。彼女は、よく彼と腕を組んで商人達のところへ出入りした。また彼は、召使達を連れて來た。前にコルブルウス公爵家にゐたことのある元氣な大男の馭者シャルルや、髪を縮らせて愛嬌のいゝ小男の料理係ジュリアンや、それに、臺所働きのするダイクトリイヌと、門番にもなり外出のときのお供にもなるフランソアとの夫婦者、などであつた。亭主のフランソアは、短い半ズボンや、顔には化粧を施し、背地に金筋の入つたナナからもらつた制服を着て、支關で客を迎へてゐた。それは作法にかなつた、立派なきちんとした服装だつた。

二ヶ月目から、家は整つて立派になつた。費用は三十萬法以上もかゝつたのである。厩舎には八頭の馬、馬車部屋には五臺の馬車が備へられ、その中の金の飾りをした四輪馬車の如きは、忽ち巴里中の評判になつた。ナナはこのやう

な豪奢な家に納つて、静かな暮しをしてゐた。彼女は『公爵夫人』の第三回目の上演以來、伯爵が金を出してやつたにも拘らず、破産しかけて焦つてゐるポルドナアヴを捨て、もう劇場へは出なかつた。しかし彼女にも苦い失敗の記憶が残つてゐた。フオンタンに懲りた上に、もうどの男も残らず汚ないものと考へるやうになつてゐた。そして今は、心の中で、もう愛などに迷ふまいと強く考へてゐた。しかし彼女は小鳥のやうな氣持で、決して復讐をしようなどゝは思つてゐなかつた。腹を立てゝゐるときは別として、彼女に残つてゐるものは、相變らずの激しい金使ひや、金を出してくれる男に對する例の侮蔑や、男から男へと移つてゆく絶え間ない氣紛れや、情夫達の落ちぶれて行くのを傲然と見てゐる態度などであつた。

初めからナナは伯爵をうまく操つてゐた。彼女は二人の關係をはつきりと決めてかゝつた。彼は、時々の贈物は別として毎月一萬二千法を出し、その代り彼女には完全に貞淑を守つてくれといふことだけを要求してゐた。彼女は忠實にそれを守ることを誓つた。だがやがて彼女は、一家の女主人に對する敬意と自由、つまり彼女の意志に對して絶對に尊敬を拂ふことを要求した。そして、彼女は毎日友達の家へ引き入れることを許され、伯爵は決つた時間だけに來ることになつた。かうして、彼は何事につけてもナナを

盲目的に信用しなければならなくなつた。そして、もし彼が嫉妬を起して、彼女を疑ふやうなことをすれば、ナナは直ぐ別れるなどゝ脅かして威張つたり、または可愛いルキの頭にかけて誓つたりした。伯爵はそれで満足しなければならなかつた。尊敬の意のないところに、愛情はないものだ。かうして一ヶ月の終りには、ミヨファはナナを尊敬するやうになつてゐた。

けれども彼女は更にそれ以上のものを望んで手に入れることが出來た。間もなく彼女は立派な女として、彼を左右するやうになつた。伯爵が陰氣な顔をして訪ねて來れば、何もかも言ふことを聞いてから、元氣をつけ慰めてやつた。そのうちに、だん／＼彼の家庭内で起ること、つまり夫人のことや、娘のことや、また氣持や金錢に關するいろ／＼な心配事の世話までするやうになつた。その彼女の態度は、道理のある、正しい、眞心の籠つたものであつた。ただ一度、彼女は激情に捉はれたことがあつた。それは伯爵が、ダグネは屹度自分の娘のエステルに結婚を申し込むだらうと打明けた時の事であつた。伯爵とナナとの關係が明らかになると、ダグネは二人を引き離すの上策と思つて、ナナを惡黨扱ひにして、自分の將來の舅をそんな女の手から遁れさせようとした。それを聞くと、彼女は、言葉巧みにこの昔の情夫を罵つた。あの男こそ悪い女にひつか



かつて財産を費ひ果した浮氣者で、道徳の觀念といふものが少しもなく、自分には金がないものだから、他人の金を捲き上げてほんの時々花束を送つたり食事を奢つたりしてゐたのだ、と言つた。そして伯爵が彼のために辯解しようとするので、ナナは露骨に、昔自分とダグネが關係のあつたことまでさらけ出して、色々厭なことを詳しく述べ立てた。すると伯爵は顔を眞蒼にして、もうダグネのことを言はうとはしなかつた。これで人を有難がつて買ひかぶるのに懲りたらしかつた。

この屋敷はまだ家具の設備も十分ではなかつた。或る晩ナナは、ミッファに貞節を盡すといふ極めて堅い誓ひを立てた後に、クサヴィエド・ワンドゥル伯爵とも交際したいと言ひ出した。ワンドゥルは、この二週間ほど前から、訪ねて來たり花束を贈つたりして、ナナに深く心を寄せてゐたのだつた。彼女は愛してゐるからではなくて、寧ろ自分が自由であるといふことを見せるために、彼の言葉にも従つてゐた。しかしその翌日、ミッファには言ひたくないと思つてゐた勘定を、ワンドゥルが支拂つてくれたので、彼に對して一層強く心を動かすやうになつた。彼女は、ワンドゥルから毎月八千法乃至一萬法は十分にとれるだらう、それだけあれば小使として随分役に立つのだからと思つてゐた。彼はその頃、はげしい熱に浮かされて、財産を

食ひ盡してしまひかけてゐた。既に飼馬とリュシイのために小作地を三つまで失つてしまひ、今度はナナのために、ミアンの附近に唯一つ残つてゐた邸宅を一呑みにされようとしかけてゐたのだつた。彼は滅びて行く者に有り勝ちなはげしい欲望に驅られて、祖先の一人がフキリップ・オウギェスト時代に建てた古塔の殘骸に至るまで、あらゆる財産を急いで使ひ果たさうとしてゐた。そして、巴里中の人間が手に入れようと望んでゐるこの女のために、彼の家の紋のブザンソン金貨までも残らず使つてもいゝとさへ思つてゐた。彼もナナの言ひ出した條件を承諾した。即ち完全に自由を許し、一定の日にだけ訪問し、強ひて彼女に誓ひを立てさせたりするやうな無茶なことはしない、といふのである。ミッファは何も怪しまなかつた。だがワンドゥルの事は底の底までもよく知り抜いてゐて、しかも少しも外には現はさないで知らない振りをして、例の元氣のいゝ懷疑的な上品な微笑を浮べながら、自分の訪ねてゆく日がきまつてゐて、その上巴里の人が自分を忘れないうちは、不可能なことまで要求する事はしない、といつた顔をしてゐた。

その頃から、ナナは自分の家を本當に立派なものにした。一家の人員も、厩舎の係から臺所働き、ナナの居間の女中まで、すつかり整つた。ゾエが何もかも切りまはして、思ひもかけないやうな込み入つた事情が起つても、うまく切り行き、階下に置いておくのよ。私も下りて行くやうにするから。」

り抜けた。この家は劇場のやうに道具立てが出来、また大きな行政機關のやうに秩序が立つてゐた。かうして初めの數ヶ月は、非常に具合よく運んで、何の不和もなく、調和を破ることもなかつた。たゞ時々、ナナが輕率なことや無分別や我儘なことをするので、ゾエが氣持を悪くすることはあつた。こんなことがあつたので、ゾエもだん／＼だらしがなくなつて來たばかりでなく、ナナが男とふざけてゐるやうな時には、何か餘得があるものだといふことに氣づいてゐた。その頃ナナの家へ來る贈物は莫大なものだったので、彼女はその混雜にまぎれてその中からルイ金貨を誤魔化してゐたのである。

或る朝、まだミッファが部屋にゐるときに、ナナの着更へをしてゐる化粧室へ、體中をぶる／＼顫はせてゐる一人の男を、ゾエが案内して來た。

「まあ、坊や」とナナは吃驚して言つた。如何にもそれはジョルジュだつた。彼はナナが肌着のままで、露き出しにした肩へ美しい金髪を垂らしてゐるのを見て、その頸に飛びつき、はげしく抱きしめて體中に接吻した。彼女は驚いて身を跳き、聲をつまらせて口籠るやうに言つた。

「およしつたら、あの人があちらにゐるんだから！ 馬鹿ね……それに、ゾエ、お前も馬鹿だわ。あちらへ連れてお

ゾエは彼を押し出して行かなければならなかつた。ナナはやつと階下へ下りて食堂で彼等と一緒にになると、二人に叱言を言つた。ゾエは唇を尖らせ、膨れ面をして、奥様を喜ばして上げようと思つたのだと言ひながら部屋を出て行つた。ジョルジュはナナに會へたので幸福さうに、眼には一ぱい涙を湛へながら彼女を見つめてゐた。もう今では、彼の犯した罪も許され、母親は彼にも分別があると信じて、フォンデットから去ることを許したのであつた。それで、停車場へ降りると直ぐ、一刻も早く最愛の人を抱きたいと思つて、馬車で來たのである、と言つた。彼は、ミニョットの家で素足のまゝ彼女を待つてゐたときのやうに、今後もずつと彼女と一緒に暮したいと言つた。かう話をしながらも、長い間慘めにも引き離されてゐた爲め、彼女の體に觸れたくて堪らないので、彼は自分の指を彼女の方へ差し出してゐた。彼はナナの両手をとつて、化粧着の廣い袖の中から、肩のところまで撫で、行つた。

「あなたは今でもこの坊やを愛してゐてくれる？」と彼は子供のやうな聲で訊ねた。

「それや愛してゐるわ」と急に彼の手を振りほどいて、彼女が言つた。「でもあんたは、前以て何とも言はないでやつ



て来るんだもの……ねえ、私は自由な體ぢやないのよ。も少しものを考へてくれなきや困るわ。」

長い間の望みがやうやくかなつたので、夢中になつて馬車から下りて来たジョルジュは、この家の様子がどんな具合かといふことさへまだ知らなかつた。だがそのとき気が付いて見ると、自分のまはりはずつかり變つてゐた。彼は、高い天井に裝飾を施し、ゴブラン織を掛け、銀の器で輝くやうな戸棚のある、この豪華な食堂をじろく見まはした。

「え。」と彼は悲しげに答へた。

そしてナナは彼に、決して午前中に来てはならないと言ひ聞かせた。来たいならば、午後の四時から六時の間に來るが、その時分ならば家へ入れてあげるから、と言ふのだつた。彼は問ひたげな、訴へるやうな顔付で、それでも訊き質さうとはせずに彼女を見てゐるので、今度はナナが優しい態度になつて彼の額に接吻してやつた。

「おとなしくしてゐらっしゃいね、私だつて出来るだけのこととするわ。」と彼女は囁くやうに言つた。

しかしこの言葉はもうジョルジュに眞心を告げてゐるものではなかつた。彼女はジョルジュを、非常に優しい少年だと思ひ、友達にしようとは考へたが、それ以上の氣持はなかつた。しかし、毎日四時に訪ねて來る彼を見ると、あまり

可哀さうなので、彼女も我を折つて自分の部屋の椅子に掛けさせ、絶えず彼女の美しい體を少しづつ味つてゐる彼を許して置いた。彼はもうナナの家から離れようとはせず、小犬のピジューと同じやうに家族の一員になつて、ともに主人の着物の裾に纏ひつき、他の情夫が來てゐるときでも、ほんの僅かにしろ、ナナの體に觸つてゐた。彼女が一人で退屈してゐるときには、思ひ設けぬ甘い言葉を受けたり、抱いてもらつたりして喜んでゐた。

ユーゴン夫人は、自分の息子がまたこの悪い女に引つかかつたことを知つたと見え、巴里へ駈けつけ、當時ワッセンの兵營にゐた兄のフキリップ中尉の助けをかりに行つた。この兄から逃げ隠れしてゐたジョルジュは、どんなにひどい目に遇はされるかと思つて、ひどく絶望してゐた。彼は何事も隠してゐることが出来ないで、優しい氣性ではらくしながら、何時もナナに向つて話すこといへば、どんなことでもやり兼ねない頑固な亂暴者の兄のことばかりになつてしまつた。

「分るでせう、お母さんは自分であなたの家へ來やしません。」と彼は説明するのだつた。「その代りに兄さんを寄越すんです……。屹度、お母さんはフキリップに僕を捜させるんですよ。」

初めてナナは腹を立てた。そして無愛想に言つた。

「勝手に來ればいぢやないの！ 中尉だらうと何だらうと、あなたの代りにフランソアがその兄さんを追ひ返してくれるわ、あの人ならしつかりやつてくれるよ！」

だがジョルジュが相變らず兄のことをばかり話したので、彼女もたうとうフキリップのことを氣にするやうになつた。一週間ばかり後に彼女は、その兄のことは何から何まですつかり覚えてしまつた。非常に背が高く、力が強く、快活で、少しは亂暴なところもあり、その上體の細々した點、例へば手は毛深く、肩に痣があることまで知つた。それで或る日、この男のことをいろく考へ、來れば扉口から投げ飛ばしてやるのと思ひながら、叫ぶやうにかう言つた。

「坊や、あなたの兄さんは來ないのかい……この様子ぢや、卑怯者なんだね！」

翌日、ジョルジュとナナが二人きりでゐるところへ、フランソアが入つて來て、フキリップ・ユーゴン中尉がお會ひしたいとのことと、と告げた。ジョルジュは眞蒼になつて騒いだ。

「多分そんなことだらうと思つてゐた。お母さんが今朝話してゐたから。」

そして彼はナナに、今は會へないと言つてくれと頼んだ。しかしそのとき彼女はもうすつかり顔を熱らせて立ち上つ

て言つた。

「まあ、どうして？ そんなことをすれば私が恐がつてゐると思はれるぢやないの。いゝのよ！ なんでもないわ……ね、フランソア、十五分ばかり客間で待たせて置いて、それからこゝへ連れて來ておくれ。」

彼女は腰を下さずに、暖爐の鏡と伊太利製の手匣の上にかけてあるヴェニスヴェニスの姿見の間とを、そはく歩きまはつた。そしてその前へ行く毎に、笑顔を作りながら、ちらと鏡の中を見た。一方ジョルジュは、今に起らうとしてゐる光景を想像して、力もなく安樂椅子の上に顛へてゐた。彼女は絶えず歩きつづけながら、途切れく言つた。

「十五分間ほど待たせて置けば、兄さんの氣持も靜まるわ……。そして卑しい女の家へでも來た積りであるのなら、きつと客間を見て吃驚してしまふわ……。さうよ、さうよ、何もかもよく見て下さいよ。贗物ぢやないんだからね。そして女を尊敬しなければならぬことにも氣がつくわ。まあ、男達には尊敬させるに限るんだよ……。どう？ もう十五分経つて？ まだだわね、やつと十分経つたばかりね。まあ、長いのね。」

彼女はちつとしてゐなかつた。十五分経つと、彼女はジョルジュに、召使達に見られては不體裁だから、扉口で立ち聞きしないといふことを堅く約束させた上で、部屋から出て



行かせた。彼は部屋から去るときに、息のつまつたやうな聲で、やつとこれだけ言った。

「ねえ、あれは僕の兄さんだから……」

「心配しなくてもいいことよ。」と彼女は威厳のある態度で言った。「あの人が禮儀正しくすれば、私だつてちやんと丁寧にするわ。」

フランソアは、フロックコートを着たフキリップ・ユーゴンを案内して来た。初めジョルジュは、ナナの命令に従つて爪先立ちで部屋を出たのだが、二人の聲を聞くと躊躇つて不安さうに、足の力も失くして立ち止つてしまつた。彼は話の結末がどんなになるか、兄が彼女を撲つたりしやまいか、また自分とナナとの間を永久に裂くやうな恐ろしいことが起りはしないだらうか、など、想像した。それで、どうしても扉口に耳を當て、立ち聞きしないではゐられなかつた。扉が厚くて聲が十分届かないので、はつきりとは聞えなかつたが、フキリップの口から出る言葉が時々彼の耳を打つた。それはしつかりした口調で、子供だとか、家族だとか、名譽だとか言つてゐた。彼は自分の愛人がどんなことを答へるか心配して、胸を躍らせながら、はら／＼してゐたが、何も聞きとれなかつた。確かに、彼女は「何ですか、馬鹿な！」とか、「放つておいて下さい、これは私の家ですから！」とか言ふであらうと思つてゐたが、どん

な言葉も、溜息一つ聞えて來なかつた。その部屋の中では、ナナが死んだやうに静かにしてゐるのだつた。だが、やがて兄も言葉の調子を柔らげた。彼には何のことやら譯が分らなかつたが、そのとき、變な聲が聞えたので、彼はすつかり驚いてしまつた。それはナナが泣いてゐるのだつた。その瞬間、彼は反抗的な感情に捉はれて、今にも飛び込んで、フキリップに飛びついてやりたいと思つたが、丁度そのときゾエがその部屋へ入つて來たので、彼は不意に見られて恥かしさうに扉口から離れた。

ゾエは静かに、筆筒の中へ着物をしまつてゐた。その間彼は黙つてちつとしたまゝ硝子に額を押しつけ、心をやきもきさせながら心配してゐた。暫らく黙つてゐた後に、ゾエが訊ねた。

「今奥様と話してゐらつしやるのは、あなたのお兄様ですか？」

「さう。」と彼は咽喉にひつか／＼つたやうな聲で答へた。

また二人は黙つてしまつた。

「それで御心配なんですか？ ジョルジュさん。」

「さう。」と相變らず苦しい辛い思ひをしながら彼は繰り返した。

ゾエは急がうともせず、レースを畳みながらゆつくりと言つた。

「心配なさらなくてもいいんですよ……。奥様がうまくして下さいますから。」

それだけ話ただけで、二人はもう何も言はなかつた。しかしゾエは部屋を出て行かうとはしなかつた。そしてジョルジュが苦しい思ひと疑惑とで眞蒼になりながら、益々はげしく興奮してゐるのに眼をくれようともせず、その上十五分ばかりもぐ／＼してゐた。彼は客間の方をちらと横目で見た。こんなに長い間、二人は一體何をしてゐるのだらう？ 恐らくナナは今でも泣きつゞけてゐるのだらう。きつと亂暴者の兄が彼女を撲つたのだらう。そして、やつとゾエが部屋から出て行つてしまふと、彼は扉の傍へ駆け寄つて、再び耳を當て、聞いた。彼はすつかり驚いてしまつて、何が何だか分らなくなつた。といふのは、快活な高い聲や、囁くやうな優しい言葉や、ナナの操られた時のやうな抑へた笑ひ聲などが聞えて來たからであつた。そして間もなく、ナナはフキリップを階段の方へ送つて行つて、そこで丁寧な親しげな言葉を交してゐた。

ジョルジュが客間へ飛び込むと、ナナは鏡の前に立つて、自分の姿を見つめてゐた。

「どうでした？」と驚いて彼は訊ねた。

「何がどうでしたなの？」と振り向かうともせず彼女が言つた。

それから、ぞんざいな調子で、

「あんた、何を言つてゐるの？ あんたの兄さんてずるぶんおとなしい方ね！」

「ぢや話はずまくついたんですか？」

「勿論よ、うまく行つたわ……。まあ！ どうしたつて言ふの？ 私達がとつ組み合ひでもすると思つてゐたんでせう。」

ジョルジュにはやはり何のことだか譯が分らなかつた。彼は口籠るやうに言つた。

「確かに聞えたやうに思ふんだけど……あなたは泣いてやしませんでしたか？」

「泣いてた、私が！」彼をぢつと見つめながら、彼女が叫んだ。「あんたは夢でも見てゐたんでせう！ どうして私が泣いたなんて思ふの？」

ジョルジュは、自分が彼女の命令を聞かずに、扉の影で盗み聞きをしたといふので、叱られはしまいかと思つておどおどしてゐた。彼女がむつとした様子をしたので、彼は狡く機嫌を取るやうな調子で、自分の知りたと思つてゐることを訊ねた。

「それで、兄さんは……？」

「あんたの兄さんは、私がどんな人間だが直ぐ分つて下さつたの……。もし私が淫賢かなんかだつたら、兄さんが仲



へ入つてわざ／＼いらつしやるのも尤もね、何しろあんなの年も若いんだし、お家の名譽もあることだから。さうよ！私、あの方の氣持がよく分るわ……。でもあの方は一目で何もかもよく見抜いて、社交界の紳士のやうにいゝ態度をして下すつたわ……。だから、もうあんたは心配しなくてもいゝのよ、もう片がついたんだから。あの方がうまくお母さんを宥めて下さるわ。」

そして笑ひながら附け加へた。

「それに兄さんもこの家へいらつしやるのよ……。私がお招びしといたから、いづれまたいらつしやるわ。」

「何ですつて、また来るんですつて！」 ジョルジュは顔の色を變へて言つた。

彼はその上何も言はなかつた。フキリップの話はもう出なかつた。それからナナが外出するために着更へをしてゐると、彼は大きな悲しげな眼で彼女を見た。彼はナナと別れる位なら死んだ方がましだと思つてゐたので、うまく解決したことを喜んでゐた。しかし心の底には自分でもよく分らないし、また人に話さうとも思はないやうな、漠然とした悲しみ、深い苦しみがあつた。彼は兄のフキリップが、どんなにして母親を安心させたかを知りなかつた。兎に角三日経つてから、母親は安心してフォンデットへ歸つて行つた。その夜、ナナの家では、フランソアが兄の中尉

の來たことを通じたので、ジョルジュは顔へ上つたが、フキリップは快活に冗談を言ひながら、ジョルジュを子供扱ひにし、彼が家から抜けて遊びに来てゐるのを大眼に見てやつて、別に氣にもとめてゐなかつた。けれども、ジョルジュの方では、身じろぎもせず、少女のやうに顔を赧らめながら、言葉少なに、びく／＼してゐた。彼は十歳も年の違ふフキリップと親しく暮したことは、これまでにもなかつた。彼は、兄を父親と同じやうに恐れて、女の出來たことなどはひた隠しに隠してゐた。だから、健康な兄がナナの傍でも自由にして、大聲で笑つたり、樂な氣持で冗談を言つたりしてゐるのを見て、ぎ／＼恥かしい思ひがした。しかし、兄は間もなく毎日來るやうになつたので、ジョルジュも終ひには少しづつ慣れて來た。ナナは晴れやかな様子をしてゐた。それは艶つばい生活の中に於ける移轉の後始末を付ける賑はしさであり、男達や家具で一杯になつてゐる家への素晴らしい轉宅の喜びであつた。

或る日の午後、ユーゴンの兄弟が揃つてナナの家に向かふとき、ミユファ伯爵が約束の時間以外に訪れて來た。だがゾエが、奥様には今お客様がありますと答へたので、彼は強ひて入らうともせず、分別のある譯の分つた男のやうにして歸つて行つた。夕方になつて、また彼がやつて來たとき、ナナは侮辱された女のやうな、冷やかな怒りの色を

現はして彼を迎へた。

「ねえ、あなた、」と彼女は言つた。「私、あなたから侮辱されるやうなことをした覚えはありませんわ……。ねえ、私がお家にゐるときには、他のお客さんと同じやうに入つて來て頂きたいわ。」

伯爵はぼんやりしてゐた。

「だけど、それや……」と彼は説明しようと思つた。

「多分私のところにお客があつたからだと仰しやるんですけど、それやその通りだわ、男の人が來てゐましたわ。だけどそれだからつて、私がお客さんとなんかしてゐたと思つてゐらつしやるの？……男つてもはよくそんな情夫ぶつたことをして、女との關係を見せびらかすものよ、でも私はそんなに見せびらかされたくないわ！」

彼は色々と骨折つて、やつと彼女の宥しを得た。併し心の底では、得意だつた。ナナは、かういふいきさつによつて、伯爵を従順にさせ征服したのであつた。ずつと前から、彼女は伯爵に、ジョルジュのことは納得させ、まだほんの子供で、自分の慰めにもなるから、と言つてゐた。また彼女は彼との夕食のときにフキリップも同席させたが、伯爵は非常に機嫌よくしてゐた。そして食事がすむと、彼を脇へ連れて行つて、近頃お母さんは如何ですか、など訊いた。その頃から、ユーゴン兄弟とグンドゥルとミユファとは、

公然とこの家へ出入りするやうになつて、彼等は互に親しく握手をした。この方が都合がよかつた。たゞミユファだけは、あまり繁々と顔を出すのは控へて、外國人が訪れて來たやうな儀式ばつた調子を崩さなかつた。或る晩、ナナは床の上の熊皮に坐つて、靴下を脱いでゐるときに、伯爵は、これらの人々のことを好意をもつて語つた、殊にフキリップは誠實のある人間だとまで言つた。

「さうね、それや仰しやる通りだわ、あの人達は皆おとなしい親切な方よ。」ナナはまだ床の上に坐つて寢衣に着更へながら言つた。「だけどね、あの人達は私の今の立場を知つてゐるわ。一言でもへんなことを言へば、私あなたのためにあの人達を追つ拂つてしまふわ。」

しかしナナは、こんな豪奢を極めた王宮のやうな生活をしながらも、退屈し切つてゐた。彼女は終夜男を傍に置いて、鏡臺の抽斗にまでも、櫛や刷毛と一緒に金を持つてゐたが、もうこんなことでは満足しなくなつた。どこかに缺けたところがあり、彼女を退屈させるやうな隙間があつた。彼女は、することもない日々を暮し、同じやうな單調な時間を過ごしてゐた。彼女には明日といふものがなかつた。食へることに事缺かず、どんな枝にでも喜んでとまると小鳥のやうな生活を送つてゐたのだつた。彼女には食へさせてもらへるといふ確かな保證があつたので、別に何を



するでもなく、この暇な静かな修道院のやうな生活の中に沈んだまゝ、まるで家に閉ぢ籠つてゐる淫賣婦のやうに、まる一日を伸び／＼として暮してゐた。外出するときには必ず馬車に乗るので、足を使ふといふことはなくなつた。彼女は若い娘心に歸つて、唯一つの彼女の仕事である男を待つてゐる間、朝から晩までビジュウに接吻したり、馬鹿げた真似をしては時間を費やしたりしてゐた。彼女は快よく疲労した様子で、こんな生活を續けてゐた。このやうな放逸な氣持のうちにも、彼女の考へてゐること、いへば、自分の美しさを保つといふこと、何時も人を訪問したりされたりすること、體を洗ふこと、體中に香水をつけること、そして何時、如何なる人の前でも、顔を赧らめたりせず裸かになれるといふ誇りを持つてゐること、などであつた。

朝、ナナは十時に起きた。スコットランド系のグリフォン種のビジュウが彼女の顔を舐めて起すのだつた。それから五分間ばかりは、戯れ合つた。犬は彼女の腕や腿の間を駆け廻つた。それがミッファ伯爵をむつとさせた。このビジュウが彼に嫉妬を感じさせた最初のものだつた。獸が、こんなに夜具の下へ鼻を突つ込むのは宜しくない、と彼は考へた。それが済むとナナは化粧室に入つて入浴した。十一時頃にフランスが来て、午後手の込んだ髪を結ぶまでに、

取り敢へず櫛を入れるのだつた。朝食には、彼女は一人で食事をとるのが大嫌ひだつたので、殆んど毎日マロアル夫人がやつて来た。このマロアルは朝になると、例の途方もない帽子を被つてどこからともなくやつて来て、日が暮れると、また彼女の得體の知れない生活へ戻つて行くのだつた。しかしそれを誰も氣にとめなかつた。そしてナナの最も退屈な時間は、朝食からお化粧までの二三時間だつた。大抵はマロアルを誘つてベジグをやるのだつたが、時々にはファイガロ紙を讀むこともあつた。演藝欄や社交界の消息が殊に彼女の興味を惹いた。それからまた本を開いて見るやうなこともあつた。彼女は文學を愛してゐることを得意にしてゐたのだつた。お化粧は五時頃までかゝつた。そしてそれが済むと、やつと長い睡氣から覺めたやうに、いそ／＼と馬車に乗つて外出したり、大勢の男達を招待したり、または街へ出かけて晚餐をとることも屢々あつた。寢床に就くのは非常に遅くなるので、また翌る日は同じやうな疲れ心地で起き上つて、何の變化もない一日が初まるのだつた。

彼女の大きな慰めはバティニョルへ行つて伯母の家に子供のルキゼを訪ねることだつた。二週間も彼女は子供の事を忘れてゐて、それから急に思ひ出すと、矢も楯もたまらなくなつて、度ましく優しい親心に胸を一杯にして、伯母きかつた。まあこの坊やは、こんなにして死んでしまふのではなからうか？ 母親の自分はこんなに達者なのに、と思つた。

子供から離れてゐる日には、ナナは相變らずまた騒がしい生活を續けてゐた。ボアの散歩や、あちこちの初日の芝居や、メイソン・ドオルカカフェ・アングレでの晝餐や晚餐、それから人々の集つてゐる公園や興行物、マビエユ、見世物、競馬などを漁り歩いてゐた。けれども、それでもまだ悲しみの込み上げて来るやうな、どうしていゝか分らないほど退屈な時間があつた。絶えず彼女は何物かに夢中になつてゐたが、一人になるとすぐに兩手を投げ出して、疲れ切つた様子をした。孤獨が忽ち彼女を悲しませた。そこには彼女自身の空虚と倦怠があるばかりだつた。習慣からも生れつきからも非常に快活な彼女だつたが、そんな時はうら悲しくなつて欠伸の間に絶えず繰り返すこんな短い言葉に、彼女の人生を言ひ現はしてゐた。

「おゝ！ 煩さい男達つたら。」  
 或る日の午後、音楽會からの歸り途に、ナナは、モンマルトルの歩道の上を早足に歩いてゐる、靴の踵を潰し、汚れたスカートをし、雨に濡れた帽子を被つた女を見た。彼女はすぐにそれが誰であるかを知つた。  
 「お停めよ、シャルル！」と彼女は馭者に叫んだ。

には煙草を、子供には蜜柑やビスケットを、心盡しの手土産にして、馬車にも乗らずに駈けつけるのだつた。また時とするるボアからの歸り途に、四輪馬車を驅つて立ち寄ることもあつた。その附近の淋しい道筋の人々は、ナナの立派な衣裳を見て大騒ぎした。ルラ夫人は、姪のナナが全盛になつてからといふものは、その虚榮心を尙のこと擧げ出した。そしてヴィリエ街に顔を見せることも殆んど稀で、こは私の来るやうな場所ではないから、などと言つてゐた。しかし自分の方へ、ナナが四千法も五千法もする衣裳をつけて訪ねて来るのを、得意がつて非常に喜んだ。その翌日は、一日中ナナの贈物を近所の女達に見せ廻つて、その金高を吹聴して驚かせるのだつた。大抵の場合、ナナは日曜日を肉親の者だけで水入らずに暮らすやうに取つて置いた。そしてミッファがそんな日に招待しても、堅氣な女らしく微笑んで、駄目ですわ、赤ん坊を見に行つて伯母の家で晚餐をしますの、と言つて斷つた。けれども、この隣れな小さいルキゼは年中病氣だつた。もう三歳にならうといふ子供ではあつたが、いつも頸筋に濕疹を出して、この頃では兩方の耳の中に膿腫が出来てゐた。それは腦カリエスになる懼れがあつた。ナナは、そんなに顔色の悪い血の氣の失せた坊やの、柔らかな體に黄色い斑點が出てゐるのを見て、はつとして眞顔になつた。殊に彼女の驚きは



そして呼び聲を上げた。

「サタン！ サタン！」

通行人は誰も皆振り返つて、視線を集めた。傍へ寄つて来たサタンは、馬車の車輪でまた着物を汚した。

「さあ、お乗りよ。」とナナは、人々を尻眼にかけて平氣で言つた。

そしてサタンの手をとつて、厭がつてゐる彼女を明るく青色の四輪馬車に伴れ込んで、シャンチイの附いた眞珠母色の絹の着物を着てゐる自分の隣に坐らせた。道に立ち止つた人々は、既者の立派な服装を見て微笑した。

その時からナナはまた情熱に捕はれた。サタンが例の悪い癖を唆かすのだつた。ウィリエ街の屋敷に落着くと、ナナはサタンの體を綺麗にして、新しい着物を着せてやつた。それから三日ばかりの間に、サタンはサン・ラザアルのことや、仲間の姉妹達の煩さかつたことや、彼女を娼婦のカードに記入してしまつた警官達の野暮臭いことなどを話して聞かせた。ナナはそれを聞いて腹を立てながら、彼女を慰めて、大臣に會つてでもお前さんの名をきつとそのカードから消して上げると誓つた。それにしても、何も急ぐ必要はなかつた。この屋敷へは、誰もサタンを探しに來ないに決つてゐた。かうして二人の愛撫の午後がまた初まつたのだつた。優しい言葉を囁き合つて、接吻したり微笑み交し

たりした。これはラザアル街で警官に妨げられて止した、あのふざけた戯れの續きだつた。だが或る夜、それは本物となつた。嘗てロールの家であんなに不愉快な目に會つたナナは、今こそすべての事情が呑み込めた。彼女は夢中になつて怒つたので、丁度四目目の朝サタンの姿がこの家から見えなくなつた。彼女の出るのを誰も見なかつた。サタンは新しい着物を着て、戸外が懐かしくなり、歩道が戀しくなつて逃げ出したのだつた。

その日、ナナの家では激しい聲が起つた。召使達は皆、騒ぎ聲一つ立てず顔を伏せておつとしてゐた。ナナは、フランスアがサタンの出てゆくを見逃して扉口を見張つてゐなかつたといふので、彼をひどく叱つた。が、やがて彼女は努めて自分を制するやうにし、サタンを淫賢扱ひにし初めた。これによつて彼女は溝の中から拾ひ上げて来た女なんて、こんなものだといふことが分つた。午後になつてゾエは、ナナが部屋の中へ閉ぢ籠つて泣いてゐるのを聞いた。夜になると彼女は思ひ出したやうに馬車の用意を言ひつけ、ロールの店へ連れて行けと言つた。彼女は、サタンがマルティル街のあの料理店の卓子にゐるだらうと思つたからである。だがそれはもう一度しみく會ひたいからではなくて、横面でも振り飛ばしてやりたかつたからである。果してサタンは、小さな卓子で、ロベール夫人と

一緒に食事を構つてゐた。サタンはナナを見ると笑ひかけた。ナナは胸を突かれた思ひがして、喧嘩を初めるどころか、反對に優しい親切な氣持になつた。彼女は自分でジャンパンの代價を拂つて、周囲の卓子にゐるものにまで振舞ひをし、ロベール夫人が便所へ行つてゐる間にサタンを連れて店を去つた。そして馬車に乗ると、彼女はサタンと唇を噛み合つて、二度とこんな眞似をしたら殺してしまふと言つて脅かした。

それから後も、絶えずこんな騒ぎが起つた。ナナは何度となく、欺かれた女の怒りから更に悲しい氣持になつて、この家の居心地の良さに倦いて氣紛れから逃げ出して行つた。碌でなしのサタンの後を追ひかけた。彼女はロベール夫人のことを口を極めて罵つた。或る日の如きは、夫人と決闘しようかとさへ思つた。こゝに邪魔者が一人ゐるのだ。近頃ナナは、ロールの店で食事をするときには、ダイヤモンドを澤山身に飾り、よくルキズ・ヴィオレエヌや、マリア・ブロンヤ、タタン・ネネなどといふ連中を連れて出掛けた。料理店の三つの部屋の脂の焦げる香ひの中に、黄色い瓦斯の光に照らされて、これらの女達は、若い淫賢婦達を驚かして、氣持になり、食卓を立ち上るときには、自分達の贅澤な装身具を見せびらかしてゐた。近頃ロールは益々肥つて光澤を増し、やつて來るお客達には皆、更にゆつたり

した母親のやうな態度で接吻してゐた。だがサタンは、このやうな中にあつても、青い眼と處女のやうな純潔な顔付をして、持前の平靜さを失はずにゐた。ナナとロベール夫人との間に挟まれて、両方から噛みつかれたり、撲たれたり、あちらこちらへ引つ張られたりしながらも、彼女はただ、可笑しいわね、二人とも仲直りした方がいゝのに、と言つて澄ましてゐた。彼女を打ちたゝいた所で何になるものではなかつた。彼女は双方に愛想よくしてゐたいといふ氣は持つてゐたのだが、さりとて、自分の體を二つに切り分けることも出来ないではないか。けれども終ひには、ナナが彼女を愛撫し、贈物も澤山やつて、奪つてしまつた。一方ロベール夫人は、その復讐として、ナナの情夫達に匿名で恐ろしい手紙を書き送つた。

その頃ミリア伯爵は心配さうにしてゐた。が或る朝、彼は逆上せ切つた様子で、ナナの眼の前に一通の匿名の手紙を差し出した。彼女がその手紙を讀むと、最初の文句から、ナナがアンドンヴルやユーゴンの兄弟と一緒に伯爵を欺いたといふことが責めて書かれてゐた。

「こんなことは嘘ですわ！ 嘘ですわ！」とナナは、平常にも似合はない率直な口調で、しつかりと叫ぶやうに言つた。

「お前は誓へるかね？」とミリアはもう肩の荷を下した



やうな氣持になつて訊ねた。

「え、あなたのお望み次第のものにかけて、誓ひますわ……え、いゝわ、私の子供の頭にかけて誓ふわ！」

だが手紙はまだそれで終つてゐなかつた。讀んでゆくうちに、ナナとサタンとの關係が、卑しいひどい言葉で書き立て、あつた。手紙を讀み終ると、彼女は微笑を洩らした。

「あ、この手紙が誰から出たか分つたわ。」彼女は簡単にそれだけ言つた。

そしてミラファがそれをも打ち消して欲しさうにしてゐるので、彼女は靜かに言ひ加へた。

「ね、あなた、これはあなたに關係のあることぢやないわ……それで、あなたはどうしたといふの？」

彼女は決して打ち消さうとはしなかつた。伯爵はむつとしたやうに言ひ返した。すると彼女は肩を聳やかした。それならあなた方の社會はどうです？ 何處にだつてこんなことはあるぢやありませんか、と言つて、彼女は彼の女友達の名まであげ、社交界の婦人達だつて同じことをしてゐるのだと言ひ放つた。終ひには、彼女の言葉によれば、こんなことは誰でもする當り前のことに過ぎないといふのだつた。嘘はどこまでも嘘で、だからつい先刻もアンドンダールとユーゴン兄弟のことに就いては、彼女はあんなに怒つたのだ。全くそのことなら、彼女が彼の言葉を聞いて息の

詰るほど怒つたのも尤もである。しかし、何にもならないことにまで彼を欺したとて、何の益があらう？ それで彼女はまた繰り返して言つた。

「それにね、もしそれがあなたのお氣に召さないのなら、簡単なことだわ……扉はあの通り開いてゐるんですから……ね！ 私がどういふ女だか、分つていたとき度いものですわ。」

彼は顔を伏せた。心の底では、ナナが誓ひを立ててくれたので喜んでゐたのだ。彼女の方では、自分の力がよく効いたのを見て、もう宥めようなどとはしなかつた。その頃からサタンは紳士達と同じやうに公然とこの家に居居つてしまつた。アンドンダールも匿名の手紙は受け取つたが、それを待つまでもなく、何もかも知り抜いてゐた。彼は面白がつて、わざと嫉妬したやうにサタンと争つたりした。一方フキリップとジョルジュはサタンを友達として待遇し、手を握り合つたりひどい冗談を言つたりした。

或る夕暮、ナナはサタンを連れ出すことが出来なかつたので、彼女の手を離れてマルティル街へ食事をとりに出掛けた。行つた時、一事件が持ち上つた。相手もなしに食事をしてゐるとダグネが入つて來た。彼は身持をよくしてゐたが、それでも時々また昔の悪癖に捉はれて、かうした巴里の薄暗いよからぬ場所へ、誰にも會はないやうにと念じながら

足踏みをしてゐるのだつた。そしてナナを見ると、一寸たぢろいだ様子だつたが、彼は逃げ出すやうな男ではなかつた。笑ひながら傍へ來て、同じ食卓へ坐つてもいゝかとナナに訊ねた。彼が自分をからかつてゐるのを見ると、ナナは冷やかに威張つて見せて、素氣なくかう答へた。

「お好きなところへお坐りなさいよ。こゝは誰でも入れる場所ですからね。」

こんな調子で初まつたその會話は、非常に面白かつた。しかし食後になると退屈したナナは、彼をとつちめてやらうと考へて、食卓に頬杖をつき、急に馴れ／＼しい言葉で問ひかけた。

「時に、あなたの結婚はうまく行つてるの？」

「なか／＼うまく行かないんです。」とダグネが白狀した。ミラファ家へ彼が結婚を申し込んだ時には、伯爵が餘り冷やかな態度をしてゐるので、實際彼はもう諦める方がよいとさへ思つたほどだつた。それはどうもうまく行くとは思はれなかつた。ナナは手で顎を支へながら、唇には皮肉な微笑を浮べて、その明るい眼で彼を見つめてゐた。

「さう！ 私は悪い女ですからね。」と彼女は靜かに言葉を續いだ。「私の手から、未來の舅様を奪ひ取らなければならぬのでせうよ……でもね、氣の利いたあなたにしては、随分間が抜けてゐるわね！ 何とか仰しやいよ！ 私を尊

敬してゐて、何でも残らず私に打明けてる男に、私の悪口を言ふなんて……まあお聞きなさいよ、私がさせようと思へば、あなたは結婚出来るのよ。」

彼には、直ぐその意味が了解された。そして、どんな事でも彼女に従はうと決心したが、相變らず冗談を言つて、話を堅苦しくすまいと務めてゐた。彼は手袋をはめてから、それでも言葉だけは眞面目に、エステル・ド・ブヴィル嬢と結婚したいのだと、彼女に頼んだ。彼女は擦つたいやうな笑ひ方をした。この青年に恨みを持つなんてことは、誰にも出来ないのだ。ダグネが女達に持つてゐるのは、彼の澄んだ音楽的な柔らかさのある優しい聲のためであつた。女達は彼に、『大鷲絨の口』と云ふ諺名をつけてゐた。どんな女も、その澄み通つた聲をしみ／＼と聞かされると、口説き落されてしまふのだつた。彼もその力を知つてゐて、下らない話を聞かせながら、その言葉の果しのない搖籃で、女を寝つかせるのだつた。二人が食卓を離れると、彼女は顔を蒼白色にして、また彼に惹きつけられ、その腕に纏つて顛へてゐた。夜空は晴れ上つてゐたので、彼女は馬車を歸して、自分の家まで彼を伴れて一緒に歩いた。言ふまでもなく、それから二階へ上つた。二時間ほど経つて、彼女はまた着物を着更へながら、かう言つた。

「では、どうしても結婚したいと言ふの？」



「でもねー」と彼は呟いた。「それが、僕の執るべき一番いい方法なんだから……もう僕には金がないんですよ。」  
彼女は彼を呼んで靴 釦をはめさせた。そして暫らく黙つてゐたが、

「いゝわー 承知してよ……私が助けて上げるわ……あの子は杖のやうに瘦せてゐるけれど、それもあんなの好みなら……さうよー 喜んで添はせて上げるわ。」

そして、まだ胸も露はにしたまゝ彼女は笑ひ初めた。  
「だけど、私には何を呉れるの？」

彼は彼女に抱きついて、感謝の心を籠めて肩に接吻した。彼女は嬉しさに顫へながら、身を跳いて反り返つた。

「あのね。」と彼女はその接吻に咬かされて叫んだ。「私がお禮に欲しいものはね……その結婚の日に、あんなのまだ汚れない贈物を持つて来て欲しいの……。花嫁さんよりも前に、ね！」

「いゝですともー いゝですともー」と彼は彼女よりも一層高く笑ひながら言つた。

そんな取引が二人の心を樂しませた。二人共、この話が  
大へんうまいことだと考へた。

丁度その翌日ナナの家で晩餐會があつた。例の木曜日の晩餐會で、ミッファとザンドゥルとユーゴンの二人の息子と、それにサタンが加はるのだつた。ミッファは早くか

ら来た。彼は、ナナを困らせてゐる二三の負債を始末しなければならぬのと、彼女が死ぬほど欲しがつてゐるサファアの頸飾りを買つてやりたかつたので、八萬法ばかりの金が要るのだつた。しかし、もう今までに随分財産を使つてゐたし、それに、まだ不動産を賣ることは躊躇してゐたので、彼は金貸しを探してゐたのだつた。ナナの忠告に従つて、彼はラボルデットにその事を相談した。するとラボルデットは、問題が非常に大きなことなので、髪結のフランシスに相談して見る事にした。フランシスは喜んで、得意先のかうした用事に奔走するのだつた。伯爵は、世間には普通の事だが、外へ洩らすまいとする考へから、こんな男達の手を煩はすことにした。二人とも、彼の署名した十萬法の手形は、靴から外へは出さないといふ約束をした。そして利子として差引く二萬法の金も、自分達の利益にするのではないと言譯をし、どうしても彼等が行かなければならぬ高利貸のことを、破廉恥漢だなど罵つた。丁度ミッファの来たといふことを召使が知らせた時、フランシスはナナの髪を結び上げたところだつた。ラボルデットも、隔てのない友達の親しさで化粧室にゐた。伯爵を見るとフランシスは、そつと白粉やボマードの間へ紙幣のどつしりした包みを置いた。化粧臺の大理石の上で、一枚の手形が署名された。ナナはラボルデットをも晩餐會まで引き留めて置

かうとした。けれども彼は斷つた。彼は或る外國人の富豪のために巴里を案内しなければならぬのだつた。ミッファは彼を片隅に呼んで、寶石細工師のベッケルのところへ寄つて、サファアの頸飾りをこゝへ持つて来るやうに言つてくれと頼んだ。ミッファは今晚のうちにナナを驚かせたかつたのだつた。ラボルデットは喜んで引き受けた。それから半時間ばかり經つて、ジュリアンがそつと小函を伯爵に渡した。

晩餐の間、ナナはいそ／＼としてゐた。八萬法を見たので、喜んでゐるのだつた。しかしそれも、残らず右から左へ出入り商人に渡つてしまふ金だつた！ さう思ふとがっかりした。銀や硝子の器の、その反射で明るいこの立派な食堂で、スープの出る頃から、彼女は何となく悲しくなり、貧しかつた頃の幸福を羨美したい氣持になつた。男達は燕尾服を着てゐた。彼女は白い縞子に刺繍をした服を着てゐた。サタンは彼女よりも地味な黒い絹の服を着て、たゞ頸に彼女の與へた金色のハート型の飾りを垂れてゐた。お客達の後ろには、ジュリアンとフランソアがゾエと共に、三人とも勿體ぶつて控へてゐた。

「どんなに考へて見ても、お金のなかつた頃の方がずつと面白かつたわ。」とナナが繰り返した。

彼女はミッファを右に、ザンドゥルを左に坐らせてゐる

た。しかし、その二人の方へは少しも眼をやらずに、フキリップとジョルジュの間の、正面に坐つてゐるサタンばかりを氣にしてゐた。

「ねえ、さうぢやなくつて？」と彼女は何か口を利く毎にさう言つた。「あの頃はよく笑つたものね、それ、あのポロソオ街の、デッス小母さんの塾へ通つた頃ね！」

焼肉が出た。ナナとサタンは昔の思ひ出を樂しんで、不思議なほどお喋りになつてゐた。二人は急に、またあの汚らしい青春の記憶を話したくなつてゐるのだつた。それも殊に、男達が傍にゐる時に限つて、自分等の生ひ立つた悲惨な境遇を、彼等にも押しつけたくて堪らなくなるのだつた。男達は困つた眼付をして顔色を變へてゐた。フキリップとジョルジュは、努めて笑はうとし、ザンドゥルは苛々と髯を捻り、ミッファは益々むつかしい顔をしてゐた。

「ヴィクトルを覚えて？」とナナが言つた。「悪い奴だつたわね、女の子を奪へ連れ込んだりして！」

「覚えてゐるわ。」とサタンが答へた。「あんなの家の大きな庭もはつきり覚えてゐるわ。門番が箒を持つてさ……」

「ポーシ小母さんは死んだのよ。」

「それから、あんなの家の店だつて覚えてゐるわ……。あんなのお母さんは肥つてたわね。或る夕方一緒に遊んでゐるところへ、お父さんがへゞれけになつて歸つて来たわ、へ



べれけになつてさー」

その時ゾンドゥルは話題を變へようと思つて、二人の思ひ出話の中へ口を入れた。

「どうでせう、例によつて松露が欲しいものですね……。あれはいゝものですよ。昨日もコルブルウズ公爵のところへ食べましたが、生憎味が悪くてね。」

「ジュリアン、松露よー」とナナは無愛想に言つた。それからまた話を初めた。

「さう！ あのお父さんと來たら始末が悪かつたの……だからあんなに零落れたの！ 時々どこかへ姿をかくしてしまつてね、ひどい貧乏だつたわ！……まあ私は、苦勞と云ふ苦勞をし抜いて來たと言つてもいゝわ。それにしても、私があんな兩親と同じやうにくたばらなかつたのは、全く不思議だわ。」

今度はナイフをいぢつてゐたミュッファが、堪りかねて遮つた。

「そんな話はある愉快ぢやないね。」

「何ですつて？ え？ 愉快ぢやありませんつて！」とナナは怖ろしい眼付で睨み返した。「愉快ぢやないのは分つてますわ！……でも、私はパンを食べなきゃならなかつたんですよ……。私はね、御覽の通りの正直者だから、あつたことをそのまま言つてゐるんです。母親は洗濯女で、父親

は飲んだくれで、たうとう酒で死んぢやつたんです。さあ！ これでお氣に入らないのなら、私の家柄が恥かしいとでも仰しやるんなら……」

皆が仲へ入つた。そんなに言ふもんぢやありませんよ！と言ひながら、人々は皆彼女の家庭を尊敬した。しかし彼女は言ひ續けた。

「私の家柄が恥かしいとでも仰しやるんなら、さあ！ どうぞ御勝手になさいまし。私はね、父親や母親のことを隠すやうな、そんな女ぢやないんです……。何も親達と別にして考へて貰ひたくはないんですわ！」

皆は彼女を宥めて、彼女が望むまゝに父のことも母のこともすべての過去の話も聞いてゐた。四人の男達は皆食卓の上に眼を伏せて小さくなつてゐた。彼女一人が、男に對する無限の力を持つた怒りに委せて、嘗つてグウト・ドオル街を歩き廻つた泥まみれの古靴の下に男達を踏み躪つた。

彼女はまだ昔と少しも變つてゐないのだつた。人々がたとへどんなに彼女に金を與へても、宮殿を建てよやつても、彼女は相變らず林檎を噛つてゐた頃を懐しむのだつた。ほんとお金なんて詰らないわ！ そんなものは、出入り商人のために作られてゐるんだわ、と彼女は思つた。だがやがて彼女のそんな發作も、世界中の人が皆親切な心を懷いて、誰も隔てを作らない單純な生活を望む感傷的な氣持によつ

て鎮められてしまつた。

「さあ！ どうしたの？ シャンパンをお注ぎよ。」と彼女は言つた。「何故そんなにぼんやりして、私の顔を見つめてゐるの？」

口論の間、召使達は少しも笑はなかつた。何も聞えないやうな振りをして、彼女が怒れば怒るほどむつかしい顔をしてゐた。ジュリアンは、さつさとシャンパンを注ぎ初めた。果物を差し出したフランソアは、過つてその器を傾け過ぎたので、林檎や梨や葡萄が食卓に轉がつた。

「へまなことをするわね！」とナナが叫んだ。

悪いことにフランソアは、果物がうまく積まれてゐなかつたのですと辯解した。ゾエが蜜柑をとつて、崩れ易くしたといふのだつた。

「それなら、」とナナが言つた。「ゾエが馬鹿なんだわ。」

「でも奥様……」と悪く言はれたゾエは呟いた。

すると突然ナナは立ち上つて、威丈高な身振りをして急ぎ込んで叫んだ。

「おだまり！……皆出て行つておくれ！……お前方には用事はないんだから。」

さう叱つて見ると彼女は氣が鎮まつた。彼女は直ぐに、非常に優しく、愛想よくなつた。食後は愉快になつて、男達は皆快活に自分で果物をとつた。サタンは梨を剥き、ナ

ナの後ろへ來て、その肩に凭れて食べながら何かナナの耳に囁いて、二人は高い聲で笑つた。それからサタンは、梨の最後の一切れを分けようとして、それを前齒に啣へてナナの方に差し出した。二人は唇を噛み合つて、接吻しながらそれを食べてしまつた。するとそれを見てゐた男達の間から、滑稽な抗議が起つた。フィリップは、どうか御遠慮なくと叫んだ。ゾンドゥルは外へ出ませうかと言つた。ジュールはわざ／＼そこまで行つて、サタンの體を捉まへ、彼女の席まで連れ戻した。

「厭な人達ね！」とナナが言つた。「可哀さうに、この子が顔を赤くするぢやありませんか……ねえ、サタン、相手にしないで、喋らしてお置き。だつてこれは此方だけのことぢやないの。」

そして、眞面目な顔でそれを眺めてゐたミュッファの方に振り向いて、

「ねえ、さうでせう？」

「さうですとも。」と彼は呟いて、ゆつくり點頭いて見せた。

もう誰も冷やかす者はなかつた。これらの立派な家柄や古い名門の男達に圍まれて、この二人の女は向き合つて優しい眼を見交はした。そして彼女等は、靜かにその女性としての魅力を發揮し、男達への明らかな輕蔑を現はし、臆



面もなく氣儘に振舞つた。男達はそれを見て拍手した。人々は二階の小さな客間へ珈琲を飲み上つた。二つのランプが柔らかな光で薔薇色の壁覆ひや、燻んだ金色やラック色の骨董品を照らしてゐた。夜のそんな時間に、燈火のひそかな戯れが、様々な小函や青銅や陶器の類の間に、銀の象牙の嵌込み細工を輝かせ、彫刻を施した筆縁の光澤を浮き立たせ、絹の反射で羽目板に波形模様を描いてゐた。午後の燠爐の火は消えて燠となり、カーテンや帳帷に包まれたこの部屋は息苦しいほど熱かつた。手袋が投げ出され、ハンカチが落ち、本が開いたまゝになつてゐるこのナナの日常生活で満たされた部屋の様子は、着物を脱いで靴の香水を匂はせながら、まるで小娘のやうに何もかも取り散らし、豪奢な調度の中で一層魅力を増した彼女を直ちに眼に見るやうに思はれた。寢室のやうな大きな肘掛椅子と、寢床の間のやうに深い長椅子とが、さすがに夜更けらしく、人々を、何もかも投げ出したい眠たさへ、また部屋の隅の影の中で囁かれる楽しい愛撫へと、誘つてゐた。

サタンは燠爐の傍の長椅子へ行つて身を投げて、煙草を喫つてゐた。するとゾンドゥルが彼女に向つて、もしあなたが、まだこれからもナナを側道へ外らせるやうだつたら、あなたに都合の悪い證人を連れて來ますよ、などと脅かしながら、面白さうに念の入つた嫉妬の芝居をして見せ

た。フキリップとジョルジュも仲間に入つて、彼女をからかつたりひどく抓つたりしたので、サタンはたうとう叫び出した。

「ナナ！ ナナ！ この人達を叱つてよ！ また私をいぢめるんだもの。」

「さあ、もうお止しなさいよ。」とナナが静かに言つた。「あの子をいぢめては厭よ。そんな事はちやんと知つてゐるぢやありませんか……それにあんたも、何故いつもその人達と隅つこへ引つ込むの？ そんなに譯の分らない人達と？」

サタンは眞赤な顔をして舌を出し、化粧室へ行つた。その扉口はすつかり開け放され、艶消しの球に包まれた瓦斯の乳色の光で、大理石が蒼く照らされてゐるのが見えてゐた。ナナは女主人公らしく四人の男達に愛嬌をふり撒いて話してゐた。彼女は、或る娼婦を扱つた評判の新聞小説を讀んだのだが、それがすつかり嘘だと言つて、その穢らしい小説に腹を立てゝゐた。その上彼女は、まるで人が何もかも示すことが出来るかのやうに、一つの小説が愉快な時間を過ごすために書かれてはならないかのやうに、自然をそのまゝ現はすのだといふ趣旨を持つたその小説に對して腹立たしい厭惡を見せた！ 小説や芝居に就いて、ナナは非常に狭い意見を持つてゐた。彼女は優しくて高雅な作品、彼女を夢みさせ、彼女の魂を大きくするやうなものを

望んでゐた。それからみんなの會話は、巴里の人心を動揺させてゐる騒動へ移つて行つた。動員令に續いて處々に内亂が起つてゐたのだつた。夕方になると、方々の公會の席でそれが發表され、新聞記事は世の耳目を聳動してゐた。

まあ、顔も洗つたことのないそんな汚ない奴等が、一體何が欲しいと言ふのでせう？ こんなにしてゐて、みんなが仕合せぢやないのでせうか、陛下は、何から何まで國民のためを計つて下さるのぢやないのでせうか？ まあ汚ならしい國民達！ と言つて、彼女は共和主義者に對する反感を示した。彼女は國民を知つてゐた。彼女はそれに就いて語る資格があつた。そしてさつき食事の時には、グット・ドオル街の細民達に對してあんなに敬意を要求したことも忘れて、今度は成りあがりの女らしく、自分達の仲間を攻撃した。丁度その日の午後、彼女はフイガロ紙で或る公會の報告記事を讀んだのだつた。議會は滑稽なくらゐる混亂に陥つて、或る議員の如きは、泥酔してゐた廉により除名處分にされたのだが、その男の言つた隱語といひ、またその醜劣な考へ方といひ、彼女はそれを思ひ出すと、今でも笑ひたくなるのだつた。

「おゝ！ 酔つ拂つてゐるんですからね！」と彼女は嫌惡の情を示して言つた。「まあ考へても御覽なさい。そんな共和國は、この世のためにどれほど大きな不幸でせう……あ

あ！ 出来るだけ長い間神様が陛下を護つて下さるやうに願ひますわ！」

「神様がその願ひを聽いて下さるだらう。」と重々しくミユッファが答へた。「どうして、どうして、陛下は少しもお變りはないよ。」

伯爵は、彼女にこんな善良な感情のあるのを見て喜んだ。二人は政治上の意見では一致してゐた。ゾンドゥルとユゴン中尉もまた、あの掛け聲ばかり高くして銃剣を見ると逃げ散つてしまふ『烏合の衆』に對しては、二人とも嘲弄侮蔑の言葉に種切れはしなかつた。ジョルジュはこの夜、蒼い顔をして鬱ぎ込んでゐた。

「どうしたの坊や？」とナナがその不機嫌なのに氣ついて訊ねた。

「別にどうも……。聽いてゐますよ。」と彼は囁いた。

しかし彼は苦しさうだつた。食卓を離れたとき、彼はフキリップがナナと冗談を言ひ合つてゐるのを聞いた。そして今も彼女の隣にゐるのは自分でなくてフキリップだつた。何故か分らなかつたが、彼の胸は膨らんで裂けさうだつた。彼は、二人が隣り合つてゐるのを耐へることが出来なかつた。醜惡な考へが咽喉にこみ上げて來て、その苦しみの中で彼は自分を恥かしいと思つてゐた。サタンを笑つた彼女が、シュタイネルに、ミユッファに、それから誰も彼もに調子



を合はせてゐる彼女が、ジョルジュには、<sup>横に</sup>觸つてならなかつた。何時かフキリップが彼女の肉體に觸れるのかと考へると、彼は顔が火照るのだつた。

「ねー ビジュウを取つて頂戴。」とナナは彼を慰める積りで、スカートの上で眠つてゐた小犬を彼に渡した。

するとジョルジュは、彼女から何かを受け取つたので、気が晴れくした。その小犬は彼女の膝のぬくもりで暖かだつた。

會話は、昨夜帝室俱樂部でワンドッダルが取られた莫大な損失に移つて行つた。賭博をやらないミラファは、眼を圓くした。しかしワンドッダルは微笑しながら、もう巴里中の評判になつてゐる昨夜の失敗のことから、意味ありげな言葉を語つた。どのやうなことで死なうと、それははい、が、大切なのは華々しく死ぬことだ、と彼は言つた。少し前からナナは、彼が苛々して、口を歪ませ、その明るい眼の奥にちら／＼と何かの光を藏してゐるのに氣づいてゐた。彼には貴族的な氣品があつて、その風采のどこかに、もう衰運に向ひつゝある名家の血を享けた繊細で高雅な様子を示してゐた。そして賭博と女で空になつた彼の頭腦の下に、時として渦巻くものは、短い眩暈の外に何もなかつた。或る夜彼は、彼女の傍に寝ながら、残忍な話をして聞かせ、彼女を怖ろしがらせた。もし彼が財産を残らず蕩盡

してしまつた曉には、厩舎の扉口を閉めて、馬と一緒に焼く死なうと思つてゐるのだ、と言つた。その頃の彼の唯一の希望は、彼が巴里大賞のために準備してゐる名馬リュジニヤンの上にかゝつてゐた。彼の生活は、搖ぎ初めた彼の信用を守つてゐるこの名馬の上に繫がつてゐた。ナナに何かを強請まれる毎に、彼は六月にもしリュジニヤンが勝つたら、と言つて延ばしてゐた。

「駄目よ！」と彼女がふざけて言つた。「きつと負けてしまふわ。だつて、競馬なんかへ行けば誰だつて負けてしまふんですもの。」

彼はたゞ微かな謎めいた笑ひで答へるだけだつた。それから低い聲で言つた。

「ですがね、これは勝味のない馬だけれど、私は一頭の若い牝馬にあなたの名前をつけようと思つてゐるんですよ……ナナ、ナナ、これは口調がいい。だが、決して腹を立てないでせうね？」

「どうして私が腹を立てるの？」と彼女は心では喜びながら言つた。

會話は續いた。そして最近執行される死刑の話になると、ナナは飛び立つやうに行きたがつた。その時化粧室の入口にサタンが現はれて、頼むやうにナナを呼んだ。ナナは直ぐに立ち上つて出て行つた。その後には男達が煙草を喫ひ

ながら、慢性酒精中毒患者が殺人をした場合の責任に就いて眞面目な議論を戦はしてゐた。化粧室ではゾエが椅子の上へ倒れかゝつて、ひどく涙を流して泣いてゐた。サタンがいくら慰めても泣き止まないのだつた。

「どうしたの？」とナナが驚いて訊ねた。

「さうよー あんたが話して御覽よ。」とサタンが言つた。

「二十分も前から私が言ひ聴かしてゐるんだけど……あんたがね、馬鹿だなどと言つたので泣いてゐるのよ。」

「え、奥様……あんまりですわ……あんまりですわ。」とゾエはまた激しく泣いて口籠つた。

この場の情景が急にナナの心を優しくした。彼女はその前に躊躇つて、腰へ手を廻して、愛情を籠めた親しさで慰めた。

「まあ、お前も馬鹿ね。たとへこの私が馬鹿だと言つたつて、何もその通りに取らなくてもいいぢやないの。どんな言葉が口へ出るか、自分でも分らないんだもの！ 私は怒つてゐたからなのよ……でも私が悪かつたわ、さあもう泣かないで頂戴。」

「私がこんなに奥様を愛してゐますのに……」とゾエは口籠つた。「あゝもかうもと、私は奥様のおためばかりを考へて來ましたのに……」

するとナナは女中を抱き寄せた。そして自分がもう腹を

立てゝゐないのを見せるために、まだ三度ばかりしか手を通さない着物を彼女に與へた。二人の喧嘩は何時もかうした贈物で終るのだつた。ゾエはハンカチで眼を抑へてゐた。そして貰つた着物を腕に掛けて、なほ話し續けた——臺所では皆が非常にびく／＼して、ジュリアンやフランソアは、あんなに奥様に叱られたので、お腹の空いたのもどこへやら、食へものも咽喉へ通らない有様です、と。ナナは仲直りの印に彼等に「ルイ與へることにした。彼女の身邊の悲しみは、あまりに彼女の心を苦しめるのだつた。」

ナナは、明日のためにも少し氣がよくだつたこの悶着が、こんな風に済んだので氣持よく客間へ歸つて來た。

と、サタンが彼女へ激しい口調で、あの男達がまだ私を虐めるのなら、私はさつさと出て行くわ、と言つて彼女を脅かすやうに訴へた。そしてナナに、今夜のうちに一人残らず追ひ出してしまつて、思ひ知らしてやるがいゝわとも言ひ、また、その後にあたつた二人きりになつてしまつたら、どんなに楽しいことだらうと言つた。ナナは又心配になつて、そんなことは出来やしないわ、と言つた。するとサタンは子供のやうにぶり／＼怒つて、ひどく當り散らして、例の高飛車な態度に出た。

「ねえ、あんた。私はさうして貰ひたいんだわー みんな追ひ出して頂戴、でなきや私が出て行くだけだわー」



そしてサタンは客間へ入つて、窓の傍の、人から離れた長椅子に深く身を投げこんで、大きな眼でナナを見つめながら、死んだやうに黙つてゐた。

男達は刑法學者達の最近の學説とは反對の結論に達してゐた。病理學上の或る種の場合に於ける責任消滅のこの新説を認めれば、この世には病人ばかりとなつて、もう罪人はゐなくなるのだといふ事だつた。ナナはサタンに點頭い  
て見せて、さてどうすれば伯爵を歸らせてしまへるだらうかと、その方法を考へてゐた。他の人々はそのうちに歸るだらうが、彼だけがきつと残るだらう。果して、フキリッブが歸り支度をする時、兄を後に残して置くことだけを心配してゐたジョルジュも直ぐにその後を續いた。グランドゥザルはそれからまだ數分間歸らずにゐた。彼は、どうかして偶然にも、ミッファに餘儀ない用事があつて、その位置を彼に譲られるやうなことはあるまいかと、それを知りたさに、しばらく様子を見てゐたのである。そのうちに、ミッファが今夜は歸らないといふことを、はつきり見てとると、彼は氣前よく別れを告げて出て行つた。そして扉口の方へ行きながら、ふと彼は、ナナを睨みつけてゐるサタンを見て、この場の様子も呑み込めたらしく、愉快さうに彼女の傍へ行つて握手をした。  
「どうですか？ 腹を立てゝはゐないでせうね？」と彼は

囁いた。「御免下さいよ……何といつてもあなたが一番粹な方ですよ、ほんとに！」

サタンは返事もしなかつた。彼女は二人きりになつたナナと伯爵から眼を離さなかつた。もう人眼を憚らなくなつたミッファは、ナナの傍へ腰を下ろして、その指をとつて接吻した。するとナナは話題を變へて、娘のエステルさんは機嫌よくおなりになつたか、と訊ねた。昨夜も伯爵はこの娘が悲しさにしてゐることを零してゐたのだつた。彼は一日も家では幸福に暮らすことが出来なかつた。妻は一日家を外にしてゐるし、娘は氷のやうに黙り込んでゐるからだつた。ナナはそんな家庭の事情を、何時も優しく彼に同情してやるのだつた。そしてミッファが身心の張りも抜けて、その身を投げ出してまた悲しみを訴へ初めると、  
「お婿さんは貰つてあげないの？」とナナが、何時か自分のした約束を思ひ出して言つた。  
そして直ぐに彼女は、思ひ切つてダグネのことを話して見た。伯爵はその名を聞くとはつとした。お前さんから何時かあんな話を聞いたんだから、そんなことは斷じてならない！ といつた様子だつた。  
彼女は彼を驚かして置いて、高い聲で笑つた。そしてその首に縋つて言つた。  
「おゝ！ 嫉妬なんですよ、……考へて御覽なさいな。あ

の人が私の悪口をあなたに言つたので、私は一時怒つたんです……。今では氣の毒なくらゐですわ……」  
だが彼女は、ミッファの肩越しにサタンの視線に出會つた。彼女は不安さうにミッファを離して、眞面目な口調で續けた。

「ねえあなた、その結婚をやめてはいけませんわ。どうして私がああなたのお嬢さんの幸福を邪魔するのでせう……。あの青年は非常に立派な男で、あれよりいゝ人を見つけることは出来ませんわ。」

それから彼女は、口を極めてダグネを褒めた。伯爵はまた彼女の手を握つて、その言葉を受け入れた。考へて見て、また相談しようと言つた。それから彼が寢ようと言ひ出すと、彼女は聲を低めて言ひ含めた。いゝえ、私ね、少し加減が悪いの、私を愛して下さるなら、もうこれ以上言はないで頂戴。しかし彼は、いつまでも頑張つて歸らうとはしなかつた。彼女は氣が弱くなつた。と、またサタンの視線に出會つた。彼女は後へ引くことは出来なかつた。いゝえ、それはいけませんわ。伯爵は非常に興奮して、苦しさうに、立ち上つて帽子を取つた。そして扉口のところまで、ポケットに入つてゐる小函に手が觸つたので、サファイアの頸飾りのことを思ひ出した。彼はそれを寢床の奥へ、彼女が先に入つて脚で見つけるやうに、隠して置かうと思つてゐ

た。夕食が済むと、まるで、大人氣もないそんな不意打ちを、彼は考へてゐたのだつた。だが彼は、こんなにして送り出されるその苦痛の中で、この小函を不意に彼女の手に渡した。

「何なの？」と彼女が訊ねた。「あらまあ！ サファイアだわ……あゝ！ さう、頸飾りね。あなたは、なんて親切な方でせう！……ねえ、あなた、あれときつと同じなんでせう？ でも、店に並んでゐると、もつと綺麗に見えるわね。」

それが感謝のすべてであつた。そして彼女は、彼の出て行くのには氣を留めなかつた。黙つて身を投げ出して待つてゐるサタンが眼に入ると、彼はまた振り返つて二人を眺めたが、もう諦めておとなしく階段を下りて行つた。玄關の扉がまだ閉められないうちに、サタンはナナに抱きついて、踊つたり歌つたりした。それから窓へ駆け寄つて、  
「あすこを歩いて行くあの帽子を御覽よ！」と言つた。  
カーテンの影で、二人は鑄鐵の手欄に肘を突いてゐた。一時が鳴つた。人影の途絶えたヴィリエ街の三月のこの濕つぽい夜の奥に、二列の瓦斯燈が遠く續いて、雨を帯びた夜風の大きな煽りが、時々それを吹き拂つてゐた。模糊とした地上が眞暗な孔のやうに見え、黒い空の下に、建築中の邸宅の足場が高く聳えてゐた。そして二人は、この新ら



しい巴里の、森として凍つたやうな平地を横切つて、悲しさうなその影と一緒に、雨に濡れた歩道を歸つて行くミラファの圓い背中を眺めながら、腹を抱へて笑つてゐた。するとナナがサタンを黙らせた。

「氣をおつけよ、巡査だわ！」

そして二人は笑を噛み殺して、密かな恐怖を抱きながら、道路の向う側を、正しい歩調で進んで行く二つの黒い人影を見た。ナナはどんなに贅澤をし、どんなに立派な正しい暮しをしてゐても、警察に對しては恐怖を感じてゐた。その話と、死ぬ話とを非常に嫌つてゐた。一人の巡査がこちらの屋敷を見上げると、彼女はぞつとした。あんな人達は何をし初めるか分つたものではないし、夜のこんな時間に、二人が笑つてゐるのを聞いたなら、きつと淫賣婦だと認めるだらう、と思はれた。サタンは微かに顫へながらナナに抱きついた。しかし二人は一つの燈火が、その時水溜りの其處此處にある路上を揺れながら進んで来るのに氣を取られて、まだそこにちつとしてゐた。それは溝を漁つて来た年とつた女の肩拾ひだつた。サタンは彼女を知つてゐた。「あらまあ！」とサタンが言つた。「ボマレの女王だわ、柳の籠を背負つてさ！」

そしてサタンは、風が細かな雨を二人の顔へ吹きつけるのも構はずに、ボマレの女王の話ナナにして聞かせた。

あれで、昔は素晴らしい美人だつたのよ。巴里中の人氣をすつかり一人で背負つてゐたわ。男と云ふ男が、猫も杓子も、みんな家畜のやうに集まつて行つたものだつたわ。立派な人も随分、あの人の家の階段で泣かされたものよ。：それが今では、一人だつてかまつてくれる者はなし、近所の女が、時々慰めにアブサントを飲ましてやる位で、道を通れば、子供が寄つて、後ろから石を投げるんですつて。まつたく零落したものね。ほんとに泥に落ちた女王様だわ！ とサタンが言ふのを、ナナは體を冷たくして聞いてゐた。

「見て、御覽よ。」とサタンが言ひ加へた。

そして男のやうに口笛を吹いた。丁度窓の下に来てゐたその女は、振り仰いで、燈火の黄色い光で顔を見せた。それは襤褸に身をくるんで、千切れた薄い頸巻をし、齒のないうが穴のやうに陥ち込み、窪んだ眼がぎら／＼光り、皺だらけの蒼ざめ果てた顔であつた。するとナナは、酒に身を持ち崩したこの女の怖ろしい老衰の姿を眼の前にして、不意に記憶が蘇つて来て、闇の中をまたあのシャモンの幻影が過ぎるのを見た。あのイルマ・ダンダラルが、昔は淫賣をしてゐたのに、今は老齡と名譽に満たされ、村中の者の尊敬を受けながら、館の前の石段を登つて行くのだつた。するとサタンがまた口笛を吹いて、こちらの姿の見えない

その女を笑ふので、

「およし、巡査だから！」とナナは聲を變へて囁いた。「お入りよ、早く。」

規則正しい足音がまた歸つて来た。二人は窓を閉めた。ナナは髪を濡らして顫へながら振り返ると、暫らく客間を前にして、我を忘れたやうに、まるで知らない場所へ来たやうに、ぼんやり立ちつくしてゐた。そして不意に幸福を感じたほど、その部屋は暖かで、いゝ香りがしてゐるのを見出した。積み重ねられた富、年代を経た家具、金と絹との織物、象牙や青銅の品々、それらが二つのランプの薔薇色の光の中に眠つてゐた。そして静まり返つた屋敷全體から、客間の上品さや、食堂の氣持のいゝ廣さや、廣い階段の静かさや、椅子や敷物の柔らかさや、豪奢に満ちた感覚が立ち昇つてゐた。それは直ちに彼女自身の擴張であり、彼女の支配と享樂への欲求の、また總てを所有し總てを破壊せんとする欲望の權化に外ならなかつた。彼女は未だ嘗つて、女性としての力をこれほど深く感じたことはなかつた。彼女は靜かに周圍を見廻してゐたが、重々しい考へ深さうな様子で言つた。

「ほんとにさうだわ！ 何といつても、若い間に、それを利用しなければならぬわ！」

その時もうサタンが、寢室の熊の毛皮の上に轉がつて、

彼女を呼んでゐた。

「いらつしやいよ、ね！ いらつしやいよ、早く！」

ナナは化粧室で着物を脱いだ。そしてもつと早くしようと焦つて、その豊かな金髪を両手に持つて、銀の盆の上に揺り動かした。長いピンが霞のやうに落ちて、よく光つた銀盆に續けて音を立てた。

## 十一

その日曜日、六月初めの暑い荒れ模様の空の下を、人々はブウロオニの森に催された巴里大賞の賭けられた競馬に急いだ。朝、太陽は茜色の霧の中に昇つたが、十一時頃馬車が續々ロンシャンの競馬場に到着する時には、南風が雲を吹き散らした。灰色の霧は長い裂け目を作つて消え去り、その裂け目から見える濃い青空は地平線の端から端まで擴がつた。そして、二つの雲の間から洩れる太陽の直射の中で、總てのものが俄かに燃え上つた。馬車や乗馬者や徒歩者の雜鬧で次第に満たされて行く芝生。また審判官の小舎や決勝點の指標や掲示板の柱などのあるまだがらんとした競馬場。そして正面にある重量測定場の圍ひの中央に、煉瓦と木で作つた對稱的な棧敷の五つの特別席などがくつきりと照らされた。彼方には小さな樹木で縁取られた廣い野原が水平に連なつて、眞晝の光を受け、その西方は、ヴァレ



リ、アン山の峻しい側面で仕切られてゐるサン・クルウとシュレーヌの樹木の茂つた丘陵に閉ざされてゐた。

ナナは、まるで巴里大賞が、彼女の運命を決めるかのやうに夢中になつて、決勝點の傍の柵の近くに席を占めようとしてゐた。彼女は人よりも先に早くから銀飾りのついた四輪馬車で乗りつけた。その馬車を引いてゐる四頭の白馬はミラファ伯爵の贈物であつた。左の馬に乗つて御してゐる二人の馭者と、馬車の後で堅くなつてゐる二人の従者を従へて、彼女が、芝生の入口に現はれたとき、群衆の間には女王の通御のやうな騒ぎが起つた。彼女はゾンドゥールの厩舎の色である青と白の、變つた衣裳を着けてゐた。體にびつたり合つた青い絹の小さな胴着と上着は、大きな腰當で腰の後ろに高くかゝげられて、當時は膨らんだスカートを用ゐたものであつたが、彼女は大膽にも腿の線をつくきりと見せてゐた。それから白絹子の上衣や、白絹子の袖口や、頸に掛けた白絹子のショールは、總て銀色の透しレースで飾つてあつて、それを太陽が輝やかしく照らしてゐた。その上彼女は一層騎手に似るやうに、白い羽飾りの着いた青い帽子を勇ましく被つてゐた。金色の髪は背中を流れて、褐色の毛の大きな尾のやうに見えた。

十二時が鳴つた。巴里大賞の賭けられた競馬までには、まだ三時間以上もあつた。四輪馬車が柵に近く停つた時、

ナナは自分の家にあるやうに寛いだ氣持になつた。彼女は氣紛れにルキゼとビジュウとを連れて來てゐた。彼女のスカートの中で寝てゐた犬は、そんな暑さにも拘らず寒がつて身顫ひした。またリボンとレースで飾り立てられた子供は、可哀さうに蠟のやうな小さい顔をし、黙つて、外氣のために蒼ざめてゐた。一方ナナは近くの人々にかまはずに、彼女の前の腰掛に坐つてゐたジョルジュや、フキリップ・ユーンと非常に高い聲で話をした。この二人の男は、白い薔薇と青い瑠璃草の花束の積み重ねた中に埋つてゐた。

「そしてね、」と彼女が言つた。「あの人が煩さくするので、私、扉口を指さしてやつたの……。もう二日も怒つてゐるのよ。」

彼女はミラファのことを話してゐたのである。しかしその初めての口論の本當の原因を二人には打明けなかつた。或る夜彼女が、悪い癖だが、退屈まぎれにちよつと連れこんだ男の帽子を部屋に置いたのをミラファが見つけたのであつた。

「あなた達は、あの人がどんなにかしな人だか知らないわね。」と彼女は、自分の話に興かりながら續けた。「ほんとは、この上もない似而非信者なのよ……。そしてあの人は毎晩お祈りをするの。え、決して缺かしやしないわ。私はね、あの人がきまり悪い思ひをするといけないと思つて先

きに寝むものだから、何も知らないと思つてゐるのよ。だけど私はちやんと見てゐるわ。ぶつ／＼早口で喋つて、十字を切り、それから向き直つて、私を睨んで寢床に入つて來るの……」

「おや／＼！ むづかしいんだな。」とフキリップが囁いた。「では、寢る前と寢てからのお祈りですか？」

彼女は晴れやかに笑つた。

「さうよ、前と後にね。私が眠ると、またぶつ／＼早口で何か言つてるの……。うんざりさせられてるのよ、何か一言でも言ひ合ひさへすれば、屹度あの人お説教を始めるの。この私はね、何時も信仰を持つてゐるんですよ。無論、からかふのは御勝手だけれど、私は信ずることは信じるわ……。たゞあの人はひどく煩さいの、泣いたり、懺悔をしたりしてね。一昨日も喧嘩をした後で、發作を起してしまつて、私は本當に心配したわ……」

しかし彼女は、突然話を切つて言つた。「御覽なさい、あすこにミニオン夫婦が來てるわ。子供を連れてくるのね……。まあ、あの子供達の着物の拙い着せやうつたらー」

ミニオン夫婦は、成り上り者らしい、贅を凝らした無粋な色の四輪馬車に乗つてゐた。ローズは、髪をとつて、赤いリボンの飾りのある鼠色の絹の衣裳を着て、彼女の前

の腰掛に、ひどくだぶ／＼した詰襟の學生服を着たアンリイとシャルルが喜んでゐるので、幸福さうに微笑んでゐた。しかし、馬車が柵の近くにならんで、彼女は、ナナが花束の中で四頭の馬と従僕を伴つて誇らしげにしてゐるのを見ると、唇をすぼめて顔をそむけた。それに反してミニオンは、晴れやかな顔と愉快さうな眼付をして、手で挨拶の合圖をした。彼は、原則として、女達の喧嘩の中へは入つて行かなかつた。

「それはさうと、」と、ナナが再び言ひ始めた。「あなた方はあの几帳面さうな齒並の悪い年寄りの人を知つてゐて？……」

「ヴノオさんよ……。今朝、私に會ひにいらしたの。」

「ヴノオさんが、」とジョルジュは驚いて言つた。「まさかあの人が！ あの人はエスイタ教の癡り固りですよ。」

「さうよ、私もさう思つてゐたわ。だけど、何を話したかあなた方には想像もつかないわ！『滑稽な人』のお話よ！あの人は伯爵のことや、あの家庭の不和を私に話したの、そして家庭の幸福を返してくれるやうに私に頼むのよ……。非常に丁寧に、何時もにこ／＼しながら……。だから私、さう云つてやつたの。宜しうございます、伯爵夫婦を仲直りさせるやうに致しませう。と約束したのよ……。え、冗談ぢやないわ。あの人が幸福なのが見られるなら、どんなに嬉しいことせう、あの二人が！ さうなれば私も氣



樂になれるわ。だつて、ほんとにもう大分前から、あの人に苦しめられてゐるんだもの。」

この幾月かの彼女の倦怠が、この心からの叫びの中に現はれてゐた。その上伯爵は、非常に金に困つてゐるらしい。ラポルデット宛に振り出した手形が拂へさうにないので心配してゐた。

「あゝ、あすこに伯爵夫人がゐますよ。」とジュールジュは特別席を見廻しながら言った。

「どこ？」とナナが叫んだ。「子供の癖に眼が早いのね！：日傘を持つて頂戴よ、フキリップ。」

するとジュールジュが、素早く兄を出し抜いて、銀色の房飾りのついた青い絹の日傘をとつて夢中になつて喜んだ。ナナは大きな雙眼鏡で見廻した。

「あゝ！ さう、分つたわ。」やつと彼女が言った。「右側の特別席の柱の傍でせう？ 葵色の着物を着てるわ、傍に白い着物の娘さんもゐるわ……あら！ ダグネが行つてお辭儀をしたわ。」

それから、フキリップはダグネと棒のやうなエステルとが近く結婚することを話した。それはもう決つてゐて、教會の公表も済んでゐた。初め伯爵夫人は反對したのだが、噂では伯爵の意志が通されたといふことだつた。ナナは微笑んだ。

「知つてゐるわ、知つてゐるわ。」と彼女は囁いた。「ポウルにとつてはこの上なしだわね。優しい青年ですもの、その値打はあるわ。」

そして、ルキゼの方に身を屈めた。「お前も面白い？ どう？ ……まあむつかしい顔をしてゐること！」

子供は笑ひもせず、あたりの様子を眺めてゐた。非常に大人びて、眼に見たもの總てを悲しく考へ込んでゐるやうであつた。ピジュウは、そは／＼してゐるナナのスカートから追ひ立てられて、子供の傍に行つて、震へてゐた。

そのうちに、芝生は一杯になつた。馬車は、カスカアドの門から、ぎつしりと長い／＼列になつて入つて来た。イタリアン街から出て来た大形乗合馬車が五十人もの客を乗せて到着して、特別席の右側に整列してゐた。續いて、數臺の獵犬輪送馬車、無蓋二人乗四輪馬車、素晴らしく立派な四輪幌馬車、その間に交つて驚馬が揺つてゐる見すばらしい辻馬車、そして四頭の馬を驅り立てゝゐる一人乗馬車、それから主人は外に腰掛けて、馬車の中では召使がシャンパンの籠を持つてゐる四頭立四輪馬車、そしてまた大きな車輪ががら／＼と鐵の響を轟かしてゆく古い馬車、時計の機械のやうに精巧に作られて、鈴の響の中を駈けて行く輕快な雁緊二頭立、それらが續く中を、時々騎馬の人が通

つた。徒歩者の波が馬車の間を周章して走つた。遠くの物音が、ボアの路と云ふ路を通つて、芝生の上に着くと、急に静かな音になつて消えた。次第に増してゆく群衆のどよめき、呼び聲、叫び聲、それらが大氣のなかに上つて行く他にはもう何も聞えなかつた。そして颯と起つた風のため、太陽がまた雲の端から現はれると、金色の光の箭が降り注いで、馬具やニス塗りの鏡板を輝かせ、婦人達の着物を燃え立たせた。その降り注ぐ光の中に、馭者達は腰掛の上が高く立つて、彼等の持つてゐる大きな鞭と共にぱつと輝いて見えた。

すると、ラポルデットが無蓋四輪馬車から降りて来た。ガガとクラリスとブランシユド・シヅリイが、彼の席を其處に取つて置いたのだつた。彼が競馬場を通つて、重量測定場の圍ひの中に入らうと急いでゐるとき、ナナはジュールジュに彼を呼ばせた、そして彼が来ると、

「私は幾らなの？」と笑ひながら訊いた。彼女は、あの若い牝馬の『ナナ』のことを言はうと思つてゐた。この『ナナ』はディアヌ賞の競馬で見苦しくも負け、その上、四月と五月のデ・カアル賞やラ・グラント・ブウル・デ・ブロードニー賞の競馬に出て順位さへもつけられなかつた。その賞金はブンド・ザルの厩舎の他の馬、即ちリュジニヤンが取つた。それでリュジニヤンには立派な優勝馬の

折紙がつけられ、前日から、人々は勝率二分の一でさつさとリュジニヤンに賭けたのだつた。(勝率二分の一といふのは、一回に一回勝利を得る見込みのあること)「まあ大抵五十分の一ですね。」とラポルデットが答へた。「おや／＼、『私』は安く見られたのね。」ナナはこの冗談に愉快になつて言つた。「では、私は、私に賭けない事にするわ……え、え、さうよ！ 私は私に一ルイも賭けないわ。」

ラポルデットは、ひどく急いで出て行かうとしたが、彼女がまた呼び止めた。彼女は相談相手が欲しかつた。調馬師や騎手の仲間に關係のある彼は、あちらこちらの厩舎に就いて種々な特別の消息を知つてゐた。今までも何度となく彼の豫想が當つたので、人々は彼を競馬通の王と呼んでゐた。

「さあ教へて頂戴よ、どの馬に賭ければいゝの！」とナナが繰り返した。「英吉利馬はどう？」  
「スピリットですか？ 三分の一ですな……ブレリオ二世なら、同じく三分の一で……それから、他の馬では、コジニユスには二十五分の一、アザールには四十分の一、ブウムには三十分の一、ピシユネットには三十五分の一、フランシバンには十分の一、といった所でせうな……」  
「いゝえ、私は、英吉利馬には賭けませんわ。私は愛國者よ……え？ 多分ブレリオ二世ですつて、コルブルウズ公爵は、先刻から嬉しさうな様子ですわね……。えゝ！ やつ



「あたりですわ！ 私はリュジニヤンに五十ルイ賭けるわ、どう？」

ラポルデットは、不思議さうに彼女を見つめた。彼女は體を屈めて、低い聲で彼に訊ねてゐた。彼女がもつと樂に賭けられるやうに、ブンドゥルがラポルデットに彼女を賭業者のところへ連れて行つてくれと頼んで置いたのを彼女は知つてゐた。ラポルデットは、自分が何か知つてゐれば、それを教へてやつたに違ひない。が、何も説明せずに、自分の鑑定に委すやうに承知させ、彼が自分の考へだけで彼女の五十ルイを勝手に賭けても、後悔しないやうにといふ約束をさせた。

「あなたのいふと思ふ馬に賭けて下さい！」と彼女は、彼と別れながら、晴れやかに叫んだ。「でもナナはいけないのよ、やくざ馬なんだから！」

馬車の中にはどつと大笑ひが起つた。青年達はナナの言葉に非常に面白がつた。ルキゼは何も分らないで、母の大きな聲に驚いて青い眼で彼女の方を見上げた。ラポルデットはまた捉まつてゐた。ローズ・ミニオンが、彼に合圖をした。そして彼女も彼に何か頼んだので、彼は手帳に金額を記入してゐた。それから、クラリスとガガが彼をまた呼び戻して、自分達の賭を變更した。彼女達は群衆の言葉を聞いて、ブレリオ二世をやめてリュジニヤンに賭けた。ラポル

デットは、無感覺な様子でそれを書き留めた。そしてやつと人々から逃れて、競馬場の向う側の二つの特別觀覽席の間に見えなくなつた。

馬車は續々と到着してゐた。今ではもう五列も並んで、人眼につく白馬を交へた雑色の大きな密集となつて、柵に添つて擴がつてゐた。そして、まだその彼方にも、多くの馬車が亂雑に、離れ／＼に、まるで草原に坐礁したやうになつて、車輪は入り亂れ、車に繋がれた馬は、並んだり斜めになつたり入れ違つたり、または頭と頭を突き合はしたりして、あらゆる方向に投げ出されてゐた。そして、まだ空いてゐる芝生を、馬に乗つて速歩で行く者や、徒歩の群衆などが眞黒になつて、しつ切りなしに進んでゐた。この大きな市日のやうな野原の上の、混亂する群衆の布模様の中に、屋臺店が汚ないテントを高く張り、太陽の直射がそれを白く照りつけてゐた。そして押し合つてゐる群衆の帽子の渦巻きは、殊に賭業者の周圍に起つてゐた。賭業者は幌を外した馬車に乗り、齒醫者のやうな身振りをして、その傍には、高い板に貼りつけた勝率表を掲げてゐた。

「どの馬に賭けるのか自分で知らないなんて、つまらないわね。」とナナが言つた。「私、自分だけの考へで何ルイか賭けて見るわ。」

彼女は立ち上つて、親切さうな顔をした賭業者を見廻し

た。すると、あちらにもこちらにも知り合ひの顔が見えるので、彼女は自分の考へを忘れてしまつた。ミニオン一家や、ガガや、クラリスや、ブランシユの外、右にも左にも、後ろにも、すつかり彼女の馬車を取り圍んだ澤山の馬車の中に、無蓋二人乗四輪馬車に乗つてゐるマリア・ブロンとタタン・ネネや、無蓋四輪馬車に母や二人の紳士と同乗してゐるカロリイヌ・エッケや、たゞ一人でメエシヤン厩舎の色の緑と橙色のリボンで飾つた小さい散歩用馬車を御してゐるルキズ・ヴィオレエヌや、一組の青年が大騒ぎをしてゐる四頭立四輪箱馬車の高い腰掛にかけてゐるレア・ド・オルンなどが見えた。更に離れたところには、貴族的な八個轡條馬車に、非常に清楚な黒服を着たリュシイ・スツワアルが、海軍少尉候補生の制服を着た背の高い青年の傍で、上品な様子をしてゐた。しかし、ナナを驚かしたのは、兩腕を組んでぢつとしてゐる一人の従僕を従へて、シュタイネルが御してゐる雁繫二頭立馬車に、シモンヌが乗つて來るのが見え

たことであつた。黄縞の白縞子づくめの腰から帽子までダイヤモンドで覆はれた着物を着て、彼女は眼も眩むばかりに着飾つてゐた。そして銀行家は、大きな鞭を振つて、前後に繋いだ二頭の馬を驅けさせてゐた。前の方は小さい金色の栗毛で、小刻みに速歩で駆け、後ろの方は大きい黒毛の逞しい馬で、脚高く速歩を踏んでゐた。

「まあ！」とナナが言つた。「あのシュタイネルの泥棒奴、また取引所をすつかり荒して來たんだわね！……どう？ シモンヌの粹なこと！ あれぢやあんまりだわ、また騒がれることでせうよ。」

しかしナナは、遠くから挨拶を交はした。彼女は手を振つたり、微笑んだり、また振り返つたりして、一人残らず誰からでも見て貰ふことを忘れなかつた。それから話を續けた。

「あの、リュシイが伴れてゐるのは息子なのよ！ 制服を着て、おとなしくしてゐるわ……だからリュシイはあんなに澄ましてゐるのよ！ 子供を恐れて、たゞの女優に見せかけようとしてゐるのよ……でも子供は可哀さうね！ 何も知らないらしいわ。」

「おや、おや！」と笑ひながらフキリッが囁いた。「しようと思へば、息子に田舎で遺産附きの娘を見つかることも出来るのですよ。」

ナナは黙つてゐた。丁度彼女は、車馬の最も雜鬧した眞中に、トリコン夫人を見つけたのだつた。乗りつけた辻馬車の中からは何も見えないので、トリコンは靜かに馭者臺の上に登つた。そして、その高いところから、背の高い體を眞直にして群衆を見下ろし、自分の知つてゐる婦人達を眺めてゐるやうだつた。婦人達は皆そつと彼女を見て微笑ん



だ。彼女は尊大に、そんな人々を知らないやうな風をした。彼女はこゝへ金儲けに來たのではなく、非常な賭好きで馬が大好きだったから、楽しみで出掛けたのだつた。

「おや！ あれはラ・ファロアズの馬鹿だよ！」と突然ジョルジュが言った。

それには誰も驚いた。ナナはもうそのラ・ファロアズを見違へてゐた。彼は遺産を繼いで以來、非常にはいからな男になつてゐた。二重カラーをし、ほつそりした肩にびつたりと合つた淡色の服を着て、頭には小さなリボン巻きつけ、氣取つて、體をだるさうに揺ぶりながら、甘つたるい聲で隠語を使つて、言葉を終ひまで言ふのさへ物憂さうな様子をしてゐた。

「まあ素敵だわ！」とナナは、夢中になつて言つた。

ガガとクラリスは、ラ・ファロアズを捕へようと、彼の方に體を乗り出して、その名を呼んでゐた。しかし彼は、輕蔑したやうなふざけた様子をして、直ぐ二人の傍からふらふらと離れて行つた。だがナナは彼を惹きつけた。彼は走つて來て、馬車の踏段に上つた。彼女がガガのことを冷やかすと、彼は呟いた。

「いゝえ、駄目ですよ、あんなお婆さんなんか！ もうがつかりです！ ねえ、お分りでせう、あなたですよ、私の愛するジュリエットは……」

彼は、胸に手を置いた。ナナは、彼のこんなに思ひがけない青空の下の告白を、大へん笑つた。そして、彼女は言つた。

「あらまあ、それどころぢやないわ。あなたは私が賭けようとしてゐるのを忘れさせてしまふのね……ジョルジュ、あすこに、賭業者があるでせう、肥つた赤ら顔の、縮れ毛のあの薄汚い悪黨面が氣に入つたわ……。あれを連れて來て頂戴よ……。連れて來られて？」

「私は愛國者ぢやありませんよ。ありませんとも！」とラ・ファロアズが口籠つた。「私はすつかり英吉利馬に賭けました……英吉利馬が勝てば素敵ですよ！ 佛蘭西人は皆狂人になるでせう！」

ナナは眉を顰めた。そして人々は馬の實力に就いて議論をした。ラ・ファロアズは、競馬通振つて、どの馬も皆驚馬だ。ヴェルディエ男爵のフランシバンはトルウスとレノールの血を受けた大きな鹿毛で、若し調馬の際に脚を痛めてゐなかつたなら、きつと勝利を獲るだらうとか、コルブルウズ厩舎のプレリオ二世は、四月に腹痛をやつたからまだ十分走れないが、それは隠してあるのだとか言つた。そして最後にアザールを勧めて議論を終つた。そのアザールはメエシャン厩舎の所屬で、どの馬よりも缺點の多い、誰も賭け手のない馬だつた。けれども彼は、馬鹿な！ アザール

は素晴らしい體格だ。そして、元氣旺盛だ！ これこそ競馬界を驚嘆させる馬だ！ と言つた。

「でもね」とナナが言つた。「私はリュジニヤンに十ルイとブウムに五ルイ賭けたとこのよ。」

すると直ぐラ・ファロアズは叫んだ。

「まあ、なんてことをしたんです。ブウムですつて！ そんなものに賭けちや駄目ですよ！ ガスクさへ自分の馬だのに見放してゐるんですよ……それにまたリュジニヤンなんて、冗談ぢやありませんよ！ 小羊とお姫様が勝つなんて、まあ考へても御覽なさい。駄目ですよ、小羊もお姫様も！ 脚が短かすぎますよ！」

彼はむせんで言葉を切つた。するとフキリップは、リュジニヤンはデ・カアルとランド・ブウル・デ・プロデュの賞金を獲たぢやないかと言つた。しかしラ・ファロアズは直ぐに答へた。それが何の理由になります、そんなことは何でもありませんよ。どうして、そんなことを信じてゐてはいけません。それに、リュジニヤンに乗るのはグルシムですよ。だから、誰も問題にしてゐないんですよ！ グルシムは賭には弱くて、勝つたことなんかありません。

そして、このナナの馬車の中で起つた議論は、芝生の端から端へと、擴がつて行くやうに見えた。騒がしい聲が高くなつて賭の熱が溢れてゐた。人々の顔は赤くなり、態度

は亂れてゐた。馬車の上に乗つ立つた賭業者は、夢中になつて勝率を叫び、金額を記入してゐた。だが、そこにはほんの小口の賭手しかゐらなかつた。大きな賭は、重量測定場の圍ひの中で行はれてゐたのだ。そして、ほんの百スウ位の少額の金を賭けて、それで數ルイをうまく儲けようとする數々の欲望を懷いて、激しく騒いでゐた。結局、スピリットとリュジニヤンの間の大競走を想像されてゐた。見た眼にそれと分る英吉利人は、群衆の中を、顔を燃え立たせ、既に勝ち誇つて、母國にゐるやうに悠々と歩き廻つてゐた。リーディング卿所有のブラアマアは、去年大賞金を獲得してそのときに負けた記憶は、今も人々の心に痛々しく残つてゐた。今年もまた佛蘭西が負けるやうだつたら、何といふ不幸なことか分りやしない。それで婦人達は皆、國民的自尊心から興奮してゐた。ランドゥル厩舎は佛蘭西の名譽を守る城壁になつた。人々はリュジニヤンを勵まし、辯護し、際援した。ガガや、ブランシュや、カロリヌや、その他の者もリュジニヤンに賭けた。リュシイ・スツワアルは息子の手前を思つて賭けなかつた。その時ローズ・ミニオンが、ラポルデットに二百ルイ賭けるのを委任したと言ふ評判が擴がつた。たゞ獨り、トリコンだけは取者の傍に腰掛けて、争論の眞中で非常に冷静に、次第に高まる喧騒を他處にして、最後の瞬間を待つてゐた。英吉利人の喉から出る感嘆の叫



びに交つて、巴里兒の生々とした言葉が聞え、その喧騒の中にも、色々な馬の名が繰り返されてゐた。トリコンは耳を傾けながら、威厳のある態度で何か書きつけてゐた。「ナナには？」とジョルジュが言った。「誰も賭けないのだらうか？」

實際、ナナには誰も賭ける者がなかつた。その名は人の口に上らなかつた。ワンドゥル厩舎の見込みのないこの馬は、リュジニヤンの人氣に消されてしまつてゐた。しかし、ラ・ファアロアズが兩手を上げて言った。

「僕は啓示を受けた……。ナナに一ルイ賭ける。」

「萬歳！僕は二ルイだ。」とジョルジュが言った。

「僕は三ルイだ。」とフキリップが和した。

そして、彼等はだん／＼金額を上げ、愉快さうに、丁度競賣でナナを賭つてゐるかのやうに金額を公表しながら、ナナの御機嫌をとつた。ラ・ファアロアズは、ナナのためになら金を惜しまないと言つた。もう皆も賭けなければならなくなつたので、しきりに賭手を勧誘してゐた。三人の青年が宣傳に出掛けようとする、ナナが呼び止めた。

「ね、私そんなことして貰ひたくないわ、ほんとよ……。ジョルジュ、リュジニヤンに十ルイとブレリオ二世に五ルイよ、さう言つてね。」

しかし、彼等は走つて行つた。彼女は愉快さうに、青年

達が馬車の間に入つて行つて、馬の首の下で身を屈め、芝地中を歩き廻つてゐるのを見つめてゐた。彼等は、馬車の中に誰か知つた顔を見つけると、走つて行つてナナを勧めた。そして、時々彼等が得意になつて、指で數を示しながら振り返ると、群衆の中にとつと笑ひ聲が起つた。ナナは立ち上つて、日傘を動かしてゐた。しかし、仕事はうまく行かなかつた。數人の男が聞いてくれただけだつた。例へばナナの眼に動かされたシュタイネルが三ルイを賭けたが、婦人達は残らず拒絶した。どうしまして、きつと敗けますからね！白馬や従僕を連れて、世界を呑み込むやうな態度で私達を壓倒してゐるあんな汚ならしい女の成功のため、骨折りを強ひられる事はないわと言つた。ガガとクラリスはひどく勿體振つてラ・ファアロアズに、私達を馬鹿にしてゐると訊いた。ジョルジュが大膽にも、ミニヨン一家の馬車の前に顔を出すと、ローズは苛立たしく顔をそむけて答へなかつた。馬に自分の名前を付けるなんて、まあ何といふ穢らはしいことせう！と呟いた。これに反して、ミニヨンはジョルジュの言葉に従つた。女は何時でも幸福を齎すものですよ、と嬉しさうに言ひながら。

「どう？」とナナが、賭業者のところへ長い間行つてゐて歸つて来た青年達に訊いた。

「あなたは四十分の一ですよ。」とラ・ファアロアズが言つた。

「幾らですつて？ まあ、四十分の一ですつて！」と、彼女は驚いて言つた。「まあ四十分の一……どうしたんでせう？」

丁度そのときラポルドットが再び現はれた。馬場は閉ざれ、鐘が鳴つて最初の競馬を告げた。そして、一同が熱心になが／＼といふ中で、彼女はナナの勝率が突然騰つたことに就いて彼に訊ねてゐた。彼は逃げるやうに、それはきつと申し込みがあつたのでせうと答へた。それ以上の説明は聞かれなかつた。そしてラポルドットは忙がし／＼に、ワンドゥルがあちらを脱けられさへすればこゝへ来るでせうと告げた。

巴里大賞競馬の期待に打ち消されて、最初の競馬がまるで注意されずに終つた頃、雲が競馬場を立て罩めた。すぐに太陽は隠れて、鉛色の日光が群衆の心を暗くした。風が起り、それが俄かに豪雨になつて、大粒の雨が盆を覆へすやうに降り注いだ。混乱や、網叫や、冗談や、罵り聲が、急いで先を争つて露店の天幕に走り込む徒歩者の中に起つた。馬車の中の女達は、身を隠さうと兩手で日傘に獅噛みつくし、従僕達は驚いて幌に駆けつけた。しかし、驟雨はもう止んで、まだ飛び散つてゐる埃のやうな雨の中に、太陽がまた輝いた。森を越えて運ばれて行く雲の後に、青い裂目が開かれた。それはまるで空が上機嫌になつたやうな

もので、ほつと安心した女達は、笑聲を湧き立たせた。ばつと日の光が射して、馬の鼻息や、つぶ濡れになつて頼へてゐる群衆の混乱した騒ぎの中に、水晶の玉を滴らしてゐる芝生を照らしつけた。

「まあ！可哀さうなルキゼ！」とナナが言つた。「ひどく濡れたかい、坊や？」

子供は黙つて手を拭いて貰つてゐた。ナナはハンカチでルキゼを拭いてから、前よりもひどく頼へてゐるビジュウを拭いた。彼女の着物の白絹子に汚點が附いたのを、どうすることも出来なかつたが、彼女は氣にも懸けなかつた。花東は生き／＼として雪のやうに輝いた。彼女は唇をすつかり露で濡らしながら、その一つを嬉しさうに吸つた。

しかしこの驟雨は、急に觀覽席を人々で満たした。ナナは雙眼鏡で見渡した。その距離からは、たゞスタンドの上に、密集し混乱して積み重つた一塊の、蒼白い顔が點々と光つてゐる暗い色にしか見えなかつた。太陽は、屋根の端から照りつけて、その光の稜で、腰掛けてゐる群衆を追ひ除けた。

それは、着物の色が褪めるからしなかつた。しかしナナは、殊に特別席の下の、砂の上に列んでゐた椅子席から、驟雨に追ひ立てられた貴婦人達を面白がつて眺めてゐた。重量測定場の圍ひの中へは、婦人達の入場が嚴禁されてゐたので、ナナはそれらの身分の高い貴婦人達が、着物の着方も



まづく、髪形も可笑しいのを、溜飲を下げて眺めてゐた。場内がどよめいた。皇后陛下が中央の特別席の、山荘の形に張つた天幕に臨場された。その大きな露臺には赤い絨掛椅子が並んでゐた。

「おや、伯爵だ！」とジョルジュが言つた。「今週は供奉だとは思ひませんでした。」

ミラファ伯爵の四角張つた嚴めしい顔が、皇后陛下の後に見えた。すると青年達は、サタンがそこにゐて彼をとつちめるのが見られないので残念だと言つて、からかつた。その時ナナは陛下の觀覽席にゐるスコットランドの王子の顔を、雙眼鏡で見つけた。

「まあ！王子だわ！」と彼女が叫んだ。

彼女は、王子が肥つた事に氣づいた。一年半の間に大きくなつてゐた。それから彼女は色々の詳しい話をして、お

お！なんてお強さうに見えることだらう、と言つた。彼女の周囲の貴婦人達の馬車の中では、皆が、伯爵はナナと別れた、と小聲で話してゐた。それはまるで物語のやうだつた。伯爵がナナと關係したといふ評判が立つてから、テイルリイ宮殿の人々は侍従長の行爲を非難してゐた。それで、彼は地位を保つためにナナと手を切つた、といふ話だつた。ラ・ファロアズがまたやつて来て、彼女を『私のジュリエット』と呼びながら、忠義ぶつて、あけすけにこ

の話ナナに傳へた。すると、彼女は陽氣に笑つて、言つた。

「嘘よ……あなたはあの人を知らないのよ。あの人なら、私が『ちよいと』と言ひさへすれば、何でも抛り出してしまふわ。」

少し前から、彼女はサビイヌ夫人とエステルを注意して眺めてゐた。ダグネも二人の傍にゐた。今着いたばかりのフォシヨリイは、彼女等に挨拶するために、人々の間を通つてゐた。そして彼も微笑を浮かべながら、そこへ行つた。その時ナナは、輕蔑したやうな態度で特別席を指さしながらかう言つた。

「私はもうあんな人達はちつとも怖くないのよ！……あんな人達のことなら知り過ぎてゐますもの。まるで行商人の見切品みたいだわ！もう尊敬なんかしないの！尊敬なんか種切れよ！汚ららしい事は下層だつて上流だつて、變りやしないわ、同じ仲間だわ……え、だから私は、人に輕蔑なんかされたくないの。」

そして彼女は、大袈裟な身振りをして、競馬場で馬を牽いてゐる馬丁たちから、王子ではあるが、汚らしい男のチールスや、彼と話してゐる陛下に至るまでを指し示した。

「萬歳、ナナ！……素敵だ、ナナ！……」とラ・ファロアズ

が感激して叫んだ。

鐘の音が風に消えて、競馬が續いてゐた。今、イスバアンの賞の競走が終つて、賞金はメエション厩舎のベルランゴオに落ちた。ナナはまたラポルデットを呼んで、彼女が預けた百ルイの形勢を聞いた。彼は笑ひながら、折角の幸運を逃がすからといつて、それを賭けた馬を知らせようとはしなかつた。まあ見て、御覽なさい、うまくやつてありますよ、と言つた。そして彼女が自分で、リュジニヤンに十ルイとアレリオ二世に五ルイを賭けたことを打明けると、彼は、女といふものは何時も馬鹿なことをするものだ、と言はんばかりに肩を聳やかした。彼女は驚いて、何のことだか譯が分らなかつた。

その時、芝生は一層活氣づいて來た。巴里大賞を前に控へて、晝食が始まつたのだつた。人々は食べるよりも寧ろ飲んだ。殆んど到るところで、草原でも、一人騎四頭立馬車の腰掛の上でも、二人乗四輪箱馬車でも、四頭立幌馬車ででも飲んでゐた。従僕の手で函の中から取り出された冷肉が並べられ、シャンパンが運ばれた。その椀は小さい爆音を立て、抜かれ、その音が風の中へ運ばれて消えた。冗談が言ひ交され、コップの碎ける音は、この興奮した陽氣さの中へ微かな調子を加へた。ガガとクラリスはブランシユと一緒に、膝の上に掛けた毛布の上で、つましくサンドウィッ

チの食事を取つた。ルキズ・ヴィオレエヌは散歩用馬車から降りて、カロリイヌ・エッケと一緒に立つた。二人の足許の芝生では、紳士達が食事を持ち寄つて、そこへタタンや、マリアや、シモンヌやその他の人達が飲みに来てゐた。そしてまた、他の人々はその傍のレア・ド・オルンの四頭立四輪箱馬車の上で、シャンパンを抜いてゐた。その連中は周囲の見物よりも一段と高いところで、みな日向で酔つぱらひながら傍若無人に振舞つた。すると今度は、人々はナナの四輪幌馬車の前へ押し寄せて來た。彼女は立ち上つて、挨拶をする人達にシャンパンを注ぎ始めた。従僕の一人のフラスソアが瓶を取り次いだ。こちらではラ・ファロアズが、卑しい聲を出して香具師の口上を眞似た。

「ずつとお近寄りなさい、皆様……え、これはたゞですよ……どなたにでも差し上げます。」

「およしなさい。」遂にナナが言つた。「香具師のやうだわ。」彼が非常に滑稽な様子をするので、彼女は大層面白がつた。彼女は、飲まない振りをしてゐるローズ・ミニヨンのところへ、ジョルジュにシャンパンを一杯持たせてやらうかと、ちよつと考へた。退屈し切つてゐるアンリイさんにシャルルさん、一杯召し上りませんか、と言はせようと思つたのだ。しかしジョルジュが喧嘩になるのを恐れて、自分でそれを飲んでしまつた。するとナナは、自分の後に忘れてゐたルキゼ



のことを思ひ出した。きつと咽喉を渴かしてゐるだらう、と思つて、無理にルキゼに少し葡萄酒を飲ませると、恐ろしく咳き込んだ。

「お近寄り下さい、お近寄り下さい、皆様。」とラ・ファロアズは繰り返した。「これは一スウでもありません、一スウでもありません……私どもはたゞで差し上げるのです……」

その時ナナは、叫び聲を上げて彼を遮つた。

「おや！ ボルドナアヴだわ、あそこに……呼んで頂戴よ。ねえ！ お願ひだから、走つて行つて頂戴よ！」

それは陽に焼けて赤くなつた帽子を被り、油染みて縫目が白くなつたフロックコートを着て、腕を後へまはして散歩してゐるボルドナアヴであつた。破産のために光澤を失つたといふ恰好のボルドナアヴだが、それでも威勢よく上流社會の人々の前にその貧窮ぶりを見せながら、財産なんか何時でも捨てる覺悟のある男の勇氣を示してゐた。

「やあ、どうも！ これや大したもんですな！」ナナが氣質の優しい女らしく手を差し出すと、彼は言つた。

そしてシャンパンを一杯飲んでから、忌々しさうにかう言つた。

「あゝ！ 私が女だつたらなあ！ だが、まあ、それも仕方のないことだ！ お前さんは劇場へ歸りたいかね？ わしはゲエテ座を借りる算段をしてゐるんだが、二人で巴里

を騒がせようよ……。どうだい？ それにはお前さんに助けて貰はなくちやあね。」

そして彼はぶつ／＼と咳きながらも、ナナに會つたのを喜んでゐた。彼は、かうして親切なナナが心に慰安を與へてくれ、彼女の前にゐれば、たゞ生きることにより外に何も考へない、と言つた。彼女は彼の娘であり、彼の眞實の血であつた。

周圍の人数は次第に増して行つた。今では、ラ・ファロアズがシャンパンを注いでゐた。フキリップとジョルジュは友達を集めに行つてゐた。人々の押し合ひが、緩やかに芝生の全部に少しづつ起つて行つた。ナナは誰にでも微笑みかけ、おどけたことを言ひかけた。酒飲みの群が近寄つて來た。方々から總てのシャンパンが、彼女を指して進んで來た。間もなく彼女の四輪幌馬車の周圍には、もはや群衆と喧嘩ばかりが舞めいた。そして彼女は、金髪を露へしながら、陽を受けた雲のやうに白い顔をして、差し出されたコップの前に君臨してゐた。その騒ぎの絶頂で、彼女の勝利に憤慨してゐる女達の膽を奪つてやらうとして、あの昔の勝ち誇つたヴェニスの姿勢で、なみ／＼と注いだ盃を彼女は高く擧げた。

誰か彼女の背中に觸つたので、驚いて振り向くと、腰掛の上にミニオンが來てゐた。ミニオンは何か重大なこと

を告げに來たらしいので、彼女は一寸姿を隠して彼の傍に腰掛けた。ミニオンは自分の妻がナナを怨んでゐるのは笑ふべきことだと到るところで言つてゐた。彼はそれを愚かなことで、しかも無益なことだと思つてゐた。

「かうなんですよ、お前さん、」と彼が囁いた。「氣をお附けなさい、ローズを餘り怒らしちやいけませんよ……お分りでせうが、一寸お知らせして置かうと思ふんです……さうだ、あれは武器を持つてゐますよ、それに『公爵夫人』の事件では、どうしてもお前さんを赦さないんですからね……」

「武器ですつて。」とナナが言つた。「それで私をどうするつていふの！」

「まあお聞きなさい。あれがフォシユリのポケットから手紙を見つけたんですよ。サビイヌ夫人からフォシユリの奴にやつた手紙なんです。言はなくとも分つたことだが、悪いことにその中には、まあいろんなことが澤山書いてあるんです……。で、ローズはその手紙を伯爵に送らうてんです。伯爵とお前さんに復讐するために。」

「で、私をどうしようつていふの？」とナナは繰り返した。「そりやまた可笑しいわね……そんなことは……あゝ！ それやフォシユリのことぢやないの。えゝ、かまはないわ！ 私を困らせて下さるのは結構よ。笑つてやりませうよ。」

「いゝえ、どうして、そいつはいけませんよ。」とミニオン

がきつぱり言つた。「そんなに甘く見ちゃ！ それに、そんなことをしたつて得がいくことぢやなし……」

彼は言ひ過ぎるのを恐れて言葉を切つた。彼女は、きつともうサビイヌ夫人を助けてなんかやらないわ、と叫んだ。しかし彼が執拗く言ふので、彼女はぢつと見返した。きつと彼は、フォシユリが、もし伯爵夫人と別れることになれば、また自分の家庭の方へやつて來るので、それを恐れてゐたのだ。だが、それこそ、總てに復讐しようとするローズの願つてゐるところだつた、彼女は記者に對しては愛情を持つてゐたから。ナナは考へ込んでゐたが、ヴォオの訪問を思ひ出すと、或る計畫を考へつた。ミニオンはその間も彼女を説き伏せようと努めてゐた。

「ローズが手紙を送るのを捨て、置くんですか？ 騒動が起りますよ。お前さんにも掛り合つてゐるんですからね。それに、お前さんが總ての原因だと言つてゐるんです……。先づ、伯爵が夫人と別れたのも……」

「どうしてそんなことが。」と彼女は言つた。「まるで反對ですよ……」

今度は彼女が口を噤んだ。彼女は自分の考へを明らかに言ひたくなつた。そして、もう煩さくなつたので、ミニオンの意見を聴くやうな風をした。そして、ミニオンが彼女に、皆の前でローズの傍へ來るやうに、例へば、この競



馬場でちよつと訪問するやうに勧めると、ナナは、まあ考へて見てから、と答へた。

どよめきが彼女を席から立ち上らせた。競馬場では數頭の馬が、疾風の中を駆けてゐた。それは市賞で、コルヌミユウズがそれを獲得した。今や、巴里大賞の競走が初まらうとしてゐた。人氣は沸騰し、不安が群衆の心を掻き亂した。この數分間を早く済ませようとして、群衆は足踏みをし、體をうねらせた。そしてこの最後の時に當つて、豫想外の出來事が賭手を驚かせた。それはワンドゥル厩舎の、見込みのない馬ナナの勝率が絶え間なく騰貴することだつた。紳士達は刻々に新しい勝率を齎して歸つて來た。ナナは三十分の一の勝率に達した。ナナは二十五分の一に、二十分の一に、次いで十五分の一に。誰にもその理由が分らなかつた。この若い牝馬はどこかの競馬にも敗つてばかりゐたのに、まだ朝の間は五十分の一でさへ一人の賭手もなかつたのに！この突然の狂氣沙汰は何を意味してゐるか？或る人々はこの笑劇を演つてゐる馬鹿者共に對して、痛快な輕蔑の言葉を放つて、少しも取り合はなかつた。他の人々は眞剣に心配して、その裏面に何か疑はしいものが存在すると見て取つた。恐らく何かあつたのだらう。人々はさういつた前例や、競馬場で默認されてゐる詐欺について話してゐた。しかし今日は、ワンドゥルと云ふ偉大な名前が、

そんな非難を阻止してゐた。しかし疑ひ深い人々が、きつとナナは最後になるだらうと言ふと、またそれに心を動かされる人が多かつた。

「ナナに誰が乗るんです？」とラ・フロアズが訊いた。丁度この時、ほんとのナナがまた姿を見せた。すると紳士達は、その問ひに卑猥な意味をつけて大袈裟にとつと笑聲を上げた。ナナはそれを引き取つて、

「ブライスですわ。」と答へた。

また議論が始まつた。ブライスは、佛蘭西では知られてゐないが英吉利では有名な騎手だつた。何時もグルシャムがナナに乗りつけてゐたのに、なぜまたワンドゥルはこの騎手を呼び寄せたのだらう？それにまたそのグルシャムにリュジニヤンを委したことも腑に落ちなかつた。ラ・フロアズは彼を一度も勝つたことのない騎手だと言つた。しかしそれらの話は皆、冗談や打消しの言葉や突飛な區々の意見などの喧騒の中に溶け込んでしまつた。人々は時間潰しにまたシャンパンを抜き初めた。するとその時、或る騒が起り、群衆がばら／＼になつて少しづゝ組を作つた。ワンドゥルが來たのだつた。ナナは怒つて見せた。

「まあ！今頃いらつしやるなんて、あなたも随分親切な方ね……私、重量測定場が見たくつてならないのよ。」

「ぢや、一緒においで。」と彼が言つた。「まだ時間はある

から。一廻り御覽よ。丁度こゝに婦人入場券を一枚持つてるから。」

そして彼は、リュシイや、カロリイヌや、その他の女達の見送る羨望の眼を嬉しく感じてゐるナナの胸をとつて連れ去つた。彼女が出た後の四輪幌馬車に残つてゐたユーゴンの息子達とラ・フロアズは、シャンパンの接待を續けてゐた。彼女は、すぐ歸つて來ますわ、と言つた。

ワンドゥルは、ラポルドットを見つけると彼の名を呼んだ。短い言葉が交はされた。

「すつかり集まつたかい？」

「ええ。」

「幾ら？」

「千五百ルイ、これで全部です。」

ナナが聴き耳を立てると、二人は黙つてしまつた。ワンドゥルは、非常に興奮し、情熱の漲つた輝く眼をしてゐた。これは前夜、彼が馬と一緒に焼け死ぬのだと言つた時に、ナナを恐怖させた眼だ。競馬場を横切りながら、彼女は低い聲で親しく話し掛けた。

「ね、教へて頂戴よ、……どうしてあの若い牝馬の勝率が騰るの？大騒ぎだよ！」

彼は體を顫はせて、思はず口を滑らした。

「あゝ！それはね……それにしても何といふ連中だら

う！私が折紙付きの優勝馬を持つてゐれば、我も／＼と押し寄せて來て、私には何の儲けにもならないし、それかといつて勝目のないのを出せば、まるで人が掠め取つたかなんかのやうに悪口を言ふんだからね。」

「前から知らせて下さればいいのに、私は賭けてしまつたのよ。」と彼女が言つた。「あの馬には勝目があつて？」

突然理由もなく彼が怒り出した。

「何だつて？煩さいな……どの馬にだつて勝目はあるよ。勝率が騰るのも當り前だよ！人が賭けるんだからな。誰が賭けるといふのか？そんなことは知らないよ……。まだそんな愚問をして私を弱らせるんなら、もうあんたを捨てて行くよ。」

その語調は、彼の氣質にも彼の習慣にもないものだつた。彼女は侮辱を感じる前に驚いた。しかし彼は、すぐそれを恥かしかつた。そして彼女が冷やかな口調でもつと丁寧に話して下さいと言ふと、彼は言ひ譯をした。この間から、こんなに俄かに氣持が變るのだつた。陽氣で上調子な巴里の人々は誰も、この日彼が最後の勝負をやつてゐるとは知らなかつた。もし彼の馬が負けて、人々がまたしても彼の馬に賭けた莫大な金額を彼から奪ふなら、それはもう破滅であり、没落だつた。足場のぐらつき出した生活を漸く保つてゐる彼の信用の基礎や立派な外觀は、混亂と負債



によつて空虚にされ、地響きを立て、倒れるであらう。誰一人知つてゐる者はゐないが男喰ひのナナは、世の中の男を喰ひつくして、最後にこの搖ぎ始めた財産に喰ひつきに來たのだ。彼女の氣狂ひ染みた氣紛れは人々の評判になつてゐた。バアドでは賭博をやつて、伯爵がホテルに拂ふ金まで残らず捨て、しまつた。或る酔つ拂つた夜などはダイヤモンドを寄せ集めて、燃えさかる炭火の上へそれが燃えるかどうか見るために投げ込んだ。その豐滿な肉體とその場末女らしい卑しい笑ひとで、彼女は次第に、あんなに瘦せて纖弱な古い家系の後を享けた伯爵に襲ひ掛つて行つたのだつた。今では伯爵は、穢らしい卑しい趣味に浸されて、疑ふ力までも失つて、一切を賭してゐたのだつた。一週間ばかり前に、彼女はアーヴルとツルウヰルの間のノルマンディの海岸に、城館を買ふ約束を伯爵にさせてしまつた。彼はその約束を果たすことを最上の光榮と考へてゐるのだつた。あまり彼女が煩さくするので彼女を打ち倒してしまひたいと思ふほど、彼は彼女を馬鹿だとも思ふのだつた。番人は、伯爵と腕を組んだこの婦人を押し止めることも出來ないので、二人を重量測定場の中へ通した。たうとうこの禁止された場所へ入つたことに夢中になつて、ナナは、特別觀覽席の下に腰掛けてゐる貴婦人達の前をゆつくり歩きながら、自分の身嗜みに注意した。それは氣持のいゝ空

の下に、その色をくつきりと入りまじらせた、十列の椅子に腰掛けてゐる衣裳の並んだ、奥行のある集團だつた。椅子と椅子は離れてゐた。偶然に出會つた人々が、ちやうど公園の五點形植附の下へ集つたやうに、すぐに親しい輪を作つた。子供は自由に、一つの組から他の組へ走り廻つてゐた。それより高い特別席は、群衆を乗せた階段を積み重ねて、そこでは明るい色の織物が、木組みの微妙な影に溶け合つてゐた。ナナは貴婦人達の顔を見つめた。ちつとサビイヌ夫人を見つめてゐるらしかつたが、彼女が皇室席の前を通ると、皇后陛下の傍に儀式張つてぎこちなく立つてゐるミラファ伯爵の姿が彼女を愉快にした。

「おゝ！ なんて間の抜けた恰好をしてゐるんでせう！」と彼女は高い聲でワンドゥヴルに言つた。

初め彼女は隅から隅まで見廻りたがつてゐた。だが、芝生や木立のあるこの園の一角は、彼女にはあまり面白くなかつた。柵の傍の大きな棚には氷の塊が置いてあつた。茸のやうな田舎風な葎屋根の下には、人々が押し合つて手振り身振りして話しながら叫んでゐた。それが申込所だつた。その傍の厩舎は空で、憲兵の馬が、一頭あるだけなのを見て、彼女はがっかりした。次に、調馬場があつた。一周百メートル位ゐる馬場で、厩舎の若者が、覆ひを被せたアレリオ二世をひき廻してゐた。砂利を敷いた通路には、鉛孔に橙色の

切符を挿した澤山の人々が見えた。そして特別席の開け放された歩廊には、しつ切りなしに人群れの續いてゐるのが一寸彼女の注意を惹いたが、女達には入場が禁止されてゐたのだから、別に腹を立てることもなかつた。

通りかゝつたダグネとフォシユリイが、彼女に挨拶した。すると彼女が合圖をしたので、二人は通り過ぎる譯にもゆかなかつた。彼女はこの園の中の悪口を言つた。それから話を切つて、

「おや！ シュアール侯爵だわ。まあ老けたこと！ 死にさうぢやないの、あの老人は！ それで、何時も許々してゐるの？」

するとダグネはこの老人の最近の出來事を話した。それは一昨日の話で、まだ誰も知らなかつた。シュアールは幾月も思案した擧句に、ガガから娘のアメリカを三萬法で買ったのだつた。

「みつともないことね！」とナナは氣を悪くして叫んだ。「娘を持つといゝわね！……私、さう思ふわ！ あら、リリだわ、あすこの芝生へ、箱馬車に乗つて貴婦人と一緒に入つて來たのは、あの婦人の顔も見たことがあるやうだわ……例の老人が出てやつたのでせう。」

ワンドゥヴルは許々し、もうその場を外したくて、彼女の言葉を聞いてゐなかつた。しかしフォシユリイが別れ際に、

もし賭業者をまだ見なかつたら、こゝへ何を見に來たのか分らないと言つたので、伯爵ははつきりと厭な態度を示しながらも、また彼女を連れて行かなければならなかつた。それは非常に珍らしい事だつたので、彼女は大喜びだつた。小さな建物で、橡の若木で縁どられた芝生と芝生の間にあつた。その若葉の蔭に、賭業者が賭手を待ちながら、まるで市日のやうにぎつしり詰合つて、大きな輪になつて並び、木の腰掛の上に立ち上つて群衆を見下ろし、傍の木の幹に勝率表を掲げてゐた。眼を皿のやうにして、身振りや目配せで賭金を記入してゐるその動作が敏捷なので、野次馬連は口をばかんと開けて、譯も分らずにそれを見つめてゐた。それは大變な騒ぎで、數字が次々に叫ばれ、豫期しない勝率の變化が喚聲を以つて迎へられた。そして櫛の齒を引くやうに駆けつけて、走つてゐるうちからもう口を開けて、建物の入口に立ちどまると直ぐ高い叫び聲で、スタートや勝敗を報じてゐた。益々騒ぎは大きくなり、その度毎に長いざわめきが、暑熱に煽られたこの賭博の情熱の中に起るのだつた。

「可笑しな人達だわ。」とナナがひどく面白がつて言つた。「何だか譯の分らない顔付をしてゐる人達ね……ほら、あの大きな人なんかと、森の奥で一人で出會つたら、どんな氣がするでせう。」



すると、ブンドゥルは彼女に一人の賭業者を指した。それは小間物屋の手代で、二年間に三百萬法を儲けた男であつた。體の細い、華奢な好男子で、人々の尊敬の的になつてゐた。誰でも彼には笑顔を作つて話しかけ、中には立ち止つて彼の姿を眺める者もあつた。

遂に二人はその建物から離れた。するとブンドゥルは、自分の名を呼んだ賭業者の一人に一寸顔で合圖をした。それは彼の昔の馭者で、牛のやうな肩をし、血色のよい横柄な顔をした大きな男であつた。出所の怪しい資金から競馬で一と當あてようとしてゐたが、伯爵は彼を引き立てようと努めて、相變らず人前でも構はずに下男扱ひにした。自分の秘密の賭の手先に使つてゐた。そんなに保護してもらつてゐるにも拘らず、彼は續けざまに少からぬ金を失つて、今日こそはと、腦溢血でも起しやうに眼を血走らせながら、その最後の札を張つてゐるのだつた。

「ところでね、マレシャル」と、非常に低い聲でブンドゥルが訊いた。「お前はあれに幾ら賭けたのかね？」  
「五千ルイでございますよ、伯爵様。」とその賭業者が、同じやうに聲を低くして答へた。「どうでせうか？ それで宜しいと思ひますが……。實は、勝率を下げ、三分の一にしたのでございます。」  
ブンドゥルは非常に不機嫌な様子をした。

「いや、いけないよ。それやいけないよ。すぐに二分の一に直して来い……これ以上はもう言はないよ、マレシャル。」  
「お、伯爵様。今となつてはもう仕方がありません。」とマレシャルは共謀者らしく祕かな微笑を浮べて言つた。「あなたの二千ルイを賭けるために、私は人々を寄せ集めなければなりませんでしたよ。」

その時、ブンドゥルは彼を黙らせた。しかし伯爵が立ち去ると、マレシャルは思ひ出して、あの若い牝馬の勝率の騰貴について訊ねなかつたのを残念に思つた。もしもあの若い牝馬に勝目があるのなら、自分が五十分の一でそれに二百ルイを賭けてゐることもうまく行くのだつた。

ナナには、伯爵の囁いてゐた言葉が少しも分らなかつたが、もう一度説明を求めようとはしなかつた。伯爵は一層苛々してゐるやうに見えた。そして重量測定室の前で出會つたラポレットに、彼女を委せてしまつた。  
「この人をあちらへ案内してくれ給へ。」と彼は言つた。  
「私には、一寸用があるから……ではまた。」

そして伯爵は測定室に入つて行つた。それは狭い室で、天井は低く、大きな秤が場所を塞いでゐて、まるで町はづれの停車場の荷物取扱所のやうであつた。こゝでもまたナナは失望した。彼女は、馬を量るために非常に大きな見上げるやうな機械が何かあるのを想像してゐた。まあ、ど

うだらう、騎手しか置れないやうなものぢやないの！これでは測定するなんて威張る値打はないわ！と言つた。一人の騎手が間の抜けた様子で、膝の上に馬具をのせてその秤に乗つて、フロクコートを着た肥つた男がその重さを検査するのを待つてゐた。そして扉口では、厩舎の若者がコジニユスを抑へてゐた。その周囲には人々が集つて、黙つて一心に眺めてゐた。

馬場が閉められようとしてゐた。ラポレットはナナを促した。しかし彼はまた一寸後戻りして、少し離れたところでブンドゥルと話してゐる小柄な男を彼女に指し示した。  
「あれがブライスですよ。」と彼は言つた。  
「あゝ！ さう、私に乗るのはあの人の。」と彼女は笑ひながら囁いた。

そして彼女はその男が非常に醜いを知つた。ナナには總ての騎手が佝僂のやうに思はれた。きつと騎手は大きくなれないやうにされてゐるのだわ、と彼女は言つた。その騎手は四十恰好で、瘦せた、皺の深い、硬ばつた無表情の長い顔の、まるでひからびて老けた子供のやうだつた。體は節くれ立つて、縮こまつてゐたので、白い袖の附いた青い胴着が、木に着せかけてあるやうに見えた。  
「あれぢや駄目だわね、」と彼女はそこを離れながら言つた。「あんな男なら勝てないわ。」

雜間はまだ馬場を満たしてゐた。そこでは、濡れて踏みつけられた草が黒くなつてゐた。鑛鐵の柱が高く掲げられた二つの掲示板の前では、群衆が頭を上げてがや／＼騒ぎながら、馬の番號が騎手室から接續された電球で照らし出されるのを、待つてゐた。皆が番附を指してゐた。ピッシュネットをその持主が引つ込めたので、騒ぎが起つた。ナナはラポレットの腕に縋つて、やつとそこを横切ることが出来た。旗橋に釣り下げられた鐘は、人々を馬場から退かすために、執拗く鳴り續けてゐた。

「ねえ、あんた方！」と四輪幌馬車に乗りながら彼女は言つた。「重量測定場だなんて大袈裟だわ！」  
皆は彼女を喜んで迎へて、その周りで手を叩いた。「萬歳！ ナナ……ナナが歸つて来た……」と叫んだ。すると彼女は、まあみんなお馬鹿さんね、私を浮氣女とも思つてゐるんですか？と言つた。しかし彼女は丁度よい時に歸つて来た。さあ！ いよいよ／＼始まつた。シャンパンは忘れられ、もう盃を持つてゐる者はなかつた。

しかしナナは馬車の中に、ビジュウとルキゼとを膝に載せたガガがあるのを見て驚いた。ガガは、子供が抱きたくて仕方がないといふ口實を作つて、ラ・フロアズの傍に来ようと思ひついたのであつた。彼女は非常に子供好きなんだと言つた。



「ときに、リリを教へて下さらない？」とナナが訊いた。  
 「あれ、あすこの、あの老人の箱馬車にゐるのが、きつとり  
 リでせう？……先刻、何だかい、話を聞いたわ。」

ガガは悲しげな顔をした。  
 「ね、あなた、私はそれで病氣になりましたの。」と、苦し  
 さうにガガが言った。「昨日は、私、寝なきやならない位  
 でしたわ、ずいぶん泣きましたよ。今日出て来られるとは  
 思ひませんでしたわ……。ね、あなたは、私の考へがどう  
 だつたか御存じでせう？ 私はあんなにしたいくはありませ  
 んの、私はあの娘を立派に結婚させようと思つて、修道院  
 で育てました。そしてあの殿しい叱言や、絶え間のない監  
 督や……それなのに、ね、あなた、あの娘があんなにし  
 たがつたのですよ。え、喧嘩もしました、涙を流して、  
 厭な言葉を言ひ合つて、しまひには私があ娘の頭を敲き  
 さへしました。あの娘はひどく退屈して、それを脱れたが  
 つてゐました……。すると、あの娘はかう言ひ出しました  
 の、『お母さんでも私のすることを妨げる権利はない筈よ。』  
 つてね。それで私はあの娘に言ひました、『情ない娘だね、  
 お前は私達の顔を汚すのです、さあ出てお行き！』そんな  
 次第で、私はあゝなるのを承知しなければならなかつたの  
 です……。だけど、もう私の最後の望みもなくなりました、  
 私は夢を見續けてゐたのに、何もかもあんなにうまく行つ

てゐましたのに！」

喧嘩の騒ぎが二人を立ち上らせた。ジュールジュが、群衆の根  
 のない噂に對して、ブンドゥルを辯護してゐるのだつた。  
 「どうして彼があ馬を見離したなど、言ふんだい？」と  
 この青年は言つた。「昨日、競馬俱樂部で、彼はリュジニヤ  
 ンに一千ルイを賭けたんだよ。」

「さうだ、僕はそこにゐた。」とフキリップが斷言した。「そ  
 して、彼はたつた一ルイだつてナナには賭けなかつたんだ  
 ……もしもナナが十分の一の勝率なら、一文も賭けないに  
 決つてゐたんだ。それがこんな數字になつて来るのはをか  
 しいぢやないか。それはどういふ魂膽だらう？」

ラポルデットは静かな態度で聞いてゐたが、やがて肩を聳  
 やかした。  
 「もうおよしなさい、静かに話ませうよ……伯爵はやは  
 りリュジニヤンに少くとも五百ルイは賭け、しかもその上、  
 ナナにも百ルイばかり賭けさせてゐます。持主といふもの  
 は、何時も持馬を信じてゐる風をしなければなりませんか  
 らね。」

「なんだつて！ それが僕等にどうだつてんだ！」とラ・フ  
 アロアズが腕を振りながら叫んだ。「勝つのはスピリットだ  
 よ……。佛蘭西負けろだ！ 英吉利萬歳だ！」  
 人波が大きく揺れた。その時鳴り續けてゐた鐘は、馬が

競馬場に入つて来たことを告げてゐたのだ。その時ナナ  
 は、よく見えるやうに、馬車の腰掛の上に立つて、瑠璃草  
 と薔薇の花束を踏み躪り、ずつと地平線を見渡した。この  
 熱狂の絶頂に至つて、初めて馬場は、その薄曇色の柵を閉  
 して空になつた。其處に巡查が二人づゝ柱のやうに並ん  
 だ。そして彼女の前が泥まみれになつてゐる帯のやうな草  
 原は、遠くになるにつれて再び緑になり、遙か彼方へ柔か  
 い天鵞絨の毛氈となつて連つてゐた。それから彼女は、視  
 線を低くしながら、その中央の競馬場を見下した。そこで  
 は爪先き立ちになつて、馬車に嚙りついた群衆が熱狂し、  
 沸騰して押し合つてゐた。馬が嘶き、天幕の布が音を立  
 た。騎手はその馬を、柵に集まつて腕をついてゐる徒步者  
 の間へ進ませた。彼女が振り返ると、そちらの方では、特  
 別席の人々の顔が小さく見え、幾列にも重つた頭ばかりの  
 塊は、たゞ歩廊や階段や露臺に滿ち溢れた雑色にしか見え  
 なかつた。その黒い横顔の堆積が空に浮き出てゐて、その  
 彼方に、競馬場を圍んでゐる平原が見えた。右手に當つて、  
 常春藤で覆はれた風車の後ろに、深い樹蔭で遮られた入海  
 のやうな牧場があつた。正面には、小山の麓を流れてゐる  
 セエヌ河まで、公園の並樹道が交叉しながら續いて、そこ  
 には馬車の列が動かずに待つてゐた。それから、左の方ブ  
 ウロオニに向つて、再び瀾然と開けた土地が、ムウドンの

胃味が、つた遙か彼方にまで續いて穴のやうに見えてゐ  
 た。それをポロニアが縁取つてゐて、その葉の落ちつくし  
 た薔薇色の梢は、艶々した漆塗りのやうにくつきりと輝い  
 てゐた。しつ切りなしに人々がやつて来た。蟻の群のやう  
 に細長い列が、遠くから野原を横切つて、リボンのやうな  
 細い道に續いてゐた。そしてまた非常に遠い巴里の方向は、  
 入場料を拂はない人々が、大森林に群棲する獸のやうに、  
 點々と黒い列をなして、ボアと同じ高さの木立の下に動い  
 てゐた。  
 しかしその時、突然、數十萬の人々の心は生々と燃え上  
 つた。人々は天空の下に、狂ひ廻る昆蟲のやうにどよめい  
 て、この平野の一角を覆つてゐるのだつた。十五分ばかり  
 前から、隠れてゐた太陽が再び現はれて、はげしく光を降  
 り注いだ。そして總てのものが再び輝き、婦人の日傘は群  
 衆の上で、數限りのない黄金の楯のやうに見えた。人々は  
 太陽に向つて歡呼した。笑ひ聲がそれを謳歌し、雲を拂ひ  
 退けようとして腕がさし伸ばされた。  
 その時、一人の警官が人氣のない馬場の中央を駈け去つ  
 た。遙か左手から、一人の男が手に赤旗を持つて現はれた。  
 「出發合圖者のモオリイアク男爵ですよ。」とラポルデット  
 はナナの問ひに答へた。  
 ナナを取り巻いて、馬車の階段の上でさへ押し合つてゐ



る男達の間、叫び聲が起つた。會話は、何の連絡もなく、たゞ思ひ付きの言葉だけで續けられてゐた。フキリップや、ジョルジュや、ボルドナアヴや、ラ・ファロアズは黙つてゐることが出来なかつた。

押しちやいけない！……見えないぢやないか……あゝ！審判官が小舎に入つた……。君はあれがド・スウヴィニ氏だといふんだね？……何だつて？こんなところでは、餘程いい眼でもしてゐなければ、どれが誰の鼻だか分るものかい……やかましいや、小旗が揚つたぜ……。そら、來た〜、見ろよ！……先頭はコジニユスだ。

黄と赤の小旗が空で、旗竿の尖に飄つた。馬が次ぎ〜に厩舎の若者に牽かれて入場した。鞍の上で手綱を放してゐる騎手が、太陽にくつきり照らされてゐた。コジニユスに續いて、アザールとブウムが現はれた。それからスピリットが入つて來ると、ざわめきが起つた。それは遅ましい黒鹿毛で、その橙と黒の地味な色には、英吉利的な陰氣さがあつた。ブレリオ二世は初めから人氣を呼んでゐた。小さな、非常にきび〜した、薔薇色で縁取られて淡く緑を含んだ馬だつた。人々はブンドゥル厩舎の例の二頭を待つてゐた。遂にフランシパンの後ろから、青と白の色取りが現はれた。併し、ひどく動んだ鹿毛のリュジニヤンは、非の打ちどころのない姿勢だつたが、ナナが惹き起した人氣のため

に殆んど閉却されてしまつた。嘗つてこのやうなナナを見た者はなかつた。日光はこの栗毛の若馬に、少女の金髪のやうな光澤を與へて輝かせた。それは光を受けて新らしいルイ金貨のやうに輝いてゐた。しつかりした胸や、輕快な頭や、平頸の、神經質な、氣品のあるすらりとした姿勢の、伸び〜した骨組みの馬だつた。

「あら！私の髪の毛と同じだわ！」とナナは夢中になつて叫んだ。「まあ、私も肩身が廣いわ！」

人々は彼女の馬車に攀ち登つた。ボルドナアヴはもう少してナナが忘れてゐたルキゼを踏みつけるところだつた。彼は父親のやうに何か囁きながらルキゼを抱き上げて、肩車をしてやつた。

「可哀さうに坊やはこんなに捨て置かれてさ……。よしよし、お前に母さんを見せて上げようね……。見えるかい？ほら、あすこに、お馬があるだらう。」

そして、ビジュウも彼の足にぢやれついたので、彼はルキゼと一緒に肩に載せた。ナナは、彼女の名を持つたその馬に満足して、周囲の女達の顔を見廻してゐた。誰も皆苛立つてゐた。このとき、今まで自分の箱馬車でぢつとしてゐたトリコン夫人が、兩手を振つて、群衆の上から一人の賭業者を呼び寄せた。彼が豫想を語り終ると、彼女はナナに賭けた。ラ・ファロアズは、その間もずつと煩さいほど騒いでゐ

た。彼はフランシパンに夢中になつてゐた。

「僕は啓示をうけたのだ。」と彼は繰り返した。「まあ、フランシパンを見て御覽。どうだい？なんといふ元氣だらう！……僕はフランシパンに八分の一で賭けてゐるんだ。さあ賭けた人は誰々だい。」

「まあ、静かになさいよ。」遂にラポルデットが言つた。「あとで後悔しますよ。」

「驚馬だよ、フランシパンなんか。」とフキリップが言ひ放つた。「もう汗をかいてるぢやないか……あれがのろ〜く走るところでも見るんだね。」

馬は右手に現はれた。そして足馴らしに駆け出して、特別席の前を次ぎ〜に通つた。するとまた皆は熱狂して一時に話し合つた。

リュジニヤンは背中が長すぎるよ、しかし調子がいゝな……ねえ君、ブレリオ二世には一スウだつて賭けちやだめだよ。あいつは神經質だ、頭を上げて疾つてらあ、あれぢや駄目だよ……。何んだつて！スピリットにはビュルンが乗るつて……。あいつは肩が駄目なんだよ。頑丈な肩、それが肝腎なんだ……。いや、どうして、スピリットは落着きすぎてるよ。……私、大アウル・デ・プロデュー賞金競馬の後でナナを見たけれど、ぐつしより濡れて、毛は艶を失つて、死ぬかと思ふほど横腹が動悸してゐたわ。二十ルイも

賭けられたことなんかありませんわ……。いやもう澤山！僕等はお前さんとフランシパンとは倦き〜してゐるのだよ！もう間はないぜ、そら、出發だ。

殆ど泣きさうになりながら、賭業者を見つけようと焦つてゐたのは、ラ・ファロアズだつた。皆は彼を宥めなければならなかつた。總ての手綱は絞られた。併し最初の出發はよくなかつた。遙か彼方に細く黒い線のやうに見える出發合圖者が、その赤旗を下さなかつた。馬は暫らく疾驅して歸つて來た。それからなほ二回ほど出發をやり直した。遂に出發合圖者は馬を揃へて、巧くスタートを切らしたので、群衆は一度に喚聲をあげた。

素晴らしいぞ！……いや、偶然だ！……そんなこと構ふものか、それッ！

喧嘩はやがて胸を緊めつけるやうな不安に變つて鎮まつた。最早賭ける事は済んでしまつて、廣大な競馬場で勝負が争はれてゐた。先づふつと呼吸が止つたかのやうに靜まり返つた。眞蒼になつた顔が頼へながら伸び上つてゐた。出發では、アザールとコジニユスが先頭を争つた。それにブレリオ二世が直ぐ續き、他の馬は混亂した群になつて追驅した。土を震動させ、颯と逆風を捲き起して、特別席の前を疾驅した時には、既にその列は四十頭身ばかりの長さ

に延びてゐた。フランシパンが一番遅れ、ナナはリュジニヤ



ンとスピリットの二頭にやゝ遅れてゐた。「おや」とラポルドットが呟いた。「英吉利馬がそのうちに楽に抜きますよ！」

總ての馬車からは話し聲や綱叫が起つた。人々は皆伸び上つて、太陽の中を駆け過ぎる騎手の輝かしい姿を眼で追つた。路が登りになるとアレリオ二世が先頭を切り、コジニスとアザールは遅れ、リュジニャンとスピリットは鼻を並べ、ナナがいつもその二頭を追つてゐた。

「どうだい！ 英吉利馬の勝たせ。もう分り切つたことだよ。」とポルドナアヴが言つた。「リュジニャンは疲れた、それに、アレリオ二世はもう駄目だ。」

「何んだつて！ 英吉利馬の勝ちだつて、くだらない！」とフキリッが愛國的な苦痛をもつて熱狂して叫んだ。

物悲しい感情が密集した群衆の咽喉を締めつけた。またしても敗北か！ そして殆んど宗教的な、不思議に熱烈な希望が、リュジニャンに對して高まつた。人々はスピリットと死體運搬人のやうに落着き拂つた騎手とを罵つた。草原に散らばつてゐる群衆は、熱狂の餘り帯を振り足を空に上げたりしてゐた。騎手は物凄く疾驅で芝生を突つ切つた。馬の後を追つて、靜かに體を廻してゐたナナは、足許に馬と人との怒濤——疾きこと電光の如き騎手のユニフォームは唯一筋の線を劃して、一陣の旋風の過ぐるにも似たこの

疾走を、トラックをぎつしりと圍んで見送り見返る人頭の海を見た。彼女は、疾驅する馬の腰と、その歩度を延ばし切つて眼にも止らない足の上に乗つてゐる騎手達を、背後から見送つてゐた。それは今、ボアの遠い緑の中を、實に小さな微かな姿になつて側面を見せながら駆けつけてゐた。そして突然、競馬場の中央に植ゑられた植木の後に隠れた。

「見てゐるよ！」とジョルジュは常に希望をもつて言つた。「これからだ……それ、英吉利馬が追ひ付かれたぞ。」しかしラ・ファロアズは、また佛蘭西馬を輕蔑して、スピリットを喝采しながら悪口を言ひ始めた。萬歳！ いゝぞ！ どうだい、佛蘭西馬は僕の言つた通りだ！ スピリットが先頭だ、フランシパンが二番だ！ 佛蘭西馬は駄目ぢやないか！ ラポルドットはそれに腹を立て、むきになつて馬車から放り出すぞと脅かしつけた。

「さあ、何分かゝるかな。」とポルドナアヴが穩かに言つた。ルキゼを肩車しながら、彼は時計を引き出した。一頭づゝ、樹立の背後から現はれた。群衆は茫然とした。長いざわめきが起つた。アレリオ二世がまだ先頭を切つてゐた、と、見る間にスピリットが追ひつき、リュジニャンは離されて、それに他の一頭が代つた。騎手の胴着が見分けられず、直ぐにはそれがどの馬か分らなかつた。と、叫び聲が起つた。

今やその群は忽ちのうちに正面に現はれた。だん／＼接近して來るのが感じられた。遠くからの鼻息が刻々に大きくなり、その呼吸づかひが感じられた。全群衆は、熱狂して柵に癡みついた。そして、人々の胸から迸り出る素晴らしいどよめきが、馬の疾驅よりもなほ早く、浪を碎く海のやうに轟きながら、次から次へと柵をめぐつて擴がつた。それは壯大な勝負の最後の勇壯な有様だつた。十萬の觀衆は一つの考へに捉はれ、その疾驅に百萬法のかゝつてゐる馬の後を追つて、たゞ運命を祈る願ひで誰も皆一様に胸をとよろかしてゐた。人々は拳を握り口を開けて、自分の賭に夢中になつて、叫び聲と身振りで銘々の馬を勵まし、犇めき、押し合つた。そしてフロクコートの下に包み切れなくなつて顔を出した各々の野性の叫び聲は、次第に一層はつきりと轟きわたつた。

「そこだ！……そこだ！……そこだ！」  
ナナは相變らず追ひ續けた。今やアレリオ二世は引き離され、ナナは二三馬首の差で、常にスピリットと先頭を争つてゐた。雷のやうな轟きが益々大きくなつた。馬は接近して來た。嵐のやうな叫び聲が馬車の中からそれらを迎へた。

走れ、リュジニャン、腰抜けめ、驚馬め！……素敵だ、英吉利！ も一つだぞ、そこだ！……アレリオめ、いま／＼

「おや、ナナだ！……ナナ、しつかりしろ！ だからリュジニャンは駄目だと言つたぢやないか……いよう！ さうだ、ナナだ。あの金色はナナですよ……それねナナでせう！ 燃えたつてゐるやうですよ……萬歳、ナナ！ あの駆け振りは！……なあに！ どちらでもいゝよ。ナナがリュジニャンの代りに勝つんだ。」

數秒間皆がさう考へた。若馬は徐々に努力を續けて始終追ひつめて行つた。大きな感動の聲が起つた。遅れた馬はづつと後になつてしまつて、最早人々の興味を惹かなかつた。激しい競争がスピリット、ナナ、リュジニャン、アレリオ二世の間に行はれた。皆がそれらの名を呼んだ。人々は連絡のない言葉を呟いて、それらの進んだのや遅れたのを批評した。馭者臺の上に登つて來たナナは、感動の餘り眞蒼になり、身を顛はせながら黙つてゐた。彼女の傍では、ラポルドットが微笑してゐた。

「どうだい？ 英吉利馬は旗色が悪いね。」と愉快さうにフキリッが言つた。「もう駄目さ。」  
「兎に角、リュジニャンにはもう見込みがないぜ。」とラ・ファロアズが言つた。「アレリオ二世が……それら！ 四頭が一緒になつたぞ。」

同じ言葉が誰の口からも洩れた。  
なんて早いんでせう……恐ろしい早さだ！



しい！ あゝ！ 畜生！ 僕の十ルイも駄目か！……ナナ  
 だけだぞ！ 萬歳、ナナ！ 萬歳、しつかり！  
 馭者臺の上では、ナナは知らず／＼自分が駈けてゐるか  
 のやうに、腿や腰を揺り、腹を動かし始めた。それが彼女  
 には、若馬を助けるやうに思はれた。その度に疲れたやう  
 にはつと息をついて、やうやく低い聲で言つた。

「そら走れ……もつと走れ……そら走れ……」

その時素晴らしい光景が現はれた。鐙の上に突立つたブ  
 ライスは、鞭を上げて、鐵のやうな腕でナナを滅多打ちに  
 鞭つた。この老けてひからびた子供のやうな男の、硬ばつた  
 死人のやうな長い顔が焰と燃え上つた。そして、見違へる  
 やうな恐るべき大膽さと、勝ち誇つた意志とをもつて、彼  
 は若馬に勇氣を與へた。泡をふき血走らせた眼のナナを勵  
 まして、駈け続けさせた。その若馬は、地響きを立て、  
 呼吸をはずませ、風を巻いて駈け過ぎた。審判官は非常に  
 冷静に、決勝標に眼を注いで待ち受けてゐた。大歓聲が轟  
 いた。ブライスは最後の努力をもつて、一馬首だけスピリ  
 ヲを抜き、決勝標にナナを投げつけた。

喊聲が、潮のやうに高まつた。ナナ！ ナナ！ ナナ！  
 と人々の絶叫は轟き渡り、嵐のやうに激しく荒れ狂つて、  
 次第に廣大なボアからモン・ヴァレリアンまで、またロンシ  
 ヤンの平野からブウロオニユの平原まで地平線を満たして

行つた。芝生にも、熱狂した感激の聲が鬨を作つた。ナナ、  
 萬歳！ 佛蘭西萬歳！ 英吉利、態見ろ！ 女達は日傘を  
 振り廻した。男達は跳び上り、躍り上つて、聲を限りに叫  
 んだ。夢中に笑ひながら、帽子を投げる者もあつた。馬場  
 を隔てた重量測定場の圍ひの中から、それに應じて喊聲が  
 上り、特別席を揺がした。腕を振り上げ、眼を輝かせ、口  
 を開いて夢中になつた人々の小さい顔が重り合つてゐる上  
 に、まるで烈火の眼に見えない焰のやうな空氣の震動だけ  
 がはつきり見えてゐた。それは何時果てるともなく漲り溢  
 れ、遠い小徑の奥の木立の下に群つてゐる人々の間にまで  
 行き渡り、やがてまた皇室席まで押し寄せて感動を傳へた。  
 皇后陛下も喝采した。ナナ！ ナナ！ ナナ！ その叫び  
 は、金色の光線で群衆の顔を打つてゐる太陽の光の中へ立  
 ち上つて行つた。

するとナナは馬車の馭車臺に立ち上つて、體をぐつと延  
 ばし、人々が喝采してゐるのを自分の事だと信じた。彼女  
 は、ナナの勝利に茫然として、黒い帽子の海で覆はれ、最  
 早草が見えないまで隙間もなく押し寄せた人波に蹂躪され  
 てゐる馬場を眺めながら、暫らくちつとしてゐた。そして、  
 人々が整然と、出口の方へ垣を作つて並びながら、ぐつた  
 り前屈みになつて氣が抜けたやうに弱り切つてゐるブライ  
 スを乗せて出て行くナナを再び喝采した時、彼女は我を忘

れて、無遠慮な言葉で凱歌を擧げながら激しく自分の腿を  
 蹴いた。

「あゝ！ あれは私だ、けれども……あゝ！ 何といふ好  
 運だらう！」

そして、彼女はこんなに熱狂した喜びをどう言ひ現はし  
 ていゝか分らないで、ボルドナアヴの肩の上から、そんな  
 高いところにゐたルキゼを抱き取つて接吻した。

「三分と十四秒だ。」とボルドナアヴはポケットへ時計を入  
 れながら言つた。

ナナは絶えず、平野が自分の名を劔して來るのを聞いた。  
 それは、彼女を稱へる彼女の民衆だつた。そして彼女は、  
 美しい髪を靡かせ、大空のやうな白と青の衣裳を身に着け  
 て、日光の中に眞直ぐに立つてゐた。ラポルデットは、別れ  
 際に、二千ルイの儲けだと彼女に告げた。彼は五千ルイを  
 四十分の一の勝率でナナに賭けて置いたのだつた。しかし  
 その金高も、この勝利より以上に彼女を感動させはしなかつ  
 った。その思ひもかけない勝利の輝きは、彼女を巴里の女  
 王にした。婦人達は皆賭に負けた。ローズ・ミニオンも、カ  
 ロリヌ・エッケも、クラリスも、シモンヌも。ローズは腹  
 立ち紛れに日傘を毀した。リュシイ・スツワアルは、息子の  
 前もかまはずに、あの肥つたナナの好運が續にさはつて小  
 さな聲で何か罵つてゐた。トリコンは、馬の出發や到着毎

に十字を切つてゐたが、女達の上につきとその高い體を  
 立ち上らせて、自分の鑑識眼に得意になつて、如何にも經  
 験を積んだ女らしくナナを褒め上げた。

ナナの馬車の周圍には、男達の混雜が一層激しくなつて  
 行つた。群衆は猛烈な鬨の聲を上げた。ジョルジュは、聲を  
 限りに咽喉を枯らして叫び続けてゐた。シャンパンが無く  
 なつたので、フキリップは二人の従僕を連れて、料理屋に  
 走つて行つた。そしてナナを中心とする勝ち誇つた人々は  
 次第に増し、遅れて來た者は近よれないほどだつた。芝生  
 の上で、彼女の馬車を中心にしたこの運動は、觀衆の猛烈  
 な狂氣沙汰の中で彼女を女王ヴェニヌとして遂に崇拜する  
 までに至つた。ボルドナアヴは彼女の後にゐて、父親らし  
 い優しさをもつて口の中で何か呟いてゐた。シュタイネルも  
 亦夢中になつてシモンヌを乗せて、ナナの馬車の踏段へ上  
 つて來た。シャンパンが運ばれて、彼女が満たされた盃を差  
 し上げると、激しい喝采が起つた。人々は強く、ナナ！  
 ナナ！ ナナ！ と再び叫び始めたので、それに驚いた他  
 の觀衆は、またあの若馬が出たのかと見まはしたほどであ  
 った。もう彼等の熱狂してゐるのは、馬なのかこの女なの  
 か分らなかつた。

その時ミニオンは、ローズが恐ろしい眼付をするのにも  
 かまはずに駈けつけた。この素晴らしい女が、彼を夢中に



したのだつた。彼はナナに接吻しようと思つた。そして、  
兩頬に接吻してから、父親らしい態度で言つた。

「私が苦しい思ひをしてゐるのは、その何です、確かに  
ローズがあの手紙を送らうとしてゐることなんです……  
あいつはひどく怒つてますからね。」

「その方がいゝことよ！ 私にとつても都合がいゝわ！」  
とナナは言ひ放つた。

しかし彼が呆氣にとられてゐるのを見ると、直ぐにまた  
言葉を繼いだ。

「あゝ、いゝえ、私、どんなことを言つたかしら？……ほ  
んとに、私は自分の言つたことが分らないわ！……私は酔  
つてゐるんですよ。」

ほんとに酔つてゐた。喜びに酔ひ、日光に酔ひ、ひつ切  
りなしに盃を上げて、彼女は自分自身に對して歡呼の聲を  
あげてゐた。

「ナナのために！ ナナのために！」と彼女は、次第に全競  
馬場に擴がつて行く、喧騒と笑聲と歡呼の増す中に叫んだ。

競馬はまさに終らうとして、ヴォブラン賞の競馬が初ま  
つてゐた。馬車は一臺々々と歸り初めた。するとワンドッ  
ヴルの名が、口論の中にまた聞え初めた。今ではもう總て  
の事情が明かになつた。ワンドヴルは三年前から、グル  
シャムにナナを控へさせて置いて、この最後の一撃を計畫

してゐたのだつた。そして彼がリュジニヤンを出場させて  
ゐたのは、若い牝馬にこの勝利を得させるために過ぎな  
かつた。負けた人々は憤つた。勝つた人々はそつと肩を聳や  
かした。それがどうしたといふのだ？ こんなことは許さ  
れてゐないといふのか？ 持主が自分の馬を思ふまゝにす  
ることは、他にもよくあることだ！ 大多数の人々はワ  
ンドヴルがナナを勝たせて、獲れるだけのものをその友人か  
ら掻き集めたのを、非常に冷酷だと言つた。それであの勝  
率が俄かに上つた理由も分つた。賭金二千ルイ、勝率の平  
均三十分の一として、百二十萬法の儲けだらうと人々は言  
つてゐた。その金額の莫大なことが尊敬を拂はせ、一切の  
辯解となつた。

併しそれは別のもつと重大な噂がひそかに重量測定場  
の邊りから起つて來た。そこから歸つて來た人々が詳しい  
ことまで話したので、邊りはざわめいて、人々は高い聲で  
恐ろしい醜聞を噂した。あのワンドヴルも可哀さうにも  
うおしまひだ。この折角の最後の一撃を實にくだらな  
間の抜けた詐欺で臺なしにしてしまつた。彼は性質の悪い賭  
業者のマレシャルを使つて、一旦公然と賭けた金のうちか  
ら千ルイ餘りの金を取り戻したさに、自分の分としてリュ  
ジニヤンに賭けるのを二千ルイにしたのであつた。こんな  
惨めな遣り繰りも、危殆に瀕してゐた伯爵の財政状態の龜

裂を示してゐた。マレシャルは今までにリュジニヤンで六萬  
法ばかりの金を儲けてゐたが、今日の勝負には見込みがな  
いと睨んでゐた。すると少しも確かな詳しい消息を知らな  
いラポルデットは、マレシャルがその時まで本當の事情を知  
らずにナナに、五十分の一の勝率で賭けてゐた二百ルイを  
取消させてしまつたのだつた。マレシャルは結局ナナで入る  
べき十萬法をふいにして、後には四萬法の損失だけが残つ  
たので、足の下で何もかも崩れ落ちるやうな氣持がした。

彼は競走が済んで、伯爵が重量測定室の前でラポルデット  
と立ち話をしてゐるのを見ると、忽ちその事情がすつかり  
呑み込めた。そして昔殿者だつた頃の權幕を出し、欺され  
た腹立ちまぎれに、彼はひどい言葉で内幕をぶち撒けなが  
ら、公衆の面前で恐ろしい喧嘩をやつたので、その周圍に  
は人だかりがして來た。審判官會議が開かれるだらうとい  
ふことだつた。

フキリッブとジョルジュが低い聲でその様子を知らせたが、  
ナナは笑つたり飲んだりしながら何を考へようともしな  
かつた。兎に角ありさうなことだ。彼女は色々なことを思ひ  
出して見た。成程あのマレシャルは厭な顔をしてゐた。しか  
し、彼女がまだ半信半疑であるところへ、ラポルデットが現  
はれた。彼は眞着な顔をしてゐた。

「どうしたの？」と彼女は低い聲で訊ねた。

「臺なしです。」彼はたゞさう答へただけだつた。  
そして肩を聳やかして、ワンドヴルはまるで子供だ！  
と言つた。彼女はがっかりしたやうな身振りをした。

その夜、マビエユで、ナナは素晴らしい人氣だつた。十時  
頃彼女がそこに現はれると、もう最初からはげしく喝采さ  
れた。その夜の底抜け騒ぎには、遊び好きな青年達が一人  
残らず寄り集つて來た。上流社會が下層民の野性と興味さ  
の中へ飛び込んで來たのだつた。人々は瓦斯燈の列の下で  
押し合つた。夜會服の男や、けばくしい衣裳の女や、また  
汚れてもいゝやうな古い着物を着て肩を露にした女達が  
集つて來て、腹一杯食べたのに乗じて、歩き廻つたり喚き  
立てたりした。管絃樂の金屬樂器の音さへも、三十歩も離れ  
るともう聞えなかつた。誰も踊らなかつた。理由もなくつ  
まらない言葉が繰り返されて、人々の間に傳播して行つた。  
皆は體をぶつつけ合つて騒ぎ立てたが、それも別に面白  
はなかつた。七人の女が衣裳室に閉ぢ込められて、出して  
くれと言つて泣いてゐた。そこらに轉がつてゐた多葱を見る  
と、一同はそれを競賣して、二ルイにまでも難り上げた。丁  
度その時ナナが、競馬の時のまゝの白と青の服裝で現はれ  
た。誰も彼も彼女に握手した。三人の紳士は彼女を擁して、  
凱旋したときのやうに、庭の荒れた芝生と亂れた緑の叢の  
間を通つて行つた。奏樂席が邪魔になればそれを襲撃し、



椅子や譜面臺が壊された。一人の警官が親切に混亂を整理してゐた。

やつとナナが勝利の感動から我に歸つたのは火曜日だった。その朝彼女は、ルキゼが外氣に觸れて、病氣になつたと知らせに來たルラ夫人と話してゐた。しかし、巴里中持ちきりの話が彼女の心をも奪つてゐた。競馬界から除名され、同じ夜華族會議で處分されたワンドゥルは、翌日彼の馬と共に厩舎の中で焼死したのだつた。

「あの人はよくそのことを私に言つてたわ。」とナナは言つた。「あの人はほんとに氣狂ひだわ！……昨夜それを聞いて、私は、まあ吃驚したのよ！ね、何時かの夜も、ほんとに私を殺しさうだつたのよ……それから、どうしてあのナナのことを私に知らなかつたのでせう？私だつて身上が作られたのに……あの人は、ラボルデットに、もし私が事情を知れば、直ぐに髮結ひや澤山の人に觸れまはるだらうと言つてたんですつて。よくお氣のつくことだわね！……ええ！ほんとに私、そんなに氣の毒だとは思はないわ。」

思ひ出して見ると彼女は腹が立つてならなかつた。その時ラボルデットが入つて來た。彼女の賭金を整理して四萬法を持つて來たのだつた。しかしそれも、たゞ彼女の不機嫌を増すばかりだつた。彼女は百萬法儲けることさへ出來

たのだから。ラボルデットは、今度のことは何も知らないやうな顔をして、ワンドゥルに就いては一言も語らなかつた。この古い名家は後嗣が絶えて、つまらないことで斷絶してしまつた。

「いゝえ！さうぢやないわ。」とナナが言つた。「あんなにして厩舎の中で焼け死ぬのは、詰らないことぢやないわ。立派な最後だと思つてよ……でも私、あのマレシャルとの一件を辯護しようと言ふのぢやないわ。あれは馬鹿らしい話だわ。だから私、あのブランシュが圖々しくすつかり私のせゐにしたがつてゐたので、かう言つてやつたわ。『私があの男に盜めとでも言つたのですか！』とね。さうぢやないの？男からお金をとるくらゐに、何も罪まで犯させなくつてもいゝんだわ……もしも男が『金がない』と言ふのなら、私は『ちやさやうなら』と言ふだけよ。さうすればそれで済むことぢやないの。」

「さうよ。」と伯爵が眞面目になつて言つた。「執念深い男は、それだけ自分達が損をするんだよ！」

「でも、あの最期は、とても素敵だわね！」とナナが言葉を續いだ。「まあきつと、あなただつて怖ろしくてぞつとすると思ふわ。あの人は皆を歸して、石油をもつて中へ入つたのですつて……それから大變な勢で燃えたのよ！考へて御覽なさい、建物が殆んどすつかり木で出來てるんでせ

う、それに藥や秣が一ぱい填つてゐるんですからね！……焔が塔のやうに上つたのですつて……可哀さうなのは、焼け死にたくもなかつた馬だわ。跳ねたり、扉口にぶつつかつたりして、ほんとに人間のやうな悲鳴を上げるのが聞えたさうよ……さうでせうとも、聞いただけでもぞつとすゐるわね。」

ラボルデットはその話を信じてゐないらしく、軽い溜息を洩らした。彼はワンドゥルの死を信じてゐなかつた。彼が窓から脱け出すのを見たと言ふ者もあつた。多分精神錯亂から厩舎に火を放つたのだらうが、熱さに耐へられなくなる、正氣に歸つたのだらう。あんなに女には眼も鼻もない臍甲斐ない男が、どうしてあのやうな大膽な死に方が出來るのですか、とラボルデットが言つた。

ナナはすつかり厭な氣持になつて、ラボルデットの言葉を聞いてゐた。そしてたゞ一言かう言つたきりだつた。

「まあ！つまらない男ね！あんなに立派だと思つてゐただんだけれど！」

十二

午前の一時頃、ナナと伯爵とはヴェニス製のレースで覆はれた大寢臺の中にまだ起きてゐた。彼は三日間不機嫌にしてゐた後、昨日の夕方戻つて來たのであつた。室はラン

ブの光で幽かに照らされ、生温く且つ戀の香にしつとり濕つてまどろみ、銀を鑲めた白ラック塗の調度類がほんのり白んで見えた。垂れた幕は、闇の中に寢臺を浸してゐた。ほつと溜息が聞えた。續いて接吻が沈黙を破つた。そしてナナは掛蒲團から滑り出て、脛も露はにしたまゝしばらくの間薄團の縁にちつと坐つてゐた。伯爵は枕の上に頭を落して闇の中に留つてゐた。

「あなた、神様をお信じになつて？」彼女は暫く思ひに沈んだ後、宗教的の恐怖に襲はれて、男の兩腕から逃れながら眞面目な顔で訊ねた。彼女は朝から氣分が悪いと嘸つてゐた。そして自分でも言つてゐるやうに、色々な馬鹿しい考へ、つまり死だとか地獄だとかいつたやうなものが秘かに彼女を惱ましてゐた。幾晩も幾晩も、妊娠の恐怖や残忍な想像が、眼を開いてゐるのに夢魔を伴つて彼女を脅かした。彼女は言葉を續いで言つた。

「どう？私でも天國に行けるとお思ひになつて？」

さう言つて彼女は身顛ひした。一方伯爵はこんな時にこんな奇妙な質問をされたのに驚かされて、心のうちに舊教的な悔恨が目覺めるのを感じてゐた。しかも彼女は、肌膚を兩肩から滑らし、髪をふり亂して、咽び泣き、彼の胸に取り纏つて身を投げ掛けた。

「私、死ぬのは怖いわ……私、死ぬのは怖いわ……」



彼は彼女から脱れるためにひどく骨を折つた。彼自身も眼に見えない神に對する恐怖に感染して、自分の體にとりついてゐる女の狂氣染みた行ひに負かされるのではないかと思つた。そこで彼は彼女に、お前は確かに大丈夫だ。何時か神の赦しを受けられるやうに、たゞ身持を良くしなすればいゝのだ、と言ひ聞かせた。だが彼女は頭を振つた。勿論彼女は誰にも悪い事はしてゐなかつた。その上彼女は常に聖女のメダルを身につけてゐた。彼女は、乳の間に赤い紐で下げてゐるそのメダルを彼に示した。しかし彼女は、結婚しないで男を知つてゐる女、多くの男を経験した女は、すべて地獄に墮ちると思ひ込んでゐた。教理問答の断片が彼女の胸に思ひ起された。あゝ！もしはつきり死後のことを知ることが出来たならば、だが人々は何も知らないのだ。誰も死後の便りを齎したものはない。そして、たとへ牧師達が馬鹿氣きつたことを話したとしても、それを氣にするのは、本當に愚なことだつた。しかし彼女は肌ですつかり温くなつてゐるメダルを、恰も死に對する咒ひであるかのやうに、恭々しく接吻した。死の考へが冷たい戰慄をもつて彼女を満たしたのだつた。

ミリアは、彼女を化粧部屋へ連れて行かなければならなかつた。彼女は扉を開け放つて置いてさへも、一人では一分間も其處に留つてゐることを恐れた。彼は再び横にな

つたが、彼女はまだ部屋の中を歩き廻り、隅々を檢べ、ごく微かな物音にも怯えたのだつた。姿見が彼女の足を止めた。彼女は自分の裸體に眺め入つて、以前のやうに我を忘れた。しかし咽喉や腰や股を見ると恐怖が倍加した。遂に彼女は長い間、兩手で頬の骨に觸つて見た。

「死ぬと醜くなるわね。」と彼女は静かな口調で言つた。そして彼女は、どんなになるか見ようとして、兩頬を引きつらせ、眼を見開き、腮を落ちくぼました。それから、そんな醜い顔付のまゝで、伯爵の方に振り返りながら、

「ねえ、見て頂戴。私、きつと小さな顔になるでせうねえ。」

そこで、彼は腹を立てた。

「馬鹿だね、さあお寢み。」

彼は死後一世紀も経つたやうに憔悴した彼女を墓穴のうちに見るやうな氣がした。そこで兩手を組み合せて祈りの言葉を呟いた。暫く前から、宗教が再び彼を征服してゐたのだつた。信仰の苦悶が日毎に中風のやうな苦しみを繰り返して、彼を打ちのめすのであつた。兩手の指は慄へ、彼は絶え間なく次の數語を繰り返した。「神様……あゝ神様……」

「神様。」それは彼の無力の叫びであり、罪の叫びであつた。しかも彼は確かに地獄に墮ちるであらうとは思つたが、その罪に對してどうすることも出来なかつた。彼女が寢床に

歸つて來た時、彼は夜具の下で、兇暴な顔付をし、胸に爪を立て、天國を探し求めるかのやうに空を見詰めてゐた。そこで彼女は泣き始めた。二人は共に抱き合ひ、理由もなく齒をがた／＼させて、馬鹿々々しい執拗な一つ考への底を彷徨つた。彼等は前にもこのやうにして夜を明したことがあつた。だがその晩は、ナナが恐怖の去つた時に言つたやうに、全く馬鹿げてゐたのだ。彼女は、或る疑惑から用心深く伯爵に、多分ローズ・ミニヨンが例の手紙を送つたのであらうと質問した。だがさうではなかつた、それは單なる杞憂で、それ以上のものではなかつた。何故なら、彼はまだ自分が妻に裏切られてゐるといふことをしつかり知らなかつたからである。

それから又姿を見せなかつたが、二日の後、ミリアは午前中に——そんな時間には嘗つて來たことはなかつたのだが——姿を現はした。彼は眞蒼な顔色をし、眼は血走り、内心の激しい惱みを残してゐた。しかしゾエは、自分自身も恐怖に襲はれてゐたので、彼の苦惱には氣が付かなかつた。彼女は出迎へに走り出て、叫んだ。

「まあ！ 旦那様、よくいらして下さいました！ 奥様は、昨晚、もう少してお亡くなりになるところでございましたよ。」

そして彼が詳しく訊ねたので、

「思ひもよらないことで……あの、墮胎なすつたのでございますよ、旦那様！」

ナナは妊娠三ヶ月だつた。長い間彼女は體の具合が悪いと思つてゐた。プッターレル醫師でさへはつきりした診断はつけられなかつた。が、彼がはつきりさうと言ひ渡すと、彼女はひどく厭な氣持がして、妊娠を隠すためにあらゆることをしたほどだつた。彼女の苛立たしい恐怖も、暗い氣分も、少しはこの異狀から來てゐるのだつた。彼女は、體を隠さなければならぬ、あの父親なし子を生む娘の羞恥心から、その秘密をひた隠しに隠した。それは彼女にとつて、馬鹿げた出來事に思へ、人に笑はれるやうな、肩身の狭い思ひがした。恐らく人は悪口を言ふだらう！ 全く何もかもお終ひになつてしまふのだ！ もう嘲笑されることなど何もないと思つてゐる時に、また嘲笑されねばならぬのだ！そして彼女は、女としての働きを害なはれたかのやうに、絶えず意外な感じを懷いてゐた。一體、人が望みもしないのに、又他のつもりでしたことなのに、子供が出来るのであらうか？ 母になるといふ重大なことを快樂の中に芽生えさせたり、彼女が自分のまはりに起した多くの破壊の中に、一つの生命を興へたりする自然の作用は、彼女を極度に苛立たせた。人間は何も厄介な事などなしに、自分の思ふまゝに振舞ふことが出来ないのだらうか？ 一體、



子供なんて何處から降つて来るのだらう？ 彼女には何も分らなかつた。あゝ！ほんとに、子供といふものは、作つた男が引き取つて、世話をすべきである。誰も子供を自分のものだと言ふものはゐないし、皆から邪魔者抜ひにされるとして見れば、子供も生きてゐたとて大した幸福なことではないだらう。

そこで、ゾエは痛ましい出来事を物語つた。

「奥様は四時頃お腹がお痛みになつて、化粧部屋へお入りになりましたが、なかく戻つておいでになりませんか、私が参りますと、氣を失つて床の上に倒れてゐらつしやいました。はい、旦那様、床の上にごさいますよ。丁度殺されたときのやうに、血の海の中にお倒れになつて……それで何もかも分りましてごさいますよ。奥様がそのことを打ち明けてさへ下さればよかつたのにと、私は思はず腹が立ちました。……丁度そこへゾルジュ様がお見えになりました。奥様をお起しするお手傳ひをして下さいましたが、墮胎と一言申し上げると、あの方も又御氣分が悪くおなりのやうな始末で……本當に私、昨日からずるぶん氣を揉みましてごさいますよ！」

實際、家の中は混雑してゐるやうに思はれた。召使達は、階段や部屋を忙しく行き來してゐた。ゾルジュは客間の安樂椅子の上に夜を明かして起きたところであつた。夜、何

時もならナナが客を迎へる時刻に、彼女の變事をその友達に告げ知らせたのは彼であつた。彼は眞着になり、驚愕と感動に満たされて、一部始終を語つた。シユタイネル、ラ、フアロアズ、ラキリツ、その他の人々がやつて來た。一言聞いただけで、人々は思はず叫び聲を發した。そんなことがある筈はない！それは狂言に相違ない！けれども、やがて冗談でないと分ると、彼等は眞劍になつて、頭を振り、むつかしい顔をして、彼女の部屋の戸を見つめてゐた。夜中頃まで、十二人ばかりの友人等が、誰が子供の父であらうかといふ一つの考へを氣にしながら、燵爐の前で低い聲で話し合つてゐた。彼等はぎごちない當惑した顔付で、辯解し合つてゐるやうに見えた。それは彼女から起つた事で、彼等には何の關係もないことだ、と言はぬばかりに、彼等は背中を圓くしてゐた。さあ、驚かすにも程があるよ、このナナは！彼女からこんな冗談を聞かされやうとは、誰も思ひも寄らないことだつた！そして彼等は、笑ふことも出来ない死人の部屋から出るやうに、爪先き立て、一人づゝそこを去つたのだつた。

「兎に角お上り下さいませ、旦那様。」とゾエはミラファに言つた。「奥様は餘程およろしいのでごさいますから、お話位は出来なれませう……私どもは、今朝来て下さる約束のお醫者様をお待ち申してをります。」

ゾエはゾルジュを家へ眠らせに歸した後だつた。二階の客間には、サタンだけが残つてゐた。彼女は長椅子の上に横になつて、煙草をふかしながら、空を見詰めてゐた。この出来事以來、彼女は、屋敷中が騒動してゐる中で肩を聳やかし、ひどい言葉を吐き散らして、冷やかな怒りの態度を示してゐた。その時ゾエがミラファに、まあ奥様は随分お苦しみになつたのでごさいますよ、と繰り返しながら彼女の前を通り過ぎたので、

「結構なことを仕出かしたのよ、これで少しは懲りるだらうよ！」と彼女はぶつきら棒に言ひ放つた。

二人はびつくりして振り返つた。サタンは身動きもしないで、ちつと天井を見つめたまゝ、つんとして唇に煙草をくはへてゐた。

「えゝ！あなたは御親切でゐらつしやいますとも！」とゾエは言つた。

するとサタンは起き上つて、腹立たしさに伯爵を睨んでゐたが、相手の顔にまたその言葉を叩きつけるやうに叫んだ。

「結構なことを仕出かしたのよ！これで少しは懲りるだらうよ！」

そして彼女はまた横になつて、まるで彼女には何の興味もなく、もう何事にも立ち入るまいと決心したかのやうに、

煙草の煙を細々とくゆらせた。話にも何もなるものですか！と言つた風に。

しかしゾエは、相手にしないでミラファをナナの部屋に案内した。生暖い静かさの中にエーテルの臭ひが漂つてゐた。ヴィリエ街を通る馬車が、時々微かな音を響かせて來た。ナナは枕の上に眞白になつて、物思はしげな眼を大きく見開いて眠つてはゐなかつた。そして伯爵を見ると、ちつとしたまゝ微笑んだ。

「まあ！あなた、」と彼女は靜かに囁いた。「もうお目にかけられないと思つてゐましたのに。」

それから彼が、髪に接吻しようとして體を屈めると、彼女は感動して、まるで彼が子供の父でもあるかのやうに、眞心を籠めて子供のことを話しかけた。

「私、あなたにも言へなかつたのよ……それほど、私ね、嬉しく思つてゐたのよ！そして、色々な夢を描いてゐたわ、あの子があなたに應はしければいと望んでゐたわ。それに、もう何もかもなくなりましたわ……この方がよかつたのかも知れないけれど、私、あなたの一生に邪魔ものなんか残したくはないんですものね。」

彼は、自分が子供の父だと聞いて吃驚して、何か口の中で呟いた。そして椅子を引きよせ、片手を夜具に突いて、寢臺の傍に腰を下ろした。ナナはその時彼の取り亂した顔



や血走つた眼や、熱で顫へてゐる唇に氣がついた。

「どうなすつたの？」と彼女は訊ねた。「あなたも御加減が悪いの？」

「いや。」と彼は苦しさに言った。

彼女はちつと彼を見詰めてゐた。それから合圖をして、愚圖々々と藥瓶を並べ直してゐたゾエを出て行かせた。二人だけになると、彼女は彼を傍に引き寄せてかう言った。「どうなすつたの、あなた？……あなたの眼は涙で一杯よ、私にだつてよく見えるわ……さあ話して頂戴、あなたは何か言ひにいらしたのでせう。」

「いや、さうではないんだ。」と彼は口籠つた。

しかし彼は苦しさに咽喉がつかまつて、その上入つて來たがどうしてよいやら分らず、この有様に感動して、泣き伏してしまつた。そしてその堤の切れたやうな苦痛を堰きとめようとして、毛布の中に顔を埋めた。ナナには何もかも分つてゐた。確かにローズ・ミニヨンが、たうとうあの手紙を送つたのに違ひなかつた。彼女はしばらく彼をそのまま泣かせて置いた。彼は激しく身を悶えて、寢臺の中の彼女もそれに揺り動かされた。遂に彼女も心を動かされて、母親のやうな聲で言つた。

「お家の方に厭なことがあつたのでせう？」

彼は點頭いた。彼女はまたしばらく黙つてゐたが、やが

て低い聲で囁いた。

「では、何もかも御存じなの？」

彼は點頭いた。そしてまた重苦しい沈黙が痛ましい部屋を満たした。前の晩、皇后陛下の夜會から戻つて來て、彼はサビイヌが戀人に送つた手紙を受け取つたのだつた。そして恐ろしい一夜を、復讐を夢みて過してから、妻を殺してしまひたい心をちつと抑へつけて、朝方家を出たのであつた。外に出ると、六月の晴れた朝の爽かさに氣を奪られて、もう昨夜からの考へを忘れてしまつた。今までにもその生活が苦しい時には、何時も出かけたやうに、ナナのところへ來たのだつた。そこへさへ辿りつけば、彼は慰めが受けられるといふ意氣地のない喜びで、我と我が惨めさの中に身を投げ出すことが出来るのであつた。

「さあ、しつかりなさいよ、」とナナは非常に優しく言つた。「随分前から私は知つてゐたの。でも私は、こんなにはつきりと、あなたの眼を開けて上げられませんでしたわ。去年はあなたはまだ疑つてゐらしやつたのでせう。あれから私の用心のお蔭で、皆うまく納つてゐたのよ。だがしかし、あなたは證據をもつてゐらつしやらなかつたのでした……それなのに今日になつては、たとへあなたが證據を握つてゐらしたとしても、もう無理だと思ふわ。とにかく何か一つ口實を作らなければならぬわ。その位のことでは

不名譽沙汰にもなりませんよ。」

彼はもう泣いてはゐなかつた。羞恥の念が彼を捉へた。彼は家庭生活の最も機微な打明け話を、随分前から洩らしてはゐたが……彼女は彼を勵まさなければならなかつた。何と言つても彼女は女だつた。彼女なら何でも聞いてやることが出來た。すると彼は低い聲で次のやうに言つた。「お前は病氣だのに、お前を疲らすなんてつまらないことをしたわ！……こゝへ來たのがいけなかつたのだ。私は歸るよ。」

「いえ、いけません。」と彼女は強く言つた。「歸らないで頂戴。きつと私がいゝことをあなたに教へて上げますわ。たゞね、餘り私を喋らせないで頂戴ね、お醫者さんに止められてゐるんですから。」

彼は遂に立ち上つて部屋の中を歩き初めた。その時彼女が問ひかけた。

「これからどうなさるの？」

「あの男の横面を殴りつけてやるんだ。」

彼女は、それはいけませんと言はぬばかりに顔を曇らせた。

「えゝ、そりや無理もないことですがね……そして奥様の方は？」

「訴へるんだ。證據を握つてゐるからね。」

「それも尤もなことだと思ひますわ、あなた。だけどね、やつぱりつまらないわ……ねえ、私、どうしたつてあなたにそんなことはさせませんわ。」

そして彼女は靜かに弱々しい聲で、決闘や訴訟と云ふものがどんなにくだらぬ役に立たないものかを話したのだつた。新聞は一週間もいゝ物笑ひの種にするだらうし、彼はその全生涯の平靜や、宮廷に於ける高い地位や、名譽ある家名を賭けることになるに違ひない。それなのに、嘲笑者だけを作るために、なぜまたそんなことをなさるのであるか？ と彼女は言つた。

「かまふものか？」と彼は叫んだ。「兎に角復讐をするんだ。」

「ねえ、あなた、」と彼女は言つた。「そんなことは、その時直ぐに復讐しない位なら、もう決して復讐などしないものよ。」

彼は立ちどまつて何か口の中で呟いた。彼は決して臆病ではなかつた。しかし彼も、彼女の言ふことを尤もだと思つた。不安な氣持が心の中に大きくなつていつた。そして何かしら力を削ぐやうな羞恥の感情が、怒りに興奮してゐる彼を和らげた。すると彼女はまた有の儘に何もかも言つてしまつて、彼をその上納得させた。

「ねえ、あなたがこんな厭な思ひをするのも何のためだか



知つてゐて？……それは、あなた自身が奥様を欺したからよ。さうぢやないこと？ 仲良く暮さう 思へば、あなたが外で泊つては駄目よ。奥様が疑ふのも當然ですわ。それなのに、何と言つて奥様を非難なさるお積りなの？ きつと奥様はあなたが手本をお示しになつたのだつてお答へになりますわ。したらあなたは黙つてしまはなければならぬぢやないの……この弱味があればこそ、あなただつてもこゝで役にも立たない地團太を踏んでゐて、あそこへ二人をとつちめに行かないのでせう。」

ミラファは、こんな烈しい言葉に心を挫かれて、また椅子に腰を下ろしてしまつた。彼女は黙つてゐるが、息を繼いでから低い聲で、

「あゝ、疲れましたわ……手を貸して頂戴。少し枕を高くしたいの。知らない間にこんなに滑つてしまつて、頭が疲れるわ。」

彼女が手を貸して直してやると、彼女はずつと樂になつてほつと溜息をついた。彼女は離婚訴訟のみつともない光景を思ひ浮べた。夫人側の辯護士がナナの名を持ち出して、巴里の人々を興からせることをこの人は考へて見たのだらうか？ そんな訴訟になれば、彼女のワリエテ座に於ける地位や、この屋敷や、この生活も、何も彼も評判になるだらうと彼女は考へた。しかしどう思つて見ても、彼女はそんな

な廣告を求める氣持にはなれなかつた。心の汚ない女達ならば自分の評判を立てるために、彼にそんなことまでやらせたかも知れなかつた。しかし彼女は何よりも彼の幸福を望んでゐた。彼女は彼を引き寄せた。自分の枕の所に彼の顔を引付けて、片腕をその頸筋に巻きつけて、靜かに彼に囁いた。

「ねえあなた、あなたは奥様と仲直りをなさいませうよ。」  
彼はむつとして、斷じてそんなことは出来ない！と言つた。彼の心はあまりの恥辱に耐へることが出来なかつた。しかし彼女は優しく言ひ續けた。

「あなたは奥様と仲直りをなさいませうよ……ねえ、あなたもこの私が、あなた方の間を邪魔してゐるのだなど、あちこちで評判するのを聞きになりたくはないでせう？ そんな噂を立てられるのは、そりや私にだつて餘りひどすぎますわ。皆は私のことを、まあ何と考へてゐるんでせう？……だけど、たゞね、何時も私を愛すると誓つて頂戴。何故つて、もしかあなたが外の女と……」

涙が彼女を息詰らせた。彼は幾度も接吻で彼女の言葉を遮つて、かう繰り返して言つた。

「まあ馬鹿な、そんなことが出来るものか！」

「いゝえ、いゝえ。」と彼女は言ひ續けた。「さうしなければならぬのですわ……さうなれば私も諦めますわ、何と

いつてもあの方にはあなたの奥様なんですもの。あなたが出會ひ頭の女をつかまへて、私を裏切りなさるとは譯が違ひますわ。」

彼女は出来るだけ心盡しの助言を與へながら、そんな風に言葉を續けたのだつた。そして神の名さへ口にした。彼は老ウノオが、罪から救ひ出さうとして彼に説教するのを聞くやうな思ひがした。しかし、彼女は別れるとは言はなかつた。切りに彼の愛情を求めた。彼の妻と彼女との間に彼の愛を分けることを求めた。誰とも仲違ひせず、丁度人生には不可避な醜汚の中の幸福な眠りのやうな波瀾のない生活を口説き求めるのであつた。さうすれば、彼等の生活には何等の變化も與へないだらう。彼は何處までも彼女の愛する人としてゐられるだらう。たゞ前程繁々來なければいゝのだ。そして伯爵夫人には、彼女と寝ない夜を與へればいゝのだ。彼女は力が盡きはてゝしまつた。微かな吐息をついて、言葉を結んだ。

「結局、私はいゝ事をしたと思ふやうになりますわ……あなた、これまでよりもつと愛して下さいな。」

二人は沈黙に歸つた。彼女は枕の上でなほも蒼ざめ、眼を閉ぢてゐた。もう疲れたくないと思つて、彼は彼女の言葉を黙つて聞いてゐた。一分間餘りの後、彼女は眼を開いて、呟いた。

「それぢやお金は？ 腹を立てたりなすつて、何處から取つておいでになるの？……ラポルデットは、手形をとりて昨日來たのよ……私、もう何もないの、體に着けるものだけなくなつたの。」

それから彼女は顔を閉ぢて、死んだやうになつた。深い苦悶の影がミラファの顔を過ぎた。彼は心に受けた打撃のために、どうにも始末のつかない金銭上の困難を前の晩から忘れてゐた。正式の契約をしたにも拘らず、十萬法の手形は、もう一度書き變へられて、流通し初めたところだつた。ラポルデットは、絶望を裝ひながら、萬事フランスのせむにして、教育のない者と取引をして、もう危険な目に遇ふのは御免だ。兎に角支拂はれねばならなかつた。決して伯爵は支拂を拒むやうなことはないであらう。と言つてゐた。その上ナナの新しい要求の他に、自宅にも夥しい額の支出をせねばならぬといふ難關があつたのだ。フォンデットから歸ると、伯爵夫人は突然贅澤な趣味——彼等の財産をも喰ひ盡すやうな世俗的な享樂の欲望を示したのであつた。財産をも潰すやうな氣紛れなことをしたり、家風の面目を一變してしまつたり、ミロメニール街の古い屋敷を改造するために五十萬法を使ひ盡したり、莫大な金額を撒き散らしたり、多分人にやつたりして何時の間にかなくしてゐながら彼女は別に使ひ途を夫に報告しようと思はしめない



などいふことが人々の間に噂されるやうになつた。ミラファは様子を知らうとして、二度ばかり思ひ切つてこの問題に觸れてみたが、彼女が如何にもへんな様子で、微笑を浮かべながらちつと彼を見つめたので、餘りはつきりした返事をされるのが恐ろしく、それ以上訊ねる勇氣がなくなつてしまつた。ナナの手でダグネを婿にするのを承諾したのも、何よりもエステルの持参金を二十萬法に減らすことが出来るだらうと思つたからであつた。後は、この思ひがけない結婚で夢中になつてゐる若者と何とか話を纏めることが出来るだらうと思つたのであつた。

しかし一方では、一週間前から、ラボルデットの十萬法を早速工面しなければならぬ状態にあつたので、ミラファは、たつた一つだけその方法を思ひついてゐたが、これはさすがに躊躇してゐた。それはこの間、一人の叔父が伯爵夫人に遺贈した、約五十萬法と評價されてゐる素晴らしいポルドの地所を賣ることであつた。だがそれには夫人の署名が必要であつた。尤も夫人も伯爵の許可がなくては、他人に譲ることが出来ないといふ契約ではあつたが、伯爵は、昨夜たうとう決心して妻にこの署名のことを話さうと思つたが、その決心も全く無駄に終つた。この頃では、このやうな妥協はどうしてもすることが出来なかつた。そんなことは一層妻の不義の恐ろしさを彼に痛感させた。彼はナナ

が何を求めてゐるのかよく分つてゐた。そして彼はナナに次第に心易さを感じ、より深く事情を打明け、自分の立場を訴へ、夫人の署名のことに就いての心配を打明けた。

だが、ナナはそれをしつこく繰り返す様子はなかつた。彼女はもう眼を開けようともしなかつた。彼女が餘り蒼ざめたのを見て、彼は心配してエーテルを少し嗅がせた。すると彼女は溜息をついて、ダグネの名は出さずにそれとなく彼に訊ねた。

「結婚は何時ですの！」

「五日先の火曜日に、契約書に署名することになつてよ。」と彼は答へた。

彼女は眼を閉ぢたまゝ、闇の中で自分の考へを話すかのやうに言つた。

「ね、あなた、あなたは御自分のしなければならぬことがお分りでせう……私の望みはたゞ皆が満足することですの。」

彼はナナの片手をとつて彼女を宥めた。全く彼女には氣息が一番大切な事であつた。彼は最早興奮しなくなつた。エーテルの臭ひが滲み込み、生温い沈滞したこの病室は、すつかり彼の氣持を和らげて、幸福な平和を求めさせた。侮辱されて怒り立つた彼の體中の力も、熱の興奮と快樂の思ひ出をもつて、今この病む女の傍で看護しながらこの寢床

の熱氣に觸れてゐると、脆く抜けてしまつた。彼は女の方に身を屈めて、彼女を固く抱きしめた。彼女は顔を動かさずに、口許に勝ち誇つた微笑を浮べた。その時醫者のブウタレルが現はれた。

「やあ！ 御病人は如何です？」と、彼は親しげにミラファに言つた。「おやく、あなたは病人に話をさせましたね！」

この醫者は、何時もミラファをナナの夫扱ひにしてゐるのである。彼はまだ若い立派な男で、社交界に多い顧客を持つてゐた。その上非常に陽氣で、これらの婦人達とは友達のやうに談笑するが、決して一緒に寝たことはなく、その代り思ひ切り高い金を極めて正確に支拂はせた。一寸呼ぶと直ぐ来るので、ナナは一週に二三度人を遣つて來て貰つた。ナナは何時でも死を考へて身を顛はせながら、子供のやうに一寸した痛みをも心配げに訴へた。彼はお喋りや馬鹿話をしてナナを愉快な氣持にさせ、それで病氣を癒すのだつた。かういふ種類の女達は皆彼を愛してゐた。しかし今度はナナの痛みは眞剣なものであつた。

ミラファは非常に心を動かされて室を退いた。可哀さうにナナがこんなに弱つてゐるのを見ると、彼はもう感動以外には何も感じなかつた。彼が出ようとする、彼女は一寸合圖をして彼を呼び戻し、接吻してくれるやうに唇を差

し出した。そして低い聲で、冗談に脅かすやうな様子をして言つた。

「私があなたを許してあげたことは覚えてらつしやるでせう……奥様と仲直りして下さいね。でなきや、私怒るわ！」

サビイヌ伯爵夫人は、やつと塗料が乾いたばかりの修繕した屋敷で、饗宴を開くために、火曜日に娘の契約書に署名したいと思つてゐた。五百の招待状が、あらゆる階級に互つて發せられた。その朝までも裝飾屋が壁掛を張りつけてゐた。九時頃吊燭臺に火をつける時になつて、建築技師は夢中になつてゐる伯爵夫人と共に最後の指圖をした。

それは優しい魅力を持つた春の饗宴の一つであつた。六月の夜は暑かつたので、大廣間の二枚の扉を開け放つて、舞踏場を庭の敷砂の上まで擴げることが出来た。最初に着いたお客達は、入口で伯爵と夫人に迎へられると、眩暈を感じた。それは、先づ伯爵夫人の冷たい思ひ出の漲つた昔の客間や、信心家らしい嚴肅さに満たされた古風な部屋や、嵩張つたマホガニーの帝政式の家具や、黄色い天鵞絨の壁掛や、縁がかつた濕つぽい天井などを思ひ出さなければならなかつたからだ。それが今は、入るとすぐ、玄關には金で一段と目立つ寄木細工が、高い枝付燭臺の下に、波形に嵌められてゐた。そして大理石の階段には、繊細に彫刻された欄干が流れるやうに續いてゐた。次に客間はジュノ



アの天鵞絨を張り、天井には建築家がダンビエール家の寶立で一萬法を拂つて手に入れたブウシエ(フランク・ブウシエ、有名な里の)の大きな裝飾を施して、眩しい程輝いてゐた。吊燭臺や壁面に据ゑた水晶の枝形大燭臺は、硝子や高價な家具の裝飾品を照らして輝いてゐた。サビイヌの肘掛椅子——嘗つては不調和だつた赤い絹張りのたゞ一脚の椅子が、その和らかい色をもつて、じり／＼と激しく燃えてゆく火のやうな肉感的な倦怠、鋭い享樂的氣分で、屋敷全體を充たすまで擴つがたやうに思はれた。

もう人々は踊つてゐた。庭の樂隊は開放した窓の前でワルツを奏してゐた。なだらかなリズムは大氣の中を軽く傳はつて來た。庭はヴェニス提灯に照らされて、明るい影の中に、遙かに擴がつてゐた。その芝生には一つの卓子が置かれ、端には深紅の天幕が張られてゐた。このワルツは丁度ブロード・ヴェニスの卑猥な陽氣さを持つた低級な曲であつたが、その曲は響のよい波と壁を温めるやうな戰慄とをこの古い屋敷に滲み通らせた。それは丁度街から人間臭い風が吹いて來て、由緒の深い住居の中に朽ち果てた年月の塵を吹き拂ふが如く、ミラファ家の過去——この家の中に眠つてゐた名譽と信仰の半世紀を、持ち運んで行つたやうに見えた。

伯爵の母の年とつた友人達は、全く知らない所へ來たか

のやうに呆然として、燵の傍の彼等がいつも坐る場所に退いてゐた。彼等はだん／＼増して來る人々の中に、そこに小さな一群をしてゐた。食堂を通つて來たデュ・ジョンコア夫人は、どの室にも見覚えがなくなつてゐた。シャントロア夫人はぼんやりした様子で、恐ろしく大きく見える庭を見てゐた。間もなく隅の方に低い聲で、色々な悪口が初まつた。

「ねえ」とシャントロア夫人は呟いた。「伯爵夫人は、元のやうにおなりになれるかしら……考へても御覽なさい、人前に出ていらつしやるなんてあんまりのことだわ。こんな贅澤やこんな大騒ぎ……よくないことですよ……」

「サビイヌさんはほんとにどうかしてゐるわ。」デュ・ジョンコア夫人は答へた。「入口の所で會ひになつたでせう？ おや、こゝからあの方が見えますわ……ありつたけのダイヤモンドを着けてゐらつしやるわ。」

暫くの間、彼女等は立ち上つて遠くから伯爵と夫人とをじろ／＼見てゐた。サビイヌは純白な着物をつけ、素晴らしい英吉利製のレースを飾つて、若々しい快活なその美しさを誇つてゐた。絶えずその顔に湛へてゐる微笑の中には微かな陶酔が交へられてゐた。彼女の傍には、年とつた少し蒼白い顔のミラファが靜かに威嚴を保つて微笑んでゐた。「昔は伯爵が御主人だつたのですがね。」シャントロア夫人

は言葉を繼いだ。「小さな椅子一つでも、御主人のお許しがないと家の中に入れることは出来なかつたのですがね……でも奥様はすつかり變へてしまつて、この頃は、伯爵が奥様の家にゐらつしやるといふ風ですわ……奥様が客間を作り變へるのをどうしても承知なさらなかつた頃を覚えてゐらつしやるでせう？ それが今では家中を作り變へたのですよ。」

しかし、彼女等は黙つてしまつた。シュセル夫人が若い紳士等に取り巻かれ、夢中になつて軽い叫びをあげ、この家の有様を褒めながら入つて來た。

「まあ！ いゝわね！ 素敵だわ……よい御趣味ね！」そして女達に向つて遠くから言つた。

「まあ！ 手入れなすつたので、前の古くさい様子は影もなくなつてしまつたわ……ほんとに素敵になつたわ！ 全く立派ね……これでこそ人を招ぶことが出来るわ。」

二人の老婦人は小聲で、今度の意外な結婚のことを話しながら、改めて腰を下した。エステルは薔薇色の絹の着物を着て、何時ものやうに瘦せ細つて、處女らしい無言の顔付で通り過ぎた。彼女はおとなしくダグネと結婚することを承知した。喜びもなく悲しみもなく、冬の夜に燵に薪をくべてゐた時のやうに冷靜であつた。彼女のために催されたこの饗宴も、光も花も音楽も、彼女には何の感動も與へ

なかつた。

「無賴漢みたいな男ですわね。」とデュ・ジョンコア夫人が言つた。「私一度も會つたことはいませんわ。」

「お氣をつけなさいな。來ましたよ。」とシャントロア夫人は呟いた。

ダグネは、ユーゴン夫人が息子と一緒に來てゐるのを見つけると、急いで走り寄つて腕を貸した。彼は微笑を湛へ、まるで彼女が自分の幸運のために大いに骨折つてくれたかのやうに、親切の限りを盡した。

「どうも有難う。」彼女は燵の傍に坐りながら言つた。「こゝは私の昔馴染の場所ですよ。」

「あなたはあの人を御存じなのですか？」デュ・ジョンコア夫人はダグネが行つてしまふと訊ねた。

「え、よく存じて居りますの。いゝ人でございますよ。家のジョルジュが大層好いてゐますので……非常に立派な家の生れでございますよ。」

そしてこの人のよい婦人は、漠然と感じられる反感に對して、ダグネを辯護した。彼の父はルキ・フキリップ王に篤く信頼されて、死ぬまで知事をしてゐた。彼の代になつて、多少は財産が減つた。破産したとも言はれてゐるが、兎に角、一人の叔父が大地主で、彼にその財産を遺すことになつてゐる。そのやうなことを話しても、相手の二人の婦人



は頭を振つて信用しなかつた。ユーゴン夫人も當惑したやうに、結局彼の生れが尊敬に値するものであることを繰り返した。彼女は非常に體がだるくて、足が重いと滾してゐた。一月以來、用事がたまつてゐたのでリシエリウ街の家に住んで居ると言つた。悲しみの影が、彼女の母親らしい微笑を覆つた。

「兎に角、」とシャントロー夫人は結論した。「エステルさんはもつとずつとよい所に結婚を申し込むことが出来たのでせうにねえ。」

樂隊が立つた。四組舞踏であつた。人々は場所を空けるために、客間の兩側にとつと退いた。明るい色の着物が、黒い服の間に交つて通つて行つた。輝く光は、頭の波の上に、寶石をきらめかせ、純白の羽毛をそよがせ、リラや薔薇の花を明るく咲かせてゐた。もう暑かつた。潑刺とした音楽の調子の下に、滲み入るやうな香が、軽やかな網目織や、露はな肩の蒼白く浮いてゐる縞子や絹の亂れた着物からたち昇つてゐた。隣の室々の奥の開けた扉からは、婦人達が並んで、扇で風を入れながら慎ましげに聲を立て、笑ひ、眼を輝かせ、口を歪めながら坐つてゐるのが見えた。客は絶えず到着して、一人の従僕がその名を呼びあげてゐた。一方、紳士達は人波の中でゆつくりと背のびをして、遠くの空いた椅子を探し、彼等の腕に凭れてもぢくしてゐる

婦人達を坐らせようとしてゐた。しかし、屋敷は人で一杯になつて、スカートはかすかな音を立て、重なり合つてゐた。一方の隅では、レースや、結び玉や、突き出した腰當などで通路が塞がれてゐたので、このやうな目まぐるしい混雑に慣れてゐる婦人達は、淑かさを保つて、禮儀正しく控へ目にちつと動かないでゐた。又、庭の奥深くには、ヴェニス提灯の薔薇色の光の下に、幾組もの夫婦が、息苦しい大廣間を逃れて入り込んでゐた。人々の影が、木立の向うから遠く和やかに聞えて来る音楽にリズムを合せてゐるやうに、芝生の縁を流れ過ぎてゐた。

シュタイネルは、卓子の前でシャンパンを飲んでゐたフウカルモンとラ・フロアズに會つた。

「うんざりするほど飾り立てたものだね。」とラ・フロアズは、金色の棒の上に張り渡された。眞紅の天幕を見ながら言つた。「まるで牛糞麵麩の市場にゐるやうだ……ね？ さうだ！ 生糞麵麩の市場だよ！」

今では彼は、すべてに對してひねくれ、もう何一つ眞面目にとるには足らないと思つてゐる若者のやうな様子をして、皮肉な冗談をしきりに言ひだした。

「あの可哀さうなワンドゥルが生き返つて來たら、すつかり面喰ふでせうね。」とフウカルモンは呟いた。「あの男があすこの燧爐の前で、やり切れないほど退屈してゐた頃の

ことを覚えてゐるでせう？ いや、いや！ 笑ひごちやありませんよ。」

「ワンドゥルだつて！ 止して貰ひたいね、あんな奴の話は。」とラ・フロアズは、輕蔑するやうに言つた。「火の中へ飛び込んで、僕等を驚かさうと思つたら、大間違ひだよ！ 今時、あいつのことなんて、一人だつて話す者はないよ。ワンドゥルなんて奴は、人からも忘れられるつまらないあれつきりの男さ！ あいつのことなんか、聞きたくもないね！」

その時、シュタイネルが彼等に握手をして言つた。

「御存じですか、ナナが來ましたよ……いや、全く、入つて來た時の様子つたら！ 素晴らしいもんでしたよ……先づ、伯爵夫人に接吻して、それからダグネにかう言ひながら近づいて來た子供達を祝福したのですよ。『ポウル、お前さんが若しあの人を欺せば、それは私を欺すことになるのですよ……』え、なんですつて！ あなた方はあれを知らなかつたんですか！ いや全く見事な、素晴らしいものでしたよ！」

二人は口を開いて彼の言ふことを聞いてゐたが、終ひには笑ひ出した。彼は得意になつてひどく元氣づいた。

「え？ あなた方は今度の結婚がうまく行くとおぼえてゐたか！ ナナなんですよ、話を纏めたのは。それに、

ナナはこの家族同様なんですよ。」

ユーゴン兄弟が通りかゝつた、フキリップは彼を黙らせた。さうすると男達の間で今度の結婚の話が始まつた。ラ・フロアズがそのいきさつを話すと、ジョルジュはひどく怒つた。ナナは新郎にとつては眞に當るミラファと極めて密接な關係があつたことを話した。たゞナナが、昨日までダグネと寝てゐたのだらうといふことだけは、嘘であつた。フウカルモンは無遠慮に肩を聳かした。一體ナナが何時誰と寝るかは誰にも分らないことなのだ。ジョルジュは興奮して、「いや、僕は知つてゐるよ！」と答へたので、皆大笑ひをした。この連中は、シュタイネルの言ふやうに、何時も臺所の召使達のやうな大騒ぎをしてゐるのであつた。

卓子にはだん／＼人が集つて來た。彼等は坐り合つたままで席を譲り合つた。ラ・フロアズは、まるでマビエユ(當時の巴黎の遊樂地)にでも居るやうな積りで、圖々しく婦人達を見てゐた。廊下の奥でダグネをつかまへて盛んに説教をしてゐるのを、こゝに居合はせた人々は發見して驚いた。彼等はがや／＼と、ダグネは懺悔をさせてゐるのだとか、結婚當夜の心得を教へてゐるのだとか、軽い冗談を言つて騒いだ。それから彼等は、客間の扉の前に戻つた。客間には幾組もの人々が、左右に分れて立つてゐる人々の間を縫つて、熱心にボルカを踊つてゐた。外から吹き込む風



の下に、蠟燭は高く燃えてゐた。拍子をとつて軽い響を立  
てながら衣服が通り過ぎる毎に、微かな風が立つて、燭臺  
から滴り落ちる燃えるやうな熱氣を冷すのであつた。

「成程！ 中に居れば寒くはないなあ！」とラ・ファロア  
ズが呟いた。

庭の暗い影から出て来た時には、彼等は瞞きをした。そ  
して彼等は、シユアール侯爵がたつた一人で、長身を利し  
て自分の周囲の女の露はな肩を見下してゐるのを、指し示  
し合つた。侯爵は少くなつた白髪の下に、蒼ざめた嚴しい  
顔を、尊大な威厳を見せてゐた。侯爵は、ミユファ伯爵  
の行爲に愛想をつかして、この間公然と絶交し、それ以  
來邸内に足を踏み入れたことはないのだつた。今夜こゝ  
に姿を現はすことを承知したのは、彼の孫娘のたつての願  
ひによつてであつた。なほ侯爵は、現代の人々の放埒と  
恥づべき妥協をすれば、上流階級の瓦解を來すといふこ  
とを考へて大いに憤慨し、その孫娘の結婚を許さなかつ  
た。

「あゝ！ 世も末ですわね。」と燧爐の傍でデュ・ジョンコア  
夫人はシャントロー夫人の耳許に囁いた。「あの女が不幸な  
伯爵を惹はしたのです……あんなに信心深く、氣高い方  
だつたのに……」

「あの方は破産なすつたやうでございますよ。」とシャント

ロー夫人は話を續けた。「私の夫の手許に妙な手形があり  
ましたわ……。あの方は今ヴィリエ街の家に住んでゐらつ  
しやいますのよ。巴里中の人は皆その話をしてゐますわ……  
全くサビイヌのことは黙つて見てゐられませんか。尤も  
伯爵もあの人に色々苦勞させるんでせうがね。でも、サビ  
イヌもお金を無暗にばらまいたりして……」

「あの方はお金をばら撒くだけなんですよ。」と相手の婦  
人がそれを遮つた。「まあ結局、二人とも、落ちつくところ  
にさつさと落ちつくでせうよ……津波の中で溺れ死ぬので  
すわ。」

しかし或る優しい聲が彼女等の話を遮つた。それはヴノ  
オであつた。彼は何處かに身を隠したいとでもいつたやう  
な風で、彼女等の後へ坐りに來たのであつた。そして腰を  
屈めて呟いた。

「どうしてそんなに心細いことを仰しやるのですか？ 總  
てのものがどうにもならなくなつたやうに見える時、神が  
顯はれ給ふのです。」

彼は、昔自分が萬事を指圖してゐたこの家の没落を靜か  
に目前に見てゐたのであつた。フォンデットに於ける滞在  
以來、彼は自分が何を言つても全然無益に終るといふこと  
を明確に意識して、この家の人々の狂亂を募るがまゝにし  
て置いた。彼は總てのことを——ナナに對する伯爵の熱烈

な戀も、伯爵夫人の傍にフオシユリイの居ることも、またエ  
ステルとダグネの結婚さへも、成行きに委せてゐたのだ。

こんなことはつまらないことぢやないか！ そして彼は、  
ひどい放蕩といふものはやがて大きな信仰に導くといふこ  
とを十分に察知して、若い夫婦も不和になつた伯爵夫婦も  
うまく制御しようと考へて、以前よりも更に優しい意味あ  
りげな様子をしてゐた。神の攝理は何時か現はれるであら  
う。

「私達の友人は、」と彼は低い聲で續けた。「何時も立派な  
宗教的感情に燃えてゐられるのです……。その最もいゝ證  
據を私にお示しになりました。」

「結構ですわね。」とデュ・ジョンコア夫人は言つた。「では、  
あの方は先づ奥様と仲直りをなさる筈でございますね。」  
「勿論です……。今度私は、遠からず和解せられるのだら  
うといふ望みを持つてをります。」

すると、二人の老婦人は彼に色々質問した。しかし彼は  
また極めて慎ましくなつて、神の御意のまゝに従はねばな  
らぬと言つた。彼のすべての望みはひたすら伯爵と伯爵夫  
人との仲を元にもどして、世間の誹謗を避けるといふこと  
にあつた。宗教は、人が禮節を守つてさへるれば、人間の  
幾多の缺點をも赦すものであるといふのだつた。  
「兎に角、」とデュ・ジョンコア夫人は語を繼いだ。「あなた

は今度のあの無禮漢との結婚をお止めなさるところでした  
のに……」

するとこの老人は深く驚いたやうな様子をした。

「あなたは間違つてゐらつしやるのです。ダグネは極めて  
立派な青年です……。私はよくあの方のお考へを存じてを  
ります。あの方は若い頃の過ちを忘れようと思つてゐらつ  
しやるのです。エステルはあの方を必ず再生させるでせ  
う。」

「おゝ！ エステルが！」と、シャントロー夫人は輕蔑する  
やうに呟いた。「あの娘はほんとはきくししないやうで  
すわね。本當に取柄のない娘ですわ！」

この意見はヴノオを微笑させた。だが彼は、新婦に就い  
ては餘り辯護しなかつた。無關心にならうとしてゐるかの  
やうに、彼は臉を閉ぢて、再び婦人達の後の隅の方に姿を  
隠した。ユイゴン夫人は疲れてほんやりしながら、二言三  
言耳にした。彼女は自分に挨拶したシユアール侯爵に話し  
かけながら、寛大な様子で、取りなすやうに結論するので  
あつた。

「この方々は餘り嚴格過ぎますわ。今の時世は誰にとつて  
も全くよくないのですもの……ねえ、侯爵さま、自分が  
過ちを赦されたいと思ふなら、他人を赦してあげなければ  
なりませんわねえ。」



侯爵は諷刺を言はれたのかと思つて、一寸當惑してゐた。しかしこの人の好い婦人が大層悲しげな微笑をしてゐたので、直ぐ安心して言つた。

「いや、或る種の過失に對しては赦すことは出来ません……さうした寛容な態度をとれば尙更、社會は墮落の深淵に落ちて行くのですからね。」

舞踏は再び活氣づいて來た。また四組舞踏が始まつて、客間の床に軽い震動を與へ、恰も古い住居は饗宴の動搖に撓んでしまつたかのやうであつた。時々、人の頭で薄暗くなつた中に、舞踏で上氣して眼を輝かせ、唇を半ば開けた女の顔が、燭臺に白い肌を照らされて浮び出た。デュ・ジョンコア夫人は、この有様は餘り無分別だ。辛うじて二百人を入れる位ゐるの室に五百人の人を詰めこむなんて、餘り無分別だ。それ位ゐるなら、何故カルウセルの廣場でも結婚契約書に署名しないのだらう、と言つた。シャントロー夫人は、これが新しい風習なんぞせう、と言つた。昔はこのやうな儀式は親族だけで行はれたのだが、今日では、大騒ぎで、面識も無い人達を矢鱈に招待する底抜け騒ぎでもしなければ、夜會は興ざめたものとも思つてゐるらしい。人は自分の贅澤振りを見せびらかし、自分の家に素性も知れない者を引き入れるのである。そしてこのやうな混亂がやがて家庭を腐敗させることは、極めて當然なことである。

と言ふのだつた。この婦人達は、今夜の客の中に五十人以上の顔見知りか居ないと滾してゐた。一體こんな人達は何處から來たのであらう？ デュルテの着物を着た若い娘達は、肩までも露はに出してゐた。或る女は、髻の中に金の短剣を突き立て、黒玉の刺繍した着物を鎖帷子のやうに着てゐた。また或る女は、人が笑ひながら後からついて行くほど、大膽な、びつたり身についた、人目につくスカートをはいてゐた。今年の冬の終りのあらゆる贅澤はこの家に集つてゐた。氣儘な享樂の社會、一家の主婦が一日の交際の中から拾ひ集めてくるもの、立派な名前と大きな汚ない行爲とが一緒になつて同じ享樂の欲望の中に入りこめいてゐる社會である。暑さが一段と加はり、溢れる程に人の一杯ゐる客間の中央を、人々の顔は對稱的に並んで拍子を合はせて四組舞踏を踊つてゐた。

「全く粹な様子だね伯爵夫人は！」とラ・ファアロアズは廳へ降りる扉口で言葉を續いだ。「娘さんより十歳も若く見える位だよ……。時に、フウカルモン君、君は覺えてゐるかね、昔ブンドゥルが賭をして、伯爵夫人には腿がないつて言つたことを。」

この厚顔無恥な態度は、紳士達に厭な氣持を起させた。フウカルモンはたゞ次のやうに答へた。

「君の従兄に聞いてみたまへ。ほら丁度來たよ。」

「成程ねー それやいゝ考へだ……」とラ・ファアロアズは叫んだ。「僕は十ルイ賭けるよ、あの人には確かに腿がある。」實際フオシュリイがやつて來た。この家の馴染である彼は、屏口の混雜を避けて、食堂から廻つて來たのであつた。彼は冬の初めにローズに再び捕へられ、彼女と伯爵夫人の間に挟まれて、二人のうち誰をどうして棄てよいか分らないので、非常に厭々しながらも、結局兩方のものになつてゐた。サビイヌは彼、虚榮を喜ばせるが、ローズはずつと彼を楽しませる。その上ローズには眞の情熱、ミニョンを困らせるやうな、男に對する激しい愛情があつた。

「一寸聞きたいことがあるんだがね。」ラ・ファアロアズは從兄の腕をとつて繰り返して言つた。「ほら、白い絹の着物を着た婦人がゐるだらう？」

彼は遺産を得て傲慢な氣持を持つやうになつてからは、古い恨みを晴らしたくて、好んでフオシュリイをからかつた。彼が昔田舎から巴里へ來たとき、嘲弄されたその仇を討ちたいと思つてゐたのであつた。

「うん、レースをつけた婦人だね。」

新聞記者は、まだ分らないので伸び上つた。

「伯爵夫人だらう？」と、彼はたうと言つた。

「さう、その通り……僕は十ルイ賭けたんだがね。あの女には腿があるかい？」

さうして彼は笑ひ初めた。昔、伯爵夫人が他の男と寝ないだらうかと聞いて、ひどく彼を周章させたこの元氣な男の鼻柱を折つてやつたことを非常に喜んだ。だがフオシュリイは少しも驚かずに、ぢつと彼を見つめた。

「ふん、馬鹿！」と、やがて彼は肩を聳かしながら言ひ放つた。

それから彼はそのあたりにゐた紳士達と握手を交した。

一方ラ・ファアロアズは、自分が何か馬鹿なことを言つたかどうか分らなくなつて、すつかり度を失つた。人々は、競馬以來銀行家とフウカルモンがヴィリエ街のナナの家の常連に仲間入りしたことや、ナナは非常に快方に向ひ、伯爵が毎夜彼女の様子を見に行くと言ふことなどを話した。その間、ぢつと話を聞いてゐたフオシュリイは、何か考へ込んでゐるやうであつた。朝、喧嘩をした時、ローズは例の手紙を送つたから、これから彼がその貴婦人の家へ行けば、定めし歓迎されることであらう、とはつきり言つたのであつた。彼は長い間躊躇した後、兎に角勇氣を振つて出て來たのだ。しかしラ・ファアロアズの馬鹿々々しい冗談を聞くのと、表面は冷静を装つても、實は心を轉倒させてゐたのであつた。

「どうかなすつたんですか？」とフキリップは彼に訊ねた。「何だかお苦しさうですが。」



「私ですか、いゝえ少しも……仕事があつたので、どうも遅くなりました。」  
 そして、人生にありふれた悲劇を解決する、人には分らないやうな英雄主義をもつて、彼は冷やかに言つた。  
 「私はまだこの家の人々に御挨拶をしてないので……禮儀は守らなければなりませんからね。」  
 しかも彼は、ラ・ファアロアズの方を振り向いて冗談さへ言つた。

「さうだらう、先生？」

そして彼は人々の間を押し分けて行つた。召使が來客の名前を投げつけるやうに精一杯に叫ぶ聲は、もう聞えなくなつてゐたが、扉口では伯爵と夫人が、入つて來る婦人達にひきとめられて、まだ話を交してゐた。彼はたうとう伯爵達の所に行きついた。庭の入口の階段に居た紳士達は、その場の様子を見ようと背伸びをした。そして、ナナがきつともうお喋りをしたに違ひないと思つてゐた。

「伯爵はまだあの男に気がつかないのだよ。」とジョルジュは呟いた。「見て居給へ！伯爵が振り向いた……さあ見たぞ。」

樂隊は再び「フロンド・ヴェニヌス」のワルツを奏し初めてゐた。フォシュリイは先づ何處までも落着き拂つて、絶えず微笑してゐる伯爵夫人に挨拶した。それから、彼は伯爵の後へ行つて極めて物靜かに、暫くちつと待つてゐた。その

夜伯爵は、尊大な威嚴を保ち、大官らしく嚴然と頭をもたげてゐた。遂にこの新聞記者を見た時、彼は一層その尊大な態度を増した。數秒間二人の男は互にちつと見合つてゐた。そしてフォシュリイから先に手を出した。ミラファも手を差し出した。彼等が手を握り合つてゐると、サビイヌ伯爵夫人は、その前に目を伏せて微笑んでゐた。その間もワルツは絶えずふざけた淫らなリズムを奏してゐた。  
 「どうやら無事に行きさうぢやないか！」とシュタイネルが言つた。

「二人の手はひつゝいてしまつたのかい？」とフウカルモンは、餘り長く手を握り合つてゐるのに驚いて訊ねた。

抑へきれない思ひ出が、フォシュリイの蒼ざめた頬に薔薇色の閃きを見せた。彼は薄暗い埃だらけの古道具の並んだ小道具部屋を再び見るのだつた。そしてそこには、ミラファが無暗に人を疑ひながら、卵子立てを持つてゐた。だが今はミラファは人を疑はなかつた。それは崩れて行く威嚴の最後の名残であつた。フォシュリイは、伯爵夫人の朗らかな快活さを見て、恐怖を滅し、急に笑ひたいやうな氣がした。それが彼には可笑しく思はれたのである。

「あゝ！今度は夫人だ！」とラ・ファアロアズが叫んだ。恰好なと思つた時にも、冗談一つ言はないでちつと見てゐたのだ。「ほら、あそこへナナがやつて來るだらう。」

「黙つてゐたまへ、馬鹿だね！」とフキリップは呟いた。「ねえ、君……ナナのために、ワルツを弾いてゐるのだよ、さうなんだよ！ ナナが來たよ。それにナナは伯爵夫妻を仲直りさせようとしてゐるんだからね！ 何といふことだい……何だい、君は見ないのかい！ ナナはフォシュリイとサビイヌ夫人と伯爵の三人を、みんな愛稱なんかで呼びながら、胸に抱き緊めてゐるよ。あれを見てゐると、へんな氣持になるね、あの家族的な場面は。」

エステルが近寄つて來た。フォシュリイが挨拶すると、その間、彼女は薔薇色の着物の中で體を硬ばらせ、無口な子が驚いた時する様に、両親の方を一寸眺めてから彼を見てゐた。ダグネもまた、この新聞記者と固い握手を交はした。彼等は一團となつて賑やかに談笑してゐた。と彼等の後に、ダノオが、信心深い眼差しで一同を包み、敬虔な優しい氣持で彼等を覆ひ、やがては神の攝理の道を作つてくれるやうな深い信仰に幸福を感じながらそつと入つて來た。

ワルツは常にふざけた肉感的な調子を奏してゐた。それはこの上なく大きな快樂の復奏で、丁度上げ潮のやうにこの舊い屋敷に打ち寄せて來た。樂隊は、小さな笛の顫音と、ヴァイオリンの絶え入るやうな溜息を漲らせた。ゼノア産の天鵞絨や金細工や繪畫の下で、枝附燭臺は非常な熱と光の粉末を發散してゐた。一方、今夜の客の群は、硝子に映

つて二倍の人数に見え、次第に高まるざわめきの聲と共に、益々殖えてゆくやうに見えた。客間の周圍に坐つて微笑してゐる女達の間を、組になつた男女が、腰に手をあて、通り過ぎ、一層強く床を震動させた。庭には、ヴェニス提灯から洩れる炭の熾火のやうな光が、遠い火事の反映のやうに、小路の奥に新鮮な空氣を求めに行く散步者達の黒い影を、映し出してゐた。そしてこの壁の顫動や、立ち籠めた赤い煙は、この家の隅々から古い名譽が焼け崩れて行く最後の焰のやうであつた。四月の或る夜、フォシュリイは、この家で水晶の碎けるやうな音を聞いた。だがあの當時初まつたばかりのまだ控へ目勝ちな陽氣さは、次第に大膽になり、狂氣染みてきて、たうとう今日の華々しい饗宴となつたのであつた。今ではこの家の龜裂はますます大きくなつて、やがては没落するこの家の運命を豫告してゐた。場末の醉漢の家庭は、食器棚にはパンが無く、財布は狂酒の爲に空にされるといふやうに、暗い窮乏から害はれ滅んで行く。だがこのやうな上流の家庭では、蓄積された富が、一舉に點火されて崩壊して行くその上を、ワルツが舊家の臨終の鐘を打つてゐるのである。そしてナナは、目には見えないが、その柔らかな肢體を持つて舞踏會の上に擴がつて、野卑な音楽のリズムの上に、熱い空氣に漂つてゐる彼女の臭ひを撒きちらし、この社會を解體させようとしてゐるので



あつた。  
 ミラファ伯爵が、二年前から一度も入つた事のない妻の寢室に姿を見せたのは、教會で娘が結婚式を挙げた夜であつた。伯爵夫人は非常に驚いて、最初は後退りをした。しかし彼女が、決して口邊から離したくないあの陶酔したやうな微笑を失はなかつた。伯爵はひどく間の悪るさうにぶつ／＼言つてゐた。それで夫人は少しばかり彼をたしなめた。だが、二人は決してはつきりしたことは言はなかつた。それはお互に許し合ふことを望んでゐる宗教的な氣持だつた。そして二人の間では、默契によつてお互の自由を保持することに定められてゐた。寢床に入る前に、伯爵夫人は何か躊躇してゐるやうに見えたので、彼等は家庭の色々な用事を話し合つた。伯爵は、先づ第一に、ポルドの土地を賣却することを話した。彼女は直ぐに同意した。二人とも非常に窮乏してゐるので、それを分配することにした。和解が成立した。ミラファはこれで良心の苛責の念が軽くなつたのを感じた。  
 丁度その日、ナナが午後の二時頃眠つてゐると、ゾエが部屋の扉を敲いた。カーテンが下してあつて、薄明りの靜かな爽かさの中に、熱い風が窓から入つて來た。ナナはまだ多少弱々しかつたが、寢床に起き上つてゐた。彼女は眼を開いて、訊ねた。

「誰なの？」  
 ゾエが答へようとしたとき、ダグネがづか／＼と入つて來て、姿を見せた。彼女は枕に脇をついて、ゾエへ出て行くと言つた。  
 「まあ、あんたなの！ 結婚の日だといふのに……一體どうしたの？」  
 彼は暗いのに驚いて部屋の眞中に立つてゐた。しかし闇に慣れると、歩み寄つて來た。燕尾服を着て、白ネクタイと白手袋を着けてゐた。そして彼は繰り返して言つた。  
 「えい！ さう、僕です……あなたは忘れたのですか？」  
 全く彼女は何も思ひ出さなかつた。彼はわざと大袈裟な様子をして、自分を捧げに來たのに相違なかつた。  
 「ねえ、あなたのお蔭で……だからお禮にあなたに僕の清い體を捧げに來たんです。」  
 丁度、彼は寢臺の縁に居たので、ナナは露はな両手で彼を抱きしめた。激しく笑つて體を揺ぶりながら、殆んど泣いてゐた。それほど彼女はこの男の情の厚いのを喜んでゐた。  
 「まあ！ この子は、面白いこと……でもよくこんなことを覚えてゐたのね！ 私はもう忘れてゐたわ！ ぢや、あんた逃げて來たのね、教會から出て來たのね。ほんと、あんた香臭いわ！ でも、さあ、接吻して！ もつと強く、」

ねえ！ さあ、きつとこれが最後よ。」  
 まだかすかにエーテルの臭ひの漂つてゐる暗い部屋で、二人の甘い笑聲が消えて行つた。非常な暑さがカーテンを膨らませ、往來の子供の聲が聞えた。それから、時間を氣にしながら、彼等はふざけ合つた。ダグネは手輕な食事を濟ませた後に、すぐ花嫁と一緒に旅に立つのであつた。

十三

九月末の或る日、ミラファ伯爵は、その夜ナナの家で晚餐をとる筈になつてゐたのを、テニールイ宮殿から突然の命令を受けたので、それを知らせるために夕暮どきにやつて來た。屋敷にはまだ灯が點つてゐなかつた。召使達は臺所で大聲で笑つてゐた。彼は靜かに階段を登つて行つた。その繪の硝子窓はまだ温かい影の中に輝いてゐた。二階の客間の扉は音を立てなかつた。その部屋の天井には蒼薇色の夕陽が弱い光を投げ込んでゐた。赤い壁覆ひや、ふか／＼とした長椅子や、ラック塗の家具や、さては亂雑に置かれた刺繡や、青銅や陶器などが、刻々と迫つて來る闇のなかに眠り、もう象牙の光澤も金の反射もない部屋の隈限に沈んでゐた。そしてその薄闇の中に、たゞ一つ、くつきりと眼につくやうな、白いスカートを大きく擴げたナナが、ジュールジュの兩腕に身を投げ掛けてゐるのを、彼は見

た。もうどんな辯解の餘地もなかつた。彼は叫び聲を發しようとしたが、咽喉につまつて、口を開いたまゝ立つてゐた。  
 ナナは弾き出されたやうに身を起した。そして彼女は、自分の部屋へ彼を無理矢理に押しやつて、ジュールジュに逃げ出す暇を與へた。  
 「入つて頂戴。」と彼女は夢中になつたまゝ囁いた。「何も彼もお話ししますから……」  
 彼女はこの不意の出來事に前後も分らなくなつた。今までに彼女は決してこんなに、自分の家の客間で、しかも扉に鍵もしないで、男の言ひなりになつたことはなかつた。それといふのも、フキリップに對する嫉妬で狂氣のやうになつたジュールジュとの口論やいきさつが、こんな始末になつたのであつた。彼が彼女の頸に纏つて激しく獻敵したので、彼女は心の中に、ひどく可哀さうに思つて氣を鎮めてやらうとしたが、それもどうしていゝか分らなくて、彼の言ふがまゝになつてゐたのであつた。そして彼女のところへ董の花束一つ持つて來ることも出來ないやうな、母親から小使もろくに貰へない小僧つ子と、こんなに我を忘れるやうな馬鹿な眞似をしたのは、彼女にとつてはこれが初めてのことだつたのに、そこへ丁度伯爵がやつて來て二人の現場を見てしまつたのだ。ほんとにまあ運の悪いこと！ 親



切にしようとするれば、こんなことになるのだわ！と彼女は考へた。

彼女がミリアアを押し込んだ部屋は、眞暗だったので、彼女は手探りで荒々しく電鈴を鳴らして、ランプを持つて来させた。全くジュリアンのせみだわ！と考へた。客間にランプがありさへしたら、決してこんなことは起りはしなかつたのだ。突然やつて来たあの獣のやうな夜が、彼女の心を變らせたのだつた。

「お願いですから、どうか話を聞いて下さい。」と彼女が言つた。その時ゾエがランプを持つて来た。

伯爵は腰かけて膝に手を置いたまゝ、今見たばかりの有様に呆然として床を見つめてゐた。怒りの叫びも立てなかつた。體の凍るやうな恐怖に前後もなく顫へてゐた。この苦しげな沈黙がナナの心に觸れた。彼女は伯爵を慰めようとした。

「さうよ！ そりや私が悪かつたわ……私のしたことは大變悪かつたわ……。え、私は自分の過ちを後悔してゐます。それがこんなあなたにあなたの氣を滅入らしたかと思ふと、非常に悲しいの……さあ、どうか優しくして、私を許して頂戴ね。」

彼女は伯爵の足許に跪ついた。そして彼の眼を覗き込んで、しとやかな優しい様子で彼が深く恨んでゐるかどうか

を知らうした。それから伯爵が長い溜息をついて、やつと氣を落ち着けると、彼女は一層甘えて、眞面目な優しい聲でなほその上辯解した。

「ね、あなた、かうだつたのよ……あの氣の毒な友達には斷りきれなかつたんですもの。」

伯爵は氣が折れてしまつた。彼はたゞジュールジュと手を切るやうに要求した。しかし彼が今まで懐いてゐた幻影は總て消えてしまつて、もう彼女の誓つた忠實さに信頼するとは出来なかつた。明日にでも、ナナはまた彼を欺すかも知れない。そして彼は、たゞ彼女と別れると考へるだけでも、人生に恐怖を感じ、意氣地のない欲望に惹かされて、なほ苦しみなながらも彼女を離すまいとした。

丁度それは、ナナがますます素晴らしい女となつて、巴里に輝き渡つてゐた頃であつた。彼女はまた、悪徳の方面に於ても有名になつてゐた。傍若無人に豪奢を衒ひ、金錢を輕蔑し、これ見よがしに多數の男の財産を蕩盡して、それで全巴里を見下してゐた。彼女の屋敷は輝かしい垣塙のやうなものであつた。そこでは飽くことを知らぬ欲望が燃え上り、彼女の唇を洩れるほんの僅かな息吹さへも、黄金を細かな灰に變じて、忽ちそれを風が撒き散らしてしまつた。嘗つて今までに、誰もこんな怖ろしい浪費振りを見た者はなかつた。その屋敷は奈落の上に建てられてゐるやう

なものであつた。男達は其の財産や、その肉體や、その名譽と共に奈落の底に吸ひ込まれて行つて、跡には塵さへも留めないものであつた。赤蕪や巴旦杏菓子や、獸肉をしやぶる鸚鵡のやうな食慾の女は、毎月その食卓のために五千法を費やした。臺所の浪費は際限も無く酷いもので、勘定は、次から次へと三重四重にも人手をくゞつてゐるうちに、價、高くなり、葡萄酒の大樽はそつと中味を抜かれるといふ有様だつた。ヴィクトリヌとフランソアが料理場を指圖してゐたが、二人は親類の者達を呼び込んで、冷肉や肉ス、プを食はせる他に、多くの人々をも招待した。ジュリアンは出入商人に口錢を要求した。硝子商人は三十スウの硝子板を置いて行つたが、その度に、彼には二十スウを儲けさせた。シャルルは馬の燕麥を喰ひ、買ひ入れた品物を二倍にして届け、表門から入つたのを裏口から賣り飛ばすやうなことをしてゐた。皆が皆こんな奪略に夢中になり、先を争つて掠め取つてゐる間に、ゾエはうまく表面をつくらつて、皆の盗みを匿してやりながら、その間へ自分も紛れ込んで目立たぬやうにしてゐた。しかし盗まれるものはまだしものこと、前の晩の食物は垣根に捨てられ、食料品は召使達もうんざりするほど有り餘り、砂糖はコップにこびりつき、瓦斯は出放題に焚かれて壁を落してしまつた。そしてこんなに多くの口が喰ひ潰してゐる家の中にはその没

落を急ぎ立てるところの、不精や意地悪や喧嘩などの、あらゆるものが揃つてゐた。また、二階のナナの方では、そのふしだらが一層激しかつた。一萬法もする着物は二度身に着けたばかりで、ゾエが賣つてしまふし、寶石は抽斗の奥で、碎けてしまつたかのやうに見えなくなつた。馬鹿氣た買物やその日その日の新流行品が、翌日は片隅に忘れられ、路に掃き出されてしまふのだつた。非常に高價なものを見れば買ひたくならずにゐられない性分の彼女は、身のまはりに、こんな花だとか高價な骨董品だとかを絶えず買ひつ放しにして置いて、その一時の氣紛れが高くつけばつくほど嬉しくてならないのだつた。何も手には残らなかつた。彼女はすべてのものを壞した。それらは、彼女の白い小さな指の間に萎れたり汚れたりした。何とも見分けられないままでに壞されたものがあたりに散らばつて、そのよれよれの布屑や、泥まみれの襦袢が彼女の後につき纏ひ、その通つた路を示してゐた。すると、この亂脈な金遣ひの最中に、一度に大變な勘定が、押し寄せて来た。帽子屋に二萬法、下着屋に三萬法、靴屋に一萬二千法、それに厩舎には五萬法の金が必要だ。六ヶ月のうちに、彼女は仕立屋から十二萬法の書付を受けとつた。ラポレットが平均四十萬法と見積つた生活状態を、別に變へた譯でもなかつたのに、彼女が今年費つた金額は百萬法に達した。これには彼女自



身も呆氣にとられて、一體どこへそんな金が流れて行つてしまつたのか分らなかつた。来る男は次から次へとナナの食物にされ、金は車に積んで運ばれたが、彼女の豪奢な生活できしんでゐる、この屋敷の下に年中掘られてゐる穴を遂に埋め盡すことは出来なかつた。

その上ナナは、最後の氣紛れを計畫してゐた。彼女は一度、自分の部屋を作り變へようと思ひつくと、もうその部屋が出来上つたのを見るやうな氣がしてゐた。それは茶がかつた薔薇色の天鵞絨を銀の金具で留め、それを天井まで天幕のやうな形に張つて、金の紐飾りやレース飾りまで付いた部屋であつた。それこそ豊かな優しい彼女の見事な金色の體の至上の住居に思はれた。しかし部屋は何と云つても、あの素晴らしい心をも奪ふやうな寢臺に對しては、たゞ額縁の役をつとめるものに過ぎなかつた。ナナは今までに嘗つて無かつたやうな寢臺、巴里中の人に来て、彼女のこの上もない裸體を讚美する王座とも祭壇ともいふべきものを、夢みてゐた。その寢臺は、どこからどこまで金と銀の浮彫がしてあつて、一個の大きな美術品ともいへるもので、銀の格子の上には金の薔薇の花を散らし、枕のところには、その花の間から帷帳の蔭に、寢臺の中で行はれる嬌態を窺つてゐる愛の神達が笑ひながら身を屈めてゐた。彼女はラポルデットに頼んで、金銀細工師を二人連れて來さ

せ、もう下圖には取りかゝつてゐた。その寢臺は五萬法かかるだらうといふことで、ミッファがそれを彼女に新年の贈物とすることになつてゐた。

ナナが驚いたことは、自分が、手足をも洗つてゐるやうな黄金の川に浸りながら、いつも金に不自由を感じてゐたことだつた。或る日などは、幾ルイかの、滑稽なほど僅かな金のために、責め立てられたこともあつた。そんな時はゾエに借りるか、でなければ、何とか出来るだけのことをして、自分でその金を作らなければならなかつた。しかし今では、彼女は身を投げ出すやうな極端な方法をとる前に、男達に當つて見て、彼等が身につけてゐるものを、冗談事のやうにして銅貨まで掠めて來るのだつた。三ヶ月この方、彼女はさうして殊にフキリップのポケットを空にした。そして彼女が切迫語つてゐる時には、彼は財布を置かないでその家から出ることは出来なかつた。そのうちに厚顔しくなつた彼女は、彼に借金を申込んだ。それも二百法とか三百法とかで、決してそれ以上ではなかつた。それを煩さく急がれる借金や勘定書に當てるのだつた。七月に經理係の大尉に任命されたフキリップは、僕は金持でないのですから、と言譯しながら、翌日にその金を持つて來た。それは善良な母のユーゴン夫人が、この頃では目に立つて厳しく二人の息子に注意してゐたからである。三ヶ月経つて見ると、

この小さな貸金も、度々繰り返されるうちに一萬法ばかりの額に上つてゐた。それでも大尉は、いつも朗らかな氣持のいい、笑顔を見せてゐた。しかし彼は瘦せて、時とするとか何かに氣を奪られたやうにぼんやりして、顔には苦惱の影が現はれてゐた。しかしナナを一目見ると、彼のそんな顔は直ぐに變つてしまつて、或る情熱的なうつとりとした様子になるのであつた。彼女は猫のやうに戯れた。別れるときに扉口で接吻して彼の心を酔はせて見たり、思ひ掛けない時に身を任せて、彼の心を捉んだりしてしまつた。そんなにして、彼は毎日勤務時間が終るや否や、もう彼女のスカート傍に釘づけにされてゐた。

或る晩ナナは、自分はまた別にテレエズといふ名もあつて、その祝名節が十月十五日に當ると言つた。すると男達は残らず彼女に贈物をした。フキリップ大尉も贈物として、サクソニヤの古代の金を鏤めた陶器の糖杏入れを持つて來た。彼が入つて來ると、彼女はたつた一人きりで湯上り姿のまま化粧室にゐた。白と赤のフランネルの大きな化粧着を纏つたまゝ、卓子の上に並べた贈物の一つ／＼夢中になつて眺めてゐた。栓をあげようとして、水晶の縁を壊してしまつてゐた。

「あら、あんたはなんている、方なんでせう！」と彼女は言つた。「それは何なの？一寸見せてよ……まあ、こんな小

ちやなものに澤山のお金を使ふなんて、あんたも坊ちゃんね！」

彼女は彼が金持でなかつたから、こんなに叱つて見た。しかし心の中では、自分のためにこんなに彼が總てを投げ出してゐるのを見て満足した。それこそ彼女の心を動かす唯一の愛の證據であつた。そして彼女は、この糖杏入れがどういふ風に出て來てゐるかを知らうと、開けたり閉めたり動かして見た。

「氣をおつけなさい。」と彼が囁いた。「壊れ易いんですから。」

すると彼女は肩を聳かした。まあこの男は、私の手が、人足のやうな手だとも思つてゐるのだらうか！と考へた。と、突然蝶番ひが彼女の指に残つて、蓋が落ちて壊れた。彼女はその破片に眼をやつたまゝあつげにとられた様で言つた。

「まあ！壊れてしまつたわ！」

そして、彼女は笑ひ出した。床に飛び散つた破片が、可笑しく見えたのだつた。そして發作的な快活さで、物を壊すのを面白がる子供のやうに、意地悪くげら／＼と笑つて見せた。フキリップは一寸むつとした。過ちをしたナナの方では、この骨董品を買ふのにフキリップがどれだけの苦しみをしたかを知らないのだつた。彼女は、彼が魂消げてる



るのを見て、自分を抑へようとした。「ほんとに、私のせみぢやないのよ……龜裂が入つてゐたんだわ。こんな古いものは駄目だわ……それに、この蓋がひっくり返つたんだもの。」

それからまた彼女は狂氣のやうに笑ひ出した。しかし、フィリップの眼がこらへ切れずに涙に濡れてゐるのを見て、優しくその頸に抱きついた。

「お馬鹿さんね！ 私は、やつぱりあんたを愛してゐるのよ！ 誰も壊す人がなかつたら、商賣人は何も賣れやしなぢやないの。みんなこんなものは壊れるためにあるのよ……ね！ この扇を御覽なさい、これはたゞ糊づけにしてあるだけよ！」

彼女は扇を取り上げて、力を入れて開いた。絹地が二つに裂けてしまつた。これで彼女は氣が立つて來た。彼の贈物を壊してしまつたからには、他の贈物とてもそんなに大事にしてゐるのではないといふ所を見せるために、丈夫なものは何一つないことを證明しながら、そこにあるものを残らず打ち壊して、はしやぎまはつた。彼女は空ろな眼に光を輝やかせ、唇を少し反らせて白い歯を見せた。すべてが粉々になつてしまつた、眞赤な顔をした彼女は、また笑ひ出して、手をひろげて卓子を叩いた。そして駄々つ兒のやうな聲で言つた。

「おしまひよ！ もう何も無いわ！ もう何も無いわ！」

この時フィリップは、彼女の陶酔に誘はれて、自分もはしやぎ初めた。彼女を仰向きに反らせてその咽喉に接吻した。彼女はされるがまゝに身を任せて、彼の肩にぶら下つて、もうずつと以前からこんなに楽しいことはなかつたかのやうに、嬉しさうにしてゐた。そして彼を離さないで甘えた聲で言つた。

「ね、明日、きつと十ルイ持つて來て頂戴よ……ほんとに厭になつてしまふわ、麵麩屋の書附で困らされてゐるのよ。」

彼はさつと顔を蒼くした。それから、彼女の顔に最後の接吻をしてかう言つた。

「盡力はして見ませう。」

二人は黙つてしまつた。彼女は着物を着た。彼は硝子扉に額をあてゝゐた。一分間ばかり経つてから、戻つて來て、ゆつくり口を切つた。

「ナナ、あなたは僕と結婚しなくてはいけない。」

その言葉の意味が忽ちナナを陽氣にして、スカートを結び終へることも出来なかつた。

「まあ、可哀さうな方、あなたはどうかしてゐるわね……私があんたに十ルイくれと言つたので、結婚を申込むの？……そんなこといやだわ。私、それよりもつとく愛してゐるのよ。まあ變なことを言ひ出すのね、ほんとに！」

それから、ゾエが彼女に靴を穿かせに入つて來た時には、二人はもうそのことを話してはゐなかつた。女中は直ぐ卓子上の粉々になつてゐる贈物をちらつと横眼で見た。そして、それを接ぎ合はさなければならぬとせうかと訊くと、ナナが捨て、おしまひと命じたので、彼女は残らずスカートの中へ入れて外に出た。料理場で皆が唇を撰り分けて、奥様のお餘り物を分配した。

その日ジョルジュは、ナナが止めて置いたのにも拘らず屋敷の中へ入つて來た。フランスアは彼の通るのを見付けたが、他の召使達は、奥様がかきつと困るだらうと思ひながら笑ひ合つただけであつた。彼が小さな客間に忍び込むと、兄の聲が聞えたので立ち止つた。彼は、戸の蔭に釘づけになつて、あの接吻も結婚の申込みも、その様子をすつかり聞いてしまつた。彼はどきつとして氷のやうになつた。頭の中がすつかり空虚になつて、彼はぼんやりしてそこを出た。リシュリエ街の母のゐる部屋の上の、自分の寢室に入つて、初めて彼の心は憤りのあまり獻敵になつて亂れ狂つた。今度こそは疑ふ餘地がなかつた。ナナがフィリップの腕に抱かれてゐる忌はしい幻影が、絶えず彼の眼の前に浮んだ。それが彼には亂倫なものに見えた。彼がほつと心の靜まつたのを感じた時、記憶が甦つて來て、また狂ほしい嫉妬の怒りが彼を寢床の上に投げつけた。毛布を噛んで呪ひの言葉を

吐き散らしてゐると、一層心が狂氣ひのやうに亂れた。さうして一日が過ぎた。頭痛がすると言つて、彼は部屋を出なかつた。夜になると一層ひどくなつた。死ぬほどの熱が悪夢の中に絶えず彼を揺ぶつた。もしも兄がこの家に住んでゐたなら、彼はナイフで殺しに行つただらう。夜が明けると、彼は自分を抑へようとした。死ななければならぬのは、寧ろ自分であつた。この窓から身を投げれば、乗合馬車が來て轢くだらう、と思つた。しかし彼は十時頃家を出て、巴里中を歩き廻り、橋の上へ來ると、そこを歩きつ戻りつした。これが最期と思へば、どうしてもまたナナに會ひたくてならなかつた。もしかすれば、彼女のほんの一言が自分を救つてくれるかも知れない。そんな風にも思はれた。彼がリシュリエ街の彼女の屋敷に入つた時には、三時が鳴つた。

その日の正午頃、恐ろしい知らせがユーゴン夫人の肝を潰した。フィリップは、聯隊の金庫から一萬二千法を盗んだことを告發されて、彼は昨日の夕方から獄に繋かれてゐるのだつた。三ヶ月前から、彼は少しづつ金を流用してゐて、そのうちに返さうと思ひながら、不足額は偽造文書で填めてゐた。その遣り繰りは、管理評議會の怠慢によつて何時も見逃されてゐたのだつた。老夫人は息子の罪を見て、ゐたゞまれない氣持から初めてナナに對する怒りの叫びを上



げた。彼女はフキリップとナナの關係を知つてゐた。そして萬一のことがあつてはと怖れて、かうして巴里に留まつてゐたのが彼女の不幸の基になつたのである。それにしても、今まで彼女はこんな恥づべきことになるとは思はなかつた。今となつて見れば、あんなに金をやらなかつたので、自分も一緒になつて罪を犯したやうな思ひがして後悔された。彼女はがつくりと脇掛椅子に體を落し、足が立たなくなつて、自分の身はもう用のないものに思はれて、死ぬまでそこに釘づけされたやうに一步も動けなかつた。しかし突然、ジョルジュのことを思ふと彼女は慰められた。まだ彼女はジョルジュが残つてゐた。彼が斡旋してきつと自分と兄とを救つてくれるだらうと思はれた。そして彼女は、誰にも救ひを求めずに、今度のことは彼等の間だけで無事に納めてしまはうと、重い足を曳きずつて階段を上つて行つた。彼女はまた自分の身邊に優しい愛情があると信じ切つてゐた。しかし二階へ来て見ると、部屋が空になつてゐた。門番が彼女に、ジョルジュさんは朝早くからお出ましになりました、と告げた。第二の不幸がこの部屋の中に感じられた。皺くちゃになつた毛布の寢床がすつかり苦惱を語つてゐた。椅子は床に脱ぎすてられた着物の間に轉がつてゐて、死んだものゝやうに見えた。ジョルジュはきつとあの女のところへ行つてゐるのだらうと思はれた。そしてユーゴン夫

人は、涙も出さずに、強く足を踏みしめて階段を下りて行つた。彼女は二人の息子を取り戻したいと思つて、出掛けただつた。

朝からナナには厭なことがかり續いてゐた。先づ九時になると麵麩屋がやつて来て勘定書を突きつけた。たつた百三十三法の麵麩代が、こんな屋敷に王者のやうに暮らしてゐて拂へないとは、惨めなことだつた。その麵麩屋は、前貸をしなくなつた日から他の麵麩屋に換へられたのが縁に觸つて、もう二十度も足を運んでゐた。そして召使達も麵麩屋の味方をした。フランソアは、もつとこつびどく喧嘩腰に出なければ奥様は拂ひつこないと告げた。シャルルは後廻しにされてゐる古い藥の代金を貰ひに自分も一緒に二階へ上らうと言つた。またウィクトリヌは、誰か男が来てゐる時に、丁度その會話の最中に飛び込んで行つて金を出させるのがいと忠告した。料理場の者がどつと嘸し立てた。出入商人は何も彼も知つてしまつた。こんなお喋りが三時間も四時間も續いた。ナナは話の中で裸にされ、皮を剥がれた。氣樂すぎるほど閑な奉公人根性で、召使達は夢中になつて話してゐた。たゞ一人料理長のジュリアンだけがナナの味方をして、兎に角素晴らしい方だと言つた。そして外の連中が、一緒に寝たんだらうと言つて彼に詰め寄ると、彼はとぼけた風をして笑つた。料理女はそれを腹立

たしげに眺めてゐた。彼女はもしも自分が男なら、ナナのやうな女の後からは唾を吐きかけてやりたいほど、日頃から嫌つてゐた。フランソアは意地悪く、奥様に知らせないで麵麩屋を玄關に待たせて置いた。朝飯の時に彼女が降りて来ると、眼の前に麵麩屋が立つてゐた。彼女は勘定書を受取つて、もう一度三時頃来てくれと言つた。すると彼は口汚なく罵つて、きつとどんなことがあつても間違ひなく頂戴する、と約束して出て行つた。

ナナはこんな喧嘩に氣を悪くして、朝飯の味もなかつた。今度こそはこんな麵麩屋の拂ひはすまされなければならぬと思つた。今までに何度も、その金を別に取つて置いたのだが、或る時は花を買ふために、或る時は一人の老憲兵のために寄附したために、何時もその金が消えてしまつたのだつた。そして兎に角彼女はフキリップを當てにしてゐた。そのフキリップが二百法を持つて来てくれないので、彼女も不審に思つてゐた。ほんとに運が悪かつたのだ。一昨晩なら、彼女はサタンに着物一揃ひを千二百法ばかりも出して買つてやるのが出来たのだつた。それが今日では、もう手許に一ルイも残つてゐなかつた。

二時頃になつて、そろ／＼ナナが心配になり出したところへラポレットがやつて来た。彼は寢臺の下圖を持つて来たのだつた。それが氣晴らしになつたので、ナナは直ぐ何

もかも忘れて喜んだ。彼女は手を敲いて踊つた。それから嬉しさに胸を躍らせて、客間の卓子の上に身を屈めながら下圖を調べた。それをラポレットが説明した。「ね、舟形になつてゐるんです。眞中には花の咲いた薔薇の茂みがあり、それから花と蕾がずつと紐のやうに續いてゐるのです。葉は緑金で花は赤金ですよ……。そしてこゝが枕許で、銀の格子の上に愛の神が輪舞を踊つてゐるんです。」

するとナナが喜びに夢中になつて遮つた。「あら！ をかしいわ。この小さな、隅の方にゐるのはお臂を上にしてゐるわ……。どう？ この意地の悪い笑ひやうつたら！ 變な眼つきだこと！……ねえ、あなた、私、こんな人達の見えてゐる前ではふざけたことも出来ないわ。」彼女は並々でない自尊心の満足を感じた。金銀細工師は女王様でもこんな寢臺にお寝みなさらないと言つた。しかしそれはたゞ複雑なだけのものであつた。ラポレットは彼女に脚の部の下圖を二枚見せた。一枚の方は船から思ひついたものだが、もう一枚の方は、はつきり次のものを現はしてゐた。即ち牧羊神が夜の女神の被つてゐるヴェールを剥いでその輝やかな裸體を見せてゐるところであつた。もしも彼女がこの後の方を選ぶなら、金銀細工師は、夜の女神を彼女に似せて作らうと言つてゐるとラポレットが附



け加へた。きはどい趣味のこの思ひつきは、顔が蒼くなるほど彼女を喜ばせた。彼女は闇の生温い肉慾の象徴として、自分がこの銀の小像になることを想つてみた。

「勿論顔と肩だけモデルになつてやればいゝんですよ。」とラポルデットが言つた。

彼女は彼をちつと見つめてゐた。

「どうして? ……これは藝術品だから、彫刻家がいくら私をモデルにしたつて何とも思やしないわ。」

勿論彼女はこの後の方を選んだ。すると彼が彼女を遮つた。

「待つて下さい。…その方は六千法も高くつくんですよ。」

「何ですつて、そんなことはどうだつていゝぢやないの!」と突然彼女は笑つて叫んだ。「私の可愛いミヌフ(馬鹿)は貧乏ぢやなくつてよ!」

今では彼女は伯爵のことを親しい人達の間で私の可愛いミヌフと呼んでゐた。この家へ出入りする男達も、もう彼女に話しかける時には、こんな風にしか言はなかつた。「あなたは昨夜可愛いミヌフに會ひましたか? ……あゝ! そのうちにあなたのミヌフがいらつしやるんですか?」單にそれは親しみの意味だけしかなかつたのだが、彼女はまだ彼の前では決してそんなことを言はなかつた。

ラポルデットは下圖を巻きながら最後の説明をして、金銀

細工師がこれから二ヶ月のうちに、丁度十二月二十五日の頃に、寢臺をお渡しすると約束したことや、次の週から彫刻家が夜の女神の雛型を取りに来ることなどを話した。それから彼を送り出しながら、ナナは麵麴屋のことを思ひ出して、突然、

「一寸、あんたは今ルイそこに持つてゐない?」と訊いた。

ラポルデットがいゝと信じて守つてゐた主義は、決して女に金を貸さないことであつた。彼は何時でも同じ返事をした。

「駄目ですよ、僕は空っぽです。…何ならあなたのミヌフのところへ行つて上げませうか?」

彼女は、行つて貰つても駄目だと言つて斷つた。伯爵からは二日前に五千法引き出してゐたのだつた。しかしまた彼女はそんな遠慮したことを後悔した。ラポルデットが出て行くと、まだ二時半になるかならないのに、もう麵麴屋が顔を見せた。そして荒々しく大きな聲で罵りながら、玄關の小さな腰掛に坐り込んでしまつた。ナナは二階からそれを聞いてゐた。殊に召使達が、初めはこつそり喜んでゐたが、やがてだん／＼聲を大きくして笑ふのを聞くに耐りかねて顔色を變へた。料理場では皆が笑ひこけてゐた。馭者は中庭の奥の方から眺めてゐた。フランソアは用事もない

のに玄關を横切つて、意味ありげな冷笑を麵麴屋に投げてから、この場の様子を皆に知らせようと急いで去つた。誰も皆ナナを輕蔑してゐた。四方の壁からは囁きが聞えて來た。彼女の弱身につけ込んで聞くに堪へない言葉をもつて彼女を恥かしめるこの召使達の輕蔑の中で、彼女は一人も味方がないのを感じた。すると彼女はゾエにその百三十三法を借りよと思つたが、思ひ返して止めてしまつた。ゾエにはもう金を借りてゐた。もしも斷られでもしたら、と思ふと、彼女の自尊心はあまりに強すぎて、それを言ひ出すことも出来なかつた。そして彼女は氣を取り亂して、自分の部屋へ入るなり高い聲で獨言を言つた。

「えゝ、えゝ、この私には、自分より外に頼りになるものは、誰一人ゐないんだわ。…私の體は私のものだ、こんな侮辱を受けるより、自分で働く方が、どんなにいゝか分らない。」

そして彼女はゾエを呼びもせず、狂氣のやうに着物を着ると、トリコンの家へ駆けつた。これは彼女が困り抜いたときの最上の策であつた。あの老夫人に頼み込まれたり勧められたりして、今までにも彼女は、自分の方の必要に應じて、斷つたり承知したりしてゐた。彼女の女王のやうな生活に穴の開く日が次第に多くなつてゐたが、そんな日には彼女はそこへさへ行けば、彼女を待つてゐる二十五

ルイをきつと見つけることが出来るのだつた。貧乏人達が公設質屋へ行くやうに、彼女はまるで習慣のやうに、氣もかけずにトリコンの家へ行つてゐたのだつた。

しかし彼女は部屋を出ると、客間の眞中に立つてゐるジョルジュにばつたり顔を合した。ジョルジュの蠟のやうに蒼い顔色にも、その大きく見開いた眼の陰鬱な輝きにも、彼女は氣がつかなかつた。そしてほつと安心して溜息をついた。

「あら! 兄さんの用事で來たのでせう!」

「いゝえ。」とジョルジュは一層顔を蒼くした。

彼女はがつかかりした様子を見せて、まあこの子は一體どうしようと言ふんだらう? なぜ私の道を邪魔するの? さあ、私は急いでゐるんですよ、と言はぬばかりにしたが、また思ひ返して訊ねた。

「ねえ、あんたはお金を持つてゐない?」

「えゝ。」

「さうだわ、まあ私、馬鹿だつたわ! あんたは一文なしだつたわね、馬車賃の六スウだつて持つてやしないんだわね。…お母さんがくれないのでせう。…まあ男の癖に。」

そして彼女は出て行かうとした。しかし彼はそれを捉へて話しかけた。彼女は腹を立て、急ぐんだからと繰り返すと、また彼は短い言葉でそれを遮つた。

「聽いて下さい。僕は知つてますよ、あなたは兄と結婚す



「それ思ひがけない喜劇だった。彼女は椅子に身を投げ  
て思ふ存分笑つた。」

「いゝえ。」とジョルジュが續けた。「いゝえ、いゝえ、あなたと  
結婚したいのは僕なんです……その話で僕は來たんです。」  
「えゝ？ 何ですつて？ あんたも同じやうに！」と彼女  
は叫んだ。「それがあんたの家の病氣なの？……およしなさ  
いよ！ 悪い趣味だわ！ いか私がそんな汚らしいこ  
とをあんた方に要求したことがあつて？……兄さんでもあ  
んなでも、そんなことは御免よ！」

ジョルジュの顔が明るくなつた。自分は何を間違へたのか  
しら、と思つてゐるやうだつた。そして言葉を續けた。

「では、兄と一緒に寝ないと僕に約束して下さい。」

「まあ！ ずるぶん煩さいのね！」また辛抱し切れなくな  
つてナナは立ち上つた。「あんなに私は急ぐんだと言つてゐ  
ながら、あんまり可笑しいのでついうっかり一分間も遊ん  
でしまつたわ……あんたの兄さんと寝るのが嬉しければ  
一緒に寝るわ。そんなに私を人にやるまいとして、一體あ  
んなはこゝの支拂をしてくれるの、勸定書をちやんと始末  
してくれるの？……えゝ、私寝るわ、あんたの兄さんと一  
緒に……」

彼は彼女の腕を捉へて、力いっぱい握り締めて口籠つた。

「そんなに言はないで下さい……そんなに言はないで。」  
彼女は彼を撲つて、握り締めてゐる彼の手を振りほどい  
た。

「あら、あんたは私を酷い目に遭せるのね！ まあ、厭な  
子だこと！ ……さあ、早く出て行つて頂戴……私は  
ね、親切だからこれほど許して置いて上げるんだわ。ほんと  
よ！ あんたは大きな眼をしてゐるわね……きつとあん  
たも死ぬまで私をお母さんにしようとは思はないでせう。  
私にだつて赤ちやんを育てるよりも、もつといゝことがあ  
るのよ。」

彼は體を固くして、しかしおとなしく苦しさにそれを  
聽いてゐた。一言々々が激しく心臓に應へて死にさうに感  
じた。彼女は彼の苦しみには氣付かずに、今朝からの煩さ  
い出来事の氣晴らしに彼へ當り散らして、調子に乗つて喋  
り續けた。

「あんたも兄さんに似てるわね、あのほんの可愛い坊や  
の……兄さんとは二百法の約束がしてあるのよ、あゝ！  
それも駄目なんだわ！ でも待つて見ようかしら……私は  
ね、あの人の金だけを當てにしてゐるんぢやないのよ！  
ポマードだつて、碌に買へやしないんだもの……それに  
しても、随分私を困らせるわね……あら！ 知らないの？  
さうよ！ あんたの兄さんのせいで、これから出かけて行

つて、他の男から二十五ルイ貰つて來なきやならないの。」  
彼はもう何も分らなくなつてナナの通る扉口を塞いだ。

そして、涙を流し手を合せて彼女に頼んで口籠つた。

「いやー よして下さい、行かないで下さい！」

「それや駄目よ」と彼女は言つた。「あんたお金を持つて  
るの？」

併し彼は金を持つてゐなかつた。この場合、彼は金さへ  
手に入るなら、死んでもいゝと思つた。嘗つて彼は、こん  
なに自分を憐れな、役に立たない、小さな子供だと感じた  
ことはなかつた。涙に咽びながら、彼は力の限りその大き  
な苦痛を訴へたので、終ひには彼女もそれを見て優しい氣  
持になつてしまつた。彼女は優しく彼を押しつけて、

「ね、いゝ子だから、私を通して頂戴。これには譯がある  
んだから……私の言ふことを聽いて頂戴。あんたは赤ちや  
んだわ。それや、あの一週間は楽しかつたわ、けれど今日  
日は、どうしても用事をすまさなくちやならないの。もつ  
と考へて頂戴……あんたの兄さんは男よ。兄さんには話し  
てないの……あゝ！ どうか黙つて、頂戴な、こんなこと  
を皆あの人に喋つても、何の役にも立たないのだから。あ  
の人は私がどこへ行くか知る必要はないのだから。私は腹  
を立てると、よくお喋りをしすぎるわね。」

彼女は笑つた。それから彼を引き寄せて頰に接吻した。

「さやうなら、赤ちやん。もうおしまひ、おしまひよ、分  
つて……私行くわ。」

そして彼女は出て行つた。彼は客間の眞中に立つてゐた。  
最後の言葉が早鐘のやうに彼の耳に響いてゐた。もうおし  
まひ、おしまひよ。——彼は足許の地面が裂けるやうに思  
つた。彼の空ろな頭の中では、ナナを待つてゐた男の姿は  
消えて、絶えず彼女の露はな腕に抱かれたフキリップだけが  
残つてゐた。彼女は否定はしなかつた。彼女はその不實を  
彼に知られる悲しみをあんなに避けようとしたのから見て  
も、彼を愛してゐるのだ。もうおしまひ、おしまひよ。

——彼は深く息をついた。壓しつけられるやうな重苦しさ  
に息をつまらせて、部屋の周圍を見廻した。いろ／＼の思  
ひ出が一つ／＼浮び上つて來た。ミニョットの華やかな夜、  
自分が彼女の子供のやうな氣がしてゐた愛撫の時間、そし  
て今あるこの部屋で盗むやうに楽しんだ肉慾の数々。だが、  
それはもうどこにもない！ 彼はまだ小さかつたのだ、そ  
んなに早く大きくなれなかつた。フキリップには髯があつた  
から、彼に代つたのだ。かうなればもうおしまひだつた。  
もう彼は生きて行くことが出来なかつた。彼の悪徳は、彼  
が身を投げ與へた無限の愛情と、感性的な憧憬の中にまだ  
濡れてゐた。そして、今そこに彼の兄がある時に、どうし  
て彼がそれを忘れられよう？ 彼の血を分けた、もう一人



の彼である兄の悦びは彼を嫉妬で怒らせた。それはもう最後だった。彼は死なうと思つた。

總ての扉は開け放されたまゝになつてゐた。召使達はナナが乗物にも乗らずに出かけたのを見て、大騒ぎをしてゐた。階下では支關の腰掛に坐り込んで麵麴屋がシャルルやフランソアと談笑してゐた。ゾエは急いで客間を通つた時に、ジョルジュを見て吃驚したらしかつた。そして、奥様をお待ちしてゐらつしやるの、と訊いた。如何にも彼は待つてゐたのだが、ゾエには返事するのも忘れてゐた。そしてまた一人になつてしまふと、邊りを探し初めた。外には何も見つからなかつたが、化粧室でよく切れさうな鋏を見つけた。ナナはそれで肌の手入れをしたり、髪を切つたり、年中癖のやりに使つて體を綺麗にしてゐた。彼はふるふる顫へる手にその鋏を握りしめて、一時間もポケットに入れてちつとしてゐた。

「奥様がお歸りだ。」ゾエは部屋の窓のところで見張つてゐたらしくまたそこを通りしな言つた。

屋敷の中には人々の走る音が聞えた。笑聲が消えて扉が残り閉められた。ジョルジュはナナが短い言葉で麵麴屋に拂ひを濟ませるのを聞いた。それから彼女が二階へ上つて来た。

「あら！ まだあんたこゝにゐたの！」と彼女は彼を見つ

けて言つた。「あゝ！ またお互に腹を立てるのは厭だわ、あんた！」

彼女が部屋の方へ行くのを彼は追つた。「ナナ、僕と結婚してくれないか？」

すると彼女は肩を聳やかした。あまり馬鹿氣てゐて答へが出来なかつた。彼女は彼の鼻の先へびつしやり扉を閉めた。彼はまた片手で扉を開いて、鋏を握つた片手をポケットから出した。そして力を籠めたかと思ふ間に、ぐつさり自分の胸に突き刺した。

ナナは、何か不幸な出来事の起つたのを感じた。振り返つて、そこに自分で胸を突き刺した彼を見ると、急に腹を立てた。

「まあそんな馬鹿なこと！ まあそんな馬鹿なこと！ それも私の缺で！……ほんとに死ぬ氣なの、あんたは！……あゝ、どうしよう！」

彼女は驚いた。彼はがつくり膝をついて、二度目にまた胸を突いた。そして絨毯の上に長くなつて倒れ、部屋の闕を塞いでしまつた。彼女はすつかり周章で、力限りの叫びを上げた。彼女を部屋に閉ぢ込めて、救ひを求めに駆け出すのを妨げてゐるジョルジュの體を跨ぐことは出来なかつた。

「ゾエ！ ゾエや！ 来ておくれ……始末をつけておくれ

……まあ馬鹿な、この子は、こんなことをするなんて！……まあ自殺をしたんだよ！ しかも私の家で！ こんなことがあるだらうか！」

彼は彼女に恐怖を與へた。眼を閉ぢた顔が眞白になつてゐた。血はほんの少しチョコッキの下に滲んだだけで、流れなかつた。彼女がジョルジュの體を飛び越えようとした時に、誰かの姿が現はれたので、彼女ははつと後退りした。すると彼女の前の、大きく開け放された客間の扉口から老夫人が進んで来るのだつた。それがユーゴン夫人だと分ると、すつかり怖ろしくなつて、夫人がどうしてこゝへ来たのかも考へなかつた。彼女は少しづつ後退りした。まだ帽子を被つて手袋をはめたまゝだつた。怖ろしさの餘り、口籠りながらナナは辯解した。

「奥様、私ぢやありません。お誓ひします……この人が結婚したいと言つたのを私が斷ると、自殺したのです。」

ユーゴン夫人は靜かに近づいて来た。黒い着物を着て、眞白な髪と蒼い顔をしてゐた。彼女は馬車の中で、ジョルジュの事はすつかり忘れて、フキリップの犯した罪の事ばかりを考へてゐた。きつとあのナナなら、裁判官の心に觸れるやうな説明が出来るだらう。そして彼女は、息子に有利な陳述をして貰ふやうにナナに頼まうと思ひついて来たのだつた。階下ではこの屋敷の扉が皆開いてゐた。足が悪いため

に階段で躊躇してゐると、突然、けたまましい叫び聲が彼女を急き立てた。で、二階へ上つて見ると、一人の男が肌衣に血を滲ませて、床に倒れてゐた。それはジョルジュだつた。もう一人の息子だつたのだ。

ナナは調子外れな聲で繰り返してゐた。

「結婚したいと言つたのを私が斷ると、自殺したのです。」

ユーゴン夫人は聲も立てずに身を屈めた。紛れもなく、それはもう一人の息子ジョルジュだつた。一人が世間に顔向けも出来なくなつたかと思へば、もう一人がまたこんな死に方をしてしまつたのだ。しかしこんなに彼女の生涯が崩れ落ちる中で、彼女は少しも態度を亂さなかつた。絨毯の上に跪いて、自分のゐる所も忘れ、誰が周圍にゐるかも考へずに、彼女はちつとジョルジュの顔に見入つたまゝ、片手を心臓に當て、鼓動を聞いてゐた。それからはつと弱い吐息をついた。まだ心臓が打つてゐるのを感じたのだつた。そして彼女は顔を上げて、この部屋やナナをじろく見廻した。やつと我に返つたやうだつた。彼女の空ろな眼は輝き、黙つてゐる彼女の姿が大きく怖ろしく見えた。ナナは顫へながら、二人の間にゐるジョルジュを隔て、絶えず辯解を繰り返してゐた。

「奥様……この人の兄さんがゐらつしやれば、何も彼も説明して下さるんですけれど。」



「これの兄はお金を盗んで捕まつてゐるんです。」と母親は重々しく言つた。

ナナは咽喉を締められるやうな思ひがした。だが、皆が皆まで何故こんなことになつたのだらう？ まあ、も一人は盗みをしたんだつて！ この家の者は皆狂氣なんだからか！ と彼女は思つた。ナナはすっかり周章してしまつて、どうしようともしなかつた。自分の家にゐるやうな様子はなくなつて、總てユーゴン夫人の指圖に任せてゐた。やがて召使達が駈けつけた。老夫人は何は指しても氣を失つてゐるジョルジュを馬車まで連れて行つてくれと言つた。彼女は寧ろ彼を殺してこの家から運び出したかつた。ナナは茫然とした眼付で、召使達が肩や足を持つて憐れな坊やを運んで行くのを見送つてゐた。母親はもう涙も流しつくして、彼女が愛してゐた總てのものから空虚な世界へ投げ出されたやうに、家具に傳つてその後に残つて行つた。踊り場へ来て彼女は嘔吐した。そして振り返つて、二度ばかりかう言つた。

「あゝ！ お前さんはひどい不幸を作つてくれましたね！

……お前さんはひどい不幸を作つてくれましたね！」さう言つた切りだつた。ナナはぼんやりしてまた椅子に身を投げた。まだ帽子を被つて、手袋をはめたまゝだつた。馬車が出て行つてしまふと、屋敷はまた重苦しい沈黙に沈

んだ。彼女はちつとして、何を考へることも出来なかつた。今日の出来事で頭が鳴つてゐた。十五分も経つて、彼女がまだそのまゝでゐるところへミッファ伯爵が入つて来た。すると彼女はどつと堤が切れたやうに續げざまに喋り立て、ほつと心が軽くなるのを感じた。先刻の出来事の細々とした同じ話を二十度も繰り返して、血の着いた鉄を手にとつて、坊やが胸を刺した時の身振りをして見せた。そして殊に、自分に罪のないことを見せようとしてゐた。

「ね、あなた、私の罪でせうか？ もしあなたが裁判官だつたら、私を罪にして？ 私、何もフキリップに公金を使ひ込めなんかと言つた覚えはないわ、ほんとよ。あの子にだつて、自殺しなければならぬやうな仕打はしなかつたわ……結局私が一番不幸なの、私のところへ来て、皆が馬鹿な真似をして私を苦しめて置いて、その上私をあばずれ女か何かのやうに言ふんだもの……」

そして彼女は泣き初めた。氣が弛んで、おろ／＼聲になつて、途方に暮れたやうに、限りもない悲しみを力なく訴へた。

「あなたも、あなたも同じやうに厭な顔をなさるのね……嘘だと思ひになるのなら、ゾエに訊いて下さいな。ゾエや話しておくれ。この人にすっかり申し上げておくれ……」少し前から、ゾエは手拭と洗面器を化粧室から持つて來

て、血痕の新しいうちに落さうとして、絨毯を拭いてゐた。

「さうでございますよ、あなた。」とゾエは言つた。「奥様はほんとにお氣の毒なのでござりますよ！」

ミッファは、あの母親が二人の子供のために涙を流してゐることばかり考へて、この悲惨な事實に心を緊めつけられた。彼は彼女の優しい親心を知つてゐた。寡婦らしい身なりをして、あのフォンデットで、一人細々と暮してゐたのも知つてゐた。しかしナナの方は一層絶望してゐた、今では襦袢に血を滲ませて床に倒れてゐた坊やの幻影が、彼女を居ても立つてもゐられない氣持にした。

「あの子はほんとに可愛かつたわ、おとなしくて優しくかつたわ……あゝ！ ね、あなたのお氣に障つては濟まないけれど、私はほんとに愛してゐたわ。私、可愛くて可愛くてならないわ。あゝ、どうすればいいのかしら……けれど、それも今ではあなたに何も關係ないことよ。死んでしまつたんですもの。あなたは何も心配しなくてもいいわ、ほんとに二人の間にもう誰も來ないから……」

そして、彼女はこんなことを考へて、悔恨で息も止まりさうな様子をしてゐた。で、伯爵は、さあ、そんなに氣の弱いことを言つちやいけない、お前のしたことは無理もないことで、何もお前の罪ぢやないのだから、と言つて慰めなければならなかつた。しかし彼女はほつと息をついたか

と思ふと、またかう言つた。

「ね、急いであの子の様子を聞きに行つて頂戴……今直ぐに！ ね、後生だわ！」

彼は帽子を取つて、ジョルジュの消息を聞きに出かけた。それから四十五分して彼が歸つて來ると、ナナは心配さうに窓に凭れかゝつてゐた。彼は歩道から、ジョルジュは生きてゐて、助かる見込みがあると叫んだ。すると彼女は、大喜びで跳び上つて、歌つたり、踊つたりして大變な上機嫌になつた。しかしゾエの方は後始末に腹を立てゝゐた。いくら拭いても痕が見えるので、その度にかう繰り返した。

「ねえ、奥様、とれせんわ。」

實際、絨毯の白い花模様の上に血痕がまだ薄赤く滲み出た。部屋の隅のところで、その血の線は扉口を塞いでゐるやうに見えた。

「いゝわ！」とナナが上機嫌で言つた。「そのうちには皆に踏まれて自然に消えるでせう。」

翌日になるとミッファ伯爵もこの出来事をもう忘れてゐた。リシュリュ街へ歸る貸馬車の中で、彼は一寸、もうこの女のところへは二度と足踏みすまいと決心した。天が警告を與へてゐるやうに思はれた。彼はフキリップとジョルジュの不幸を、彼自身の没落の豫告のやうに考へた。しかし、涙に暮れてゐたあのユーゴン夫人の姿も、熱に浮かされてゐ



たあの青年の有様も、彼にその誓ひを守らせる力はなかつた。この惨劇に對するほんの暫くの戦慄が済むと、たゞ彼には、あの競争者の魅力ある若々しさが絶えず自分を腹立たしてゐた苦しみから逃れることが出来た。秘かな喜びだけが残つたのである。そして今度は、青春の楽しみを持たなかつた男の獨占的な情熱が彼に起つて來た。自分一人でナナを知り、ナナを理解し、ナナの心に觸れ、ナナの息に包まれてゐたい欲求を以て、彼はナナを愛するのだつた。それは感覺を越えて純粹な情緒にまで擴げられた愛情であつた。それはまた不安な愛情であり、時には過去を嫉妬したり、時には二人で父なる神のみに跪いてゐる姿や、贖罪や赦免を空想するのだつた。日毎に宗教が益々強く彼の心を捉へた。彼は再び神の道を踐み、懺悔し、絶えず自分の心と戦ひ、悔恨によつてその罪惡とその苦業の喜びを二重にしなから、聖體を拜受してゐた。やがて彼の教導僧が、情慾を許したので、日々の苦悶は彼の習慣となり、彼はまたそれを身も世もあらぬ敬虔な心に満ちた信仰の發作に依つて續ひ返してゐた。彼は限りなき純情を以て、彼の苦しんでゐる忌はしい苦惱を、滅罪の苦惱として神に捧げるのであつた。この苦惱はなほも増大して行つた。彼は、一人の女への烈しい欲情に落ちたまゝの、その重い深刻な心を懷いて、信仰の十字架を登つて行くのだつた。そして

殊に彼が苦悶したのは、この女の何時も變らぬ不貞であつた。彼女を人と分つことは耐へられなかつたし、また愚かしい彼女の氣紛れも了解出来なかつた。彼は常に變ることなき永遠の愛を願つてゐた。そして、彼女が誓ひをするので、彼はいつも要求する金を渡したが、しかし彼は、彼女が嘘つきで、自分の身を護ることも出来ず、友達や行き掛り者にも、生れつき赤裸の獸のやうに身を任すのを感じてゐた。

或る朝彼は、彼女の家からフウカルモンが、思ひがけない時間に出て來るのを見て、彼女に喰つて掛つた。すると彼の嫉妬に厭々してゐた彼女は腹を立て、しまつた。今まで、そんなとき彼女はいつも優しい態度に出たのだつた。たとへば彼が、ジョルジュと一緒にゐるところへ突然入つて來た夜なども、彼女は自分から進んで過ちを白狀して、彼がそれを許してくれるやうに、優しい言葉や愛撫で彼を満たしたのであつたが、彼のいつまで経つても自分を理解してくれない頑固さにうんざりしてしまつてゐた。彼女は荒々しい態度で言つた。

「えゝ！ さうよ、私はフウカルモンと一緒に寝たんです。それがどうしたの？……どうしたつての？ すつかり情氣ちやつたわねえ、ミラフー」

眼の前で、彼女が『ミラフ』と云ふ言葉を彼に向つて使

つたのは、これが最初だつた。彼はこんなきつぱりとした彼女の自由に、咽喉が詰つてしまつた。そして彼が拳を握りしめてゐると、彼女は彼の傍へ歩いて行つて、眞正面から彼の顔を眺めた。

「分つたでせう。え？……それでお氣に入らないのなら、出て行つて下されば清々するわ……私の家で大きな聲は立てゝ貰ひたくないの。よくその頭へ覺えといて頂戴よ、私は自由でありたいんですわ。氣に入つた男があれば、一緒に寝ませうよ。えゝきつと寝ますわ、さうよ……さあ、早くお決めなさいよ、厭なのか、それでもいいのか、どちらなの？ あなたは出て行つて下すつてもいいんですよ。」

彼女は扉を開けに行つた。しかし彼は出なかつた。今はこれが彼を一層執着させる彼女の手管であつた。何でもないことや、些細な喧嘩にも、彼女は悪辣な智慧を使つて、否か應かを彼に決めさせた。兎も角、彼女はいつでも、彼よりもつといゝ男を見出すことが出来た。彼女は選擇に困る位だつた。欲しければ他にいくらでも、彼よりはもつと氣の利いた、もつと情熱に満ちた男があつた。そこで、彼は頭を下げて、彼女が優しくなる時を待たなければならなかつた。彼女は金の必要がある時には、いつも彼を優しくもてなした。すると彼は何も彼も忘れてしまつた。愛撫の一夜が苦惱の一週間を償つた。妻の傍へ歸ることは、彼

の心に耐へ難い思ひがした。サビイヌ夫人は、フオシュリイがロイズの手へ歸つて行つて捨てられたので、四十女らしい苛々した熱病のやうな發作で、戀から戀へと夢中になつてゐた。そして怒りつぽくなつて、毎日恐ろしい懺悔で家中を當り散らしてゐた。エステルは結婚以來、父とは顔を會はさなかつた。平凡で何の取柄もなかつた彼女は、急に鐵のやうな意志の女に變つてしまつた。ダグネもそれには閉口して、彼女の前へ出ると顫へてゐた。この頃では、ダグネが彼女を彌撒へ連れて行くのだつた。彼はすつかり改心して、女に現を抜かして二人を顧みない父に憤慨してゐた。たゞダグネだけが、伯爵の改心する時機を待ちながら、まだ優しくしてゐた。それにこの頃では、ナナのところへも出入りさへしてゐた。そして彼は、兩方の家へ壓々顔を見せて、どちらの家でもいつに變らぬ微笑を湛へてゐた。しかしミラフは自分の家へ歸つて見ると、倦怠と羞恥のために落着くことも出来ず、悲惨な氣持になるのだつた。そして、たとへ嘲られるにしても、彼はまだしも、ヴィリエ街で時間を過ごす方を選んだ。

やがて、ナナと伯爵の間には唯一つの問題しなくなつた。それは金のことだつた。或る日伯爵は、はつきり一萬法を約束して置きながら、丁度その時間になつて、空手のまゝで彼女の前へ現れた。一昨夜から彼女は彼を愛撫し、



ちやはやしてゐたにも拘らず、それがこんなに、べもなく報いられたので、彼女は矢も楯もたまらず腹を立てた。彼女はすつかり顔色を變へた。

「何ですつて？ お金はないんですか……ぢや、ミユフ、あなたのでいらした方へ歸つて貰ひませう。さあ、さあ早く！ まるで駱駝みたいな人だわ！ それでまだ私に抱きつきたいの……お金があればさよならよ！ 覚えてお置き！」

彼はいろ／＼辯解して、明後日になればその金が出来ると言つた。しかし彼女は猛り立つて遮つた。

「ぢやこの支拂ひはどうするの！ あなたは空手でいらつしやるし、私は人に捉まるんですよ……え、え！ まあ鏡でも見てらつしやい！ 私があなたの男振りに打ち込んでゐるとでも思つてるの？ あなたのやうなそんな顔では、どんな女だつて、お金でも欲しくなけりや辛抱しませんよ、全くよ！ もし今晚までに、一萬法を持つて来ないんなら、もうこの小指だつて吸はしてあげませんから……ほんとに！ 奥さんのところへお歸りなさい！」

その晩、伯爵は一萬法を持つて来た。ナナは唇を差し出した。彼はかうして貪るやうに女の唇を吸つてゐる時に、一日の苦惱を忘れることが出来た。ナナには伯爵が少しも離れずに纏ひついてゐるのが堪らなく煩さかつた。彼女はダノオに訴へて、このミユフをサビイヌ夫人のところへ連

れて歸つてくれと言つた。それにしても、あの夫婦の和解は何の役にも立たなかつたのだらうか？ 彼女は今になつて、あんな事件に巻き込まれたのを後悔した。伯爵はまた彼女のところに舞ひ戻つて来たのだつた。或る日などは彼女も腹が立つて利害を忘れ、彼を口汚なく罵つて、もう二度と鬨を跨がぬやうにしてやらうと思つたが、しかしそれも、彼女が腹を敲きながら叫んだやうに、よし伯爵の顔に唾を吐きかけたところで、彼は唯ありがたうと言つて済ます位の事だつた。そしてこんな喧嘩は金のために始終繰り返された。ナナは遠慮會釋もなく金を強請つた。ほんの僅かな金のためにも無茶な辱かしめを與へて、絶えず忌はしい貪慾を擡まにした。金のために、たゞ金のためだけにあなたと一緒に寝るのだが、自分には何の楽しみでもなく、楽しみのためなら、別に一人男がある、それにしても、あなたのやうな馬鹿者が必要だとは、何とまあ、自分には不合せなことなんだらう！ と、ナナは伯爵に面と向つて、臆面もなくさう繰り返すのだつた。宮中でも伯爵は邪魔者扱ひにされてゐた。辭職させるがいゝと云ふ噂もあつた。皇后陛下までが「ほんとに厭な男だ」と言つた。それは事實だつた。ナナも喧嘩の最後には、必ずこの言葉を繰り返した。

「全くくだわ！ ほんとに厭な人だわ。」

今では、ナナはもう遠慮をしなかつた。どこまでも氣儘に振舞つた。彼女は毎日プロオニの森に馬車を驅つて、行きずりに馴染を拾つたりまた捨てたりした。これは公然たる『引つ張り』だつた、白日の下の『賣色』だつた。街上を練る人達の大目に見すごす微笑と巴里の華やかな豪華との裡に演じられる『連れ込み』だつた。

貴夫人達は互に眼配せをして彼女の姿を見た。成り上り者の女達は彼女の帽子を模倣した。彼女の幌馬車を通るためには、屢々高位高官の馬車の列をも停らせた。その中には全歐羅巴を靴の中に入れてゐる財政家も、その太い指で佛蘭西の咽喉を締めてゐる大臣もゐた。このプロオニの社交界の一員として、彼女は重要な位置を占めてゐた。彼女の嬌名はこの首府にも謳はれ、どんな外人達からも呼ばれた。そして華々しい彼等の遊び振りに、彼女の狂氣のやうな淫蕩さが、國家の名譽や、鋭い歡樂となつて附け加へられた。そして彼女自身朝毎にその記憶を失つてゆく、絶え間のない行きずりの客や一夜の馴染が、彼女を大きい料理店に招いたり、また天氣の好い日にはマドリドまで連れて行くことなども屢々あつた。各國大使館の人々が代る／＼やつて来た。彼女はリュシイ・スツワアルや、カロリイヌ・エツケや、マリヤ・ブロンなどを仲間にして、廻らぬ舌で佛蘭西語を話す紳士達と會食した。彼等は遊ぶためには

金を惜しまなかつた。彼女はそんな男達を夜會に引張つて行つては、もつと何もかも忘れ、擦れつからしになつて、面白可笑しく遊びなさいよ、と命令するのだが、誰も彼女の言ふやうにはなれなかつた。彼女はそんな仕事に出かけることを『ふざけに行く』と稱してゐた。そして彼女はそこから、彼等を侮蔑しては上機嫌になつて歸つて来て、残りの夜を情夫の腕に眠るのだつた。

ミユフ伯爵は、彼女が男達を眼の前に見せつけられない限りは、何もかも知らぬ風を装つてゐた。その外にも伯爵は、日常生活の様々な小さな恥を忍ばねばならなかつた。ヴィリエ街の屋敷は地獄か癡狂院のやうになつて、萬事調子外れで、絶えず忌はしい危険な生活を續けてゐた。ナナは召使達とも喧嘩をするやうになつた。ひとしきり彼女は馭者のシャルルに何かと親切にしてやつてゐた。馬車を待たせて置いて料理屋に入る時などは、ボーイに言ひつけてシャルルのところにも麥酒を持たせてやつた。シャルルが輻輳する馬車の間で『辻待馬車とふざけてゐる』のを面白がつて、陽気に車内から話しかけたりなどした。ところが今度は、何の理由もなくシャルルを馬鹿者扱ひにし出した。彼女は始終、藁や糠や燕麥などの勘定で言ひ争つた。私は家畜を愛してゐるが、それにしても馬が食べ過ぎる、と言ふのだつた。そして或る勘定日に、盗んだのだらうと言つてシャル



ルを責めたので、シャルルも赫となつてナナを淫賣婦と呼んだ。馬の方があなたよりはよつぽどましだ、馬はさう誰とでも一緒に寝ませんからと罵つた。ナナも同じ調子で言ひ返した。それを伯爵が仲に入つて、馭者には暇をやることにした。それが手始めで、召使達は次々に悪事を暴露した。ヴィクトリヌとフランソアとがダイヤモンドを盗んで逃亡した。ジュリヤンさへも姿を消した。噂によれば、彼がナナと寝たのが知れて、伯爵の方から澤山金を握らせ、出て行くやうに頼んだといふことだつた。毎週臺所には新しい顔が見えた。こんな費用の嵩んだこともなかつた。この家はまるで、口入屋が寄越すやぐざ、霧が、霧地に駆け抜ける通路のやうだつた。唯、ゾエだけが例の調子で踏み止つてゐた。彼女はどうすればこの亂脈を立て直すことが出来るだらうかと、そればかり心配してゐた。さうしなければ、久しい前からちやんと考へて置いた自分の貰ふ報酬も、それから計畫も、どうする譯にも行かないのだつた。それにしても、かういふ心配はまだしものことだつた。伯爵は、酸っぱい匂ひのする氣の利かないマロアール夫人と我慢してベジグも取つたし、ルラ夫人のお饒舌も聴いてやつた。子供のルキが、名も知れない父から譲り受けた脱疽のやうな病氣で寝れ切つて、ひい／＼泣くのも辛抱した。けれども彼は、まだ／＼酷い目に逢つた。或る晩、伯爵は

戸の蔭で、ナナがぶん／＼して、或る富豪と稱する男に欺されたことをゾエに話してゐるのを聞いた。その立派な男は、亞米利加人だと名乗つて、國には金銀を持つてゐると言つてゐたが、實は文無しで、ナナが眠つてゐる間に、一スウの金も残さず、煙草を巻く紙まで持つて逃げてしまつたのだつた。伯爵は蒼白になつて、氣づかれぬやうに爪先立ちで階段を降りて行つた。それからまたこんなことを聞かされたこともあつた。カフエ・コンセルのバリトン歌手と熱くなつてゐたナナは、その男に捨てられると眼先も見えないほど悲觀して自殺を計つたのだつた。彼女は、盃に一東の燐寸を浸けてそれを飲んだ。そして、ひどく苦しんだが命だけは助かつた。伯爵はナナを看護し、ナナの戀の打明け話を聞いてやらなければならなかつた。ナナは涙を流して、今後は決してどんな男にも近づかないと誓つた。彼女は、彼女の所謂豚のやうな男を輕蔑しながら、矢張り男なしで暮すことが出来なかつた。そして、いつも誰か情夫を抱き込んで、説明する言葉もない戀の戯れや、肉體の疲勞に終る悪趣味の中に、轉々と身を耽つてゐるのであつた。ゾエが會計に氣を弛めだしてからといふもの、家政は素れ放題になつた。ミラファはもう用心して、急に戸を押したり、カーテンを引いたり、押入れを開いたりするのを控へるやうにした。務めは何もかも投げ遣りにされた。客は勝

手に家の中を歩き廻つて、到るところでぶつかり合つた。今では伯爵は部屋に入る前に咳拂ひをすることにした。それも或る夜、化粧室で結髪のフランシスがナナの髪を結び終らうとしてゐた時、伯爵は馬車を命じに一寸部屋を空けて歸つてみると、彼女が男の頸に抱きついてゐるところを見せつけられたからであつた。伯爵が背を向けるや否や、すぐにもう出鱈目が始まつた。快樂はところ嫌はず、來合はせた男を相手に、寝衣や盛裝のまゝで行はれた。そして、そんな浮氣で機嫌をよくしたナナは、顔を赤くして彼と差向ひになるのであつた。しかし彼とゐることは、まるで忌はしい苦役のやうに彼女をうんざりさせた。

しかし今では、嫉妬の苦しみには囚はれた不幸な伯爵は、ナナをサタンに任せて置くのを却つて安心するやうになつた。男を近づけまいと思へば、この惡徳の女に押しつけて置くより外はなかつた。しかしそれでも萬事がうまく行くのではなかつた。ナナは伯爵を欺くやうにサタンをも欺いた。そして、町外れに行つて怪しげな女を騙り集めては不自然な惡癖に耽るのだつた。そこから馬車で歸る途中など、どうかすると、路上の胡散臭い男に欲情を起したりした。そして一度官能を刺戟されると、妄想は手に負へなくなり、さういふ男を馬車に乗せて歸つて來て、金を與へてまた歸してやるのだつた。さうかと思ふと、或る時は男装

してよからぬ場所を彷徨ひ、人の遊蕩を眺めて退屈を凌いだりした。一方サタンは、始終出し抜かれるのに業を煮やして、家中を引つくり返すやうな騒動をやるのだつた。サタンを敬まつてゐるナナは、結局はどんなことにもいつも服従してゐた。ミラファは、サタンと提携しようと考えた。そして自分ではむづかしいと思ふことにはいつもサタンを使つた。彼女が二度もナナを自分の手へ戻してくれたことさへあつた。彼の方でもサタンには親切にした。何事も先づ彼女に話し、どんなことでも彼女の言ひなりになつてゐた。しかし、この協定も永くは續かなかつた。サタンにしたらが普通の女ではなかつた。時とすると、憤怒と戀情の嵐に唆かされて、半狂亂の態で手當り次第に物をぶち毀した。そんな時にも彼女は美しかつたけれど、そしてどうやらそれは、ゾエが焚きつけてゐるらしかつた。ゾエはサタンを物蔭に呼びよせて、まだ誰にも洩らさなかつた例の彼女の計畫の、その仲間にサタンを引き入れようとしてゐるらしい様子も見えた。

そして時には、堪へられぬ憤激の情が伯爵を奮ひ起させた。彼は數ヶ月以來、サタンがたうとう此處で客をとるやうになつたのさへ許してゐた。ナナの寢所に駆け込んで行く見ず知らずの男達にも眼をつぶつてゐた。しかしそれにしても、自分の屬してゐる交際社會の者だとか、或は知人



の誰彼に自分が欺かれてゐるのだと考へると、矢も楯もたまらない氣持になつた。ナナがフウカルモンと關係してゐることを打明けた時には、この若い男の裏切があまりに許し難くて決闘を申し込まうと決心したほど、彼は苦しんだ。事件が事件だけに立會人も見つからないので、彼はラポルデットに頼み込んだ。ラポルデットは呆氣にとられて、噴き出さないではゐられなかつた。

「ナナのために決闘ですつて……巴里中の者があなたを笑ひますよ。可笑しいぢやありませんか。ナナでは決闘になりませんよ。」

伯爵は眞着になつた。そして拳を固めた。

「いや、よろしい。街の眞中で撲つてやります。」

ラポルデットは一時間も彼を慰めなければならなかつた。撲つたところで、それは物笑ひになるばかりだし、すぐその夕方には、街中の者が喧嘩の真相を知つてしまつて、新聞にまで書き立てられるやうな始末になるでせう。と言つてラポルデットは、また同じ結論に歸つて來た。

「そんな事はいけませんよ。可笑しいぢやありませんか。」  
さう言はれる毎にミラファは、鋭利な刃物で胸を抉られるやうな思ひをした。愛する女のために、決闘も出來ないとは、それを世間が笑ふだらうとは、まあどうしたことだらう。彼は嘗て、自分の戀の惨めさをこんなに辛く身に覺

えたことはなかつた。彼の内心の嚴肅さも、世間の人の口の端に全く嘲笑し去られてしまふのだ。彼が怒つたのもこれが最後だつた。その後、彼は身を成行に任せて、友人を始め、この家に親しく出入りする人々に對しては、傍觀的な立場に立つてゐることにした。

ナナは數ヶ月の間に、來る男來る男を食つて行つた。度を増すばかりの贅澤がその食慾に油を注いだ。男一匹を一口で片づけてしまつた。まづフウカルモンが二週間と持たなかつた。彼はそのうちに、船乗り生活を廢めて、十年間の航海生活で貯め込んだ三萬法ばかりを合衆國で何かの事業に注ぎ込んで見たいと思つてゐたのだつたが、その殆んど吝嗇に近い平常の用心深さはどこへ行つたのか、すつかり投げ出して、將來を質に入れたも同様に空手形の署名まで認めてしまつた。そしてナナが追ひ出した時には裸だつた。するとナナは親切さうに、いつまでもかうしてゐたつてどうなるの？ もう船に歸る方がいゝわ、と忠告した。金がなくなれば、もうおしまひだつた。そして彼はおとなしく引き上げなければならなかつた。破産した男は、彼女の手から熟した果實のやうに墜ちて自から地上に腐つて行くのだつた。

やがてまたナナはシユタイネルの許へ、別に厭がりもせず何の愛情もなしに歸つて行つた。彼女は、汚ならしい猶太

人として彼を取扱つた、自分にも何故だか分らなかつたが、猶太人に對する昔からの憎惡を晴らさうとしてゐるらしかつた。彼は肥つてゐて、獸のやうだつた。彼女はそれを小突き廻はして、それを餌にして、兩頬に頬張りながら、早くこの男をしやぶり盡してしまひたいと思つてゐた。彼はシモンヌとは別れてゐた。彼のボスフォルの事業はぐらつき初めてゐた。そしてナナの無法な要求はその瓦解を促した。けれどもまだ一ヶ月餘りは、辣腕を揮つて腕きながらもちこたへてゐたのだつた。全歐羅巴に互つて大袈裟な廣告をしたり、ポスターを出したり、報告書を書いたり、趣意書を配布したりなどして、最も遠い國々からも金を掻き集めてゐた。かうして得られたところの細民の零細な出資も、投資家の大金も、總てヴィリエ街に流れ込んでしまふのだつた。シユタイネルは別にまた、アルサスの或る鐵工場主と組合を結んでゐた。つまり、そんな田舎の一隅で、

石炭で黒くなり汗にまみれた労働者の群が、ナナの快樂を満たすために、肉を硬ばらせ骨を軋らせてゐた譯であつた。ナナは、勞役の所得も盗みの獲物の差別もなく、一切を燃えさかる焔のやうに跡形もなく貪り食つてゐた。そして今度シユタイネルをすつかり平げてしまつた。骨の髓までしやぶりつくして、もう新しい詐欺一つ案出する力もないまで素寒貧にして、路上に抛り出してしまつたのだつた。

彼は自分の銀行の破産を前にして、今更に警察が恐ろしく、口も利けないほどびく／＼してゐた。そして遂に破産を宣告された。嘗つては百萬の富を左右したこの男も、今では金の一語を聞いてさへ子供のやうにどぎまぎして怖氣ついでゐた。或る夜彼女の家で彼は泣き初めた。そして女中に拂ふ百法を貸してくれと頼んだのだつた。二十年間巴里で鳴らしたこの辣腕家の成れの果てに、ナナは不憫にもなり胸のすく思ひもして、かう言ひながらそれを貸してやつた。

「ね、これは上げるのよ、だつて僅かなお金ですもの……そして、あなたは、もう私に買いで貰へるやうなお年ぢやないんだから、何か仕事を探すといゝわ。」  
そしてナナはすぐにラ・ファロアズに取り掛つた。彼はすつかり粹な男になるために、ナナによつて没落するの光榮を永く希つてゐた。彼はまだ色揚げされてゐなかつた。誰か女が一人、彼の手をとつてやらなければならなかつた。さうすれば巴里は二月を出でず彼を知り彼は新聞紙上に自分の名を讀むであらう、と思はれた。けれども事實は六週間十分だつた。彼の相續した財産は貸家、地所、牧場、森林、田畑などに互つてゐた。彼はそれらを矢繼早やに賣拂はなければならなかつた。一口毎にナナは一アルパン(約二)の地面を食つた。光を受けてそよ／＼樹立、成熟した麥畑、金色に輝く九月の葡萄園、牡牛が腹まで隠れてしま



ふ草原、その總てがこの奈落へ一噴みに落されて行つた。運河も、石膏切出場も、三つの風車小舎も皆無くなつてしまつた。ナナは丁度、その襲來が一地方の田畑を劫掠してしまふ蝗の一群のやうに、それらの上を走り去つた。その小さな足に觸れる土地を残らず焼き拂つた。農場から農場、牧場から牧場と、まるでお茶時に膝の上に載せた一包みの巴旦杏を食べるやうに、可愛い顔付で、何をしてゐるのか考へる様子もなく、彼の繼いだ遺産を一つづつ食べて行つた。それらは皆、實に何でもないボン／＼に過ぎなかつた。そして或晩、もう残つてゐるのは小さな森だけになつた。彼女は彼女にとつて口を開けるにも値しないその土地を馬鹿にしたやうに呑んでしまつた。ラ・ファロアズはメテッキの握りを舐めながら、その有様をぼんやり笑つて眺めてゐた。負債が彼を責め立てた。彼にはもう百法の収入さへなかつた。そして遂に田舎へ歸つて、少し氣の變な叔父と一緒に暮さなければならなくなつた。しかし、そんなことが彼にとつて何であらう。彼は粹な男になつたのだ。ファイガ口紙が二度まで彼の名を掲げた。彼は瘦せた頸に折襟の略式カラーをつけ、短かすぎる上衣を着てひよろ／＼してゐた。そして物に感動したことなどは一度もない癖に、姿態を作つて鷓鴣返し之感嘆詞を吐いてみたり、木作りの人形のやうに大袈裟な疲勞の表情をしたりした。ナナは煩さく

なつて、たうとつ、横面を撲りとばした。

そのうちにフォシユリイが、従弟に連れられてまたナナのころへ來た。不幸なフォシユリイはその頃世帯を持つてゐた。サビイヌ夫人と別れてから、彼はローズの手に歸つて行つた。ローズは彼をほんとの夫のやうに扱つて、ミニヨンは彼女の家扶のやうな形になつてしまつた。夫の位置に祭り上げられたフォシユリイは、何かローズに對して隠しごとでもする時は、あらゆる細心の注意を拂つてゐた。その様子がまるで、一家をうまく治めて行かうと努めてゐる善良な亭主そのまゝだつた。ナナはうまくこの男を手に入れた。彼が友人の出资で刊行してゐた新聞を食ひ物にした。そして彼との關係を表立てないで、却つて、人目を忍ぶ情夫のやうにして楽しんでゐた。ローズのことを話す時には、いつでも「あの可哀さうなローズ」と言つた。その新聞は、彼女のことを二月に互つて華々しく褒め立てた。彼女が地方に澤山の讀者を作つた。そして、演藝欄から社會欄に至るまで、彼女一人で残らずとつてしまつた。かうして遂に編輯は紊亂に陥り、どうやら經營も覺束なくなつた時に、彼女は更に大變な氣紛れを思ひついた。屋敷の一隅に温室を設けて、フォシユリイの印刷所を賣り飛ばしてしまつた。それもナナにとつては、睡氣さましの慰みに等しかつた。二人の關係を密かに喜んでゐたミニヨンが、フォシユリイを

すつかりナナに押しつけることは出来まいかと思つて駆けつけて見ると、ナナが、お前さんは私を馬鹿におしなのかい、と問ひ返した。まああんな素寒貧の、記事や脚本で食つてゐる男を、この私が、冗談も暇々しておくれよ！ そんな智慧の無い仕事なら、芝居の方では腕の確かな、あの可哀さうなローズさんに似合ひだわ、と言つた。ナナは、それにしてもあのミニヨンが、こちらのことをローズに告げかねないと思つて、彼女の仕返しも怖れたので、今では新聞記事を書いてくれるだけのフォシユリイをたうとうお拂ひ箱にしてしまつた。

しかしナナは、フォシユリイとは愉快な記憶を残してゐた。二人はよく、ラ・ファロアズの馬鹿を玩具にして遊んだものだつた。きつと、そんな馬鹿をからかふ遊戯があんなに二人を刺激しなかつたなら、互にさう會ひたいとは思はなかつたことだらう。それは二人にはまるで茶番だつた。鼻の先で接吻して見せたり、奢らせて置いてから散々な眞似を見せついたり、彼一人を、巴里の端から端まで使ひに走らせて置いて、その間二人で家に残つてゐたり、そして彼が歸つて來ると、彼に分らないことを言つて冷やかしたり當てこすつたりなどした。或日ナナは、フォシユリイに編み物をして、ラ・ファロアズの横面を撲つて見せると約束した。そしてその晩、彼女は平手打ちを喰はした。彼女は、男

がどんなに卑怯なものかを見るのが嬉しくて、面白がつて續けざまに打つた。そして彼に「抽斗」といふ名を付けて、「さあ、ぶつて上げるから出ておいで」と言つた。慣れないことなので、ナナの手の方が赤くなつた。ラ・ファロアズは例のハイカラな様子で、眼に涙を溜めて笑つてゐた。そして彼女を、驚いた女だとは思つたが、そんなに親しくして呉れるのが嬉しくてならなかつた。

「あのね」と或る晩、ラ・ファロアズは、撲られたので元氣づいて言つた。「僕と結婚して下さるでせう……どう？二人でなら、道化た夫婦が出来るんですが！」

これは決して空言ではなかつた。巴里を驚かす必要から、彼は密かにこの結婚を計畫してゐたのだつた。ナナの夫とはどうだい？ 粹ではないか！ いさゝか大膽ながら光榮ぢやないか！と思つてゐた鼻柱を勿論、見事に挫かれた。「私があなたと結婚ですつて……まあ！ 私にそんな氣がある位なら、とつくの昔に夫を見つけてゐますわ！ それもあなたの二十倍も價値のある男をね……そんな申込みなら山ほどあつたの。さあ！ 私と一緒に數へて御覽。フキリッパとジュールジュと、フウカルモンにシュタイネル、それでもう四人でせう。その外は數へません、あなたが知らないから……誰も彼もそんな疊句を言ふのよ、うつかり優しいもしてやれないわ。直ぐにみんなが歌ふんだから。結婚



「しませんか、結婚しませんか、だつてさ……」  
 ナナは段々調子に乗つて、しまひにはすつかり怒つてしまつた。

「えー！ いやですとも！……そんな風に私が作られてゐると思つてるの？ 少しは相手を見ておくれよ。男を背負ひ込む位なら、もう私はナナぢやないわよ……。まあそれには、汚ならしいつたら……」

彼女は唾を吐いて、まるで足許に世界中の汚なさが集つて来るのを見たやうに、今にも嘔吐しさうな様子をした。

或る夜、ラ・ファローズは姿を消した。一週間ほど経つて、彼は田舎の植物採集狂の叔父の家にあると言ふことが分つた。その叔父の植物標本を貼つてやつたりしながら、非常に醜い信心家の従妹と結婚する工夫をしてゐる、といふ噂だつた。ナナは少しも悲しまなかつた。そしてたゞ伯爵にかう言つた。

「どう？ ミュッパ、また敵が一人減りましたの。今日はお祝ひでもしなさいよ……だけど、あの時は眞面目になつてゐたわ！ 私と結婚したいと言つてね。」

伯爵が顔の色を變へると、ナナはその頭に縋りついて、笑ひながら、残忍さをつつ／＼の愛撫に籠めて言つた。

「どうなの？ あなたも怒つてらつしやるのね！ でもあなたはこの私と結婚出来ないわ……。でも、あんなに皆が

結婚々々と言つて私を困らしてゐると、あなたは隅の方で怒つてゐたのね……駄目よ、あなたの奥さんが亡くなるまで待たなけりや……あー！ もし奥さんがお亡くなりになつたら、どんなに急いで飛んで来て、どんなに床に身を投げて、どんなに皆と同じことを仰しやるでせう。大變な仕事で、溜息をついて、涙を流して、誓ひを立てるんでせう。さうなればいゝわね！」

彼女は優しい聲で話した。そして残忍な甘え方で彼を弄んだ。彼は非常に感動して、顔を赧くしながら、幾度も彼女に接吻した。と、ナナが叫んだ。

「まあどうでせう！ ちやんと分つてよ！ この人はその時のことを考へて、奥さんが死ぬのを待つてゐるんだわ……いゝわ！ もう澤山、この人は外の人達よりもつと悪いんだわ！」

もうミュッパは外の人達を毛嫌ひしなかつた。そして今では彼の最後の誇りを、この家の召使達や定連にとつて、彼がやはり『旦那』であることに置いてゐた。つまり最も多く金を拂ふものが、表向きの主人になるのであつた。そして彼の痴情は日に／＼激しくなつて行くのであつた。金によつて僅かにその位置を保ちながら、ナナの微笑をさへ非常に高價に支拂はなければならなかつた。それも、どうかすると盗み去られて、金だけが空しく消えて行つた。

そして彼に食ひ入るこの苦痛に、彼は惱まないのであられなかつた。せめてもの思ひに、彼はナナの部屋に入ると、暫くの間は、窓を開けはなすのだつた。それは部屋に籠つてゐる男達の體臭、その誰れ彼れの體から發散する空氣、むせかへるやうな強い葉巻の煙などを追ひ出すためであつた。

部屋は丁度街の四辻のやうになつて、様々の人の靴底が絶間なく敷居を磨り減らしてゐた。しかもその中の誰一人として、戸口を塞いでゐる血痕の前に足を止める者はなかつた。ゾエがしきりにその斑點を氣にしてゐたが、それもただ、綺麗好きの彼女に眼障りだからであつた。兎に角彼女は、部屋へ入るごにかう言つてそれに眼を落した。

「變ですわね、これが消えませんが……こんなに人が出入りしますのにね。」

ナナは、フォンデットで母の看護を受けてゐるジョルジュの豫後の経過も良好だと聞いてゐたので、その度にいつも同じ答をするのだつた。

「時間が経てばいゝのよ……踏んでゐるうちに消えるわ。」  
 ナナの言ふ通り、フワカルモンや、シュタイネルや、ラ・ファローズや、フォシリイなどの連中が、皆靴底に少しづつその斑點をつけて持つて行くのだつた。ミュッパだけは、ゾエと同じやうにそれが氣になつて、厭なもの我慢をし、氣をつけてゐて、それが次第に薔薇色に薄れてゆくこ

とによつて、この關を跨ぐ男の人数を讀まうとした。彼にはまたそれが何となく薄氣味が悪かつた。そして何かしら生きてゐるもの、たとへば床の上に横たはつてゐる裸の肢體か何かを踏みつける時のやうな、激しい恐怖を覺えていつもそれを跨いで渡つた。

けれども一度この部屋に入つてしまふと、快い肢體のやうな氣持が彼を酔はすのだつた。この部屋に群り集まる男達も、この部屋の扉を鎖してゐる悲劇も、何もかも一切が忘れ去られた。そして時々、部屋を出て街を歩きながら、彼は急に恥かしさと腹立たしさに涙を流して、もう二度とあの部屋には入るまいと誓ふのだつた。しかしナナの家の扉口が彼の前に開かれると、彼はまたすぐそれに捉へられしてしまつた。あの部屋の温かさに溶け込むやうな氣持になつて、その肉は艶めかしい香りに浸され、滅亡に誘ふ淫慾に征服されるのであつた。

莊麗な祭壇にいつも隨喜してゐた信仰家の彼は、こゝでもまた、その繪硝子の下に跪いて、風琴と香爐の魅惑に酔ひしれる時と少しも變らない心持を見出すのだつた。女の方は、怒りに満ちた神のやうな嫉妬深い專横さで、彼を所激しい歡喜を與へはするが、直ぐにまた地獄の幻と永遠の刑罰との、怖ろしい責苦の數時間を以てそれに代へるの



だつた。そして彼の口籠る嘆き、祈願、絶望、殊にその屈從は——それは出生と共に泥土に踏み躪られた呪はれた人の子のものであつたが——神に向つてするものと少しもかはらなかつた。その人間的慾情と靈性の希求とは、互に溶け合つて、同じ生命の莖に咲き出た花のやうに、彼の存在の暗い奥底から伸び出て来るものと思はれた。彼は、その二重の槓杆が世界を支へてゐる愛慾と信仰の支配の下に身を投げ出した。さうして理性の抗争も空しくなり、ナナの部屋は絶えず彼を狂亂させた。彼は、蒼茫たる天の不可知の前に氣を失ふやうに、性の全能の中へ身を頼はしながら耽溺するのであつた。

伯爵がこんなに何ごとにも遜つてゐるのを見ると、ナナは却つて暴君のやうに勝ち誇つた。彼女は物を卑しめて喜ぶ本能をもつてゐた。單に物を破壊するばかりではなく、更にそれを汚さなければ満足しなかつたのである。彼女の美しい手は、打ち壊したすべての物に忌はしい汚點を残しそれを腐敗させた。そして思慮を失つた彼は、たゞ漠然と、自らの汚物を食べてゐながら虱の餌になつてゐたといふ古への聖者を思ひ浮べて、このナナの戯れに、身を委ねてゐるのであつた。彼女は彼を部屋に入れて、扉を鎖してしまふと、ありとあらゆる醜行を彼に命じて楽しむのであつた。始めは二人してふざけてゐるがそのうちに彼女は頬を叩い

てみたり、したい放題の滑稽なことを無理強ひして、例へば子供のやうな廻らぬ舌で自分の言ふ通りのことを彼に眞似をさせたりした。

「さあかう言つて御覽なさい。『チュルト坊ヤガ笑ヒマチエ。』」

伯爵は素直に、彼女の口調までそっくり眞似て、言はれたまゝに繰り返した。

「チュルト坊ヤガ笑ヒマチエ。』」

さうかと思ふと、熊になるのだと言つて、彼女は肌着一枚で毛皮の上に四つんばひになり、彼に食つてかゝるやうな恰好をしながら、ウウと唸り聲を立て、匍ひ廻つた。そして面白半分にはんとに彼の股を噛みさへした。それから立ち上つて言つた。

「さああなたの番よ。やつて御覽なさい。きつと私みたいには出来なくつてよ。」

それの方がまだ面白かつた。彼女はその白い肌を褐色の髪を靡かして熊になつた。伯爵はそれを見ると笑つて、自分も四つんばひになり、唸りながら彼女の脹脛に噛みついた。

すると彼女は、わざと怖さうにして逃げまはるのであつた。「まあ、私達は馬鹿ね。」としまひに彼女が言つた。「今のあなたの様子つたら！ まあ、チュイルリ、の人達にも見せて上げたいわ！」

けれどもそのうちに、こんな遊戯も面白くなかつた。しかし、彼女は別に残酷な氣持からしてゐるのでもなかつた。彼女はやはり氣だての優しい娘であつた。それは謂はば、部屋の中に閉ぢ込められて次第に大きくなつて行く狂氣の沙汰であつた。淫慾が彼等を狂はせ、常軌を逸した肉慾の妄想に彼等を投げ入れてゐた。嘗つて不眠の夜が、ついでに彼等を悩ました神への恐怖は、今や獸性の渴きに變り、四つんばひになつて唸つたり噛みついたりする、こんな狼藉に變つてゐた。或る日熊になつた伯爵は、ナナがあまりひどく押したので、轉がつて家具に衝かつた。彼が額に瘤をこしらへたのを見てナナはわざと大聲を上げて笑つた。

その頃から、ラ・ファアラズに試つてみて味を占めた彼女は、伯爵にも獸の眞似をさせて、その上鞭をあてたり、尻を蹴つて追ひ立てたりした。

「はい、しいつ！ はい、しいつ！……お前さんは馬なんだよ……はいよ！」

或る時は彼は犬になつた。彼女が香水の附いたハンカチを部屋の隅に投げると、彼はそれを口に啣へて、手と膝で駆けなければならなかつた。

「持つておいで、セザアル！……お待ち、御馳走をあげるから、さあ三遍廻るんだよ！……いよ！ セザアル！

いよ！犬ね！……さあちんくをおし！」

しかし彼は、自分の卑しい行ひを愛し、一匹の畜生であることの快樂を味つてゐた。彼はなほその上にも墮落を望んでゐた。

「さあもつと強く撲つてくれ……ウウ！ ウウ！ さあ狂犬だよ、撲つてくれ！」

ナナはまた氣紛れを起した。彼女は或る晩伯爵に侍従の正装をして来るやうに言ひつけた。そして彼が言はれた通りに劍を帯び、帽子を冠り、純白のズボンに金を飾り立てた、緋色の燕尾服といふ嚴めしい姿で現はれると、彼女は腹を抱へて笑ひながら漫罵を浴せかけた。彼の燕尾服の左裾には、何かの象徴めいた鍵が下つてゐたが、これが殊更彼女の氣に入つた。彼女は思ふ存分卑猥な意味を考へ出して喜んだ。そして絶えず笑ひながら、彼女は一切の權威を輕蔑する痛快さと、公の美しい服装に包まれた彼をも卑しめ得るといふ樂しみとに夢中になつて、彼を揺すぶつたり、

「はら！ あつちへお行きよ、侍従さん！」と言つて後ろから幾度も尻を蹴上げたりした。そして彼女はそれらの足蹴を、人々の恐怖と平伏との上に立つて威を示してゐるあのチュイルリの宮殿の尊嚴の中まで推し及ぼして考へると、胸のすくのを感ずるのであつた。

それはまた彼女がこの社會について考へてゐたところでもあつた。即ち血液の中に遺傳された、彼女の家系の無意識の

「さあもつと強く撲つてくれ……ウウ！ ウウ！ さあ狂犬だよ、撲つてくれ！」

ナナはまた氣紛れを起した。彼女は或る晩伯爵に侍従の正装をして来るやうに言ひつけた。そして彼が言はれた通りに劍を帯び、帽子を冠り、純白のズボンに金を飾り立てた、緋色の燕尾服といふ嚴めしい姿で現はれると、彼女は腹を抱へて笑ひながら漫罵を浴せかけた。彼の燕尾服の左裾には、何かの象徴めいた鍵が下つてゐたが、これが殊更彼女の氣に入つた。彼女は思ふ存分卑猥な意味を考へ出して喜んだ。そして絶えず笑ひながら、彼女は一切の權威を輕蔑する痛快さと、公の美しい服装に包まれた彼をも卑しめ得るといふ樂しみとに夢中になつて、彼を揺すぶつたり、



怨恨であり、彼女の復讐であつた。侍従は更に服を脱がされ、それを床の上に投げ出して、その上を跳べと命ぜられた。彼は跳んだ。それから唾を吐けと命ぜられた。彼は唾を吐いた。金飾りや駕の模様や勳章を踏めと命ぜられた。彼は踏んだ。ひし／＼と音を立て、總てが壊れた！ もう何も残らなかつた。つまり彼女は一人の侍従を、まるで硝子壺かボン／＼の箱のやうに踏み潰して、町端れに積まれた汚物の一山のやうな、塵埃にしてしまつたのだつた。

金銀細工師は、約束より遅れてやつと一月の半ばになつて、註文の寢臺を届けて来た。ミヨファは丁度ノルマンディに行つてゐた。それは、至急に四千法要るとナナに言はれたので、その金を調達するために、彼に残つてゐた最後の土地を賣りに行つてゐたのだつた。まだ二日ばかり戻らぬ筈だつたところを、用事が意外に早く済んだので、彼は歸りを急いで、ミロメニールの自宅へも寄らずに、すぐにヴイリエ街にやつて来た。十時が打つてゐた。彼はカルディネ街に向つてゐる勝手口の鍵を持つてゐたので、ひとりで戸を開けて二階へ上つて行つた。客間ではゾエが青銅の置物を拭いてゐたが、彼を見てびつくりした。彼女は彼に追ひすがるやうにして、ヴノオが昨日から氣も顛倒した様子で彼を探しまはつて、今迄に二度もやつて来て、もし伯爵がこちらにさきに歸つて来たなら、すぐに自宅へ戻してほ

しい、とくれ／＼も顛んで行つたといふことを長々と述べ立てた。ミヨファは黙つて聴いてゐたが、何のことだか分からなかつた。けれどもゾエの慌て方に氣がつくと、突然、我ながら不思議なほど激しい嫉妬に捉へられて、ナナの部屋の扉口に駈けつけた。中からは笑ひ聲が聞えた。扉は押すとばつと左右に開いた。ゾエは肩を聳やかして出て行つてしまつた。まあ！ 奥さんも奥さんだ、あとはなんとでも御勝手になさるがよい、と言はぬばかりに。

ミヨファは敷居の上に立ち竦み、その場の有様に驚いて叫びを上げた。  
「おゝ、おゝ！……どうしたことだ！」  
新装された部屋は、その素晴らしい莊麗さをもつて輝いてゐた。壁覆ひの茶が／＼つた薔薇色の天鵞絨には、銀の卸が星のやうに鑲められて閃めいてゐた。この天鵞絨は、暮れてゆく一日の薄明りを背景にして、その地平線に金星が輝き初める頃の、晴れた日の夕空のやうな薄薔薇色を見せてゐた。又四隅に下つた金色の垂れ紐と鏡板を縁どる金色のレースとは、軽やかな焰のやうに、また解かれた褐色の髪の毛のやうに、この部屋の露はな肌を半ば覆ひ隠して、淫樂をそよるその蒼白さを増してゐた。そして正面には、彫刻を施した金銀の金具が光り輝いてゐる例の寢臺があつた。この寛やかな玉座ならば、ナナがその露はな女王のやうな

肢體を横へるのに十分であらうと思はれた。このビザンチン式の莊嚴さを持つてゐる祭壇ならば、彼女の性の全能の神を祀るに相應はしいと思はれた。そしてこの時ナナは、そこに怖るべき宗教的な偶像のもつ圖々しさを以つて、全裸になつて横たはつてゐたのである。そしてまた彼女の傍には、その雪のやうな白い胸の下に、その女神のやうな誇らしさの中に、一つの汚辱が、老衰が、嘲笑すべき墮落が、寢卷一枚のシニアル侯爵が、腹匍ひになつて轉つてゐたのであつた。

伯爵は両手を組み合せた。大きな戦慄にわな／＼いて、彼はまた繰り返した。

「おゝ、おゝ！……どうしたことだ！」  
では、船形寢臺の金の薔薇の花や金の葉の間に綻びそめた金の薔薇の花房は皆シニアル侯爵のために咲き出たのか。銀色の格子の上に戀の悪戯をして笑ひ崩れる愛の神々が輪になつて身を屈めてゐるのも彼のためなのか。またその足もとに牧羊神が、淫慾に疲れて眠つてゐるニンフの着物を剥いでゐた。その「夜の神」の姿は有名なナナの裸體を摸したもので、その逞ましい腿までが誰の眼にもそれと見分けられた。それまでがまた彼のためであつたのか。そしてその侯爵は、六十年間の遊蕩の後に、見る影もなく破れ果て、人間の襤褸の一切れのやうに投げ出されて、彼

女の輝かしい肉體の榮光の中に、まるで骨壺を置いたやうに見えた。彼は扉の開くのを見ると、毫碌した老人らしく周章てふために起き直つた。この最後の色慾の夜は彼を愚昧なものにし、幼兒に後戻りさせた。その骸骨のやうな體に寢卷を纏つて、灰色の毛に覆はれ血の氣の失せた憐れな片脚を夜具の外に突き出して、逃げ腰になつたまま、物も言はず、癡痺したやうに口籠つて顛へてゐるばかりであつた。ナナは當惑してゐたが、笑はないではゐられなかつた。「寝てゐらつしやい、寢床の中に入つていらつしやいよ。」と言つて、彼女は彼を轉がして、見せてはならない汚物のやうに、毛布の下に押しこめて埋めてしまつた。

それから彼女は扉を閉めに飛んで行つた。ミヨファがこんなところへ来るなんて！ 彼は何時も都合の悪いところへ来るのだつた。それにしても、彼がノルマンディまで金の工面に出かけたのは何のためだつたのか？ もうこの老人が彼女のところへ四千法を持つて来た。それで彼女は身を委したのだつた。彼女は扉を閉めて中から叫んだ。「お氣の毒ね！ でもあなたが悪いのよ。そんな風に入つて来るつてことがあるもんですか？ えゝもう澤山よ、御機嫌よう！」  
ミヨファは閉められた扉の前で、今見せられた光景に吃驚したまゝ立ち竦んでゐた。慄慄は次第に大きくなつて、



爪先きから胸を通つて頸筋にまで上つた。それから、嵐に揺すられる一本の木立ちのやうに、彼はよろめいて膝をわく／＼させ、體中をがた／＼顛はせた。そして絶望的に兩手を差しのべて口籠つた。

「あんまりだ。おゝ！ それはあんまりだ。」

彼は一切を耐へ忍んで来た。けれども、もうこれ以上は辛抱が出来なかつた。そして今や理性と諸共に顛落してゆく暗黒の中で、彼はもう何もかも自分の力に及ばないのを悟つた。彼は必死になつて、兩手を高くさ／＼上げて天を祈り、神に願つた。

「おゝ！ お願ひでございます！……おゝ！ 神よ、お助け下さい！ お救ひ下さい。いや、寧ろこの身を死なして下さい！……おゝ！ いゝえ、あの男のことではありませぬ。神よ！ もうおしまひでございます。私をお召し下さい、私を持ち去り下さい、さうして私の眼がもう見えないやうに、私の心がもう感じないやうにして下さいませ……おゝ！ 私はあなたのものでございます。神よ！ 天に在ります我等の父よ……」

彼は信仰に燃えて續けてゐた。熱烈な祈禱の言葉が唇から止めどもなく流れてゐた。と、誰か彼の肩に觸れる者があつた。眼を上げてみると、それは閉された扉の前で祈りを捧げてゐる彼を見て驚いてゐるヴノオであつた。すると

伯爵は、神が彼の祈願に答へ給うたかのやうに、この老人の頸に抱きついた。果ては涙を流し、啜び泣きながら繰返した。

「おゝ同胞よ……おゝ同胞よ。」

彼の惱みに充ち満ちた心は、この叫びによつて安らぐのであつた。彼は自分の涙でヴノオの顔を濡らし、切れ／＼な言葉と／＼に接吻した。

「おゝ同胞よ……私がどんなに苦しいことか……私に残されたのはあなた一人だ……どうかこれを限りに、こゝから私を連れ出して下さい。おゝ！ 連れて行つて下さい。」  
ヴノオは伯爵を胸に抱いて、やはり「同胞よ。」と呼んだ。けれども彼は、伯爵に更に新しい打撃を齎らさねばならなかつた。彼は昨日から伯爵を探してゐた。それはサビイヌ夫人がすつかり分別も何もなくなつて、或る大百貨店の部長と墮落ちをしたといふ、もう巴里中に擴がつてゐる怖ろしい出来事を彼に知らせるためであつた。ヴノオは、伯爵がこんな信仰の熱情に驅られてゐるのを見て、絶好の時機と思つて、遂に伯爵の家を潰したこの情事……このありふれた悲劇の顛末を直ぐに物語つた。伯爵はそれには感動しなかつた。妻が出奔した——それが彼にとつて何であらう。捨て／＼置けばいゝことだつた。そして彼は苦しさを、戸や壁や天井を見廻し、恐怖に慄へて、唯かう繰り返

してせがむばかりだつた。  
「連れて行つて下さい……もう苦しくてなりません。連れて行つて下さい。」

ヴノオはまるで子供のやうな伯爵を戸外に連れて出た。その時から伯爵はまたすつかり彼のものになつた。そして再び宗教の厳格な義務に従つた。彼の生活は支離滅裂なものになつてゐたので、テイルリイの人々の彈劾に逢つて、侍従の職を退いてゐた。娘のエステルは結婚の時貰ふ管の、伯母の遺産の六萬法の金額に就いて、彼を相手に訴訟を提起してゐた。今は落ちぶれて、その莫大な資産の残り物で細々と生活してゐる伯爵は、ナナの食べ残したものを、サビイヌ夫人が貪り食ふまゝにしてゐた。ナナの亂行が感染つたサビイヌは、どんなことでもするやうになり、どん底の墮落にまで陥ちこんで、家庭の黴のやうなものになつてゐた。けれども伯爵は、彼女がさん／＼放蕩を重ねた末に、歸つて来ると、耶蘇教徒らしい寛容さで恕してやつて、總てを忘れて彼女と一緒に暮した。彼女は彼の生きた恥辱のやうに、つき纏つた。しかし彼は、日に／＼無關心になつて、もうそんなことには苦しまなくなつた。天が彼を女の手から救ひ出して、神の御手に託したのだつた。それは自分の家柄を泥土に踏み躪られた、呪はれた男の口籠る嘆息や、祈願や、絶望や、屈從を以つてしたあのナナ

への淫慾が、宗教的なものに變じた延長に他ならなかつた。寺院の奥の敷石の上に足の冷たくなるのも忘れて跪くとき、彼は、その生命の暗い欲情の満足と同じ満足のうちに、昔の法悦を、筋肉の痙攣と智慧の甘美な戦きを、再び見出したのだつた。

ミラファがあんなにして歸つた晩、ミニヨンがヴェリエ街を訪ねて来た。彼は、今ではフォシュリイのゐるのにも慣れてしまつた。自分の妻にもう一人亭主がついてゐてくれるのも、却つて色々都合なのを知り、家庭の事は一切彼に任せて、自分はその上に嚴重な監督をすることにしてゐた。そして日々の雜費はこの男の脚本の方から入る金で支拂はせてゐた。一方またフォシュリイも仲々もの分りがよく、妙な嫉妬などはしないで、ローズとの行き掛りもミニヨンと同様によく融通を利かしてゐた。で、この二人の間に益々具合よく行つて、何につけ幸福を齎してくれるこの組合せに満足して、最早氣兼ねすることも要らない一つ世帯の中に、二人はそれ／＼自分の位置を占めて、仲よく暮してゐた。何事も秩序立つて圓滑に運んで行き、彼等は共通の幸福に向つて協力してゐた。そしてこの時も、ミニヨンはフォシュリイに勧められて、ナナのところからゾエを奪まいかと思つてやつて来たのだつた。フォシュリイはゾエを類のない賢い女だと見込んでゐた。それにローズは今



弱り切つてゐた。この一ヶ月以來、彼女は不慣れた女中にばかりぶつかつて手古摺つてゐたのだつた。折よくゾエが出て来たので、ミニオンはすぐ彼女を食堂に引つ張つて行つた。ゾエは最初の一言を聞くと直ぐ微笑んだ。いゝえ駄目ですわ。奥様からも暇を貰はうと思つてゐますの。自分で少し考へてゐることもありましてね、と言つた。彼女は得意を包み切れずに、自分を欲しがつてゐる婦人は随分あつて、毎日のやうにさういふ申込みを受けてゐるといふこと、ブランシュ夫人などは、もしお前が来てくれるならどんなことでもして上げるから、と言つて頼んでゐるといふことなども附け加へて言つた。しかしゾエは、もうトリヨン夫人の家を譲り受けてゐたのだつた。それは久しい以前からの計畫で、貯蓄してゐた金を資本にして、一儲けしようといふのであつた。彼女は將來のことも思ひ廻らして、そのうちには家を借りていろ／＼な設備もし、仕事の手を擴げようと考へてゐた。彼女がサタンを咬かしてゐたのもこのことに就いてであつた。サタンと言へば、あの哀れな女は、あんなに自分の身を安賣りしたので、今では治療院で死にさうになつてゐた。

ミニオンがしきりに事業に伴ふ危険を説いて聞かせる、ゾエは、自分の仕事の性質に就いては別に説明もせず、まるで菓子屋でも初めるやうに皮肉な微笑を浮べて、

かう言つた。

「えゝ！ 贅澤品はいつも賣行きのいゝものですよ……私人に使はれるのはもう澤山ですわ。今度は人を使つてみようと思ひますの。」

一種の激しい氣性から彼女は肩を反らした。彼女も遂に「奥様」になる。そして幾ルイかの金で、あんな女達を踏み付けにしてやる事が出来る。自分が十五年もこき使はれて来たあんな女達を。

ゾエは、ミニオンが取り次いでくれと頼むので、奥様は今日は大變御機嫌が悪いのだが、と言ひながら出て行つた。彼は一度来た切りなので家の勝手が分らなかつた。コブラ織を張つた食堂の壁や、食器棚や、銀の器物などは彼を驚かした。彼は馴れ／＼しげに諸所の扉を開けてみたり、廣間や温室を覗いてみたり、もう一度玄關にも廻つてみたりなどした。その魂を奪ふばかりの贅澤品、絹や天絨、金を輝かせた調度の數が、次第に彼を感嘆させ胸を躍らせた。ゾエはまた彼を連れに降りて来て、化粧室なども見せませうと言つた。寢室に入つて、ミニオンは魂消てしまつた。彼はうつとりとなつて、我を忘れてしまつたのだつた。彼が知り抜いてゐるあのナナが、こゝでは神聖なナナが、彼を呆氣にとらせてしまつた。濫費や、召使の激しい交替や、殆んど瓦解に瀕してゐる家政状態にありながら、なほこの家に

は財寶が山をなして残つてゐた。それは實に負債を補うて餘りがあり、破産どころではなかつた。ミニオンはこの壯大なる建物の前に立つて、様々な大工事のことを思ひ浮べた。彼はマルセイユ附近で、大水道を見物したことがあつた。そこには大きな石橋が幾つも深淵を跨いでゐた。それは實に數百萬の富と、十年の勞力とを費した巨人の仕事であつた。又彼はシエルブルで、新しい築港の巨大な船渠や、日向に働いてゐる大勢の人夫や、岩石で海を埋立て、ゆく機械などを見た。その機械は城壁のやうに聳えてゐて、時々その上に勞働者が赤くぼんやりと見えてゐた。しかし、それらも今の彼には矮小なものと思はれた。それにもましてナナの家が彼を感動させたのだつた。彼はこのナナの作つたこの部屋に立つてゐると、祭日の夜、或る菓子屋が砂糖だけの材料で作つた莊嚴な御殿を見た時の尊敬の念をまた感じたのだつた。ナナの材料が違つてゐた。それは人の物笑ひになるやうな馬鹿げた行ひや彼女のなやかな裸體を少しばかり使つて出来てゐた。そしてその恥づべくしてつまらなく見えしかも實は極めて強力なものが、よく世界を動して、技師の發明した機械や、人夫も使はずに、たゞ一人で巴里を震駭させ、そこに數々の屍を横たへてこの富を築き上げてゐるのだつた。

「あゝ！ 何と云ふ恐ろしいことだ！」と、ミニオンは今

更自分の身の上に感謝しながら、我を忘れて呟いた。

ナナは、深い悲しみに沈んでゐた。最初は伯爵と侯爵の鉢合せも、陽氣と言つていゝほどの苛立たしい興奮で、彼女の心を揺つてゐたが、それも東の間で、半死の體で馬車に乗つて歸つて行つたあの老人と、彼女があんなに怒らせながら、その後ばつたり來なくなつたあの可哀さうな伯爵のことを考へると、彼女はまたしても物悲しい憂鬱に襲はれるのだつた。二週間ばかり前から姿を消してゐたサタンがロベール夫人にさん／＼辱まれた擧句、ラリボワジェルの治療院でもう死にかゝつてゐると聞いても、仕方がないと思ふだけだつた。せめてもう一度あの女を昇舞に行かうと思つて、馬車の支度をさせてゐると、ゾエが靜かに入つて来てお暇を頂きたいと言ひ出した。それを聞くと、ナナは急がつかりした。家族の一人を失ふやうな氣持がした。あゝ！ 一人になつて、それからどうなるのだらう？ 彼女は、どうかしてゾエを引止めようとした。ゾエは、彼女がつかりするのを見て、小氣味よく思つたが、やがて彼女を接吻して、私がかうして出て行くのは、別に奥様に對して氣を悪くしたからではなく、他に仕事のあることですから、仕方がありません、と言つて辯解した。それにしてもこの月は厭なことばかりが續いた。ナナはもう外出する氣にもなれないで、客間で身をもてあましてゐると、そ



こへラポルデットが上つて来た。彼は賣物に出てゐる素晴らしいリースのことを知らずに来たのだつたが、その話の間に、別に何の氣なしにジョルジュが死んだことを洩らした。ナナはぞつとして、

「坊やが！ 坊やが死んだつて！」と叫んだ。

彼女の眼は惹きつけられるやうに、あの薔薇色の斑點を絨毯の上を探した。それはもう踵に踏まれて消えてしまつてゐた。そんな事に頓着なく、ラポルデットは詳しい話をした。ジョルジュの死に方に就いては誰も確かなことを知らなかつた、あの傷口がまた破れたのだと言ふ者もあれば、フオンデットの池に身を投げて自殺を遂げたのだと言ふものもあつた。ナナはひとり繰り返した。

「死んだつて！ 死んだつて！」

そして、朝から悲しい思ひで胸のつかへてゐた彼女は、急に聲を立て、歎息した。するとまた氣が楽になつた。彼女が壓し潰されるやうに感じたのは、何か深い大きな果しもない悲しみであつた。ジョルジュのことで彼女が悲しんでゐるのを、ラポルデットが慰めようとする、彼女は片手で遮つて、途切れ／＼に口籠つた。

「いゝえ、ジョルジュだけのことでぢやないの。みんな、みんなだわ……ほんとに私は不仕合せ者よ……えゝ！ さう、分つてゐるわ！ みんなが私のことを、悪い女と言ふんで

せう……フオンデットであの子を失くしたお母さんや、今朝この扉口で喚めいて行つたあの人や、私のために身代限りをして零落れてしまつた人達や……いゝわ、私のことを精々精々言ふが、いゝわ、何とも言ふが、いゝわ！ あゝ！ 私はいくら離れてゐても、傍にゐるやうに何でも聞えるの、誰とも一緒に寝たとか、捲き上げて裸にしたとか、大勢の人を苦しめたとか、皆がそんなことを言つてゐるわ……」

彼女は涙に咽んで、もう言葉もなく、苦しさに長椅子に横になつて、羽根蒲團に顔を埋めてしまつた。身のまはりにはひし／＼とつめ寄せる不幸や、自分の手で作り上げた悲しみや、それらが熱い果しもない涙になつて、彼女を優しく顔はした。彼女の聲はまるで人に隠れて泣く小娘のやうに細つて行つた。

「あゝ！ 苦しいわ！ あゝ！ 苦しいわ！……もう耐らないわ、ほんとうに息がつまりさうだわ……あんまりひどいわ。誰一人分つてくれずに、みんなが私の敵になるんだもの。これにみんなの方が強いんだもの……そんなに私を責めたいといふ人達は、心に聞いて見て疾ましい所のない人ばかりかしら……いゝえ！ さうぢやないわ、いゝえ！ さうぢやないわ……」彼女は次第に憤りを感じて来た。彼女は立ち上つて、涙を拭いて、苛々しながら歩き廻つた。

「えゝ、さうよ！ 勝手に何でも言ふが、いゝわ。私の罪ぢやないんだから！ この私が、一體どこが悪いんでせう？ 私は自分のものは何でも人にやつて来たし、蠅一匹だつて殺しやしないのに……悪いのはあの人達よ、さうよ、あの人達だわ！……私は一遍だつて人に意地悪なんかした覚えはないのよ。自分達の方で勝手に私の裾にへばりついて置いて、今になつてお金が無くなつたからつて、私を騙したり、乞食のやうに手を出したり、もうこの世に望みがな」といつて蕩擻してみたりするんですもの……」

それからラポルデットの前に立ち止まつて、軽くその肩を叩いて言つた。

「さあ、あなたは御存じなんだから、ほんとのことを言つて頂戴……あの人達をあんなにしたのは私でせうか？ 寄つてたかつて見苦しいことを競争して考へ出したのは、あの人達ぢやなかつたのでせうか？ 私はあの人達が厭だつたのだわ！ 私は巻き込まれまいとして、何かにしがみついてゐたの、怖かつたんだもの……さうですとも！ あの人達はみんな私と結婚しようとしたのよ。どう？ まあ立派な考へだわ！ もし私が承知すれば、私は二十度も伯爵夫人や男爵夫人になれたの。でもね、私には分別があつたので、みんな斷つて来たわ……そしてあの人達を、罪や穢れから救つてやつたの！……あの人達は、窃盗や、人

殺しや、親殺しだつてしかなかつたんだわ。私が大言さへ言へばよかつたのよ。けれども私はそんなことは言はなかつたわ……ところで今日になつて、そのお禮がどうでせう……あのダグネだつてさうだわ。食ふや食はずで困つてゐるのを、この私が幾週間もたゞ置いてやつて、それから仕事も探してやり、その上に結婚の心配までしてやつたの。それなのに、昨日出會つて見ると、顔をそむけてしまふんだもの。えゝ、えゝ！ あんな豚には用事はないことよ！ 私は、あんな奴ほど汚くはないんだから！」

彼女はまた歩き初めた。そして卓子をひどく敵いて見せた。

「さうよ！ 何も彼も間違つてゐるんだわ！ 世の中が悪いんだわ。男は女にいろんなことを要求する癖に、悪いことは女に押しつけるのよ……ねえ、私はかう言つてもいいわ——私は男達と一緒にゐても、何にも嬉しいことはなかつたの。ほんとに、少しも嬉しいことなんかなかつたね。唯煩さいばかりだつたわ。いゝえ嘘ぢやないのよ！ あゝ、何のために私はあんなことをしてゐたのでせう！……あゝ、ほんとに、みんなが私を苦しめたのだわ！ 男達さへゐなかつたら、男たちが私をこんなにしなかつたら、私はきつと修道院に入つて、神様に祈つて暮らしたでせう。私は信心



深いんだから……さうよ！ どう考へたつて、たとへ男達がお金を失くしたり、身を亡したからつて、それやみんな自分達が悪いんだわ！ 何もこの私の知つたことぢやないわ！

「さうですとも。」と、ラポルデットもその氣になつて言つた。

ゾエがミニオンを連れて来た。ナナは笑顔をつくつて迎へた。もう泣くだけ泣いたので静かな氣持になつてゐた。ミニオンはまだ感動してゐて、しきりに彼女の屋敷を褒め立てた。けれども彼女は、もうこの住居には倦き／＼してゐるといふ様子を、隠さずに現してゐた。彼女は、今では他のことを考へてゐた。近いうちに、何もかも賣り拂つてしまはうと思つてゐたのだつた。ミニオンはこゝへ訪ねて来た口實として、老優ボスタの義捐興行の話をした。ボスタは中瘋に罹つて、眩暈椅子に釘づけになつてゐたのだつた。彼女は非常に同情して、棧敷を二つ買つてやつた。その時ゾエが馬車のお支度が出来ましたと知らせたので、彼女は帽子を取つておいでと命じた。そしてその紐を結びながら、サタンの身の上話をして、かう附け加へた。

「私、病院に行つて来ようと思ふの……誰もあの子のやうに私を愛してくれた人はないわ。さうよ！ 男には情がないと言ふけれど、それやほんとだわ！……私、もしかする

ともう會へないかも知れないけれど、兎に角頼んで會はせて貰つて一度接吻してやりたいの。」

ラポルデットとミニオンは微笑した。彼女も、もう悲しくなかつたので、同じやうに微笑した。この二人なら彼女は別に氣にしなかつた。彼等もそれを知つてゐた。そして二人は控へ目に黙つて、手袋の釦をはめ終る彼女の姿を感心して眺めてゐた。彼女は財寶が山と積まれた屋敷の中に、足許に斃れた人々を踏みつけて、唯一人で立つてゐた。骸骨に蔽はれた恐ろしい領土を持つてゐたといふあの古代の怪物のやうに、彼女は累々と積まれた觸摸の上にその兩足を置いてゐた。幾多の痛ましい悲劇が彼女を取り巻いてゐた。ブンドゥルは燃え上る焔の中に焼かれたし、フウカルモンは懊惱の果てに支那海に身を投げてしまつた。破産したシュタイネルはまた如才なく稼がねばならなくなつてゐるし、ラ・ファロアズは不甲斐ない生活に隠遁してしまつた。それからミラファ伯爵家の悲惨な瓦解と、昨日出獄したばかりのフキリッに見まもられてゐるジョルジュの蒼白な死骸、没落と死、彼女の仕事は終つた。場末の汚物から飛び立つた蠅は、社會を腐敗させる酵母を携へて、たゞその上にとまるだけでこれらの人々を毒した。これは善であり、正義であつた。彼女は彼女の仲間の、變人や放浪者のために復讐を遂げたのだつた。そして、倒れた犠牲の上に、彼

女の女性としての力が、たとへば戰場を照らす太陽のやうに、榮光に輝きながら立ち登つてゐた。彼女は美事な家畜のやうに何時も無意識で、自分のしてゐることも知らない相も變らぬ氣立の優しい娘であつた。健康で、快活で、彼女は肥り、脂ぎつてゐた。しかし、もう總てそんなことは何でもなかつた。その屋敷も彼女にとつては、あまりに小さな馬鹿らしいものであり、ぎつしり家具が詰つてゐるのも足手纏ひに思はれた。そしてこれがつまらなくなれば、もう次の事に取りかゝるより他に仕方はなかつた。だから彼女は何かもつと、素晴らしいことを空想してゐたのだつた。そして最後にサタンを接吻するために、彼女は着飾つて出て行つた。その姿はまだ男に觸れたことのないかのやうに、清淨であり、しつかりしてゐて、生々しい様子を示してゐた。

十四

突然ナナが姿を消した。今度は水鳥のやうに隠れてしまつて、どこか不思議な國へ行つてしまつたのだつた。出發の前に彼女は、屋敷も、家具も、寶石も、化粧道具から下着類まで何もかも掃き捨てるやうに賣つてしまつた。噂によればその五回にわたる賣上高は六十萬法を越えてゐたといふことである。彼女の姿が巴里で見られた最後は、一文

なしのポルドナアヴが、大膽にもやつたゲエテ座に於ける夢幻劇『メリュジイヌ』に出演したときであつた。ブリュリエールやフォンタンも彼女と一緒に演つてゐた。彼女の役はたゞ單に顔を見せるだけだつたが、それが本當に「呼物」の役で、沈黙した力強い仙女の彫刻的な三つの姿態を演るのだつた。その芝居が大成功を博してゐる最中に、突然ポルドナアヴが、或る朝巴里中に大きな廣告を出して、ナナを呼び戻さうとしてゐるのを見て、人々は初めて彼女がその前夜カイロに向つて出發したことを知つた。原因は支配人と一寸した口論をした爲めで、少しばかりの言葉の端が氣に喰はないといふのだつた。それも要するに、馬鹿にされて黙つてゐられない金のある女の氣紛れからのことだつた。それに、それは彼女の熱心な希望で、ずつと以前から土耳其へ行くことを空想してゐたのだつた。

數ヶ月が過ぎ去つた。人々は彼女のことを忘れてしまつてゐた。すると突然、また紳士淑女の間に彼女の名が口にされるやうになつた。そして、妙な噂が傳へられて行つた。一人々々が、まるで違つた不思議な消息を齎らした。彼女が土耳其の副王をまるめ込んで、宮殿の奥深くに二百人の奴隷を驅使して、ほんの一寸とした氣慰みに、その奴隷の首を切つてゐるとか、いや彼女はカイロの町で、ある黒奴に迷つて、放蕩三昧に耽つた擧句、肌着一枚さへないほど



零落れてゐるのだ、とかいふそんな噂が傳へられてから二週間ほど経つて、露西亞で確かに彼女に出會つたと言ふ人があつた。すると彼女が或る皇子の戀人になつたといふ嘘みたい話が傳はり、人々は彼女のダイヤモンドの噂するやうになつた。女達は皆直ぐに、この出所もはつきり分らない噂を本當に信じた。指環のことも、耳飾のことも、腕環や大きな頸飾や、さては指指ほどもある大きなダイヤモンドを中央につけた女王の冠の話などを。そんなに遠い國からでさへも、彼女は寶石を鑲めた偶像の不思議な輝きを放つてゐた。今では、遠い野蠻な國々で彼女の獲ち得た幸福を人々は空想を交へて羨み、眞面目に彼女の名を口にした。

七月の或る夕方の七時頃、フォブール・サン・トノレ街を馬車で通つてゐたリュシイは、近所の店へ何か註文に行つたカロリイヌ・エッケが歩いてゐるのに出會つた。リュシイはカロリイヌを呼びかけて、直ぐにかう言つた。

「御飯はおすみになつて？ 暇なの？……ぢや私と一緒にいらつしやいよ……ナナが歸つてゐるのよ。」

カロリイヌは急いで馬車に乗つた。リュシイは話つゞけた。

「ね、まあお聞きよ、ナナはね、私達がかうしてお喋りをしてゐる間に、もう死んでゐるかも知れないのよ。」

「死んでゐるかも知れないつて！ まあ！ 何處で？ どうしたの！」

とカロリイヌは驚いて叫んだ。

「グラン・トテルでよ……天然痘なの……まあ！ ほんとに夢のやうだわ！」

リュシイは駭者に急ぐやうに命じた。馬は歩を伸して、ロワイヤール街から並樹街を通つて行つた。リュシイは、ナナのことを、言葉もしどろもどろに息もつかずに話した。

「あなたには想像もつかないやうなことよ……ナナはね、露西亞から歸つて來たの、なぜだか知らないわ。皇子を欺したんでせう……そして、荷物は停車場に預けたまゝ、伯母さんの所へ行つたの。憶えてるでせう、あのお婆さんよ……そしたら丁度赤ん坊が天然痘にかゝつてゐたの。赤ちやんは翌日死んだんですつて、それからナナは、仕送りする筈になつてゐたのに實際は一文も送らなかつたといふことで、伯母さんと摺み合ひまでしたの……赤ちやんの死んだのもどうやらそんなことのためらしいわ。まるで、放つたらかされてゐて、誰も世話してやらなかつたのですからね……それでね、ナナは直ぐに或る宿屋へ越してしまつたの。それから丁度停車場に預けて置いた荷物のことを思ひ出した時にミニオンに出會つたのですつて……ところがとんだことに、ナナは悪寒がして、何だか吐きたいやうな氣

持になつたので、仕方がないからミニオンが何でも面倒を見るつて約束して、自分の家へ連れて行つたの。どう？

不思議な廻り合せね！ だけど、もつと美しい話があるのよ。ローズがナナの病氣を知つて、ナナが一人つきりであることを聞くと、すつかり憤慨してね泣きながらナナの看病をしに駆けつけたのですつて……あの二人がどんなに憎み合つてゐたか、あなたも憶えてるでせう。ほんとに、まるで仇同志だつたんですものね。ところがローズがね、

せめてナナを氣の利いたところで死なせてやりたいといふので、グラン・トテルに移らせたのよ。もう三晩になるわ。ナナはあすこで死んで行くのでせうよ……この話は皆ラポ

ルデットから聞いたの。で、私も會ひたくて……」

「さう、ぢや、一緒に行きませうよ。」とカロリイヌは興奮してリュシイの言葉を遮つた。

二人は到着した。駭者は、馬車や歩行者の混雑してゐる並樹街の中に馬を止めねばならなかつた。この日議會は宣戰の布告を可決したのだつた。群衆はあらゆる道路から集つて來て、歩道を流れて歩き、車道をも埋めてしまつた。マドレーヌの方角では、太陽が雲を血のやうに眞紅に色彩りながら、今沈んで行くところであつた。その物凄ひ火災のやうな反射が、高い家々の窓を燃え立たせてゐた。黄昏が押し迫つて來て、重苦しい憂鬱な時であつた。街はもう薄闇

の中に沈んで瓦斯の明るい焰はまだ點つてゐなかつた。そして動いて行く群衆の中に、遠くからのどよめきが段々と大きくなりその蒼白い顔には眼ばかりが輝いてゐた。そして大きな苦惱の溜息と、あたりに漲り渡つた驚きとが、人の頭を残らずぼんやりさせてしまつた。

「あら、ミニオンがゐるわ、きつと何か知らせてくれるでせうよ。」とリュシイが言つた。

ミニオンは苛々して、グラン・トテルの廣い玄關に立つて群衆を眺めてゐた。リュシイが問ひかけるといきなり彼は痲癩を起して叫んだ。

「知つたことかい！ ローズは二階へ上つたきり、もう二日も降りて來ないんだ……馬鹿な奴さ、自分の體を危険な目に遭はせるなんて！ 傳染つて、顔に孔でも出來たら、おとなしくなるだらうよ！ その方がいゝがね。」

ローズの美しさが失はれるかも知れない、といふ考へがミニオンを苛々させてゐたのである。彼はもうすつかりナナを見離してゐて、女達の愚かな犠牲的精神なんかといふものは少しも諒解することが出來なかつた。しかしフォシュリイが並樹街を横切つて、そこへやつて來て心配さうに、何か變つたことはないかと訊ねると、二人は互に元氣をつけ合つて、親しい口を利いた。

「相變らずさ。君は上へ行つて、あれを連れて降りて來て



くれないか。」とミニョンが言った。

「おや、おや！ 君は親切だね！」と記者は答へた。「なぜ自分で行かないんだい！」

その時リュシイが部屋の番號を訊ねたので、二人は彼女にローズが降りて来るやうに、もし降りて来ないのならこちらにも考へがあるんだと、傳へてくれと頼んだ。しかしリュシイとカロリーヌは、直ぐには上つて行かなかつた。彼女達は、フォンタンがポケットに手を入れて、群衆が澤山集るので喜んでぶら／＼歩いてゐるのを見付けたのである。彼は、ナナが病気で階上にあるのを聞くと、悲しさうな風を装つてかう言つた。

「可哀さうに！……握手でもして来てやらうよ……病氣は何？」

「天然痘さ」とミニョンが答へた。

フォンタンは、もう中庭の方へ一步踏み出してゐたが、この言葉を聞くと引返して、顛へ上つてたゞかう呟いた。

「そいつは、いけねえや！」

天然痘が珍らしいわけではなかつた。フォンタンは、五歳の時に、この病氣に罹りかけたことがあつた。ミニョンは自分の姪の一人が、この病氣で死んだ話をした。フォンシュリイに至つては、鼻の附根に残つてゐる三つのあばたを見せて、自分の経験を話すことさへ出来た。そしてミニョン

が、一度天然痘に罹つた者は二度とこの病氣になることはないといふ口實のもとに、フォンシュリイを押しやると、彼は激しくこの説に反對して、獸醫の例などを惹いた。その時リュシイとカロリーヌとは、益々増加して来る群衆に驚いて、彼等の話を遮つた。

「御覽よ！ 御覽よ！ 大變な人だわ。」

夜が擴つて行つた。遠くの方で、瓦斯の灯が一つ／＼點つて行つた。窓から面白さうに群衆を眺めてゐる者もあつた。並樹の下の群衆は刻々に増加して、マドレーヌからバステューに互つて、大きな流れとなつた。その中を馬車はのろ／＼と走つてゐた。集團になりたい欲求に驅られて集まり、同じ情熱を胸に抱き、まだ黙つて同じ場所に足踏みをしてゐるこの密集から、唸り聲が聞え初めた。その時一つの大きな動きが群衆を退かせ、この叫喚の眞只中に、道を除ける群衆の間を、帽子を被り白い作業服を着た一群の人々が現はれて、鐵砧を打つ鐵鎚のやうな調子で、叫びを發した。

「伯林へ！ 伯林へ！ 伯林へ！」

群衆は陰鬱な、疑ひ深い氣持を懷き、しかも軍樂隊の通り過ぎて行く時のやうな英雄的な光景に動かされて、その方を眺めてゐた。

「さうだ、さうだ、口が裂けるほど怒鳴るがい！」とミニ

ニョンは急に考へ深さうに呟いた。

しかしフォンタンは、この光景を非常に美しいと思つた。彼は自分も群衆に加はりたいと言つた。敵軍が國境に迫れば、全市民は起つて、祖國を守らねばならない。そこで彼は、アウステルリッツに於けるポナバルトの姿勢をして見せた。

「さあ、私達と一緒にいらつしやいよ。」とリュシイが彼に言つた。

「いゝえ！ 行きません！ 病氣になると大變ですから！」と、彼は答へた。

グラン・ホテルの前のベンチに腰を下して、一人の男がハンカチで顔を隠してゐた。フォンシュリイはこゝへ来たときに直ぐ、それをミニョンに眼配せした。男はまだ相變らずそこにゐた。さうだ、その男は相變らずそこを離れずゐたのだ。新聞記者は、二人の女を引き止めて、その男を、彼女達に指し示した。男が頭を上げた時、彼女達は、その顔を見て思はずも驚きの聲を擧げた。それは、ミッファ伯爵であつた。伯爵は眼を上げて、或る窓をちつと見つめてゐた。

「あの男は、今朝から、あすこにゐるんだよ。」とミニョンが言つた。「僕の見つけたのが六時だつた。それからちつとも動かないんだ……ラポルデットからナナのことを聞くと

直ぐにやつて来て、あゝして顔にハンカチを當てゝゐるんだ……半時間毎にこゝまで来て、上にゐるナナの容態がいかがどうか訊ねて、それからまたあすこへ歸つて、坐り込むのだ……いやどうもあの部屋は不健康だ、人を愛するのめかうなれば苦しいことさ、誰も死なうとは思はないからね。」

伯爵は、眼を擧げたが、自分の周圍で何が起つてゐるのかさへ、分らない様子だつた。彼は宣戰布告も知らないのに違ひない。彼は群衆のゐるのを感じもしなければ、その物音も聞えなかつたのだ。

「おや、あの人を御覽。」と、フォンシュリイが言つた。

さう言へば、伯爵はベンチから離れて、高い扉口の下を入らうとするところだつた。しかし、門番は伯爵を見覚えしてしまつてゐたので、彼の問を待つまでもなく、ぶつきら棒な調子で言つた。

「且那樣、あの方はたつた今しがたお亡くなりになりましたよ。」

ナナが死んだ！ それは皆に大きな衝動を與へた。ミッファは一言も言はずに、ハンカチで顔を隠してベンチへ歸つて行つた。他の者達はお互に嘆聲を漏らし合つた。だが彼等の言葉は、叫びながら傍を通つて行く新しい群衆に遮られた。



「伯林へ！ 伯林へ！ 伯林へ！」  
 ナナが死んだ！ 本當にあんな美しい女が！ ミニオンは、ほつとした様子で息をついた。かうなればもうローズも降りて来るだらう。或るうすら寒い氣持が、そのあたりに漂つた。悲劇的な役目を空想してゐたフォンタンは、口の端を引き締め、眼をつり上げて、悲痛な表情を浮べてゐた。フォシユリイは、すつかり感動して、つまらない新聞記者らしい大袈裟な様子をしながら、神經質に葉巻を噛んでゐた。二人の女は、まだ悲嘆の言葉を交はしてゐた。リュシイが最後にナナを見たのは、ゲエテ座でのことであつた。ブランシユも同様にナナを見たのは、『メリュジイヌ』に出てゐたときのことである。水晶窟の奥に彼女が現はれた時の驚き！ 男達は、この時のナナを、よく覚えてゐた。フォンタンは、ココロコ皇子に扮してゐた。その時のことを回想すると、限りがなかつた。水晶窟の奥に現はれたナナの豊満な美しさは、何といふ素敵なものであつたことか！ ナナは一言も臺詞を言はなかつた。原作者自身が、邪魔になるといふので、ナナには臺詞を言はせなかつた。全く、彼女は一言も喋らなかつたのだ。そしてその方が却つて素晴らしかつた。彼女はたゞ姿を観衆に見せるだけであつた。ナナのやうな美しい肩や足や體つき（からだづき）の姿態は二度と再び見ることが出来ないだらう！ その彼女が死んだなんて、

何といふ不思議なことであらう！ あの時、彼女は肌着の上（かみ）に、やつと腹と尻とを蔽（おほ）へるだけの金の腰帯をしてゐた。彼女の周囲には、硝子を張りつめた洞窟が輝いてゐた。ダイヤモンドの瀑布と、白い眞珠の輪とが、圓天井の鐘乳石の間を流れてゐた。そして、明るい電燈の光を通した泉の水の透明な中で、彼女の皮膚や、髪の毛が燃えるやうに輝いて、まるで太陽のやうに美しかつた。神様のやうに水晶窟の中で輝いてゐたそのまゝのナナの姿を、巴里の人々は何時までも思ひ出すだらう。こんな悲惨な境遇の中であの美しいナナを死なせることは、あまりに情けないことではないか！ この上の部屋に横たはつてゐるナナの今の姿は、さぞ美しいことであらう。  
 「惜しい者がなくなつた！」ミニオンは、あれ程の立派なものが失はれて行くのを、残念がる男のやうに、淋し氣な聲でさう言つた。  
 彼がそれでもそこを眺めまはしてリュシイとカロリイヌとが上へ登つて行つたかどうかを見た。確かに、二人は行つてしまつてゐた。彼女は好奇心に充ちてゐたのだ。丁度その時ブランシユが、息を切らし、歩道を塞いでゐる群衆にぶつゝかりながら、漸くやつて來た。そして、ナナの死んだことを聞くと、驚きの叫び聲を擧げて、スカート（スカート）の音を騒々しくさせながら、階段の方へ急いで行つた、ミニヨ

ンは、その後を追ひながら、叫んだ。  
 「ローズに、私が待つてゐると言つて下さい……直ぐに來いつてね。」  
 「傳染の恐れは、初めにあるのか、それとも後にあるのかよく分らないんだ。」フォンタンがフォシユリイに説明した。  
 「僕の友達の醫者は、死の直後が一番危険だ、と言つてゐたがね……つまり毒氣が出るんだね……しかし、かう突然に死んだのは、全く残念だよ。最後の握手をして來たかつたんだがな。」  
 「今となつては仕方がないさ。」と、記者は言つた。  
 「さうだ、仕方がない。」と他の二人が繰り返した。  
 群衆は益々殖えて來た。商店の光と瓦斯の灯の中に、二つの人道を流れてゆく帽子の群が見えた。その時分には、次から次へと、群衆の間には熱狂が傳はつて行つて、勞働服を來た連中の通りすぎた後には人々が争つて道路に溢れ出て、路の眞中で絶えずもみ合つてゐた。そして激しく興奮した皆の胸から叫び聲（よびこゑ）が迸り出た。  
 「伯林へ！ 伯林へ！ 伯林へ！」  
 五階の部屋代は一日十二法だつた。ローズは、どうせ苦しむのなら贅澤の必要はないと思つたので、美しい立派な部屋は求めなかつたが、氣持のいいところが欲しかつた。大きな花模様を書いたルキ十三世式の麻布を張つた室には、

黒い木の葉模様のある赤い絨毯と、どこのホテルにでもあるやうなマホガニーの調度が備へられてゐた。重苦しい沈黙が部屋を支配してゐて、それが時々囁き聲によつて中斷された。その時、廊下の方で人の聲がした。  
 「確かに迷つちまつたんだわ。ボーイは右へ曲れつて言つただけど……まるで兵營だわね。」  
 「まあ、お待ちよ……一寸見てみるから……四百一號室、四百一號室……」  
 「まあ、こつちだわ……四百五、四百三……こつちにある筈だわ……それ、やつと四百一だ……いらつしやいな、しつ！ しつ！」  
 聲が止んだ。誰かゝ咳をしたが、また暫らくしんとなつた。と、扉が靜かに開いて、リュシイの後にカロリイヌとブランシユが従つて入つて來た。女達は立ち止つた。部屋の中には既に五人の女がゐた。ガガは室内に唯一つしかない赤い天鵝絨（びんぼん）の長椅子に、深々と横臥してゐた。暖爐の前では、シモンヌとクラリスとが立つて、椅子に腰かけてゐるレア・ド・オルンと話してゐた。一方扉の左側にある寢臺の前には、ローズ・ミニオンが、木の棺の傍に立つて、カーテンの影にかくれてゐる死體をちつと見つめてゐた。どの女も皆、人を訪問する時の貴婦人のやうに、帽子を被り手袋をはめてゐた。たゞ、ローズだけが手袋もはめず帽子も被



らず、三晩の徹夜の看護に疲れて蒼ざめ、この突然の死を前にしてぼんやりとし、悲しみに包まれて立つてゐた。簾の隅にある笠を覆せたランプが、ガガの顔を生々とした光で照らしてゐた。

「まあ、可哀さうに！」と、リュシイはローズの手を握りしめながら言った。「ナナにたつた一言さやうならを言ひたかつた。」

それから、彼女はナナを見ようとして振り返つた。ランプが遠すぎたけれども、彼女は強ひてナナの傍に寄つて行かうとはしなかつた。寢臺の上には、灰色の體が横になつてゐた。その赤い髪の毛だけが、顔と思はれる鉛色の部分と共に見分けられるばかりであつた。リュシイは言つた。

「私はナナをゲエテ座のあの水晶窟で見たきりよ……」

ローズは、それを聞くと我に返つて一寸微笑んで、繰り返した。

「こんなに變つてしまつたわ、こんなに……」

そして、彼女は體も動かさず聲も出さずに、再びちつとナナの死體を見つめた。三人の女は、煖爐の前の女達と一緒にになつた。シモンヌとクラリスとは、故人のダイヤモンドのことを低い聲で話してゐた。一體そのダイヤモンドと言ふのは、本當にあつたんだらうか？ 誰もそれを見た者はなかつた。或は嘘だつたのかも知れない。しかし、レア・

ド・オルンの知人のうちには、ダイヤモンドの事を知つてゐる人がゐた。それにナナが露西亞から持つて歸つたものは、そればかりぢやないの、刺繍をした布や、貴重な骨董品や、黄金製の卓子用道具から數々の調度に至るまで、さうよ、全部で、行李が五十二、それに大きな箱が幾つかあつて、貨車三臺で運んで来た程だつたのよ、と言つた。その荷物は皆、停車場に置いてあつた。荷を解く暇さへなく死んでしまふなんて！ それに荷物と一緒に、百萬法ほどのお金を持つてゐるといふことだつた。リュシイは、誰が遺棄を繼ぐのかと訊いた。遠い親類、確かにあの伯母さんだらう。伯母さんにとっては思ひもかけぬ福の神だ。併し伯母さんはまだ何も知らなかつた。病人は自分の赤ん坊を死なせてしまつたことに恨みを持つてゐたので、伯母さんには知らせないやうにと、言ひ張つてゐた。そして一同はあの赤ん坊を競馬場で見かけたときのことを思ひ出して、不憫に思つた。病氣勝ちで、やせた悲しげな顔をしてゐたあの子供、そして、たうとう育たないでしまつたあの赤ん坊。

「きつと土の下で、生きてるときよりは幸福にしてゐるでせうよ。」と、ブランシュが言つた。

「さうですとも、ナナだつてさうよ。生きてるつてことは、そんなにいいことぢやないわ。」

嚴かな空氣に包まれてゐる部屋の中で、暗い氣持が彼女達の心にまで沁み込んで来た。彼女達は、何だか恐ろしくなつた。こんなところでこんな長話をしてゐるなんて、馬鹿氣なことだつた。しかし一寸覗いて見たい氣持から、彼女達は絨毯の上に釘づけにされたやうになつてゐた。非常に蒸し暑かつた。ランプが、部屋中を包んでゐるしめつぽい薄暗がりの中に月のやうに天井に懸つてゐた。寢臺の下に置いてある皿からは、石炭酸の氣の抜けた臭ひが發散した。そして時々、吐息が、街路に向つて開かれた窓のカーテンを揺がした。戸外からは、相變らず低い唸り聲が聞えて来た。

「随分苦しんで？」踊り子のやうな笑みを湛へた三人の裸の女神の描かれた柱時計の前に立つてゐたリュシイが、さう訊ねた。

ガガは眼を覺ましたやうだつた。

「え、さうなのよ。……臨終のときには私も傍にゐたけれど、あんまりいゝものぢやないわ……ナナはひどく身顛ひをしてね……」

しかし、彼女がその説明を終らないうちに叫び聲が起つて来た。

「伯林へ！ 伯林へ！ 伯林へ！」

息詰るやうな思ひをしてゐたリュシイは、窓を大きく押し

開いて、窓際に眩をついた。戸外はよく晴れて、星空から新鮮なすがすがしい空氣が下りて来た。向うの窓には灯がついてゐて、瓦斯の光が看板の金文字の上に踊つてゐた。下の方では提灯と瓦斯の焰の輝き、大きく動揺してゐる暗闇の中で、馬車の混雑と共に、歩道と車道の別なく、群衆の流れが激流のやうに流れて行くのが見えた。大聲で話しながら来た一群は炬火を持つてゐた。火の入り交つて輝やいてゐる間に、赤い灯影が、マドレヌの方から射つて来て、赤々とした光の流れを、遠く人々の頭の上に乗せて照らしてゐた。リュシイは、ブランシュとカロリヌとを呼んで、我を忘れて叫んだ。

「一寸いらつしやいな……この窓からよく見えてよ。」

三人とも面白さうに、窓から體を乗り出して戸外を見た。木が邪魔になつて、時々炬火は葉影に見えなくなつた。彼女達は下の人々を見ようと努力した。しかし、露臺の突出部のために玄關は見えなかつた。それで彼女達には、ハンカチで顔をかくして、陰氣な塊のやうにベンチの上に身を投げかけてゐるミリア・伯爵だけしか見られなかつた。一臺の馬車が来て停つた。リュシイにはマリア・ブロンだといふことが分つた。この女も亦報らせを聞いて急いで駆けつけたのである。だが彼女は一人ではなかつた。彼女の後から大きな男が馬車を降りた。



「シユタイネルの泥棒だわ。」とカロリイヌが言った。「まだ彼奴はケルンへやられないんだわね! 彼奴が入つて来るときの面を見てやりませうよ。」

彼女達は後ろを振り向いた。しかし、十分程経つてからマリヤ・ブロンが二度も階段を間違へてやつと現はれた時には、彼女一人だつた。リュシイが驚いて訊ねると、

「あの人! まああなた、あの人がかままで上つて来るとお思ひになつて……玄關まで私のお伴をして来ただけでも、よつほど親切な方よ……そんな男達が一打ばかりも集つて階下で煙草を喫つてるわ。」

實際そんな男達は、皆階下にゐた。街路の騒ぎを一目見ようと思つてぶら／＼とやつて来た彼等は、お互に名を呼び合つて、可哀さうな女の死んだ悔みを述べてゐた。それから彼等は政治や戦争の作戦などに就いて話した。ポルドナアヴやダグネやラボルデットやプリユリエールやまだ他にも数人の人々がこの群に加はつてゐた。彼等は、フォンタンが、伯林を五日で陥落させるといふ戦術を説いてゐるのに耳を傾けてゐた。

一方ではマリヤ・ブロンが、寢臺の前に立つて、悲しげに皆と同じやうに呟いた。

「可哀さうに……私が最後に見たのは、ゲエテ座のあの水晶窟の……」

「こんなに變つちまつたわ……こんなに……」ローズは身につまされるやうな切ない微笑を浮べて繰り返した。

二人の女がまた到着した。タタン・ネネとルキズ・ヴィオレヌだつた。彼女達は、ボーイからボーイへと訊ねまはつて、約二十分間も格蘭・ホテルの中をうろ／＼探し、戦争の恐慌と街路の騒ぎのために巴里から去らうと狼狽してゐる旅客達と一緒に、三十階以上を上つたり降りたりしたのだつた。だから彼女等はすつかり疲れて、部屋に入ると、死人のことなどはそつちのけにして、いきなり、椅子に腰をおろしてしまつた。丁度その時、隣室で騒ぎが起つた。荒々しい物を碎くやうな聲を立てながら、トランクをころがしたり、道具類をぶついたりする音が聞えた。それは埃太利人の若夫婦だつた。ガガの語るところによれば、彼等はナナの苦しんでゐる時に、追ひかけつこをして遊んでゐたといふことだつた。扉一重を隔てたよけのことだから、捕へた時に笑つたり、接吻したりするのがよく聞えたと言つた。

「さあ歸りませう。私達がゐるからといつて、死んだ人が生き返るわけではなし……行かない、シモンヌ?」とクラリスが言つた。

皆は、體を動かさずに、ちらりと寢臺の方を見た。そして歸る用意をして、スカートを軽く叩いた。リュシイはまた

たつた一人離れて、窓際に膝をついた。或る淋しさが、少しづつ、恰もあの群集の唸り聲の中から、底知れぬ憂鬱が立ちのぼつて来るかのやうに、彼女の咽喉を締めつけた。炬火は火の子を上げながら、なほ通り過ぎてゐた。遠くの方では、夜、屠所に牽かれて行く羊の群のやうに、群衆が闇の中に並んで蠢めいてゐた。この波のやうに逆巻き、混乱し、眩めくばかりの群衆の中から、來らんとする虐殺の恐怖と、悲痛な感じが發散してゐた。彼等は逆上してゐた。彼等は、自分達の情熱に陶酔して叫び聲を擧げ、地平線の彼方の黒い壁の背後にゐる見知らぬ者に飛びかゝらうとしてゐた。

「伯林へ! 伯林へ! 伯林へ!」  
リュシイは向きを變へて、窓に背を凭せて、蒼い顔をしながら言つた。

「あゝ、私達はどうなるのでせう?」  
女達は頭を振つた。彼女等は、眞面目な顔付をして、この出来事を心配してゐた。

「私は、明後日、倫敦へ行くわ……」とカロリイヌ・エッケが落着いて言つた。「お母さんは、もうあちらへ行つて、私の宿をとつてゐるのよ……私、巴里で殺されるのは本當に厭ですもの。」

用心深いカロリイヌの母は、カロリイヌの財産を、全部

外國に移させて置いた。戦争が起きればどんなことになるか、誰にも分らない。しかしマリヤ・ブロンはそれに腹を立てた。彼女は愛國者で、自分が従軍してもいゝとさへ言つた。

「まあ、臆病な人ね!……さうですとも、もし私が召集されたら、男装して、普魯西人の助平野郎の横腹に、鐵砲を打ち込んでやるわ……そして、すつかりやつ／＼けてしまつた後は?」と言へば、私達は綺麗な體といふ資本があるんだからね!」

ブランシュ・ド・シヴリイはすつかり怒つてゐた。

「そんなに普魯西人の悪口をいふものぢやなくつてよ!……普魯西人だつて普通の人間ぢやないの。それに、佛蘭西人のやうに年中女のお尻ばかり追ひ廻しちやゐないんですからね……私と一緒にゐた可愛い普魯西人は放逐されてしまつたわ。金があつて、優しく、人に悪いことなんかする青年ではなかつたのだけど。本當にひどいわ。私もがつかりしてしまつた……私を馬鹿にする人があつたら、獨逸へあの人に會ひ行くわ!」

彼女達が激しく口論してゐる間に、ガガは悲しげな聲で呟いた。

「何もかもお終ひだわ。私には運がないのね……ほんの一週間前にジュヴィジイの家を買つたばかりなのに。あゝ、私



はどんなに苦しい思ひをしてゐる事でせう！ リリが助け  
てくれる筈だったのだけれど……戦争が始まつて、普魯西  
人が攻めて来れば何もかも焼いてしまふでせう……私達の  
やうな年で、もう一度始めからやり直すなんてことは、と  
ても出来ないわ。」

「ふん！ 私は何とも思つてゐやしないわ。何とかなるで  
せうよ。」と、クラリスは言つた。

「それはさうよ。」とシモンヌが傍から附け加へて言つた。  
「面白いことになりさうだ……案外何とかなつて行くもの  
よ。」

そして微笑を浮べて自分の考へを言ひ終つた。タタン・ネ  
ネとルキズ・ヴィオレヌはそれに賛成した。タタンは、軍  
人と散々滅茶苦茶遊びをしたと言つた。あの人のいゝ軍人  
達は、さぞ女と大ふざけをしたことだらう。話の聲があま  
り大きくなつたので、相變らず棺の側にゐたローズ・ミニ  
ヨンが、軽くしつと言つて皆を黙らせた。話に夢中になつ  
てゐた女達は、死人の方を斜めに見て、まるで黙つてくれ  
といふ頼みがカーテンの蔭から聞えたかのやうに、ぞつと  
身を顫はせた。そして、この突然の重苦しい沈黙、しんと  
した静けさの中に、彼女等は、間近に横たはつてゐる硬ば  
つた死體を感じた。その時、群衆の叫びがどつと起つて來  
た。

「伯林へ！ 伯林へ！ 伯林へ！」

しかし間もなく、彼女等はまた注意を忘れて、喋り始め  
た。ルキ・フリッブ王時代の昔の大臣連が集つて、よく警句  
を飛ばしたりする政治家のサロンを持つてゐた。レア・ド・  
オルンは低い聲で、肩を聳かして言つた。

「戦争なんて、何といふ困つたことをするのだらう！ 血  
を流したりして、なんて馬鹿氣たことでせう！」

すると直ぐに、リュシイは帝國を擁護し始めた。彼女は或  
る王子と寝たことがあつた。だからこれは彼女にとつて家  
庭的な問題だつた。

「放つておいて頂戴。私達は、これ以上、侮辱されたくな  
いの。こんどの戦争は、佛蘭西の名譽のためなのよ……ね  
え、私はあの王子のことで、こんなにいふのぢやなくつて  
よ。彼奴は強慾な奴だわ。夜寝る時に金貨を靴の中に隠し  
たり、ベジグをする時にお金の代りに豆を使つたりするん  
ですもの。何故つて、何時か私が、賭金に飛びつくやうな  
悪戯をしたからなのよ……でも、そんなことがあつたから  
つて、私は正確な判断を誤るやうなことはないことよ。陛  
下のなさることは正しいわ。」

レアは、優越を感じたやうな様子で頭を振つて、名士達  
の意見の受け賣りをした。そして聲を高めて、  
「もう、お終ひよ。ティユルリイでは、皆、氣狂ひのやうに

なつてゐるわ。昨日のうちにでも、佛蘭西からあの人達を  
追放してしまへばよかつたのに……」

皆は激しくレアの言葉を遮つた。彼女が皇帝に向つてこ  
んなに怒つてゐるのは、一體どうしたことなのだらう？  
人々は幸福ではなかつたのだらうか？ 物事はうまく運ん  
でゐないのだらうか？ 巴里がこんな賑やかな面白いこ  
とは、二度とないだらう。

ガガは我に返つて、腹を立てた。

「お黙んなさい。馬鹿なことだわ。自分で自分の言つてゐ  
ることが分らないんでせう……私はルキ・フリッブのこと  
を知つてゐるわ。ほんとに怒つ張りなひどい時代だつたわ。  
それから間もなく、一八四八年の二月革命が起つたの。共  
和國なんてくだらないものだわ。二月革命の後には、今か  
うしてお話してゐるこの私も、飢ゑて死にさうになつたの  
ですよ！……もしあなた方があんなことをよく御存じだつ  
たら、陛下の前に跪つて感謝なさるでせうに。陛下は私  
達の親ですわ……本當に……」

人々は、彼女をなだめなければならなかつた。彼女は、  
宗教的な興奮を以つて再び始めた。

「神様、陛下がお勝ち遊ばされますやうに。私達のために  
帝國をお護り下さいまし。」

皆はこの祈りを繰り返した。ブランシユは、皇帝のため

に、大蠟燭を灯して祈つたことがあると言つた。カロリイ  
ヌは、皇帝に軽い愛を感じて、皇帝の通る道を二ヶ月も缺  
かさずに散歩して見たが、結局氣をひくことが出来なかつ  
たと言つた。他の女達も共和主義者を攻撃して、ナポレオ  
ン三世が敵を征服して人の満足してゐる中で平和に君臨し  
てくれるやうに、共和主義者を戦線に於て絶滅してしまふ  
やうに話し合つた。

「あのビスマルクつて奴。本當に悪黨だわ。」とマリア・ブ  
ロンが言つた。

「もし私がビスマルクを知つてゐたら、彼奴のコップの中  
に、毒藥を入れてやるだけけれども。」と、シモンヌは叫ん  
だ。

しかし、ブランシユは、常に、普魯西人放逐のことを根に  
もつてゐたので、ビスマルクを擁護しようとした。ビスマ  
ルクだつて、恐らく悪い男ではないのだらう！ 誰だつて  
自分の仕事といふものを持つてゐるのだ。そして、彼女は  
附け加へた。

「ビスマルクつて人は女が好きよ。」

「それが、私達に何の関係があつて？」と、クラリスが言  
つた。「私達は、あんな奴に好いてもらひたくなんかない  
わ。」

「あんな男は、何時でも有り餘るほどゐるわ。あんな厭な



奴のことをぐづぐづ言つてゐないで、黙つてゐることにしませうよ。」と、ルキズ・ヴィオレヌが眞面目な調子で言つた。

口論はなほ續いた。ビスマルクは、完膚なきまでにやつつけられ、女達は、ナポレオン黨の熱情を以つて、小つびどくやつつけた。タタン・ネネは、それを聞きながら叫んだ。

「ビスマルク！ 私達はすつかりビスマルクに腹を立て、しまつたわね……私、腹の底から憎んでやるわ！……ビスマルクつて、どんな奴だか知らないけれど……でも、世間の人をすつかり知るなんてことは出来やしないわ。」

「そんなことはどうでもいいわ。」とレア・ド・オルンが話を結んだ。「ビスマルクは屹度私達を酷い目に遭はせるんだわ。」

彼女は、それ以上續けることが出来なかつた。他の女達は皆彼女に食つてかゝつた。え、なに？ 酷い目に遭はせるつて？ 彼女等こそビスマルクを酷い目に遭はせて自分達のもとへ引き立てたいと思つてゐたのだ。あんたのやうな非國民は、お黙りなさい！

「靜かに！」あまりの騒がしさに氣を悪くしたローズ・ミニオンが、堪へかねて言つた。

死體の冷かさが再び彼女等を捉へた。彼女等は、ぼんや

りした恐怖を抱き、死人の方を向いて、ぎこちない様子で一時に話し聲をやめた。街路では、引き裂くやうな、嘎れ聲が通り過ぎて行つた。

「伯林へ！ 伯林へ！ 伯林へ！」

丁度彼女等が部屋を去らうと決心した時に、廊下の方から呼び聲が聞えて來た。

「ローズ！ ローズ！」

ガガは驚いて扉を開け、しばらく姿を隠してゐたが、直ぐに歸つて來て言つた。

「ねえ、向うの方にゐるのは、フォシュリイよ……こゝへは來たくないんですつて。皆が死んだ人のすぐ傍にゐるので、すつかり驚いてゐるのよ。」

ミニオンはたうとう新聞記者を無理に階上へあがらせた。リュシイは相變らず窓際に寄りかゝつてゐた。彼女は、男達が歩道から、上を見上げて、彼女に大きく合圖するのを認めた。ミニオンは、怒つて男達に向つて握り拳を差し出した。シュタイネルや、フォンタンや、ボルドナアツや、その他の連中は、懸念と非難の様子を現はして、兩手を擴げた。ダグネだけは、かゝり合はないやうに手を後に廻して、煙草をふかしてゐた。

「嘘ぢやなくつてよ。」と窓を開け放つたまゝでリュシイが言つた。「私、あなた達を下へ降りさせると、あの人達に約

束したのよ……皆、私達を呼んでゐるのよ。」

ローズはやつとの思ひで、棺の傍を離れて呟いた。

「行くわ、行くわ、もうナナは私に用もないでせうから……尼さんと呼んで來ませうよ。」

彼女は帽子や肩掛を捜しまはつたが、見つけることが出来なかつた。そして、機械的に、化粧臺で洗面器に水を満たして、手と顔を洗ひながら續けた。

「何故か知らないが、がつかりしてしまつたわ……私達二人は、そんなに仲がよかつたわけではなかつただけだ。本當に私、馬鹿だわ……いろ／＼思ひ出すと、私も死にたくなつてしまふの……あゝ、さうだ、いゝ空氣を吸つてみたいわ。」

死體の臭氣が部屋を充たし初めてゐた。長い間氣にかけないでゐたが、いよく堪らなくなつて來た。

「さあ、皆行きませう。體によくはないわ。」とガガは繰り返した。

彼女等は寢臺の方を一寸見て、元氣よく出て行つた。しかし、リュシイとブランシュとカロリイヌとがまだ残つてゐた。ローズは部屋の跡始末をするために、もう一度最後にあたりを見廻した。彼女は窓にかゝつてゐるカーテンをひいた。それから、ランプでは相應しくないから、蠟燭の方がいゝと思つた。そして燧燭の傍の銅の燭臺に火を點けて、

それを死體の傍の卓子デスクに置いた。明るい光がばつと死人の顔を照らし出した。人々は恐怖を感じて、身を顫はせて部屋を出て行つてしまつた。

「あゝ、ナナがこんなに變つてしまつたわ、こんなに變つてしまつたわ。」とローズ・ミニオンは、最後まで残つて、さう呟いてゐた。

彼女は部屋を出て、扉を閉めた。ナナは顔を仰向けにし、蠟燭の光に照らされて、唯一人残された。それはクッションの上に投げ捨てられた腐肉と、液體と、血潮との堆積した墓場のやうであつた。天然痘の小さな膿疱が隙間もなく顔中を埋めてゐた。そして肌の色は褪せ、頬は落ち窪んで、泥のやうな惨めな顔色をしたナナの姿には、どこを探しても昔日の面影はなく、形は崩れて、まるで土の上に蠟燭が生えてゐるやうだつた。左の眼は化膿して、つぶれてしまつてゐた。右の眼は、半ば開いて、黒い腐つた穴のやうに窪んでゐた。鼻からは、まだ膿汁が出てゐた。赤味が、つた膿疱は、頬から物凄く笑みを浮べて、ひきつゝゐる口の方までを覆つてゐた。そして、この死の恐ろしい怪奇な顔の上を、あの美しい髪が、太陽のやうな艶々しさを今も失はずに、金色の小川のやうになつて流れてゐた。ヴェニヌの姿は破壊されてゐた。それは恰も抑壓されて、それを忍んで來た階級の人々の死骸から取り出した病毒が、



この國の人を毒した後、彼女の顔に歸つて来て、それを腐らせてしまつたのだとも言へる。

部屋には誰もゐなかつた。絶望的な大きな溜息が並樹街から上つて来て、カーテンを揺がせた。

「伯林へ！ 伯林へ！ 伯林へ！」

——了——

# 夢

エミール・ゾラ 作  
木村 幹 譯

千八百六十年の嚴冬の間、オアアズ河は氷結し、低ピカルデイの平野は、大雪に鎖されてゐた。わけても基督降誕祭の日には、北東の吹雪が襲來して、殆んどボオモンを埋め盡さんばかりだつた。朝から降り出してゐた雪は、夕方からは更に激しくなつて、一晚中降り積つた。山の手のデゾルフエツル街の、街外れの大家の北陣の北面は、まるで額（ぬか）のやうになつてゐるのであるが、それが風に吹き飛ばされて聖アニエス門にぶつつかるかと思はれるばかりだつた。それは露（つゆ）き出した破風の下に、彫刻で飾り立てられてゐて、既に大分ゴテイクがゝつたロマン式の古い門であつた。その翌日の曉方には、その邊は三尺も降り積つてゐた。

前夜の祝祭に疲れて、街はまだ眠つてゐた。六時が鳴つた。執拗（しつと）くもまだしづくと降つてゐる雪の灰白（はくはく）みかけた暗がりの中に、たつた一つ、ぼんやりとした物影が蠢いてゐた。それは、門の屋根の下に身を避けて、出来るだけ風

雪を除けてふるく、慄（ぞろ）へながら一夜を過した、九歳になる小娘の姿だつた。彼女は襪（はく）を纏（まと）ひ、破れた肩掛（かたかけ）を頭から被つて、靴下もつけない足には男もの、不恰好な靴を穿いてゐた。勿論彼女はさん／＼町中をうろつき廻つた末に、やう／＼そこへ辿りついたのに違ひなかつた。といふのは、へと／＼に疲れてそこへたばつてしまつてゐた位だから。こゝは彼女にとつて、最早この世の行詰りだつた、誰も來てくれなければ、又何物もありはしないのだ。もう棄てられつきりで再び拾つてくれる者もないのだ。たゞあるものは噛みつくやうな飢ゑと、死ぬほどの寒さばかりである。さうして、その心の重たさに息づまるやうな弱々しい有様になつたので、彼女は死力を盡して争ふことは止めてしまつてゐた。彼女に残つてゐるものは、突風が雪の渦巻を捲き起すと、我知らず身をひいて、自づと居所を變へたり、その古い石材の中へ體を突つ込まうとしたりする動作だけだつた。

幾時間も幾時間も過ぎた。長い間、彼女は對になつた二つの門の二重扉の間の、縋壁（すゐかべ）に靠れかゝつてゐたのであつ